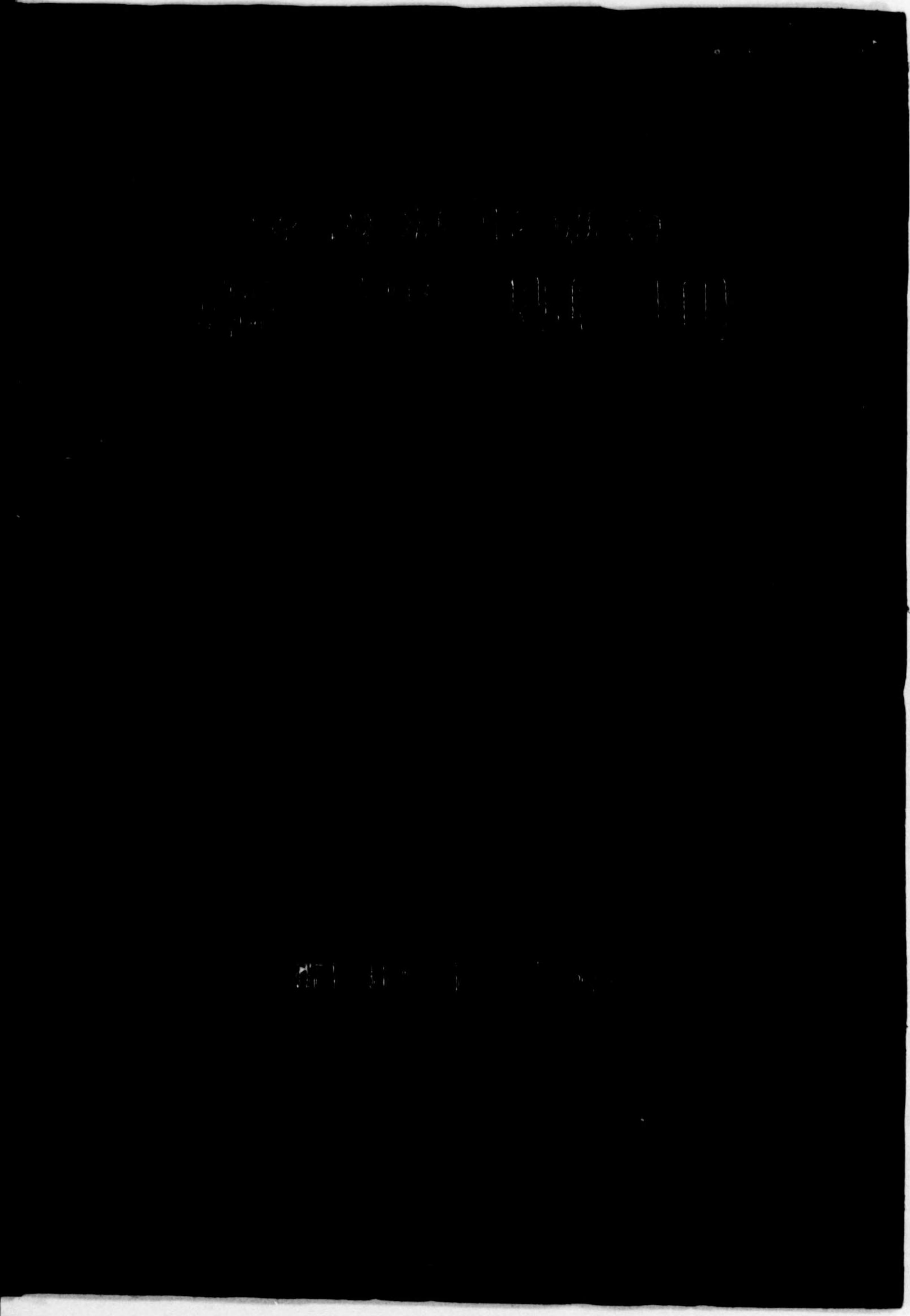


始



帝國海事協會
鋼船規則

昭和十八年

77
75

551.6
TE 24



帝國海軍協會

鋼船規則

昭和十八年



977

75

目 次

第一編 船級登録及検査

第一章	總 則	1
第二章	入級検査	4
第三章	定期検査	8
第四章	中間検査	17
第五章	臨時検査	20
第六章	冷蔵装置ノ検査	20
第七章	検査ニ關スル雜則	22
第八章	検査料其ノ他ノ料金	24

第二編 船體ノ構造及艤裝

第一章	總 則	34
第二章	定 義	37
第三章	龍骨、船首材、船尾骨材及船尾肋板	38
第一節	方形龍骨	38
第二節	平板龍骨	39
第三節	船 首 材	39
第四節	船 尾 骨 材	39
第五節	船尾肋板及之ト船尾骨材トノ固着	41
第六節	船尾骨材ニ於ケル舵ノ壺金	42
第四章	單底構造	42
第一節	肋 板	42
第二節	肋板ニ附スル山形鋼	43
第三節	中心線内龍骨	45
第四節	側 内 龍 骨	47
第五節	船首尾部ニ於ケル補強	48
第五章	二重底構造	49

第一節	總則	49
第二節	中心線桁板	51
第三節	實體肋板	51
第四節	組立肋板	53
第五節	內底板及緣板	55
第六節	外側肘板	57
第七節	側桁板	58
第八節	燃料油ヲ積載スル二重底	59
第九節	雜則	60
第六章	肋骨	60
第一節	肋骨ノ心距並ニ截面抵抗率ノ算定	60
第二節	艙內肋骨	61
第三節	船首尾艙ノ肋骨	64
第四節	甲板間ノ肋骨及船樓ノ肋骨	65
第五節	雜則	66
第七章	梁	68
第八章	梁柱	74
第九章	梁下縱材及甲板下縱桁	78
第十章	外板	80
第十一章	甲板	84
第一節	強力甲板及有效甲板ノ有效面積	84
第二節	鋼甲板及梁上帶板	86
第三節	木甲板	90
第四節	雜則	91
第十二章	隔壁	92
第一節	總則	92
第二節	水密隔壁ノ構造及水密試驗	94
第三節	水密ヲ要セザル隔壁	99
第十三章	深水槽	99

第一節	深水槽ノ構造	99
第二節	深水槽ノ設備及水密試驗	101
第十四章	船首尾防撓構造	102
第一節	船首艙ニ於ケル防撓構造	102
第二節	船首隔壁ヨリ後方ニ於ケル防撓構造	103
第三節	船尾ニ於ケル防撓構造	104
第四節	雜則	104
第十五章	船樓及甲板室	104
第一節	船樓	104
第二節	甲板室	108
第十六章	機關室及軸路	109
第一節	機關室	109
第二節	軸路	110
第十七章	艙口其ノ他ノ甲板口	111
第一節	緣材	111
第二節	艙口梁及縱材	114
第三節	艙口ノ閉鎖裝置	118
第四節	載炭口及平載炭孔	119
第五節	逃口及昇降口	119
第六節	雜則	120
第十八章	機關室口	121
第十九章	通風筒及櫛孔	123
第二十章	舷牆及舷側諸口	125
第二十一章	舵及操舵裝置	128
第一節	不平衡舵	128
第二節	平衡舵	129
第三節	操舵裝置	134
第二十二章	內張板	136
第二十三章	排水裝置	136

第二十四章	銲及銲接合	141
第一節	銲	141
第二節	銲列及銲接覆板ノ厚サ	142
第三節	銲ノ心距	146
第四節	雜則	150
第五節	深油槽ニ關スル特別規定	151
第二十五章	電弧熔接	152
第一節	總則	152
第二節	電極棒	152
第三節	熔接工ノ技術試驗	155
第四節	熔接施工方法	155
第二十六章	檣、荷役其ノ他ノ作業ノ設備	159
第二十七章	艙裝品	161
第二十八章	油槽船	167
第一節	總則	167
第二節	船底橫肋骨	169
第三節	船側橫肋骨	173
第四節	橫置梁	176
第五節	船底縱肋骨	180
第六節	船側縱肋骨	181
第七節	縱梁	182
第八節	外板	183
第九節	甲板	184
第十節	橫置隔壁	186
第十一節	中心線隔壁	192
第十二節	膨脹「トランク」	195
第十三節	艙口	195
第十四節	油槽外ノ構造配置	196
第十五節	銲接合	196

第十六節	機關室口圍壁、常設歩路及舷牆	202
第十七節	「ポンプ」裝置	203
第十八節	通風裝置	204
第十九節	油槽ノ水密試驗	204
第二十九章	對氷構造	204
第三編 機關ノ構造及備品		
第一章	總則	206
第二章	蒸汽機關ヲ主機トスル船舶ノ機關	207
第一節	汽機	207
第二節	筒形汽罐及直立汽罐	212
第三節	水管汽罐及過熱器	226
第四節	汽罐附屬品	228
第五節	汽罐ニ關スル雜則	231
第六節	給水裝置	232
第七節	排水、吸水、循環水及潤滑油ニ關スル裝置	233
第八節	管	237
第九節	給水、排水、其ノ他ノ裝置ノ水壓試驗	238
第十節	燃油裝置	239
第三章	內燃機關ヲ主機トスル船舶ノ機關	242
第一節	內燃機	242
第二節	油槽、油管、潤滑油裝置等	255
第三節	廢汽裝置及空氣壓縮機	257
第四節	氣槽	259
第五節	排水、吸水及冷却水ニ關スル裝置	262
第六節	水壓試驗	262
第七節	補汽罐	264
第四章	特殊施設	265
第五章	艙裝品及備品	265
第六章	電氣裝置	271

第一節	通則	271
第二節	發電機及電動機	272
第三節	配電盤	273
第四節	主開閉裝置	274
第五節	計器	276
第六節	開閉器及遮斷器	277
第七節	接續函、區電盤及分電盤	278
第八節	導線	279
第九節	電纜ノ絶縁及保護被覆	280
第十節	電纜ノ布設及取附	280
第十一節	配線	283
第十二節	特殊ノ設備又ハ場所ニ對スル裝置	384
第十三節	點燈及動力用二次電池	286
第十四節	引火點攝氏 65 度未滿ノ油ヲ積載スル船舶 ニ對スル特別規定	287
第十五節	試驗	288
第十六節	豫備品	288
第一附屬規程	發電機、電動機、制御裝置及抵抗ニ關スル規程	289
第二附屬規程	電纜規程	294
第一節	電線用銅線	294
第二節	電纜ノ絶縁及保護被覆	296
第三節	電纜ノ試驗	299
第四節	鎧裝用亞鉛鍍鋼線	300
別表	第一表乃至第七十三表	305~367

第四編 冷蔵裝置

第五編 材料及材料試驗

第一章	總則	373
第二章	試驗片	375
第三章	壓延鋼材	380

第四章	鍛鋼材	382
第五章	鑄鋼材	384
第六章	管	386
第七章	特殊鋼材及推進器用「ブロンズ」材	388

帝國海事協會

理事長 藤島範平
常務理事 越智誠二
常務理事 長川豊樹
理事 (印ハ遞信大臣指定)

鑄谷正輔 大谷登
大塚俊雄 岡田永太郎
山縣昌夫 郷古潔
寺井久信 淺野良三
斯波孝四郎 重光 蔭
鈴木祥枝

監事 飯沼剛一 陰山金四郎
安田繁三郎

船級管理委員會委員

委員長 大谷登
副委員長 鈴木祥枝
委員 (印ハ遞信大臣指定)

*鑄谷正輔 川崎重工業株式會社
井坂孝 元橫濱火災海上保險株式會社
飯沼剛一 大正海上火災保險株式會社

岩井祐文 造船統制會
 板谷宮吉 板谷商船株式會社
 *石原新三郎 石原產業株式會社
 *八馬安二良 八馬汽船株式會社
 富永能雄 函館船渠株式會社
 越智誠二 元遞信省
 小田桐忠治 日產汽船株式會社
 大塚巖 元函館船渠株式會社
 大塚俊雄 三井物產株式會社
 大倉堯信 海務院
 *岡田永太郎 大阪商船株式會社
 *岡崎忠雄 神戶海上保險株式會社
 *和辻春樹 大阪商船株式會社
 *河原慎男 日本郵船株式會社神戶支店
 陰山金四郎 造船統制會
 龜山俊藏 三菱海上火災保險株式會社
 *橫尾龍 株式會社播磨造船所
 橫山涉 日本郵船株式會社
 橫山孝三 三菱重工業株式會社
 *吉井兵視 笠戶船渠株式會社
 *吉岡保貞 川崎重工業株式會社
 田中正之輔 元大同海運株式會社
 玉井喬介 三菱重工業株式會社
 田澤德太郎 日本郵船株式會社
 *田宮嘉右衛門 株式會社神戶製鋼所
 *谷口茂雄 明治海運株式會社
 高橋勇 東洋汽船株式會社
 中西冢太郎 大連汽船株式會社東京支店
 鶴飼宗平 三井造船株式會社

野村治一良 北日本汽船株式會社
 *公莊惟篤 日立造船株式會社
 栗林友二 栗林商船株式會社
 倉田庫太 第一火災海上保險株式會社
 久志本常雄 三菱汽船株式會社
 *山縣勝見 辰馬汽船株式會社
 *山下太郎 山下汽船株式會社
 安田繁三郎 元日本郵船株式會社
 松井小三郎 三菱重工業株式會社
 正木壽郎 日本鋼管株式會社淺野船渠
 牧野元 國際汽船株式會社
 古川虎三郎 大洋興業株式會社
 藤島範平 元橫濱船渠株式會社
 荒木彥弼 東京石川島造船所
 淺野良三 日本鋼管株式會社
 坂部長 海務院
 榊原鉞止 東京帝國大學
 佐々木周一 三井船舶株式會社
 湊一磨 造船統制會
 斯波孝四郎 造船統制會
 柴田丈夫 住友海上保險株式會社
 *嶋谷勇 嶋谷汽船株式會社
 重光蔭 名古屋造船株式會社
 清水安治 東亞海運株式會社
 *新庄清一 大阪海上火災保險株式會社
 元良信太郎 三菱重工業株式會社
 住井辰男 元株式會社玉造船所
 鈴木恒太郎 元日本郵船株式會社

船級管理委員阪神會

本會ハ船級管理委員會委員中阪神地方在住者（上表中・印）
ヲ以テ組織ス

會長 岡田永太郎

船級委員會

委員長 重光 蔭

副委員長 横山 孝三

委員

岩井 祐文	越智 誠二
大倉 堯信	和辻 春樹
陰山 金四郎	横山 涉
田澤 德太郎	玉井 喬介
鶴飼 宗平	坂部 長
榊原 鉞止	鈴木 祥枝

技術委員會

委員長 陰山金四郎

委員

逕信大臣指定

大倉 堯信 坂部 長

船級管理委員會推薦

陰山 金四郎	横山 孝三
重光 蔭	元良 信太郎

造船協會推薦

井口 常雄	川原 五郎
田澤 德太郎	清水 菊平

造船協會阪神俱樂部推薦

山田 勝麿 阿多 正雄

機械學會推薦

朝永 研一郎

日本鐵鋼協會推薦

渡邊 三郎	吉川 晴十
鹽澤 正一	

理事長推薦

常松 四郎	山縣 昌夫
榊原 鉞止	關野 長

帝國海事協會

本部 東京都麴町區丸ノ内一丁目六番地
東京海上ビルディング
電話丸ノ内二九二二番及二九二三番

技師長	検査員	小野輝雄
技師副長	検査員	板部成雄
検査員		上田稻雄
検査員	(船用品)	中本莞爾
検査員		原三郎
検査員		守屋公平
検査員		菅野寅吉
検査員	(船用品)	高原廣衛
検査員		藤野静
検査員	(船用品)	白石頼三
検査員	(船用品)	杉野茂憲
囑託検査員	(基隆駐在)	關本諄一郎

横濱出張所 横濱市中區海岸通五丁目二十六番地
萬國橋ビルディング 電話本局三二八〇番

所長	検査員	水上純一
検査員		鶴飼善太郎
検査員		井上央
検査員		本田太一
検査員		利根川捷一

大阪出張所 大阪市西區川口町十八ノ一
電話西六八四番及六八四〇番

所長	検査員	菅野禎吉
----	-----	------

検査員		粕谷豊太郎
検査員		細野俊郎
検査員		濱田正
検査員		有馬貞尙
検査員		山口敏宗
検査員	(應召中)	櫻井徹
検査員	(船用品)	村上卯之松
検査員		佐藤信勝
検査員		松井善之助
検査員	(船用品)	柏木整作
検査員	(船用品)	中野米太郎

神戸出張所 神戸市神戸區播磨町十七
電話三宮一六四番及四〇二一番

所長	検査員	篠原重太郎
検査員		中橋和男
検査員		小野大力
検査員		眞山贊子
検査員		中谷正由喜
検査員		佐久間忠夫
検査員	(船用品)	關本泰助

相生出張所 兵庫縣相生市相生五三五二番
電話相生三五八番

所長	検査員	多田三之輔
----	-----	-------

玉出張所 岡山縣玉野市玉一番地
電話玉一六八

所長	検査員	久保勘一
検査員		川上卯一郎

検査員	倉橋正
因島出張所	広島縣御調郡因島土生町 電話土生一二番
所長	検査員 笠井元一
検査員	寛弘一
検査員	河野健吉郎
検査員	(船用品) 田村榮
門司出張所	門司市棧橋通一郵便ビル 電話四二四番
所長	検査員 茶田登
検査員	國司照政
検査員	北村勇夫
長崎出張所	長崎市千馬町一ノ四 電話長一六二四番
所長	検査員 加頭彥
検査員	川崎元近
検査員	廣田實
検査員	駒崎利夫
函館出張所	函館市東濱町六萬世ビル内 電話八七五
所長	検査員 石川悟朗
検査員	志野正男
大連出張所	大連市寺内通三 關東州海運奉公團會館内 電話(六)二九〇九番
所長	検査員 田丸信俊
囑託検査員	小泉正次郎

第一編 船級登録及検査

第一章 總則

第一條 本會ハ船體及艤裝並ニ機關ガ次ノ各號ノ一ニ該當スル鋼船ニ付船級管理委員會(以下單ニ委員會ト稱ス)ノ承認ヲ經タル上船級ヲ船舶原簿ニ登録シ船級證書ヲ發行ス

- 一、委員會ノ承認ヲ經タル計畫ニ基キ製造中ヨリ本會検査員ノ入級検査ヲ受ケ製造シタル船體及艤裝又ハ機關
- 二、製造後本會検査員ノ入級検査ヲ受ケ構造及現狀良好ナリト認メラレタル船體及艤裝又ハ機關

第二條 船級ハ次ノ記號ヲ以テ表示ス(參考参照)

- 一、前條第一號ニ該當スル船體及艤裝 N. S.*
- 二、前條第一號ニ該當シ特ニ構造ヲ輕減シタル船體並ニ數量及寸法ヲ斟酌シタル艤裝 N. S.*f
- 三、前條第一號ニ該當スル機關 M. N. S.*
- 四、前條第一號ニ該當シ特ニ構造及備品ヲ斟酌シタル機關 M. N. S.*f
- 五、前條第二號ニ該當スル船體及艤裝 N. S.
- 六、前條第二號ニ該當スル機關 M. N. S.

滿載吃水ガ形狀ニ依ル吃水ニ達セザル船ニ付テハ前項ノ船體及艤裝ノ記號ニ(With Freeboard)ヲ附記ス

航路ヲ制限スル條件ノ下ニ又ハ特殊ノ用途ニ適應セシムル目的ヲ以テ船級ノ承認ヲ爲シタル船ニ付テハ前二項ノ船體及艤裝ノ記號ニ其ノ旨(例ヘバ Greater Coasting Service, Bulk Oil Carrier 等)ヲ附記ス

第三條 船級ノ登録ヲ受クル船ニ於テ次ノ各號ノ一ニ該當スル冷藏裝置ヲ備フルトキハ委員會ノ承認ヲ經タル上其ノ旨ヲ船舶原簿ニ登録シ冷藏裝置證書ヲ發行ス

- 一、委員會ノ承認ヲ經タル計畫ニ基キ製造中ヨリ本會検査員ノ登録検査ヲ受ケタル冷藏裝置

二、製造後本會検査員ノ登録検査ヲ受ケ現状良好効力十分ナリト認メラレタル冷蔵装置

前項ニ依リ冷蔵装置ノ登録ヲ爲ス場合ニ於テハ該装置ガ前項第一號ニ該當スルモノナルトキハ符號 R. M. C.*、第二號ニ該當スルモノナルトキハ符號 R. M. C. ヲ以テ之ヲ表示ス。

第四條 入級検査ヲ受ケ之ニ合格シタル船ニ付委員會ノ承認ヲ經ルノ違ナク急速ニ船級ノ登録ヲ要スル場合ニ於テハ本會ニ於テ船舶原簿ニ登録ヲ爲シ假船級證書ヲ發行スルコトヲ得

登録検査ヲ受ケ之ニ合格シタル冷蔵装置ニ付テハ前項ノ規定ヲ準用シテ假冷蔵装置證書ヲ發行スルコトヲ得

前各項ノ船舶又ハ冷蔵装置ニ付テハ委員會ノ承認ヲ受ケタル上假證書ト引換ニ船級證書又ハ冷蔵装置證書ヲ發行ス若シ委員會ニ於テ承認スペカラザルモノト決定シタルトキハ登録ハ之ヲ抹消シ假證書ハ之ヲ本會ニ返還セシムルモノトス

第五條 船級證書及冷蔵装置證書又ハ其ノ假證書ハ之ヲ船内ニ保管シ管海官廳又ハ本會職員ノ請求アリタルトキハ之ヲ提示スベシ

船級證書、冷蔵装置證書又ハ其ノ假證書ヲ滅失又ハ毀損シタルトキハ其ノ再發行ヲ、之ニ記載シタル事項ニ變更ヲ生ジタルトキハ其ノ書換又ハ改訂ヲ遲滯ナク本會ニ申出ヅベシ

船級又ハ冷蔵装置ノ登録ヲ抹消セラレタルトキハ當該證書ヲ遲滯ナク本會ニ返還スベシ

第六條 船級ノ登録ヲ受ケタル船ハ本則ノ定ムル所ニ依リ定期検査、中間検査、臨時検査其ノ他ノ検査ヲ受ケルコトヲ要ス

第七條 船級ノ登録ヲ受ケタル船ニ付次ノ各號ノ一ニ該當シ本會ヨリ注意又ハ要求ヲ爲シタルモノ之ヲ實行セザルトキハ該船ノ船級又ハ冷蔵装置ノ登録ヲ抹消ス

一、前條ノ検査ヲ受ケザルトキ

二、修繕又ハ補充ヲ要スル事項ヲ生ジタルトキ

三、検査料ノ支拂ナキトキ

四、其ノ他本則ノ定ムル所ニ違背シタルトキ

第八條 船級又ハ冷蔵装置ノ登録ハ船主ヨリ請求アリタルトキハ何時ニテモ之ヲ抹消ス

第九條 船級ノ登録ヲ受ケル非旅客船(十二人ヲ超ユル旅客定員ヲ有セザル船)ニシテ船舶安全法第三條ニ依リ滿載吃水線ノ標示ヲ要スルモノハ本會ヨリ滿載吃水線ノ指定ヲ受ケ之ヲ標示スベシ

第十條 船級ノ登録ヲ受ケタル非旅客船ハ其ノ船級ヲ有スル間船舶安全法第八條ノ規定ニ依リ同法第二條第一項第一號乃至第五號、第十號乃至第十二號ニ掲グル事項及滿載吃水線ニ關シテハ同法ノ適用上管海官廳ノ検査ヲ受ケ之ニ合格シタルモノト看做サル

第十一條 船級ノ登録ヲ受ケントスル日本非旅客船ハ製造中ノ入級検査ヲ受ケタルトキハ船舶安全法第六條第一項ニ依ル製造検査ヲ省略セラルルモノトス

第十二條 本則ノ規定ニ依ル検査ハ製造中ノ入級検査ニ在リテハ製造者又ハ機關製造者ヨリ、其ノ他ノ検査ニ在リテハ船主ヨリノ申込ニ依リ本會検査員之ヲ行フ但シ外國ニ於テ検査ヲ受ケル場合ニ於テハ夫々其ノ國ニ於ケル本會検査員又ハ囑託検査員之ヲ行フモノトス

検査ノ申込ハ別ニ定ムル書式ニ依ルベシ

参考

本會船級ノ種別ト逡信省令船舶安全法施行規則ニ依ル船舶ノ資格トノ關係ヲ例示スレバ次ノ通りトス

本 會 船 級	本會船級ニ該當スル船舶ノ資格
N. S.*	第一級船
N. S.	
N. S.*(With Freeboard)	
N. S.*(Greater Coasting Service)	第二級船
N. S.*(With Freeboard) (Greater Coasting Service)	
N. S.*(Coasting Service)	第三級船
N. S. (Coasting Service)	

N. S. (Smooth Water Service)

N. S. (River Service)

} 第四級船

第二章 入級検査

第一條 製造中ノ入級検査ニ於テハ船體、機關、艤裝及備品ノ構造、材料及其ノ寸法竝ニ工事ニ付詳細ナル検査ヲ行ヒ第二編及第三編ノ規定ニ適合スルヤ否ヤヲ確メ且満載吃水線ノ標示ヲ要スル非旅客船ニ付テハ満載吃水線ノ指定ヲ行フ

第二條 製造中ノ入級検査ヲ受ケントスル船ニ付テハ次ニ掲グル圖面其ノ他ノ書類ヲ差出シ夫々工事着手前承認ヲ受クベシ

一、船體部

- (一) 中央横截面圖 (豫定船級計畫吃水ヲ記載シタルモノ)
- (二) 中心線縦截面圖 (計畫吃水線ヲ記載シタルモノ)
- (三) 船首材、船尾骨材及舵ノ圖
- (四) 水密隔壁及油密隔壁ノ圖
- (五) 船首尾艙及附近ノ防撓構造圖
- (六) 甲板構造圖 (艙口、艙口梁及艙口縦材ノ構造ヲ示シタルモノ)
- (七) 單底及二重底構造圖
- (八) 特設梁柱及甲板下縦桁ノ圖
- (九) 外板展開圖
- (十) 軸路構造圖
- (十一) 汽罐臺、機械臺、推力受臺及中間軸受臺ノ圖

- (十二) 機關室口圍壁ノ圖
- (十三) 強力甲板ニ長大ナル甲板室ヲ備フル船ニ在リテハ該甲板室構造圖
- (十四) 檣、「デリツク」柱及「デリツク」臺ノ圖
- (十五) 「ポンプ」裝置圖 (各水槽及油槽ノ容量ヲ記載シタルモノ)
- (十六) 操舵裝置圖
- (十七) 船體主要部ニ熔接ヲ行ハントスルトキハ熔接要領書

二、機關部

- (一) 汽罐、蒸汽過熱器、氣槽及油槽ノ圖竝ニ其ノ材料ニ關スル仕様書
- (二) 主機、軸及減速裝置ノ圖
- (三) 推進器ノ圖
- (四) 機械臺、推力受臺及軸受臺ノ取附螺釘配置圖
- (五) 船ノ推進ニ直接關係アル補助機ノ圖
- (六) 塗水、脚荷及燃料油ニ關スル「ポンプ」及管ノ配置圖 (各「ポンプ」ノ容量ヲ記載シタルモノ)
- (七) 蒸化器、給水濾器及給水加熱器ノ圖
- (八) 主汽管及給水管ノ配置圖
- (九) 內燃機用壓縮空氣管配置圖
- (十) 配電盤結線圖、電路系統圖及電纜表
- (十一) 冷藏裝置ノ登録ヲ受ケントスル船ニ在リテハ冷藏裝置ノ圖及仕様書前項ノ圖面ニハ材料ノ寸法及配置、固着方、汽罐ノ下面ト船體トノ間隙其ノ他審査ニ必要ナル事項ニ付成ルベク詳細ニ記載スベシ
特殊ノ載貨法ヲ爲サントスル船ニ付テハ第一項ノ規定ニ依リ差出ス船體中央横截面圖及中心線縦截面圖ニ搭載セントスル貨物及其ノ配置ニ關スル詳細事項ヲ明記スベシ
委員會ニ於テ必要ト認ムルトキハ第一項ニ掲グルモノノ以外ノ圖面其ノ他ノ書類ノ提出ヲ要求スルコトアルベシ

第三條 製造中ノ入級検査ヲ受ケントスル船ニ付テハ前條ノ規定ニ依ル工事承認用書類ノ外次ノ書類ヲ差出スベシ

一、船體部仕様書及一般配置圖

二、機關部仕様書及機關室一般配置圖

三、滿載吃水線ノ指定ヲ受ケントスル船ニ在リテハ船體線圖及排水量曲線圖

(上甲板迄ノ各吃水ニ對スル全排水量及毎種排水量ヲ示シタルモノ)

四、木材滿載吃水線ノ指定ヲ受ケントスル船ニ在リテハ甲板積木材貨物ノ積

附及定着ニ要スル裝置竝ニ其ノ配置ヲ示ス圖

第四條 製造中ノ入級検査ニ於テハ次ノ各號ノ時期ニ於テ工事ニ付検査ヲ受クベシ

一、船體

(一) 龍骨ヲ据附クルトキ竝ニ船首材及船尾骨材ヲ建立セントスルトキ

(二) 底部構造材取附中

(三) 水密及油密隔壁ヲ建立セントスルトキ

(四) 肋骨組成中及建立中

(五) 梁柱、甲板下縦桁及梁ヲ取附ケントスルトキ

(六) 甲板及外板ノ取附中

(七) 軸路、機關室口圍壁、汽罐臺及機械臺ノ取附中

(八) 水壓試驗及水密試驗ヲ執行スルトキ

(九) 外板ヲ張り了リ未ダ塗料ヲ施サザルトキ

(十) 船體完成シタルトキ

(十一) 其ノ他検査員ニ於テ必要ト認メタルトキ

二、機關

(一) 諸軸、諸桿又ハ「タービン」汽機ノ「ローター」ノ粗削ヲ爲シタルトキ

(二) 内燃機用氣槽又ハ汽罐ニ使用スル鋼板ノ「マーキング」ヲ行ヒタルトキ

(三) 内燃機用氣槽又ハ汽罐ノ各部ヲ曲縁、鍛接又ハ熔接シタルトキ

(四) 内燃機用氣槽又ハ汽罐ノ各部ノ組立ヲ爲シ鉸孔ヲ仕上ゲタルトキ

(五) 汽機、内燃機、空氣壓縮機若ハ「ポンプ」ノ要部、船尾管、推進器又ハ復水器ノ仕上ヲ了リタルトキ

(六) 汽機、内燃機、空氣壓縮機、氣槽、汽罐、蒸汽過熱器、復水器、「ポンプ」又ハ減速裝置ノ組立ヲ了リタルトキ及之ヲ据附ケタルトキ

(七) 水壓試驗ヲ執行スルトキ

(八) 其ノ他検査員ニ於テ必要ト認メタルトキ

前項ニ掲グル内燃機ニハ船ノ推進ニ關係アル補助内燃機ヲ、汽罐ニハ補汽罐

ヲ、諸軸ニハ船ノ推進ニ關係アル補助機關ノ「クランク」軸ヲ包含ス

第五條 製造中ノ入級検査ニ於テハ船體及機關ノ各部ニ付第二編及第三編ニ規定スル水壓試驗及水密試驗ヲ執行スルノ外水密戸ノ開閉裝置、載貨門、載炭門、舷窓、暴露甲板上諸開口ノ閉鎖裝置、排水裝置、操舵裝置、揚錨裝置、繫船裝置及揚貨裝置ノ效力試驗ヲ行フ尙機關ハ据附工事ヲ完了シ汽罐ノ安全弁ヲ制限汽壓ニ對シ調整シタル後其ノ試運轉ヲ行フ

第六條 第一章第一條第二號ノ船(以下既成船ト稱ス)ノ入級検査ニ於テハ其ノ船齡ニ應ジ製造中ノ入級検査ヲ受ケタル船ノ當該船齡又ハ之ニ最モ近キ船齡ニ於テ受クベキ定期検査ト同等ノ程度ニ於テ船體、機關、艤裝及備品ノ構造、材料、工事及現狀ヲ検査スルノ外主要部分ノ現在寸法ヲ實測シ且必要ニ應ジ滿載吃水線ノ指定ヲ行フ

前項ノ入級検査ヲ受ケントスル船ニ付テハ製造中ノ入級検査ノ場合ニ準ジ必要ナル圖面其ノ他ノ書類ヲ差出スベシ

第七條 前條ノ検査ニ於テハ次ノ各號ニ依リ水壓試驗及水密試驗ヲ爲シ且機關ニ付テハ附屬品ヲ整備シ汽罐ノ制限汽壓ヲ定メ安全弁ヲ調整シタル上試運轉ヲ行フ但シ主汽管及新ニ重大ナル修繕ヲ施シタル汽罐ノ水壓試驗ヲ除キ其ノ他ノ試驗及試運轉ハ検査員ニ於テ差支ナシト認ムルトキハ之ヲ省略スルコトヲ得

一、二重底、船首尾艙、水槽、油槽、防油區畫及船首隔壁ノ後方ニ在ル錨艙庫ハ第二編ニ規定スル壓力ヲ以テ試驗ヲ爲スコト

二、水密隔壁、軸路及水密戸ハ射水ニ依リ水密ヲ試驗スルコト

三、機關又ハ其ノ部分ハ新ニ使用スルモノナルトキハ第三編ニ規定スル壓力ヲ以テ、既ニ使用シタルモノナルトキハ次表ニ依リ水壓試驗ヲ爲スコト

種 別	試 驗 壓 力
新ニ重大ナル修繕ヲ施シタル汽罐	汽罐ノ制限汽壓力毎平方糎7疋以下ナルトキハ其ノ2倍ノ壓力、毎平方糎7疋ヲ超ユルトキハ其ノ1.5倍ニ毎平方糎3.5疋ヲ加ヘタル壓力

重大ナル修繕ヲ施サザル汽罐	汽罐ノ制限汽壓ニ毎平方糎 3.5 疋ヲ加ヘタル壓力
主 汽 管	汽罐ノ制限汽壓ノ 2 倍
正給水管及副給水管	汽罐ノ制限汽壓ノ 2 倍
復水器ノ管取附部	復水器ノ頂部上 2 米ノ水高壓力ニ相當スル壓力
汽罐ノ燃油裝置ノ噴油「ポンプ」ノ送油弁ヨリ噴油器ニ至ル管竝ニ燃料油加熱器及其ノ附屬具	常用最大壓力ノ 2 倍及毎平方糎 28 疋ノ中大ナル壓力
前欄ニ掲グルモノヲ除キ機關室ニ在ル油管	毎平方糎 2 疋
燃料油ト接觸スル加熱用蒸氣管	常用最大壓力ノ 2 倍
蒸 汽 過 熱 器	汽罐ノ制限汽壓ノ 2 倍
潤 滑 油 裝 置	常用最大壓力ノ 2 倍
壓 縮 空 氣 管	常用最大壓力ノ 1.5 倍
冷 却 裝 置	常用最大壓力ノ 2 倍
銲接合又ハ無接合ノ氣槽其ノ他ノ受壓槽	制限壓力ノ 1.5 倍
鍛接合又ハ熔接合ノ氣槽其ノ他ノ受壓槽	制限壓力ノ 2 倍
油 槽	頂板上 2.5 米ノ水高壓力ニ相當スル壓力但シ強壓油槽ニ付テハ其ノ常用壓力ノ 2 倍

第八條 汽船ノ入級検査ニ於テハ速力試験ヲ行フ但シ既成船ノ入級検査ニ於テハ速力試験ノ成績ニ關スル適當ナル資料ヲ有シ該速力試験執行後速力ニ影響アリト認ムル修繕又ハ變更ナキトキハ速力試験ヲ省略スルコトアルベシ

第三章 定期検査

第一條 定期検査ハ入級検査又ハ前回定期検査終了ノ日ヨリ四年毎ニ之ヲ行フ

第二條 定期検査ヲ行フ場合ニ於テ特別ノ事由アルトキハ本會ノ承認ヲ受ケ一部ノ検査ヲ前條ノ時期ヨリ一年以内ノ範圍ニ於テ猶豫スルコトヲ得

第三條 船級ノ登録ヲ受ケタル船ガ定期検査ヲ受クベキ時期ニ該當シタル場

合ニ於テ其ノ現ニ受有スル船舶検査證書ノ有効期間ガ船舶安全法ノ規定ニ依リ延長セラレタルトキハ該期間満了ノ時迄定期検査ヲ猶豫ス

第四條 定期検査ハ之ヲ受クベキ時期ニ該當セザルモ船主ヨリ請求アリタルトキハ時期ヲ繰上ゲ之ヲ行フ

第五條 定期検査ニ於テハ船ヲ入渠又ハ上架セシムベシ但シ正當ノ事由ニ依リ本會ノ承認ヲ受ケタルトキハ其ノ指定スル時期迄入渠又ハ上架ヲ延期スルコトヲ得

第六條 製造中ノ入級検査ヲ受ケタル船ニ付其ノ後最初ニ行フ定期検査ノ種別ハ船體及艤裝ノ検査ニ關シテハ之ヲ第一次第一種トシ爾後ノ定期検査ノ種別ハ順次第一第二種、第一次第三種、第二次第一種、第二次第二種、第二次第三種トシ以下之ニ倣フ

既成船ノ定期検査ノ種別ハ其ノ入級検査ノ程度ガ本章ノ規定ニ依ル何レノ種別ノ定期検査ニ相當スルカニ從ヒ該検査ヲ基準トシテ前項ニ掲グル順序ニ依リ之ヲ定ム

第七條 第一次第一種定期検査ニ於テハ次ノ各號ノ準備ヲ爲スベシ

- 一、船體ノ内外適當ノ場所ニ足場ヲ設クルコト
- 二、石炭及脚荷等ヲ取出シ船體ニ固着セザル物品ハ成ルベク取片附ケ又溢水道覆板ハ悉ク取除ケ泥芥箱ヲ開キ溢水吸水管ノ芥除ヲ露出シ船體内外部ヲ總テ掃除スルコト尙外航汽船ニ在リテハ食料品其ノ他ノ雜品置場、厨室、船艙等鼠ノ棲息スル場所ハ硫黃燻蒸其ノ他適當ノ方法ヲ以テ鼠ノ驅除ヲ行ヒ溢水道ハ海水ヲ以テ洗滌シ便所其ノ他不潔ナル場所ハ消毒藥液ヲ以テ消毒ヲ爲スコト
- 三、二重底水槽其ノ他ノ水槽ハ其ノ出入口ヲ開キテ水ヲ排出シ内部ヲ掃除スルコト
- 四、船ノ入渠又ハ上架中舵ヲ扛舉又ハ取外シ舵針及壺金等ヲ検査スルニ支障ナカラシメ又船底ニ附着セル海草、介殼等ヲ落シ外板ノ現状、填隙及固着銲ヲ検査スルニ支障ナカラシムルコト
- 五、船ノ首尾ヲ通ジ單底構造ノ部分ニ於テハ中心線ノ兩側ニ於テ各舷トモ船底内張板ヲ少クトモ一條宛取離スコト

- 六、二重底ノ部分ニ於テハ検査員ノ必要ト認ムル箇所ノ船底内張板ヲ取離スコト
 - 七、汽罐ノ下部ヲ検査シ得ル準備ヲ爲スコト
 - 八、燃料油ヲ積載スル船首尾艙ハ其ノ出入口ヲ開キ油ヲ排出シテ内部ヲ掃除シ危険性瓦斯ヲ排除シ検査ニ支障ナカラシムルコト
 - 九、二重底其ノ他ノ水槽及油槽ニ付検査員ノ指示スル所ニ依リ水壓試験ノ準備ヲ爲スコト
 - 十、冷蔵ノ爲防熱装置ヲ施シタル貨物艙ノ部分ハ海水道覆板及艙口蓋板ヲ取外シ検査ニ支障ナカラシムルコト
 - 十一、油槽船ニ在リテハ油槽内ノ瓦斯ヲ十分ニ排除シ検査ノ際危険ナカラシムルコト
 - 十二、操舵、繫船、揚錨及揚貨機具、手動海水「ポンプ」竝ニ艙口、載炭口、通風筒、載貨門、船樓端ノ開口、其ノ他ノ開口ノ閉鎖装置ハ所屬具ヲ取揃ヘ置キ錨、錨鎖及索ハ之ヲ適當ノ場所ニ整備シ置クコト
 - 十三、帆船ノ帆類ハ所定ノ位置ニ取附ケ展開シ得ベキ準備ヲ爲スコト
 - 十四、水密戸ノ開閉装置、載貨門、載炭門、舷窓、暴露甲板上諸口等ノ閉鎖装置竝ニ排水、操舵、繫船、揚錨等ノ装置ニ付検査員ノ指示スル所ニ依リ效力試験ノ準備ヲ爲スコト
- 第一次第一種定期検査ニ於テハ船體及艙裝ノ全般ニ互リ其ノ検査準備ノ範圍ニ於テ成ルベク詳細ナル検査ヲ行ヒ第四章第六條第一號ニ依ルノ外特ニ次ノ各號ニ依ルベシ
- 一、灰棄筒其ノ他外板ニ於ケル開口ノ部分ヲ特ニ注意シテ検査スルコト
 - 二、満載吃水線ノ標示ヲ検査スルコト
 - 三、橋、索具、空氣管及測水管ノ現狀竝ニ各測水管ノ下部ニ當ル外板ガ測水桿ノ衝擊ノ爲異狀ナキヤ否ヤヲ特ニ注意スルコト
 - 四、各水槽及油槽ハ次ニ掲ゲル壓力ヲ以テ水壓試験ヲ爲スコト

種 別	試 験 壓 力
二 重 底 水 槽	平均空艙吃水ニ相當スル水高壓力

二 重 底 油 槽	空氣管ノ上端迄ノ水高壓力及隔壁甲板迄ノ水高壓力ノ中大ナルモノ
深水槽又ハ深油槽(船首尾槽ヲ含ム)	溢出管ノ上端迄ノ高サ及頂板上 2.4 米ノ箇所迄ノ高サノ中大ナルモノニ相當スル水高壓力
油槽船ノ油槽及防油區畫	膨脹「トランク」ニ於ケル艙口ノ頂部迄ノ水高壓力

五、水密戸ノ開閉装置、載貨門、載炭門、舷窓、暴露甲板上諸開口及船樓端隔壁ノ閉鎖装置、排水装置、操舵装置、繫船装置、揚錨装置竝ニ揚貨装置ノ效力ニ付適當ナル試験ヲ爲スコト

第八條 第一次第二種定期検査ニ於テハ前條第一項ニ掲ゲルモノノ外次ノ各號ノ準備ヲ爲スベシ

- 一、船ノ首尾ヲ通ジ彎曲部ニ於テ内張板ヲ一條宛取離シ且二重底、深水槽及深油槽ノ部分ニ於ケル内張板ヲ全部取離スコト
 - 二、燃料油ヲ積載スル二重底ハ其ノ出入口ヲ開キ油ヲ排出シテ内部ヲ掃除シ危険性瓦斯ヲ排除シ検査ニ支障ナカラシムルコト
- 第一次第二種定期検査ニ於テハ前條第二項ノ規定ニ依ルノ外次ノ各號ニ依リ検査ヲ行フベシ
- 一、舷窓ノ部分ニ於ケル外板ノ状態ヲ特ニ注意スルコト若シ検査員ニ於テ必要アリト認ムルトキハ該部分其ノ他腐蝕ノ著シキ部分ニ試孔ヲ穿テ材料ノ實際ノ厚サヲ測定スルコト
 - 二、木甲板ノ磨耗部分ヲ穿孔シテ検査シ厚サガ 20% 以上減少シタル部分又ハ不良ノ部分ハ之ヲ新換スルコト
 - 三、錨鎖管、錨鎖庫、錨鎖及其ノ繫止装置ニ注意シ錨鎖ハ「シャツクルピン」ヲ抜キテ検査スルコト
 - 四、検査員ニ於テ必要アリト認ムルトキハ外板、水密隔壁、軸路及水密戸ノ水密検査ヲ行フコト

第九條 第一次第三種定期検査ニ於テハ前條第一項ノ規定ニ依ルノ外次ノ各號ノ準備ヲ爲スベシ

- 一、艙内内張板ノ大部分ヲ取離シ又防熱装置ヲ施シタル部分ハ検査員ノ指示スル箇所ニ於テ内張板ヲ取離シ肋骨及外板ヲ検査スルニ支障ナカラシムルコト

二、石炭庫内ノ内張板ヲ全部取離スコト

三、船體内外要部ノ錆落ヲ爲スコト

四、梁上側板ヲ検査スル爲其ノ上面ノ木甲板ヲ検査員ノ指示スル部分ニ於テ取離スコト

五、深油槽ノ出入口ヲ開キ内部ヲ掃除シ危険性瓦斯ヲ排除シ検査ニ支障ナカラシムルコト

六、檣及斜檣ノ楔ヲ抜取ルコト但シ檣又ハ斜檣ガ鋼製ニシテ二重張板ヲ有スルモノナルトキハ此ノ限ニ在ラザルコト

七、船室ノ部分ニ於テハ先ヅ舷窓下ノ内張板ヲ取離シ外板ノ現状ヲ検査スルニ支障ナカラシメ尙必要アルトキハ検査員ノ指示ニ從ヒ他ノ内張板ヲモ取離スコト

第一次第三種定期検査ニ於テハ前條第二項ノ規定ニ依リ検査ヲ行フノ外外板、肋板、隔壁、鋼甲板、二重底諸板其ノ他要部ニ於ケル鋼板ハ錆ノ多量ニ生ズル箇所ニ試孔ヲ穿チテ其ノ厚サヲ測リ若シ衰耗ノ甚シキ部分又ハ不良ノ部分アルトキハ之ヲ新換又ハ補強スベシ

第十條 第二次以後ニ於ケル第一種又ハ第二種ノ定期検査ノ準備及方法ハ第一次第二種定期検査ニ對スル規定ニ依ル但シ錆ノ多量ニ生ズル箇所ニ於ケル材料ノ現状及厚サハ特ニ注意シテ之ヲ検査スベシ

第二次以後ニ於ケル第三種定期検査ノ準備及方法ハ第一次第三種定期検査ニ對スル規定ニ依ル但シ船體各部材料ノ寸法ハ之ヲ實測シテ委員會ニ詳報スベシ

第十一條 前四條ニ規定スル検査ノ準備ハ船舶ノ大小、用途、年齢、構造、前検査ノ成績又ハ現状ニ依リ検査員ニ於テ適當ニ之ヲ増減セシムルコトアルベシ

第十二條 機關ニ關スル定期検査ノ準備ハ次ノ各號ニ依ル但シ機關ノ大小、構造、經歷、年齢、前検査ノ成績、現状又ハ船ノ用途等ニ依リ検査員ニ於テ適當ニ之ヲ増減セシムルコトアルベシ

一、往復動汽機

(一) 汽筒及滑弁匣ノ内部ヲ検査シ得ル様爲シ置クコト

(二) 「ピストン」及滑弁ヲ取出シ置クコト

(三) 十字頭栓及其ノ受金、「クランク」栓受金竝ニ「クランク」軸ヲ検査シ得ル様爲シ置クコト

(四) 汽機ニ屬スル重要ナル弁ヲ検査シ得ル様解放シ置クコト

二、「タービン」汽機

(一) 「タービン」筒内部、「ローター」及其ノ軸受ヲ検査シ得ル様爲シ置クコト

(二) 汽機ニ屬スル重要ナル弁ヲ検査シ得ル様爲シ置クコト

三、内 燃 機

(一) 氣筒ノ内部、氣筒蓋及「ピストン」ノ内外部竝ニ氣筒蓋附屬ノ諸弁ヲ検査シ得ル様爲シ置クコト

(二) 十字頭栓及其ノ受金、「クランク」栓受金竝ニ「クランク」軸ヲ検査シ得ル様爲シ置クコト

(三) 内燃機ニ屬スル重要ナル「ポンプ」及弁ヲ検査シ得ル様解放シ置クコト

(四) 消音器ヲ掃除シ置クコト

四、推進器、推進軸系及動力傳導裝置

(一) 推進器ヲ検査シ得ル様爲シ置クコト

(二) 各軸受ノ上半又ハ覆金及推力受ヲ取外シ置クコト

(三) 船尾管後端軸受部内面上部ト螺旋軸トノ間隙ヲ測定シ得ル様爲シ置クコト

(四) 反轉裝置ノ主要部ヲ検査シ得ル様爲シ置クコト

(五) 動力傳導裝置ノ主要部ヲ検査シ得ル様爲シ置クコト

五、汽 罐

(一) 罐内ノ水ヲ排出シ人孔蓋、泥孔蓋及覗孔蓋ヲ取外シ且火側及水側ヲ十分掃除シ置クコト尙検査員ノ要求アリタル場合ニ於テハ其ノ指示スル部分ノ罐外衣ヲ剝取り置クコト

(二) 蒸汽過熱器ヲ検査シ得ル様爲シ置クコト

(三) 火床棧ヲ取出シ置クコト

- (四) 煙室扉ヲ開キ置クコト
- (五) 汽罐ニ屬スル弁及「コツク」ヲ検査シ得ル様解放シ置クコト

六、給水装置

- (一) 給水「ポンプ」ノ要部ヲ検査シ得ル様爲シ置クコト
- (二) 給水加熱器ヲ開キ置クコト
- (三) 給水濾器ヲ掃除シ置クコト
- (四) 給水「ポンプ」ガ獨立ノ機關ニ依リ動作セラルルモノナルトキハ該機關ノ要部ヲ検査シ得ル様解放シ置クコト

七、復水装置及蒸化器

- (一) 復水器蓋ヲ開キ置クコト
- (二) 抽氣「ポンプ」及循環水「ポンプ」ノ要部ヲ検査シ得ル様解放シ置クコト
- (三) 抽氣「ポンプ」又ハ循環水「ポンプ」ガ獨立ノ機關ニ依リ動作セラルルモノナルトキハ該機關ノ要部ヲ検査シ得ル様解放シ置クコト
- (四) 蒸化器ヲ開キ置クコト

八、吸水、排水及冷却ノ装置

- (一) 最大吃水線以下ニ於テ船外ニ通ズル弁及「コツク」ヲ解放シ置クコト
- (二) 滲水「ポンプ」、冷却「ポンプ」、脚荷水「ポンプ」及消防「ポンプ」ノ要部ヲ検査シ得ル様解放シ置クコト
- (三) 芥除箱及泥芥箱ヲ掃除シ置クコト
- (四) 油、清水又ハ空氣ノ冷却器ヲ開キ置クコト
- (五) (二)ノ「ポンプ」ガ獨立ノ機關ニ依リ動作セラルルモノナルトキハ該機關ノ要部ヲ検査シ得ル様解放シ置クコト

九、潤滑油装置

- (一) 潤滑油「ポンプ」ノ要部ヲ検査シ得ル様解放シ置クコト
- (二) 油濾器ヲ掃除シ置クコト
- (三) 潤滑油「ポンプ」ガ獨立ノ機關ニ依リ動作セラルルモノナルトキハ該機關ノ要部ヲ検査シ得ル様解放シ置クコト
- (四) 潤滑油槽ノ油ヲ排除シ人孔又ハ検査孔ヲ開キ内部ヲ掃除シ置クコト

十、空氣壓縮機、掃除空氣「ポンプ」及其ノ附屬装置

- (一) 空氣壓縮機ノ要部及中間冷却器ノ内部ヲ検査シ得ル様解放シ置クコト
- (二) 氣槽ノ検査孔ヲ開キ内部ヲ掃除シ置クコト
- (三) 掃除空氣「ポンプ」ノ要部ヲ検査シ得ル様解放シ置クコト
- (四) 空氣壓縮機又ハ掃除空氣「ポンプ」ガ獨立ノ機關ニ依リ動作セラルルモノナルトキハ該機關ノ要部ヲ検査シ得ル様解放シ置クコト

十一、燃料油装置

- (一) 油槽ノ油ヲ排除シ人孔又ハ検査孔ヲ開キ内部ヲ掃除シ置クコト
- (二) 油「ポンプ」ノ要部ヲ検査シ得ル様解放シ置クコト
- (三) 油加熱器ヲ開キ置クコト
- (四) 油濾器ヲ掃除シ置クコト
- (五) 油「ポンプ」ガ獨立ノ機關ニ依リ動作セラルルモノナルトキハ該機關ノ要部ヲ検査シ得ル様解放シ置クコト

十二、船ノ推進ニ關係アル補助機、甲板補機及原動機

- (一) 船ノ推進ニ關係アル補助機ニ付主機ニ準ジ準備ヲ爲スコト
- (二) 操舵機、揚錨機、揚貨機其ノ他ノ甲板補機並ニ電氣装置、水密戸開閉装置及應急用動力設備ノ原動機ノ要部ヲ検査員ノ指示スル所ニ依リ解放スルコト

十三、水壓試験及效力試験

汽罐、主汽管其ノ他機關ノ部分並ニ電氣装置及計器ニ付検査員ノ指示スル所ニ依リ水壓試験又ハ效力試験ノ準備ヲ爲スコト

十四、機關備品

近寄り易キ場所ニ整備シ置クコト

第十三條、機關ニ關スル定期検査ニ於テハ機關及機關備品ノ全般ニ互リ前條ノ規定ニ依ル検査準備ノ範圍ニ於テ成ルベク詳細ニ検査ヲ行ヒ特ニ次ノ各號ニ依ルベシ

一、船尾管後端軸受内面上部ト螺旋軸トノ間隙ガ次ニ掲グルモノ以上トナリタルトキハ支材面ヲ調整スルコト

螺旋軸ノ徑	間隙
230 耗以下ナルトキ	6 耗
230 耗ヲ超エ 305 耗以下ナルトキ	8 耗
305 耗ヲ超ユルトキ	9.5 耗

二、内燃機ノ電氣點火裝置ノ効力ヲ試験スルコト

三、検査員ニ於テ必要ト認ムルトキハ罐板ノ厚サ又ハ罐支柱ノ寸法ヲ實測シ汽罐ノ制限汽壓ヲ改定スルコト

四、新ニ重大ナル修繕ヲ施シタル汽罐、水管汽罐及主汽管ハ第二章第七條第三號ノ表ニ掲グル壓力ヲ以テ水壓試験ヲ行フコト又主汽管ガ銅管ナルトキハ水壓試験前之ヲ燒鈍スルコト

五、蒸汽過熱器、壓縮空氣管、燃料油管、油槽及氣槽ハ検査員ニ於テ必要ト認ムルトキハ第二章第七條第三號ノ表ニ掲グル壓力ヲ以テ水壓試験ヲ行フコト若シ氣槽ノ内部ヲ検査シ得ザルトキハ必ズ其ノ水壓試験ヲ行フコト

六、新ニ備ヘタル機關又ハ其ノ部分ニ付テハ前二號ノ規定ニ該當セザルモノト雖モ第二章第七條ノ規定ヲ準用シテ水壓試験ヲ行フコト

七、電氣裝置ハ其ノ使用狀態ニ於テ各配電盤、電纜等ヲ出來ル限リ検査スルノ外發電機ハ單獨又ハ連結シテ負荷運轉ヲ爲シ開閉器及遮斷器ノ効力ヲ試験スルコト又電動機及電纜ノ絶縁抵抗ヲ試験シ其ノ値ガ 100,000「オーム」ヨリ小ナルトキハ之ヲ調整スルコト

八、壓力計、發電機ノ電壓計及電流計其ノ他ノ計器ノ効力ニ付適當ナル試験ヲ爲スコト

第十四條 定期検査ニ於テハ前回ノ中間検査又ハ其ノ後ノ検査ニ於テ定期検査ニ準ジ検査ヲ行ヒタル事項ニ關シテハ検査員ノ見込ニ依リ精密ナル検査ヲ省略スルコトヲ得

第十五條 多數ノ水槽又ハ油槽ヲ備フル船ノ定期検査ニ於テハ其ノ現狀、船齡及前回水壓試験ヲ受ケタル時期ヲ考慮シ検査員ニ於テ特ニ差支ナシト認ムル場合ニ限リ一部ノ水槽又ハ油槽ノ水壓試験ヲ省略スルコトヲ得

第十六條 氣筒ノ數五箇以上ニシテ重油ヲ燃料トスル内燃機ヲ備フル船ノ定期検査ニ於テハ機關ノ部分ニ付四年毎ニ少クトモ一回定期検査ニ準ジ検査ヲ行

フコトヲ條件トシ検査員ノ見込ニ依リ精密ナル検査ヲ省略スルコトヲ得

第十七條 同形ノ汽機又ハ内燃機ニ依リ推進軸系二箇以上ヲ有スル船ノ定期検査ニ於テハ前回定期検査後定期検査ニ準ジ検査ヲ行ヒタル汽機又ハ内燃機ノ部分ニ付テハ該検査ノ時期並ニ機關ノ年齡、現狀、製造中ノ入級検査ヲ受ケタルモノナルヤ否ヤ等ヲ考慮シ検査員ニ於テ特ニ差支ナシト認ムル場合ニ限リ精密ナル検査ヲ省略スルコトヲ得

前項ニ該當セザル船ノ定期検査ノ場合ニ於テモ汽機又ハ内燃機ガ製造中ノ入級検査ヲ受ケ製造後十四年未滿ノモノナルトキハ前項ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

第四章 中間検査

第一條 中間検査ハ入級検査ト定期検査及定期検査相互ノ中間ニ於テ入級検査又ハ前回ノ定期検査若ハ中間検査終了ノ日ヨリ十二月毎ニ之ヲ行フ

第二條 前條ノ規定ニ依リ中間検査ヲ受クベキ時期ニ於テ當該船舶ガ遞信省令船舶安全法施行規則ニ依リ中間検査ヲ延期セラレタルトキハ該期間内中間検査ヲ猶豫ス

第三條 中間検査ハ之ヲ受クベキ時期ニ該當セザルモ船主ヨリ請求アリタルトキハ其ノ時期ヲ繰上ゲ之ヲ行フ

第四條 中間検査ニ於テハ船ヲ入渠又ハ上架セシムベシ但シ正當ノ事由ニ依リ本會ノ承認ヲ受ケタルトキハ其ノ指定スル時期迄入渠又ハ上架ヲ延期スルコトヲ得

第五條 中間検査ノ準備ハ次ノ各號ニ依ル

一、船體及艙裝

第三章第七條第一項第四號、第十二號第十三號ニ掲グル準備ヲ爲スコト

二、往復動汽機

(一) 汽筒及滑弁匣ノ内部ヲ検査シ得ル様爲シ置クコト但シ検査員ニ於テ必要ト認ムル場合ヲ除クノ外「ピストン」及滑弁ヲ取外サザルモ妨ナシ

(二) 「クランク」軸ヲ検査シ得ル様爲シ置クコト

三、「タービン」汽機

「タービン」筒ノ上半ヲ扛擧シ「ローター」ヲ検査シ得ル様爲シ置クコト

四、内 燃 機

(一) 汽筒ノ内部及汽筒蓋ノ燃燒室側ヲ検査シ得ル様爲シ置クコト但シ検査員ニ於テ必要ト認ムル場合ヲ除クノ外「ピストン」ヲ取外サザルモ妨ナシ

(二) 「クランク」軸ヲ検査シ得ル様爲シ置クコト

五、推進器、推進軸系及動力傳導装置

第三章第十二條第四號ニ準ジ準備ヲ爲シ置クコト

六、汽 罐

第三章第十二條第五號ニ準ジ準備ヲ爲シ置クコト

七、給水装置

(一) 給水「ポンプ」ノ要部ヲ検査シ得ル様解放シ置クコト

(二) 給水濾器ヲ掃除シ置クコト

八、復水装置

抽氣「ポンプ」及循環水「ポンプ」ノ要部ヲ検査シ得ル様解放シ置クコト

九、吸水、排水及冷却ノ装置

(一) 最大吃水線以下ニ於テ船外ニ通ズル弁及「コック」ヲ解放シ置クコト

(二) 滲水「ポンプ」ノ要部ヲ検査シ得ル様解放シ置クコト

(三) 芥除箱及泥芥箱ヲ掃除シ置クコト

十、潤滑油装置

(一) 潤滑油「ポンプ」ノ要部ヲ検査シ得ル様解放シ置クコト但シ二重装置ナルトキハ其ノ一方ニ付準備ヲ爲スニ止ムルモ妨ナシ

(二) 油濾器ヲ掃除シ置クコト

十一、空氣壓縮機、掃除空氣「ポンプ」及其ノ附屬装置

空氣壓縮機及掃除空氣「ポンプ」ノ要部ヲ検査シ得ル様爲シ置クコト但シ二組以上ヲ備フルトキハ其ノ一組ニ付準備ヲ爲スニ止ムルモ妨ナシ

十二、船ノ推進ニ關係アル補助機

主機ニ準ジ準備ヲ爲スコト

十三、機關備品

近寄り易キ場所ニ整備シ置クコト

十四、效力試験

排水、操舵、繫船、揚錨等ノ装置竝ニ電氣装置及計器ニ付検査員ノ指示スル所ニ依リ效力試験ノ準備ヲ爲スコト

第六條 中間検査ニ於テハ船體、機關、艤裝及備品ノ現状ニ付簡易ナル検査ヲ行ヒ特ニ次ノ各號ニ依ルベシ

一、船體及艤裝ニ關シテハ主トシテ次ニ掲グル事項ヲ注意シテ検査スルコト

(一) 船底及舵

(二) 暴露セル艙口及閉鎖装置ノ效力ガ第一級閉鎖装置ノ效力ニ及バザル船樓内ノ艙口ノ縁材、蓋板、縦材、梁、覆布及覆布締附装置

(三) 暴露セル機關室口圍壁及之ニ設クル出入口ノ閉鎖装置竝ニ焚火室口及主機室天窗ノ閉鎖装置

(四) 上甲板以下ノ場所又ハ閉鎖装置ノ效力ガ第一級閉鎖装置ノ效力以上ナル船樓内ノ場所ニ通ズル通風筒ノ暴露セル縁材及閉鎖装置

(五) 暴露セル甲板上ノ空氣管及其ノ閉鎖装置

(六) 水密隔壁ニ於ケル水密戸及支水弁竝ニ船樓端隔壁ニ於ケル出入口ノ閉鎖装置

(七) 平載炭孔及其ノ蓋

(八) 舷牆ニ於ケル放水口ノ扉及蝶番

(九) 實際上検査可能ナル状態ニ在ル上甲板下ノ排水管其ノ他ノ排出管

(十) 舷門、載貨門、載炭門竝ニ上甲板及船樓甲板下ニ於ケル舷窓

(十一) 操舵機具、鎖、圓材、導鎖滑車其ノ他操舵装置ノ全部

(十二) 木材滿載吃水線ヲ標示シタル船又ハ槽船ニ在リテハ逕信省令船舶滿載吃水線規程ニ定ムル特別ノ構造及設備

二、機關ニ關シテハ其ノ要部ヲ前條ニ規定シタル検査準備ノ範圍ニ於テ検査スルコト

三、次ニ掲グル装置及器具ノ效力ニ付適當ナル試験ヲ行フコト但シ検査員ニ於テ差支ナシト認ムル場合ニ於テハ之ヲ省略スルコトヲ得

(一) 排水装置

- (二) 操舵、繫船、揚錨及揚貨ノ装置
- (三) 電氣装置
- (四) 壓力計、發電機ノ電壓計及電流計並ニ其ノ他ノ計器

第七條 中間検査ニ於テハ其ノ以前六月以内ニ中間検査ニ準ジ検査ヲ行ヒタル事項ニ付テハ検査員ノ見込ニ依リ其ノ検査ヲ省略スルコトヲ得

第八條 製造中ノ入級検査ヲ受ケタル水管式以外ノ汽罐ニシテ製造後九年未滿ノモノノ中間検査ニ於テハ其ノ現状、前検査ノ成績等ヲ考慮シ検査員ニ於テ特ニ差支ナシト認ムル場合ニ限り検査ノ方法ヲ斟酌スルコトヲ得

第九條 中間検査ニ於テ検査員特ニ必要アリト認メタル事項又ハ船主ヨリ特ニ請求アリタル事項ニ付テハ定期検査ニ準ジ検査ヲ行フ

第五章 臨時検査

第一條 臨時検査ハ船級ノ登録ヲ受ケタル船ガ其ノ定期検査又ハ中間検査ノ時期以外ノ時期ニ於テ次ノ各號ノ一ニ該當スルトキ之ヲ行フ

- 一、船體若ハ機關ノ要部又ハ本會ノ検査ヲ受ケタル重要ナル艙裝若ハ備品ニ損傷ヲ生ジタルトキ又ハ之ヲ修繕若ハ變更セントスルトキ
- 二、非旅客船ニ在リテ滿載吃水線ヲ變更シ又ハ之ヲ標示スル必要ヲ生ジタルトキ
- 三、機關ノ一部又ハ全部ヲ移動セントスルトキ
- 四、螺旋軸ヲ拔出シタルトキ
- 五、船ヲ入渠又ハ上架シタル場合ニ於テ船主ヨリ検査ノ請求アリタルトキ
- 六、其ノ他検査ヲ行フ必要アルトキ

第二條 臨時検査ニ於テハ前條各號ノ場合ニ應ジ必要ナル事項ニ付検査ヲ行フ

第六章 冷蔵装置ノ検査

第一條 第一章第三條ニ規定スル冷蔵装置ノ登録検査ニ於テハ第四編ノ規定ニ依リ冷凍機關、冷凍機室、冷蔵艙防熱装置及豫備品等ヲ検査シ且冷凍機關ノ耐壓試験並ニ冷凍及防熱装置ノ效力試験ヲ行フ

第二條 本會ノ登録ヲ受ケタル冷蔵装置ニ對シテハ六月ヲ超エザル期間毎ニ次ノ各號ニ依リ定期検査ヲ行フ

- 一、「リンバーハツチ」及艙口蓋ヲ全部取外シ「リンバー」ヲ掃除シ海水吸引管及測水管ヲ検査スルコト
- 二、艙口、通氣管、寒暖計箱、通風筒縁材及甲板ニ於ケル諸取附部ヲ検査シ通氣管ガ水密隔壁ヲ貫通スル箇所ニ於テハ水密扉ノ開閉試験ヲ行フコト
- 三、「ブライン」ヲ塗水道ニ排出スルコトアル箇所ニ於テハ「セメント」ヲ検査スルコト
- 四、冷凍機ノ各部、各「ポンプ」、汽管、水管、復水器、瓦斯凝縮器、「ブライン」冷却器、冷却媒液管、瓦斯管、「ブライン」管及豫備品ヲ検査スルコト
- 五、瓦斯凝縮器ノ「コイル」ガ鐵製又ハ銅製ナルトキハ約四年目毎ニ之ヲ取出シ又銅製ナルトキハ約六年目毎ニ之ヲ取附ケタル儘ニテ夫々成規ノ水壓試験ヲ爲スコト

第三條 三月以内ニ一航海ヲ終ル船ニ在リテハ航海ノ終ニ於テ第四條ノ規定ニ依リ部分検査ヲ受クルコトヲ得

部分検査ニ於テ検査ヲ受ケタル部分ハ次回定期検査ニ於テ検査ヲ省略ス

第四條 部分検査ニ於テハ少クとも次ノ各號ニ依リ検査ヲ行フコトヲ要ス

- 一、防熱装置、通氣管及冷蔵艙ニ於ケル冷却管ノ一般検査ヲ行フコト
- 二、壓縮筒及其ノ附屬諸弁ヲ検査シ且豫備品ヲ調査スルコト

第五條 冷凍機關ハ定期検査毎ニ使用状態ニ於テ之ヲ試験スルコトヲ要ス該試験ハ成ルベク揚荷港ニ於テ揚荷完了前ニ行フベキモノトス

第六條 前諸條ノ規定ニ依リ揚荷港ニ於テ冷凍機關及防熱装置ノ検査ヲ受ケタル場合ト雖モ積荷港ニ於テ冷蔵貨物ヲ積載セントスルトキハ更ニ積荷前検査ヲ受クルコトヲ要ス但シ船ガ本會検査員ノ検査ヲ受ケ難キ地ニ在ル場合ニ於テハ相當ノ技能ヲ有スル者ヲシテ検査ヲ行ハシメ又相當ノ技能ヲ有スル者ヲ得難キ場合ニ於テハ其ノ船ニ於ケル二名ノ當該技術者ヲシテ検査ヲ行ハシムルコトヲ得

前項ノ検査ニ於テハ「バツテン」及防熱装置ニ異状ナキヤヲ確メ且冷凍機關ヲ

使用状態ニ於テ運轉シテ船内ノ温度ヲ記録スルモノトス
第一項但書ノ場合ニ於テハ検査報告書ヲ本會ニ提出スベシ

第七章 検査ニ關スル雜則

第一條 本會ヨリ滿載吃水線ノ指定ヲ受クル船ニ於ケル滿載吃水線ノ位置ノ決定、標示スベキ滿載吃水線ノ種類及其ノ標示ノ方法ハ逓信省令船舶滿載吃水線規程ノ定ムル所ニ依ル

第二條 船級ノ登録ヲ受ケタル船ノ螺旋軸ハ第三編ノ規定ニ依ル第一種螺旋軸ナルトキハ三年以内ニ、第二種螺旋軸ナルトキハ二年以内ニ少クトモ一回拔出シテ之ヲ検査ス

前項ノ検査ハ成ルベク船ノ定期検査又ハ中間検査ニ於テ之ヲ行フモノトス

第三條 捕鯨母船其ノ他ノ特殊漁船ニ於テ漁獲物ノ處理ニ使用スル受壓罐ハ之ヲ補汽罐トシテ取扱ヒ検査スルモノトス但シ製造後六年未滿ノモノハ初メテ船ニ備附クル場合ヲ除ク外検査員ノ見込ニ依リ其ノ定期検査又ハ中間検査ノ方法ヲ斟酌スルコトヲ得

第四條 汽罐ヲ備フル船ノ入級検査、定期検査又ハ中間検査ニ於テハ汽罐ノ安全弁ハ検査後汽罐ノ制限汽壓ニ對シ調整シタル上之ヲ封鎖ス臨時検査ニ於テ其ノ封鎖ヲ解放シタルトキ亦同ジ

検査中ニ非ザル時機ニ於テ已ムコトヲ得ザル事由ニ依リ汽罐ノ安全弁ノ封鎖ヲ解放シタルトキハ遲滞ナク其ノ事由ヲ具シ再封鎖ヲ本會ニ申込ムベシ

第五條 汽船ノ定期検査、中間検査又ハ臨時検査ニ於テ最速力ニ影響アリト認ムル修繕又ハ變更ヲ加ヘタルトキハ速力試験ヲ行フ

検査員検査ヲ行フニ當リ必要アリト認ムルトキハ船ノ試運轉又ハ機關ノ試運轉ヲ行フコトアルベシ

第六條 船舶ノ検査ニ於テ錨鎖ノ最モ衰耗シタル箇所ニ於ケル平均ノ徑ガ其ノ原徑ニ對シ次表ニ掲グルモノ以下トナリタルモノアリタルトキハ之ヲ新換スベシ

原徑 (耗)	平均ノ徑 (耗)	原徑 (耗)	平均ノ徑 (耗)	原徑 (耗)	平均ノ徑 (耗)	原徑 (耗)	平均ノ徑 (耗)
9	8	22	19.5	40	36	66	59
10	9	23	20.5	42	37.5	68	61
11	10	24	21.5	44	39	70	62.5
12	11	25	22	46	41	72	64
13	11.5	26	23	48	43	74	66
14	12.5	27	24	50	44.5	76	68
15	13	28	25	52	46.5	78	70
16	14	29	26	54	48	80	71.5
17	15	30	27	56	50	82	73
18	16	32	28.5	58	52	85	76
19	17	34	30	60	53.5	88	78.5
20	18	36	32	62	55.5	91	81.5
21	19	38	34	64	57		

第七條 中間検査ヲ受クベキ場合ニ於テ定期検査ヲ繰上ゲ受ケタルトキハ中間検査ハ之ヲ行ハズ臨時検査ヲ受クベキ場合ニ於テ定期検査又ハ中間検査ヲ繰上ゲ受ケタルトキ亦之ニ準ズ

第八條 検査ヲ受ケントスルトキハ検査申込者ハ之ニ必要ナル準備ヲ爲スベシ

前項ノ検査準備ハ定期検査又ハ中間検査ニ在リテハ夫々第三章又ハ第四章ニ規定スル所ニ依リ其ノ他ノ検査ニ在リテハ検査員ノ指示スル所ニ依ル

第九條 検査ヲ受クルトキハ検査事項ニ應ジ船長、機關長又ハ之ニ代リテ其ノ職務ヲ行フ者之ニ立會ヒ検査員ニ對シ必要ナル援助ヲ爲スベシ
製造中ノ入級検査又ハ適當ナル乗組員ノ在ラザル船ノ検査ニ於テハ検査申込者又ハ其ノ指定ヲ受ケタル者之ニ立會フベシ

第十條 検査ニ際シ必要ナル準備ヲ爲サザルトキ又ハ立會人ナキトキハ検査ヲ停止スルコトアルベシ

第十一條 検査ノ結果修理ヲ爲スノ必要ヲ認メタルトキハ本會又ハ検査員ヨリ其ノ旨ヲ検査申込者ニ通知ス

前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ修理ヲ爲シタル上検査員ノ臨檢ヲ受クベシ

第十二條 本會ノ入級検査ヲ受ケ之ニ合格シタル船ニ付テハ船舶検査簿及検査通知簿ヲ發行ス

船舶検査簿ニハ船ノ要目、船體及機關ノ構造及寸法、検査ノ成績等ヲ記載シテ検査員ノ參考ニ供シ又検査通知簿ニハ次回検査ノ種類、期日等ヲ記載シテ船主ヘノ通知書ニ代フルモノトス

船舶検査簿及検査通知簿ハ船長之ヲ保管シ爾後検査申込ノ際必ズ本會ニ之ヲ差出スベシ本會ニ於テ検査ヲ結了シタルトキハ之ニ所定事項ヲ記入シタル上検査申込者ニ交付ス

船舶検査簿ハ封緘シテ之ヲ交付ス

第十三條 船舶検査簿ハ管海官廳又ハ本會職員ノ外之ヲ開封スルコトヲ得ズ

第十四條 本會ノ船級登録ヲ受ケタル船ニ付定期検査、中間検査、臨時検査又ハ冷藏装置ノ検査ヲ行ヒタルトキハ本會ヨリ検査證明書ヲ發行ス

第十五條 船舶検査簿又ハ検査通知簿ヲ滅失又ハ毀損シタルトキハ再發行ヲ、

船舶検査簿ノ封緘ヲ毀損シタルトキハ再封緘ヲ本會ニ申込ムベシ

検査證明書ヲ滅失又ハ毀損シタル場合ニ於テ必要アルトキハ其ノ再發行ヲ本會ニ申込ムベシ

第十六條 船級ノ登録ヲ受ケタル船ガ海難ニ罹リ管海官廳ニ海難報告書ヲ提出スル必要アル場合ニ於テハ本會ノ検査ヲ受クルト否トニ拘ラズ遲滞ナク其ノ事實ヲ本會ニ届出ヅベシ船級ノ登録ヲ受ケタル船ガ入渠又ハ上架シタル場合亦同ジ

第八章 検査料其ノ他ノ料金

第一條 船級ノ登録ヲ受ケントスル船又ハ登録ヲ受ケタル船ノ検査ヲ行ヒタルトキハ検査ノ種類等ニ應ジ別表ノ定ムル所ニ依リ検査料ヲ申受ク但シ朝鮮及臺灣ニ於テハ別表ニ依ル金額ノ一倍半、關東州ニ於テハ別表ノ金額ノ二倍ノ料金ヲ申受ク

前項ノ規定ハ本會本部、本會出張所若ハ検査員駐在所ノ所在地附近又ハ本會ニ於テ特ニ指定シタル地ニ於テ検査ヲ行ヒタル場合ニ之ヲ適用ス其ノ他ノ地ニ於テ検査ヲ行ヒタルトキハ前項ニ依ル料金ノ外割増料金ヲ申受クルモノト

ス

第二條 本會ハ承認ヲ受ケンガ爲依頼アリタル特殊計畫ノ調査ニ對シ相當ノ料金ヲ申受ク其ノ金額ハ委員會ニ於テ之ヲ定ム

第三條 船級ノ登録ヲ受ケル目的ヲ以テ設計圖面其ノ他ノ書類ヲ差出シ調査ヲ受ケタルモ本會ノ入級検査ヲ受ケザル場合ニ於テハ相當ノ料金ヲ申受ク其ノ金額ハ委員會ニ於テ之ヲ定ム

第四條 船級證書其ノ他ノ證書、船舶検査簿又ハ検査通知簿ノ再發行又ハ書換ヲ爲シタルトキハ次ノ區別ニ依リ手数料ヲ申受ク

- 一、船級證書ノ再發行又ハ書換 10 圓
- 二、假船級證書ノ再發行又ハ書換 5 圓
- 三、冷藏装置證書又ハ假冷藏装置證書ノ再發行又ハ書換 5 圓
- 四、船舶検査簿ノ再發行船體部各
機關部 5 圓乃至 10 圓
- 五、検査通知簿ノ再發行 1 圓
- 六、検査證明書ノ再發行 1 圓

第五條 検査ノ爲検査員ヲ本會本部、出張所又ハ検査員駐在所ノ所在地附近以外ノ地ニ出張セシメタルトキハ本會所定ノ旅費ヲ申受ク

別表 検査料金表
製造中入級検査料金

	總噸數	料 金	備 考
船 體 及 載 裝	100 以下	90 圓	油槽船ニ付テハ表ニ掲グル料金ノ 1.5 倍トス
	100 ヲ超エ 1,000 未滿	超過 10 噸迄毎ニ 9 圓ヲ加算シタル額	
	1,000 ナルトキ	900 圓	
	1,000 ヲ超エ 2,000 未滿	超過 10 噸迄毎ニ 6 圓ヲ加算シタル額	
	2,000 ナルトキ	1,500 圓	
	2,000 ヲ超エ 5,000 未滿	超過 10 噸迄毎ニ 4 圓ヲ加算シタル額	
	5,000 ナルトキ	2,700 圓	

5,000ヲ超ニ10,000未滿	超過 10 噸迄毎 = 2 圓 ヲ加算シタル額
10,000 ナルトキ	3,700 圓
10,000 ヲ超ユルトキ	超過 100 噸迄毎 = 10 圓 ヲ加算シタル額

汽筒ノ徑ノ和(米)	料 金	備 考
1.5 以下	60 圓	一、同一ノ船ニ備フベキ同型同大ノ汽機ニ臺以上ヲ同時ニ検査スル場合ニ於テハ内一臺ヲ除キ其ノ他ノモノノ検査料ハ表ニ依ルモノノ 5 割トス 二、往復動汽機ト「タービン」汽機トヲ併用スル場合ニ於テハ其ノ検査料金ハ各種汽機ニ對スル料金ノ和トス
1.5 ヲ超ニ 2.5 未滿	超過 0.05 米迄毎 = 10 圓 ヲ加算シタル額	
2.5 ナルトキ	260 圓	
2.5 ヲ超ニ 3.5 未滿	超過 0.05 米迄毎 = 9 圓 ヲ加算シタル額	
3.5 ナルトキ	440 圓	
3.5 ヲ超ユルトキ	超過 0.05 米迄毎 = 8 圓 ヲ加算シタル額	

軸 馬 力	料 金	備 考
500 以下	160 圓	一、高壓、中壓及低壓ノ「タービン」ガ軸ヲ異ニスル場合ト雖モ此等ヲ一括シタルモノヲ以テ「タービン」汽機一組トス 二、軸馬力ハ計畫正常軸馬力ヲ採ルモノトス 三、同一ノ船ニ備フベキ同型同大ノ汽機ニ二組以上ヲ同時ニ検査スル場合ニ於テハ内一組ヲ除キ其ノ他ノモノノ検査料ハ表ニ依ルモノノ 5 割トス 四、「タービン」汽機ト往復動汽機トヲ併用スル場合ニ於テハ其ノ検査料金ハ各種汽機ニ對スル料金ノ和トス
500 ヲ超ニ 2,500 未滿	超過 100 馬力迄毎 = 16 圓 ヲ加算シタル額	
2,500 ナルトキ	480 圓	
2,500 ヲ超ニ 5,000 未滿	超過 100 馬力迄毎 = 7 圓 ヲ加算シタル額	
5,000 ナルトキ	655 圓	
5,000 ヲ超ユルトキ	超過 100 馬力迄毎 = 3 圓 ヲ加算シタル額	

「タービン」汽機 (一組ニ付)

受熱面積(平方米)	料 金	備 考
100 以下	50 圓	一、受熱面積ハ燃料節減器ノ受熱面積ヲ含ムモノトス 二、制限汽壓ガ每平方糎 12.5 糎ヲ超ユル汽罐ニ付テハ制限汽壓 (每平方糎ニテ) ト 12.5 トノ比ヲ受熱面積ニ乗ジタル面積ヲ表ノ受熱面積ニ充テ料金ヲ定ム 三、強壓通風又ハ誘引通風ヲ採用スル汽罐ニ付テハ受熱面積ノ 1.25 倍ヲ表ノ受熱面積ニ充テ料金ヲ定ム 四、同一ノ船ニ備フベキ同型同大ノ汽罐ニ二個以上ヲ同時ニ検査スル場合ニ於テハ内一個ヲ除キ其ノ他ノモノノ検査料ハ表ニ依ルモノノ 5 割トス
100 ヲ超ニ 400 未滿	超過 10 平方米迄毎 = 5 圓 ヲ加算シタル額	
400 ナルトキ	200 圓	
400 ヲ超ユルトキ	超過 10 平方米迄毎 = 3 圓 ヲ加算シタル額	

汽 罐 (一箇ニ付)

軸 馬 力	料 金	備 考
125 以下	60 圓	一、軸馬力ハ計畫正常軸馬力ヲ採ルモノトス 二、同一ノ船ニ備フベキ同型同大ノ内燃機ニ二臺以上ヲ同時ニ検査スル場合ニ於テハ内一臺ヲ除キ其ノ他ノモノノ検査料ハ表ニ依ルモノノ 5 割トス
125 ヲ超ニ 500 未滿	超過 25 馬力迄毎 = 12 圓 ヲ加算シタル額	
500 ナルトキ	240 圓	
500 ヲ超ニ 2,500 未滿	超過 25 馬力迄毎 = 7 圓 ヲ加算シタル額	
2,500 ナルトキ	800 圓	
2,500 ヲ超ニ 5,000 未滿	超過 25 馬力迄毎 = 3 圓 ヲ加算シタル額	
5,000 ナルトキ	1,100 圓	
5,000 ヲ超ユルトキ	超過 100 馬力迄毎 = 4 圓 ヲ加算シタル額	

内 燃 機 (一臺ニ付)

	發電機ノ總容量 (キロワット)	料 金	備 考
電 氣 裝 置	5 以下	40 圓	本表ニ於ケル發電機ノ總容量ニハ點燈用、補機用等ノ發電機ノ容量ヲ包含シ推進裝置用發電機ノ容量ハ之ヲ包含セザルモノトス
	5 ヲ超エ 15 未滿	超過 1「キロワット」迄 毎ニ 8 圓ヲ加算シタル額	
	15 ナルトキ	120 圓	
	15 ヲ超エ 30 未滿	超過 1「キロワット」迄 毎ニ 4 圓ヲ加算シタル額	
	30 ナルトキ	180 圓	
	30 ヲ超エ 50 未滿	超過 1「キロワット」迄 毎ニ 2 圓ヲ加算シタル額	
	50 ナルトキ	220 圓	
	50 ヲ超エ 200 未滿	超過 5「キロワット」迄 毎ニ 4 圓ヲ加算シタル額	
	200 ナルトキ	340 圓	
	200 ヲ超エ 500 未滿	超過 5「キロワット」迄 毎ニ 2 圓ヲ加算シタル額	
500 ナルトキ	460 圓		
500 ヲ超ユルトキ	超過 5「キロワット」迄 毎ニ 1 圓ヲ加算シタル額		

	發電機ノ總容量 (キロワット)	料 金	備 考
電 氣 推 進 裝 置	300 以下	120 圓	電氣推進用發電機ノ原動機ニ付テハ其ノ種類ニ應ジ表ニ定ムル検査料ヲ別ニ申受クルモノトス
	300 ヲ超エ 800 未滿	超過 100「キロワット」迄 毎ニ 40 圓ヲ加算シタル額	
	800 ナルトキ	320 圓	
	800 ヲ超エ 1,600 未滿	超過 100「キロワット」迄 毎ニ 35 圓ヲ加算シタル額	
	1,600 ナルトキ	600 圓	
	1,600 ヲ超エ 2,500 未滿	超過 100「キロワット」迄 毎ニ 25 圓ヲ加算シタル額	
	2,500 ナルトキ	825 圓	
	2,500 ヲ超エ 4,000 未滿	超過 100「キロワット」迄 毎ニ 8 圓ヲ加算シタル額	
	4,000 ナルトキ	945 圓	
	4,000 ヲ超ユルトキ	超過 100「キロワット」迄 毎ニ 5 圓ヲ加算シタル額	

製造中入級検査料金ニ關スル注意

- 一、補機、艤裝品等ニシテ船體又ハ主機ト同時ニ又ハ同一ノ場所ニ於テ検査ヲ受ケザルモノニ付テハ本會船用品検査試験規則ノ定ムル所ニ依リ別ニ料金ヲ申受ク船體又ハ機關ニ使用スル材料ニ付亦同ジ
- 二、本會船級ノ外聯盟船級協會ノ船級ヲ併セ登録セントスル船ノ製造中入級検査ニ付テハ其ノ各船級協會ノ船級毎ニ本表ニ依リ算定シタル料金額ノ 2.5 割ヲ追加申受ク

既成船入級検査料金

既成船入級検査料金ハ委員會ニ於テ其ノ都度之ヲ定ム

定期検査料金

	總 噸 數	第一次定期検査			第二次以後ノ定期検査			備 考
		第一種	第二種	第三種	第一種	第二種	第三種	
船 體 及 艤 裝	100 未滿	30 圓	30 圓	30 圓	40 圓	40 圓	40 圓	油槽船ニ付テハ表ニ掲グル料金ノ 1.5 倍トス
	100 以上 300 未滿	40	40	40	60	60	60	
	300 " 500 "	50	50	50	80	80	80	
	500 " 1,000 "	70	70	70	120	120	120	
	1,000 " 1,500 "	110	140	180	140	180	220	
	1,500 " 2,500 "	130	150	210	160	200	260	
	2,500 " 5,000 "	150	170	220	180	220	280	
	5,000 " 7,000 "	160	180	230	200	230	290	
	7,000 " 10,000 "	170	190	240	210	240	300	
	10,000 "	180	200	260	220	250	310	

	汽筒ノ徑ノ和(米)	料 金	備 考
往復動汽機 (一臺ニ付)	1.0 未滿	20圓	一、高壓、中壓及低壓ノ「タービン」ガ軸ヲ異ニスル場合ト雖モ此等ヲ一括シタルモノヲ以テ「タービン」汽機一組トシ其ノ軸馬力ハ計畫正常軸馬力ヲ探ルモノトス 二、同型同大ノ往復動汽機二臺以上又ハ「タービン」汽機二組以上ヲ備フル場合ニ於テハ内一臺又ハ一組ヲ除キ其ノ他ノモノノ料金ハ表ニ依ルモノノ5割トス 三、「タービン」汽機ト往復動汽機トヲ併用スル場合ニ於テハ其ノ検査料金ハ各種汽機ニ對スル料金ノ和ノ8割トス
	1.0 以上 1.5 未滿	30	
	1.5 " 2.0 "	40	
	2.0 " 2.5 "	60	
	2.5 " 3.5 "	80	
	3.5 " 4.5 "	90	
	4.5 "	100	
タービン汽機 (一組付)	軸 馬 力	料 金	
	500 未滿	50圓	
	500 以上 1,000 未滿	70	
	1,000 " 2,000 "	80	
	2,000 " 5,000 "	90	
	5,000 "	100	

	種 別	料 金	備 考
汽罐(一箇ニ付)	直立汽罐又ハ筒形片面汽罐各1箇ナルトキ	20 圓	
	" 1箇ヲ超ユルトキ	超過1箇毎ニ10圓ヲ加算シタル額	
	筒形兩面汽罐又ハ水管汽罐各1箇ナルトキ	30 圓	
	" 1箇ヲ超ユルトキ	超過1箇毎ニ20圓ヲ加算シタル額	
内 燃 機 (一臺ニ付)	軸 馬 力	料 金	一、軸馬力ハ計畫正常軸馬力ヲ探ルモノトス 二、同型同大ノ内燃機二臺以上ヲ備フル場合ニ於テハ内一臺ヲ除キ其ノ他ノモノノ料金ハ表ニ依ルモノノ5割トス
	100 未滿	30圓	
	100 以上 250 未滿	40	
	250 " 500 "	60	
	500 " 1,000 "	90	
	1,000 " 2,000 "	110	
	2,000 " 4,000 "	130	
4,000 " 8,000 "	150		
	8,000 "	160	

	發電機ノ總容量 (キロワット)	料 金	備 考
電 氣 装 置	15 未滿	10圓	一、本表ニ於ケル發電機ノ總容量ニハ點燈用、補機用等ノ發電機ノ容量ヲ包含シ推進裝置用發電機ノ容量ハ之ヲ包含セザルモノトス 二、電氣推進裝置ヲ備フル船ノ機關ニ對スル定期検査料金ハ發電機ノ原動機ノ種類ニ應ジ表ニ依リ之ヲ定メ別ニ本表ニ依リ検査料ヲ申受ケズ 三、總噸數 1,500 噸以上ノ旅客船ノ電氣裝置ニ付テハ發電機ノ容量ニ拘ラズ其ノ検査料金ハ 80 圓トス
	15 以上 25 未滿	20	
	25 " 50 "	30	
	50 " 75 "	40	
	75 " 100 "	50	
	100 " 500 "	60	
	500 "	70	

定期検査料金ニ關スル注意

構造變更、模様替、損傷修理等ノ検査ノ爲特ニ臨檢ヲ爲シタルトキハ臨時検査料金ノ規定ヲ準用シテ増料金ヲ申受クルコトアルベシ

中 間 檢 査 料 金

總 噸 數	料 金 (船體機關併セテ)	備 考
100 未滿	25圓	構造變更、模様替、損傷修理等ノ検査ノ爲特ニ臨檢ヲ爲シタルトキハ臨時検査料金ノ規定ヲ準用シテ増料金ヲ申受クルコトアルベシ
100 以上 300 未滿	35	
300 " 500 "	45	
500 " 1,500 "	55	
1,500 " 3,000 "	70	
3,000 " 6,000 "	90	
6,000 " 10,000 "	110	
10,000 "	130	

臨時検査料金

總噸數	料 金 (臨檢一回=付)	備 考
300 未満	{ 第一回 10圓 第二回以後 5	一、一回ノ臨檢時間ハ約4時間トシ之ヲ超ユルトキハ4時間毎ニ臨檢回数ヲ算定ス 二、船體検査員及機關検査員ノ臨檢ヲ要スル場合ニ於テ第一回ノ臨檢トハ船體、機關ノ中何レカ最初ノ臨檢ヲ指スモノトス從テ第一回ノ料率ヲ二重ニ適用セズ 三、船體又ハ機關ニ關スル臨時検査料金ガ當該船舶ノ船體第一次第一種定期検査又ハ機關ニ對スル定期検査料金ニ相當スル金額ヲ超ユルトキハ之ヲ該金額ニ止ム
300 以上 500 未満	{ 第一回 15 第二回以後 10	
500 " 1,500 "	{ 第一回 20 第二回以後 10	
1,500 " 5,000 "	{ 第一回 25 第二回以後 15	
5,000 " 10,000 "	{ 第一回 30 第二回以後 20	
10,000 "	{ 第一回 35 第二回以後 25	

冷蔵装置検査料金

冷蔵船ノ容積(立方米)	料 金				備 考
	登録検査	定期検査	部分検査	積荷前検査	
1,120 未満	65圓	40圓	30圓	25圓	登録検査ヲ冷蔵装置ノ出來上リ後ニ行フトキハ其ノ料金ハ表ニ掲ゲルモノノ8割トス
1,120 以上 1,680 未満	70	45	35		
1,680 " 2,240 "	80	50	40		
2,240 " 2,800 "	90	55	45		
2,800 " 3,360 "	100	60	50	30圓	
3,360 " 3,920 "	115	70	55		
3,920 " 4,480 "	130	80	60		
4,480 " 5,040 "	145	90	65		
5,040 " 5,600 "	160	100	70		
5,600 " 6,160 "	175	110	80	35圓	
6,160 " 7,000 "	190	120	90		
7,000 " 7,840 "	205	130	100		
7,840 " 8,960 "	225	140	110		
8,960 " 10,080 "	250	155	120		
10,080 " 11,200 "	280	175	130		
11,200 " 14,000 "	320	200	150		
14,000 " 16,800 "	360	225	170		
16,800 "	400	250	190		

満載吃水線指定料金

總噸數	料 金	備 考
200 以下	10圓	一、初メテ満載吃水線ノ指定ヲ爲ストキハ検査料金ノ外本表ニ依リ料金ヲ申受ク尙木材満載吃水線ノ指定ニ付テハ普通満載吃水線ノ指定ト同時ナルト別箇ナルトヲ問ハズ表ニ依ル金額ノ8割ヲ別ニ申受ク 二、満載吃水線ノ再指定ヲ爲ストキハ表ニ依ル金額ノ8割ノ料金ヲ申受ク但シ航行區域變更ノ爲冬期北太平洋満載吃水線ノ標示ヲ附加又ハ抹消スルニ止マル場合ニ限リ其ノ料金ハ表ニ依ル金額ノ2割トス 三、前號ノ規定ニ拘ラズ昭和九年三月一日以前ニ指定ヲ受ケタル満載吃水線ヲ有スル船ニ對シ再指定ヲ爲ス場合ニ於テハ初メテ指定ヲ受ケル場合ト同様第一號ニ定ムル料金ヲ申受ク
200 ヲ超エ 300 以下	20	
300 " 500 "	30	
500 " 1,000 "	45	
1,000 " 2,000 "	65	
2,000 " 3,000 "	85	
3,000 " 4,000 "	100	
4,000 " 5,000 "	115	
5,000 " 6,000 "	130	
6,000 ヲ超ユルトキ	超過 1,000 噸迄 毎= 10 圓ヲ加算シタル額	

一般検査料金及満載吃水線指定料金ニ關スル注意

- 一、休暇日又ハ執務時間外ニ臨檢シタルトキハ一回ニ付金 10 圓ノ料金ヲ追加申受ク
- 二、検査又ハ満載吃水線指定ノ爲朝鮮、臺灣等ニ出張シタル場合ニ於テハ出張ニ要シタル總日數ヨリ検査又ハ指定ニ要シタル日數ヲ減ジタル殘日數一日ニ付 20 圓ノ割合ノ料金ヲ追加申受ク
- 三、聯盟船級協會ノ船級ヲ有シ本會ノ船級ヲ有セザル船ノ検査料金ハ次ノ各號ニ依ル
 - (イ) 特別検査、年次検査及螺旋軸検査ニ對シテハ當該船級協會所定ノ料金ヲ時價ニ依リ邦貨ニ換算シタル額ヲ申受ク
 - (ロ) 臨時検査ニ對シテハ臨檢一回ニ付金 40 圓ヲ申受ク
 - (ハ) 休暇日及執務時間外検査ニ對シテハ半日ニ付金 30 圓ヲ追加申受ク

第二編 船體ノ構造及裝裝

第一章 總 則

適用 **第一條** 本編ノ規定ハ主トシテ逓信省令船舶安全法施行規則ニ定ムル近海區域以上ノ航路ニ使用スル普通ノ型ノ船舶ニ之ヲ適用ス。逓信省令船舶安全法施行規則ニ定ムル平水區域又ハ沿海區域内ニ航路ヲ制限スル船舶ノ構造竝ニ材料及其ノ寸法ハ委員會ノ適當ト認ムル所ニ依ル。

特殊船 **第二條** 特ニ重量ノ貨物ヲ積載スル船舶、特殊ノ載貨方法ヲ爲ス爲特ニ大ナル局部的強力ヲ必要トスル船舶其ノ他特別ノ事由ニ因リ本編ノ規定ニ依リ難キ船舶ニ付テハ委員會ノ適當ト認ムル所ニ依リ其ノ構造及寸法ヲ本編ニ規定スルモノヨリ増減變更スルコトアルベシ。

大型船 特ニ大形ノ船舶ニ付テハ委員會ニ於テ必要ト認ムルトキハ其ノ構造及寸法ヲ本編ニ規定スルモノヨリ増補セシムルコトアルベシ。

帆船 **第三條** 帆船ノ肋骨、梁、梁肘板等ノ構造及寸法、局部ノ補強方法竝ニ水密隔壁ノ配置及數ニ付テハ本編ニ規定アル場合ヲ除クノ外委員會ノ適當ト認ムル所ニ依ル。

材料 **第四條** 別段ノ定アル場合ヲ除クノ外本編ニ規定スル各部材料ノ寸法ハ第五編ノ規定ニ適合シタル鋼材ヲ使用スル場合ニ付之ヲ定メ形鋼ノ寸法ハ日本標準規格ニ適合スル形狀ノモノヲ使用スル場合ニ付之ヲ定メタルモノトス。

鐵材ノ使用 **第五條** 方形龍骨、船首材、船尾骨材、舵、梁柱、汽罐ノ下部ニ於ケル肋板、二重底内底板其ノ他ノ鋼板及石炭庫隔壁ニハ同一寸法ノ鐵材ヲ以テ鋼材ニ代用スルコトヲ得。隔壁板、軸路及木甲板ヲ張ラザル暴露甲板ニハ厚サヲ鋼ヲ使用スルトキヨリ 10% 増ストキハ鐵ヲ使用スルコトヲ得。前二項ニ掲グルモノヲ除キ鋼ヲ使用スベキ部分ニハ特ニ委員會ノ承

認ヲ受クルニ非ザレバ鐵ヲ使用スルコトヲ得ズ。

工 事 **第六條** 各部ノ工事ハ良好且有效ナルコトヲ要ス。

鉄孔ハ實際上可能ナル限り接面ノ側ヨリ之ヲ打貫クモトヲ要シ且打貫ノ際使用スル受臺ハ鉄孔ノ周縁部ノ捲レヲ少クスル爲成ルベク小穴ノモノト爲スベシ。

船底彎曲部ノ肋骨其ノ他著シキ屈曲ヲ有スル箇所ノ肋骨ハ所要ノ形狀ニ屈曲セシメタル後ニ非ザレバ之ニ鉄孔ヲ穿ツベカラズ但シ豫メ小形ノ孔ヲ穿テ置キ屈曲後所要ノ大サニ鉋揉スル場合ハ此ノ限ニ在ラズ。

鋼材ヲ接合スルトキハ接面ニ於ケル捲レ其ノ他ノ突起部ヲ除去シ鉄打工事ニ先チ螺釘ヲ以テ十分ニ締附ケ密着セシメ鉄孔ガ一致セザルトキハ適當ニ鉋揉スベシ。

鋼板ヲ著シク熱シタルトキ又ハ其ノ一部分ノミヲ熱シタルトキハ取附前之ヲ適當ニ燒鈍スベシ。

曲 緣 **第七條** 鋼板ニ山形鋼ヲ固着スル代リニ板ヲ曲縁スルトキハ曲縁ノ幅ヲ成ルベク當該部分ニ附スベキ山形鋼ノ邊ノ幅以上ト爲スベシ。鋼板ヲ曲縁スルトキハ屈曲ノ内半徑ヲ成ルベク板ノ厚サノ 2 倍以上 3 倍以下ト爲スベシ。

鋼板又ハ形鋼ヲ「ジョツグル」スルトキハ屈曲ノ内半徑ヲ成ルベク厚サノ 2 倍以上ト爲スベシ。

諸 試驗 **第八條** 本編ノ規定ニ依リ試驗ハ検査員ノ立會ノ下ニ之ヲ執行スベシ。

材料試驗機ハ逓信省令船用品試驗機取締規則ニ依リ定ムル使用期間内ニ在ルモノヲ用フベシ。

材料試驗ハ委員會ノ適當ト認ムル證明書アル材料ニ付テハ之ヲ省略スルコトヲ得。

塗 裝 **第九條** 單底構造ノ船底、湓水道、汽罐室ノ下部ニ於ケル二重底内ノ船底其ノ他必要ナル箇所ニハ「ポートランド セメント」又ハ之ト同等ノ效力ヲ有スル塗料ヲ施シ外板、肋骨及鉄ヲ保護スベシ。

鋼又ハ鐵ヲ以テ構造シタル部分ハ「セメント」又ハ水「セメント」ヲ以テ塗裝シタルモノヲ除キ必要ニ應ジ油「ペイント」其ノ他適當ノ塗料ヲ以テ之ヲ塗裝スベシ

鋼材ハ錆皮ノ除去ヲ容易ナラシムル爲製造中成ルベク長期間十分大氣ニ暴露シタル後之ヲ塗裝スベシ

航 裝 品 **第十條** 檣、索具竝ニ揚貨、揚錨及繫船ノ裝置其ノ他ノ航裝品ハ本編ニ特ニ規定アルモノノ外其ノ用途ニ應ジ適當ニ構造配置シ検査員ノ行フコトアルベキ試験ニ合格ノモノナルコトヲ要ス

燃料油ヲ積載スル場合 **第十一條** 本編中燃料油ヲ積載スル場合ノ構造及設備ニ關スル規定ハ密閉試験ニ依ル引火點攝氏 65 度以上ノ燃料油ヲ積載スル場合ニ之ヲ適用ス

攝氏 65 度未滿ノ引火點ヲ有スル燃料油ヲ積載スル場合ノ構造及設備ハ委員會ノ適當ト認ムル所ニ依ル

規定ニ該當セザル構造 **第十二條** 本編ノ規定ニ該當セザル船體ノ構造及寸法ハ委員會ニ於テ本編ノ規定ニ依ルモノト同一ノ效力ヲ有スト認ムル場合ニ限り之ヲ本編ノ規定ニ適合スルモノト看做ス

聯盟船級協會船級ノ外國船 **第十三條** 本會船級及聯盟船級協會船級ヲ併セ登録スル外國船ニ在リテハ其ノ構造及設備ニ關シ當該聯盟船級協會ノ規定ニ適合スルトキハ之ヲ本編ノ規定ニ適合スルモノト看做ス

滿載吃水線ノ標示ヲ要スル船舶 **第十三條** 船舶安全法第三條ニ依リ滿載吃水線ノ標示ヲ要スル船舶ニ在リテハ本編ノ規定ニ依ルノ外其ノ構造及設備ニ關シ逓信省令船舶滿載吃水線規程ニ依ル

漁船ニ在リテハ本編ノ規定ニ依ルノ外其ノ構造及設備ニ關シ逓信省令漁船特殊規程ニ依リ尙「トロール」汽船ナルトキハ大正七年農商務省告示第 278 號ニ依ルノ必要アルコトニ注意スベシ

特殊貨物ノ積附設備 **第十四條** 特殊貨物ノ積附設備ニ付テハ逓信省令船舶設備規程第五編ノ規定ニ依ル

國際航海ニ從事スル外國船 **第十五條** 國際航海ニ從事スル旅客船ニ在リテハ船内區畫、舷側諸口、排水裝置其ノ他ニ關シ逓信省令船舶區畫規程ニ依ルノ必要アル

コトニ注意スベシ

外國船 外國船ニ在リテハ本編ノ規定ニ依ルノ外所屬國政府ノ規則ニ依ルノ必要アル場合アルコトニ注意スベシ

第二章 定 義

諸甲板 **第一條** 上甲板トハ船體ノ主要部ヲ構造スル最上層ノ全通甲板ヲ謂フ但シ二層以上ノ全通甲板ヲ有シ最上層ノ全通甲板ノ暴露部ニ常設閉鎖裝置ヲ備ヘザル甲板口ヲ有スル船舶(以下之ヲ遮浪甲板船ト稱ス)ニ在リテハ最上層ノ全通甲板ノ直下ノ全通甲板ヲ謂フ

第二甲板又ハ第三甲板トハ上甲板ヨリ數ヘ順次第二層又ハ第三層ノ甲板ヲ謂フ

遮浪甲板トハ遮浪甲板船ニ於ケル最上層ノ全通甲板ヲ謂フ

強力甲板 **第二條** 船ノ長サノ或箇所ニ於ケル強力甲板トハ其ノ箇所ニ於ケル船體ノ主要部ヲ構造スル最上層ノ甲板ヲ謂フ

低船首尾樓ノ甲板及船ノ長サノ 15% 以上ノ長サヲ有スル船樓ノ甲板ハ之ヲ強力甲板トシテ取扱フモノトス

隔壁甲板 **第三條** 隔壁甲板トハ船首尾隔壁ヲ除キ其ノ他ノ横置水密隔壁ガ第十二章第五條ノ規定ニ依リ到達スル最上層ノ甲板ヲ謂フ

船 樓 **第四條** 船樓トハ船側ヨリ船側ニ達シ上部ニ甲板ヲ有スル上甲板上ノ構造物ヲ謂フ

船ノ長サ **第五條** 船ノ長サトハ計畫滿載吃水線ニ於テ船首材ノ前面ヨリ舵柱ヲ有スル船舶ニ在リテハ其ノ後面迄、舵柱ヲ有セザル船舶ニ在リテハ舵頭材ノ中心迄測リタル距離ヲ謂フ

巡洋艦型船尾ヲ有スル船舶ニ在リテハ船ノ長サハ前項ノ規定ニ依リ長サト計畫滿載吃水線上ニ於ケル船ノ全長ノ 96% トノ中大ナルモノトス

船ノ長サハLヲ以テ之ヲ示シ其ノ單位ハ米トス

船ノ幅 **第六條** 船ノ幅トハ船體最廣部ニ於ケル肋骨ノ外面ヨリ外面迄ノ水平距離ヲ謂フ

船ノ幅ハBヲ以テ之ヲ示シ其ノ單位ハ米トス

船ノ深サ **第七條** 船ノ深サトハLノ中央ニ於テ龍骨ノ上面ヨリ上甲板梁ノ船側ニ於ケル上面迄ノ垂直距離ヲ謂フ

船ノ深サハDヲ以テ之ヲ示シ其ノ單位ハ米トス

満載吃水 **第八條** 満載吃水線トハ船舶満載吃水線規程ニ依リ標示シタル圓標ノ中心ヲ通過スル吃水線ヲ謂フ但シ満載吃水線ノ標示ヲ爲サザル船舶ニ在リテハ計畫最大吃水ニ對スル吃水線ヲ謂フ

満載吃水トハLノ中央ニ於ケル龍骨ノ上面ヨリ満載吃水線迄ノ垂直距離ヲ謂フ

満載吃水ハdヲ以テ之ヲ示シ其ノ單位ハ米トス

船樓端ノ閉鎖装置 **第九條** 船樓端ノ隔壁ノ開口ニ於ケル第一級閉鎖装置又ハ第二級閉鎖装置トハ逕信省令船舶満載吃水線規程ニ定ムル第一級又ハ第二級ノ閉鎖装置ヲ謂フ

漁船 **第十條** 漁船トハ逕信省令船舶安全法施行規則ニ定ムル漁船ヲ謂フ

第三章 龍骨、船首材、船尾骨材及船尾肋板

第一節 方形龍骨

材料 **第一條** 方形龍骨ハ平爐若ハ電氣爐ニ依リ製造シタル鋼塊ヨリ鍛造若ハ壓延シ又ハ屑鐵若ハ屑鋼ヨリ鍛造スベシ
方形龍骨ヲ屑鋼若ハ屑鐵ヨリ鍛造スル場合ニ於テハ兩者ノ混合物ヲ使用スルコトナク且成ルベク長材ニ仕上グベシ

寸法 **第二條** 方形龍骨ノ寸法ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ但シL80米以上ノ船舶ノ方形龍骨ノ寸法ハ委員會ノ適當ト認ムル所ニ依ル

$$\text{深サ} \quad 110 + 1.28 L \quad (\text{耗ニテ})$$

$$\text{厚サ} \quad 10 + 0.67 L \quad (\text{耗ニテ})$$

嵌接 **第三條** 方形龍骨ノ嵌接ノ長サハ該龍骨ノ深サノ2.5倍以上ト爲シ嵌接ノ末端ニ於ケル鉋孔ハ龍骨ヲ盤木上ニ正確ニ配列シタル後錐揉スベシ

船首材又 **第四條** 方形龍骨ト船首材又ハ船尾骨材トノ嵌接ハ方形龍骨相互ノ

ハ船尾骨材トノ嵌接 嵌接ト同等以上ノ效力ノモノト爲スベシ

第二節 平板龍骨

寸法 **第五條** 平板龍骨ノ寸法ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ但シ首尾兩端ノモノヲ除キ中央部Lノ $\frac{3}{5}$ 間ノ前後ニ於テハ漸次其ノ厚サヲ算式ニ依ルモノノ90%迄減ズルコトヲ得

$$\text{幅} \quad 875 + 21.5 \left(\frac{L}{10} \right) + \left(\frac{L}{10} \right)^2 \quad (\text{耗ニテ})$$

$$\text{厚サ} \quad 4 + d + 0.067 L \quad (\text{耗ニテ})$$

満載吃水ガDノ85%ヲ超ユルトキハDノ85%ヲ前項ノ算式ノdニ充ツベシ但シ遮浪甲板船ニ在リテハ此ノ限ニ在ラズ

平板龍骨ノ厚サハ前二項ノ規定ニ拘ラズ之ニ隣接スル船底外板ノ厚サヨリ小ト爲スコトヲ得ズ

船首尾ニ於ケル固着 **第六條** 平板龍骨ハ船首材又ハ船尾骨材ト十分ニ累接シ堅牢ニ固着シ且船首材又ハ船尾骨材ノ踵部ニ附スル外板ト肋骨心距以上累接セシムベシ

第三節 船首材

材料 **第七條** 船首材ハ方形龍骨ニ對シ定メタル材料又ハ鑄鋼材ヲ以テ製造スベシ

寸法 **第八條** 船首材ノ寸法ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ但シ満載吃水線ヨリ上部ニ於テハ漸次其ノ寸法ヲ減ジ頂上ニ於テハ面積ヲ下部ニ於ケル面積ノ70%ト爲スコトヲ得

$$\text{幅} \quad 74 + 18.5 \left(\frac{L}{10} \right) - 0.5 \left(\frac{L}{10} \right)^2 \quad (\text{耗ニテ})$$

$$\text{厚サ} \quad 6 + 6.9 \left(\frac{L}{10} \right) - 0.15 \left(\frac{L}{10} \right)^2 \quad (\text{耗ニテ})$$

L185米ヲ超ユル船舶ノ船首材ノ寸法ハ委員會ノ適當ト認ムル所ニ依ル

嵌接 **第九條** 船首材相互ノ嵌接ノ長サハ船首材ノ規定ノ幅ノ2倍以上ト爲スベシ

第四節 船尾骨材

材 料 第十條 船尾骨材ハ鍛鋼材又ハ鑄鋼材ヲ以テ製造スルカ又ハ屑鐵若ハ屑鋼ヨリ鍛造スベシ

船尾骨材ヲ屑鐵又ハ屑鋼ヨリ鍛造スル場合ニ於テハ兩者ノ混合物ヲ使用スルコトヲ得ズ

推進器孔
ヲ有セザ
ル船尾骨
材 第十一條 推進器孔ヲ有セザル船尾骨材ノ寸法ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ但シ舵頭管ノ下部ヨリ上方ニ至ルニ從ヒ漸次其ノ寸法ヲ減少シ頂上ニ於テハ截面積ヲ下部ニ於ケル截面積ノ75%ト爲スコトヲ得

$$\text{幅} \quad 74 + 18.5 \left(\frac{L}{10} \right) - 0.5 \left(\frac{L}{10} \right)^2 \quad (\text{耗ニテ})$$

$$\text{厚サ} \quad 8 + 0.76 L \quad (\text{耗ニテ})$$

L 185 米ヲ超ユル船舶ノ推進器孔ヲ有セザル船尾骨材ノ寸法ハ委員會ノ適當ト認ムル所ニ依ル

推進器柱 第十二條 推進器柱ノ寸法ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ但シ車軸孔ヨリ上部ノ幅ハ算式ニ依ルモノノ85%ト爲スコトヲ得

$$\text{幅} \quad 80.5 + 15.6 \left(\frac{L}{10} \right) - 0.17 \left(\frac{L}{10} \right)^2 \quad (\text{耗ニテ})$$

$$\text{厚サ} \quad 14.4 + 10.4 d + 0.89 L \quad (\text{耗ニテ})$$

満載吃水ガ D ノ 85% ヲ超ユルトキハ D ノ 85% ヲ前項ノ算式ノ d ニ充ツベシ但シ遮浪甲板船ニ在リテハ此ノ限ニ在ラズ

L 229 米ヲ超ユル船舶ノ推進器柱ノ寸法ハ委員會ノ適當ト認ムル所ニ依ル

推進器孔
ヲ有スル
船尾材 推進器孔ヲ有スル船舶ノ舵柱ノ寸法ハ推進器柱ノ車軸孔ヨリ上部ノ寸法以上ト爲スベシ但シ舵頭管ノ下部ヨリ上方ニ至ルニ從ヒ漸次其ノ寸法ヲ減少シ頂上ニ於テハ截面積ヲ下部ニ於ケル截面積ノ50%ト爲スコトヲ得

二箇又ハ四箇ノ推進器ヲ有スル船舶ノ船尾骨材ニシテ推進器孔ニ類スル孔ヲ有スルモノノ寸法ハ委員會ノ適當ト認ムル所ニ依ル

速力及舵
ニ對スル
考慮 第十三條 高速力ノ汽船ノ船尾骨材ノ寸法ハ前二條ニ定メタルモノヨリ適當ニ増加スルコトヲ要ス

特殊形状ノ舵又ハ特ニ大ナル舵ヲ備フル爲船尾骨材ノ補強ヲ要スルトキ亦前項ニ同ジ

車軸孔ノ
兩側 第十四條 推進器柱ノ車軸孔ノ兩側ニ於ケル厚サハ推進器柱下部ノ厚サノ60%以上ト爲スベシ

特殊截面 第十五條 船尾骨材ノ截面ガ矩形ナラザル場合ニ於テハ強力及剛性ガ前四條ニ依ルモノト同等以上ト爲ル様其ノ寸法ヲ定ムベシ

嵌 接 第十六條 船尾骨材ヲ二材以上ニテ構造スルトキハ嵌接ノ幅ハ船尾骨材ノ幅ノ1.5倍以上、嵌接ノ長サハ船尾骨材ノ幅ノ3倍以上、嵌接末端ノ厚サハ船尾骨材ノ厚サノ13%以上ト爲シ四列鉄ヲ以テ固着スベシ

巡洋艦型船尾ヲ有スル船舶ノ舵柱ノ嵌接ハ上端壺金ノ上方垂直部ニ設クルコトヲ得ズ

踵 部 第十七條 船尾骨材ノ踵部ニシテ推進器柱ト舵柱トノ間ニ於ケル部分ハ成ルベク短クシ其ノ截面積ヲ推進器柱ノ車軸孔ヨリ下部ノ截面積ノ1.25倍以上ト爲シ其ノ幅ヲ成ルベク大ナラシムベシ

龍骨トノ
固着 第十八條 船尾骨材ノ踵部ハ推進器柱ヲ有セザル船舶ニ在リテハ船尾材下部ノ前面ヨリ其ノ幅ノ9倍以上、之ヲ有スル船舶ニ在リテハ推進器柱下部ノ前面ヨリ其ノ幅ノ10倍及1.5米ノ中大ナル長サ以上前方ニ延長シ龍骨ト結合スベシ但シ船尾隔壁ヲ超エテ延長スベキ場合ニ於テ特ニ固着ヲ十分ニ爲ストキハ延長ヲ該隔壁ニ止ムルコトヲ得

第十九條 平衡舵ヲ支持スル爲特ニ後方ニ突出セル船尾骨材踵部ノ寸法ハ委員會ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第五節 船尾肋板及之ト船尾骨材トノ固着

寸 法 第二十條 船尾肋板ノ厚サハ二重底實體肋板ノ厚サニ推進器孔ヲ有セザル船舶ニ在リテハ2.5耗ヲ、之ヲ有スル船舶ニ在リテハ5耗ヲ加ヘタルモノ以上ト爲シ其ノ深サハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ但シ小形船ニ付テハ其ノ深サヲ斟酌スルコトヲ得

$$96 + 9.12 L \quad (\text{耗ニテ})$$

山形鋼 船尾肋板ノ上端ニ附スル山形鋼ノ厚サハ船尾肋板ノ厚サ以上ト爲シ其ノ各邊ノ幅ハ固着鉄ノ徑ニ應ジ適當ニ定ムベシ

舵柱トノ固着 **第二十一條** 舵柱ハ船尾肋板ノ上端迄延長シ各側ニ於テ山形鋼ヲ以テ該肋板ニ二列鉄固着ト爲スベシ

L 85 米ヲ超ユル汽船ニ在リテハ推進器柱ヲ上方ニ延長シ舵柱ノ固着方法ニ準ジ之ヲ肋板ニ固着スベシ

特殊ノ形狀ノ船尾骨材ノ上部ノ固着ハ前二項ノ規定ニ依ルモノト同等以上ノ效力ヲ有スルモノト爲スベシ

第六節 船尾骨材ニ於ケル舵ノ壺金

第二十二條 壺金ハ船尾骨材ト共ニ鍛造又ハ鑄造シ上端壺金ハ成ルベク舵頭管ニ接近セシムベシ

寸法 **第二十三條** 不平衡舵ヲ有スル船舶ノ舵柱ニ於ケル壺金ノ深サハ舵頭材ノ徑ノ 75% 以上ト爲スベシ但シ下端壺金ノ深サハ舵針ノ長サニ適應スルモノナルコトヲ要ス

壺金ノ厚サハ其ノ内部ニ嵌輪ヲ取附クルトキハ舵頭材ノ徑ノ 25% 以上、嵌輪ヲ取附ケザルトキハ 27.5% 以上ト爲スベシ

第四章 單底構造

第一節 肋板

第一條 肋板ハ肋骨毎ニ之ヲ設クベシ

寸法 **第二條** 肋板ノ寸法ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ但シ肋骨心距ガ其ノ標準心距ヲ超ユルトキハ超過 50 耗ニ付 15 耗ノ割合ヲ以テ肋板ノ深サヲ増スベシ

船ノ中心線ニ於ケル肋板ノ深サ C

$$95 + 42d + 2.25B^2 \quad (\text{耗} = \text{テ})$$

$$\text{肋板ノ厚サ} \quad 0.01C + 3.8 \quad (\text{耗} = \text{テ})$$

満載吃水ガ D ノ 85% ヲ超ユルトキハ D ノ 85% ヲ前項ノ算式ノ

d = 充ツベシ但シ遮浪甲板船ニ在リテハ此ノ限ニ在ラズ

中央部 L ノ $\frac{1}{2}$ 間ノ前後ニ於テハ漸次肋板ノ厚サヲ減ジ首尾兩端ニ

於テハ第一項ニ定ムルモノノ 90% ト爲スコトヲ得但シ 6 耗未滿ト爲スコトヲ得ズ

船首船底ノ扁平ナル部分、船尾艙内及水槽ニ使用スル船首艙内ノ肋板ノ厚サハ前項ノ規定ニ拘ラズ第一項ノ規定ニ依ルベシ

増厚 主機室ニ在リテハ肋板ノ厚サヲ第一項ニ定ムルモノヨリ 1 耗増シ汽罐室ニ在リテハ 2.5 耗増スベシ

主機臺ノ下方ニ於テハ肋板ヲ特ニ堅牢ナル構造ト爲スベシ

隔壁ノ一部ヲ構造スル肋板ノ寸法ニ付テハ第十二章第九條ノ規定ニ依ルベシ

深サ **第三條** 肋板ノ上縁ハ何レノ部分ニ於テモ船ノ中心線ニ於ケル其上縁ヨリ低カラザルコトヲ要ス

船ノ中央部ニ在リテハ中心線ヨリ B ノ $\frac{3}{8}$ = 相當スル箇所ニ於ケル肋板ノ深サヲ前條ノ算式ニ依ルモノノ $\frac{1}{2}$ 以上ト爲スベシ

船底ノ傾斜特大ナル船舶ニ在リテハ中心線ニ於ケル肋板ノ深サヲ適當ニ増スベシ

肘板 **第四條** 肋板ヲ肋骨ニ固着スル肘板ノ寸法ハ次ノ各號ニ依リ之ヲ定メ其ノ遊邊ヲ曲縁ト爲スベシ

一、龍骨ノ上面ヨリ測リタル上端ノ高サヲ中心線ニ於ケル肋板ノ規定ノ深サノ 2 倍ト爲スコト

二、肋骨ノ内縁ヨリ肋板ノ上縁ニ沿ヒ測リタル肘板ノ幅ハ中心線ニ於ケル肋板ノ深サ以上ト爲スコト

三、厚サヲ其ノ箇所ニ於ケル肋板ノ規定ノ厚サ以上ト爲スコト

第五條 肋板ニハ中心線ノ各側及船底扁平ナル船舶ニ在リテハ彎曲部ノ下部ニ於テ其ノ下縁ニ附スル山形鋼ノ上部ニ排水孔ヲ設クベシ

肋板ニハ輕目孔ヲ設クルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ肋板ノ深サヲ増スカ又ハ其ノ他ノ方法ニ依リ適當ニ補強スベシ

第二節 肋板ニ附スル山形鋼

艙内肋骨 **第六條** 艙内肋骨ト第四條ノ肘板トハ肋骨ノ深サノ 2.75 倍以上累

及外板ト
ノ固着

接スルコトヲ要ス

船内肋骨ノ下端ト船ノ中心線トノ間ニ於ケル肋板ハ其ノ厚サニ等シキ厚サノ單山形鋼ヲ以テ外板ニ一列銲固着ト爲スベシ

前項ノ山形鋼ノ各邊ノ幅ハ第二十四章第十五條ノ規定ニ依リ之ヲ定ムベシ

船内肋骨ノ截面積ガ前二項ニ定ムル山形鋼ノ截面積以上ナルトキハ船内肋骨ヲ船ノ中心線迄延長シ前二項ノ山形鋼ニ代用スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ延長シタル船内肋骨ト肋板トノ累接ノ幅ヲ一列銲固着ニ對スルモノニ止ムルモ妨ナシ

上縁山形
鋼

第七條 肋板ノ上縁ニハ中心線貫通板ヲ備フル場合ニ於テハ中心線ヨリ船側迄、其ノ他ノ場合ニ於テハ船側ヨリ船側迄連續スル山形鋼ヲ附スベシ

前項ノ山形鋼ハ厚サヲ其ノ箇所ニ於ケル肋板ノ厚サニ等シクシ各邊ノ幅ヲBニ應ジ次表ニ依リ定メ廣邊ヲ水平ニ置クベシ

B	ヲ超ニ	4"	5"	7"	9"	12"	14"	14ヲ超ニ
	4以下	5"	7"	9"	12"	14"	15以下	
山形鋼(耗)	60×50	60×60	65×65	75×65	75×75	90×75	100×75	

主機室内及汽罐臺ノ下方ニ於ケル肋板ノ上縁ニ附スル山形鋼ハ之ヲ二重ト爲スベシ

衝

第八條 肋板ノ上縁ニ附スル山形鋼又ハ第二十四條第二項ノ規定ニ依リ肋板ノ下縁ニ連續シテ取附クルコトヲ要スル山形鋼ヲ衝接スルトキハ之ニ覆山形鋼又ハ背面山形鋼ヲ附シ衝合ノ各側ニ於テ三箇以上ノ銲ヲ以テ固着スベシ

曲

第九條 肋板ノ厚サヲ規定ノ厚サヨリ0.5耗以上増加シ且其ノ上縁ヲ上縁山形鋼ノ規定ノ幅以上曲線スルトキハ該山形鋼ヲ省略スルコトヲ得但シ主機室内、汽罐臺下及船首ヨリLノ $\frac{1}{4}$ 間ニ在リテハ此ノ限ニ在ラズ

前項ノ規定ニ依リ上縁ヲ曲線シタル肋板ヲ船側迄達セシメズシテ肘

板ヲ以テ船側ニ固着スル場合ニ於テハ肋板及肘板ノ上縁ノ衝接ニ覆板ヲ附スルカ又ハ其ノ他適當ノ方法ニ依リ其ノ接合ヲ堅牢ナラシムベシ

第十條 中心線貫通板ト肋板トハ貫通板ノ厚サニ等シキ厚サノ二重山形鋼又ハ二列銲單山形鋼ヲ以テ固着スベシ但シL70米未滿ノ船舶ニ在リテハ一列銲單山形鋼固着ト爲スコトヲ得
前項ノ堅山形鋼ノ各邊ノ幅ハ第二十四章第十五條ノ規定ニ依リ之ヲ定メ銲ノ數ハ肋板ノ規定ノ深サヨリ貫通板ノ下縁ニ附スル山形鋼ノ堅邊ノ規定ノ幅ヲ減ジタル長サニ對シ銲徑ノ4倍ノ心距ニ配置シ得ルモノ以上ト爲スベシ

第三節 中心線内龍骨

構造ノ種
類

第十一條 中心線内龍骨ハ次ノ各號ノ一ニ掲グル構造ノモノト爲シ出來得ル限り船首尾ニ延長スベシ但シL60米以上ノ船舶又ハ平板龍骨ヲ有スル船舶ニ在リテハ第三號ノ構造ノモノト爲スコトヲ得ズ

一、中心線貫通板ト平置板又ハ同一效力ノ形鋼トヲ以テ構造スルモノ

二、二重山形鋼ト斷切板トヲ以テ構造スルモノ

三、二重球山形鋼ヲ以テ構造スルモノ

中心線貫
通板

第十二條 中心線貫通板ノ厚サハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ但シ中央部Lノ $\frac{1}{2}$ 間ノ前後ニ於テハ漸次其ノ厚サヲ減少シ首尾兩端ニ於テハ其ノ85%ト爲スコトヲ得

$$0.058L + 6.4 \quad (\text{耗ニテ})$$

中心線貫通板ハ其ノ兩側ニ平置板ヲ設クルトキハ之等ヲ固着スル山形鋼ノ上端迄、貫通板上ニ平置板ヲ設クルトキハ肋板ノ上端迄達セシムベシ

平置板

第十三條 平置板ハ船首隔壁ヨリ船尾隔壁迄達セシメ其ノ厚サハ中心線貫通板ノ厚サニ等シク爲スベシ

中心線貫通板ノ兩側ニ設クル平置板ノ幅ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ但シ150耗未滿ト爲スコトヲ得ズ

8.3 L-100 (耗ニテ)

前項ノ平置板ノ幅200耗ヲ超ユルトキハ中央部Lノ $\frac{1}{2}$ 間ノ前後ニ於テハ漸次其ノ幅ヲ減ジ首尾兩端ニ於テハ前項ニ定ムルモノノ80%ト爲スコトヲ得但シ200耗未滿ト爲スコトヲ得ズ

中心線貫通板上ニ設クル平置板ノ幅ハ前二項ニ依ルモノノ2倍ト爲スベシ

中心線貫
通板ノ上
下固着

第十四條 中心線貫通板ト平置板及平板龍骨トハ貫通板ノ厚サニ等シキ厚サヲ有スル山形鋼ヲ以テ一列鋲固着ト爲スベシ

中心線貫通板ト平板龍骨トヲ固着スル山形鋼及中心線貫通板ト前條第四項ニ掲グル平置板トヲ固着スル山形鋼ハ主機室內、推力受臺ノ下部、前部Lノ $\frac{1}{4}$ 間及貫通板ヲ水密構造ト爲ス箇所ニ於テハ二重ト爲スベシ

中心線貫通板ト平板龍骨又ハ前條第四項ニ掲グル平置板トヲ固着スル單山形鋼ヲ衝接スルトキハ其ノ背面ニ適當ナル覆山形鋼ヲ附スベシ

中心線貫通板ト前條第二項ニ掲グル平置板トヲ固着スル山形鋼ヲ衝接スルトキハ適當ナル覆山形鋼ヲ附スベシ

斷切板 **第十五條** 第十一條第二號ニ掲グル斷切板ノ厚サハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ但シ中央部Lノ $\frac{1}{2}$ 間ノ前後ニ於テハ漸次其ノ厚サヲ減少シ首尾兩端ニ於テハ算式ニ依リ算定シタルモノノ85%ト爲スコトヲ得

0.066 L+5.6 (耗ニテ)

前項ノ斷切板ト肋板及平板龍骨トハ斷切板ノ厚サニ等シキ厚サヲ有スル短山形鋼ヲ以テ一列鋲固着ト爲スベシ

主機室內、推力受臺ノ下部及前部Lノ $\frac{1}{4}$ 間ニ於テハ斷切板ト平板龍骨トヲ二重山形鋼ヲ以テ一列鋲固着ト爲スカ又ハ單山形鋼ヲ以テ二列鋲固着ト爲スベシ

山形鋼 **第十六條** 第十一條第二號ニ掲グル山形鋼ハ其ノ厚サヲ斷切板ノ厚サ以上ト爲シ其ノ截面積ヲ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲ス

ベシ但シ中央部Lノ $\frac{1}{2}$ 間ノ前後ニ於テハ漸次其ノ截面積ヲ減ジ首尾兩端ニ於テハ中央部ニ於ケルモノノ80%ト爲スコトヲ得

0.303 L+4.5 (平方糎ニテ)

各山形鋼ハ肋板上ニ縱通セシメ二箇ノ鋲ヲ以テ肋板上縁ニ附スル山形鋼ニ固着スベシ

球山形鋼 **第十七條** 第十一條第三號ニ掲グル球山形鋼ノ截面積ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ但シ中央部Lノ $\frac{1}{2}$ 間ノ前後ニ於テハ漸次其ノ截面積ヲ減ジ首尾兩端ニ於テハ中央部ニ於ケルモノノ90%ト爲スコトヲ得

$75\left(\frac{L}{100}\right)^2 - 12.7\left(\frac{L}{100}\right) + 19.1$ (平方糎ニテ)

各球山形鋼ハ其ノ廣邊ヲ垂直ト爲シ肋板上ニ縱通セシメ二箇ノ鋲ヲ以テ肋板上縁ニ附スル山形鋼ニ固着スベシ

増厚 **第十八條** 中心線内龍骨ヲ構造スル各材ノ厚サハ汽罐室ニ於テハ前條ニ依リ定メタルモノニ2耗ヲ加ヘタルモノト爲スベシ但シ平板龍骨ニ附スル山形鋼ニシテ「セメント」ヲ以テ覆ハルルモノニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

第四節 側内龍骨

配置 **第十九條** B9米以下ノ船舶ニ在リテハ各舷ニ一箇、9米ヲ超ユル船舶ニ在リテハ各舷ニ二箇ノ側内龍骨ヲ設クベシ
前部Lノ $\frac{1}{4}$ 間ニ於ケル船底ノ扁平ナル部分ニ於テハ側内龍骨ノ間隔ヲ1米以内ト爲スベシ

構造 **第二十條** 側内龍骨ハ肋板上ニ縱通二重山形鋼又ハ同一效力ノ平置板ヲ設ケ之ヲ斷切板及短山形鋼ヲ以テ外板ニ固着シタル構造ト爲シ出來得ル限り船首尾ニ延長スベシ
L30米未滿ノ船舶ノ側内龍骨ハ船首船底ノ扁平ナル部分ヲ除キ肋板上ニ二重山形鋼ヲ縱通セシメタル構造ト爲スコトヲ得

縱通山形鋼 **第二十一條** 側内龍骨ノ縱通山形鋼ハ其ノ厚サヲ中心線貫通板ノ厚サノ85%以上ト爲シ其ノ截面積ヲ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

0.227 L + 4.4 (平方糎 = テ)

前項ノ山形鋼ハ成ルベク不等邊山形鋼ト爲シ各二箇ノ鉄ヲ以テ肋板ノ上縁ニ附スル山形鋼ニ固着スベシ

斷切板 **第二十二條** 側内龍骨ノ斷切板ハ其ノ厚サヲ中心線貫通板ノ厚サノ85% 以上ト爲シ之ヨリ少カラザル厚サヲ有スル短山形鋼ヲ以テ外板ニ一列鉄固着ト爲スベシ但シ主機室以外ノ場所ニ於テハ斷切板ノ厚サヲ0.5 耗増ストキハ其ノ下縁ヲ曲縁シ外板ニ固着スルコトヲ得中央部ニ機關室ヲ備フル船舶ニ在リテハ前部 L ノ $\frac{1}{5}$ 間、船尾ニ機關室ヲ備フル船舶ニ在リテハ前部 L ノ $\frac{1}{4}$ 間ニ於テハ外板ト斷切板トヲ二重山形鋼ヲ以テ一列鉄固着ト爲スカ又ハ單山形鋼ヲ以テ二列鉄固着ト爲スベシ

主機臺ノ下部ニ於テハ斷切板ノ厚サヲ中心線貫通板ノ厚サ以上ト爲シ之ヲ其ノ厚サ以上ノ厚サヲ有スル短山形鋼ヲ以テ肋板ニ固着スベシ

梁柱ノ下部其ノ他必要ナル箇所ニ於テハ斷切板ヲ短山形鋼ヲ以テ肋板ニ固着スベシ

増厚 **第二十三條** 側内龍骨ノ縦通山形鋼及斷切板ノ厚サハ汽罐室及其ノ側部ノ石炭庫ニ於テハ前二條ニ依リ定メタルモノニ2 耗ヲ加ヘタルモノト爲スベシ斷切板ト外板トヲ固着スル短山形鋼ニシテ「セメント」ヲ以テ覆ハレザルモノニ付亦同ジ

第五節 船首尾部ニ於ケル補強

第二十四條 中央部ニ機關室ヲ備フル船舶ニ在リテハ前部 L ノ $\frac{1}{5}$ 間、船尾ニ機關室ヲ備フル船舶ニ在リテハ前部 L ノ $\frac{1}{4}$ 間ニ於テハ外板ト肋板トヲ二重山形鋼ヲ以テ一列鉄固着ト爲スカ又ハ單山形鋼ヲ以テ二列鉄固着ト爲スベシ但シ船首隔壁ヨリ前方ニ於テハ此ノ限ニ在ラズ

前項ノ山形鋼ハ中心線貫通板ヲ備フル場合ニ於テハ中心線ヨリ船側迄、其ノ他ノ場合ニ於テハ船側ヨリ船側迄連続セシムベシ

L 50 米未滿ニシテ中央部ニ機關室ヲ備フル船舶ニ在リテハ其ノ肋

骨心距ガ標準心距ヨリ大ナラザルトキハ第一項ノ規定ハ適當ニ之ヲ斟酌スルコトヲ得

第二十五條 船首尾部ニ於テハ漸次肋板ノ深サヲ増シ兩舷ノ固着ヲ十分ナラシムベシ此ノ場合ニ於テハ肋板ノ深サノ程度ニ依リ第四條ニ定ムル船側ニ附スル肘板ヲ省略スルコトヲ得

第二十六條 船尾艙内ノ肋板ハ船尾管ノ上部迄達セシムベシ船尾艙内ノ肋板ヲ船尾管ノ上部迄達セシムルコト實際上困難ナルトキハ船尾管ノ上部ニ適當ナル兩舷結合板ヲ取附ケ該板ノ上下兩縁ヲ曲縁ト爲スカ又ハ該縁ニ山形鋼ヲ附シテ防撓スベシ

第二十七條 内燃機又ハ特ニ大ナル馬力ノ機關ヲ主機トスル船舶ニ在リテハ特ニ船尾船底ノ構造ヲ堅牢ナラシムベシ

第五章 二重底構造

第一節 總 則

第一條 L 100 米以上ノ船舶ニ在リテハ成ルベク船首隔壁ヨリ船尾隔壁迄通達スル二重底ヲ設クベシ

一部ニ設クル二重底ノ構造ニ付テハ委員會ノ承認ヲ受ケ本章ノ規定ヲ適當ニ斟酌スルコトヲ得

水密試験 **第二條** 二重底ハ水密ニ構造シ空氣管ノ上端迄ノ水高壓力及水密隔壁ヲ第二甲板ニ止ムル船舶ニ在リテハ第二甲板迄、其ノ他ノ船舶ニ在リテハ上甲板迄ノ水高壓力ノ中大ナルモノヲ以テ其ノ水密ヲ試験スベシ

人孔 **第三條** 水密ヲ要セザル實體肋板及桁板ニハ人孔、通氣孔及通水孔ヲ設クベシ但シ中央部 L ノ $\frac{3}{4}$ 間ニ於ケル中心線桁板ニハ委員會ノ承認ヲ受クルニ非ザレバ人孔ヲ設クルコトヲ得ズ前部 L ノ $\frac{1}{4}$ 間ニ於ケル人孔ハ其ノ中心ヲ當該箇所ノ二重底ノ深サノ中心ヨリ上方ニ置キ實體肋板ニ設クルモノニ在リテハ其ノ高サヲ中心線桁板ノ高サノ $\frac{1}{3}$ 以下、其ノ幅ヲ 610 糎以下ト爲シ桁板ニ設クルモノニ在リテハ其ノ高サヲ中心線桁板ノ高サノ $\frac{1}{2}$ 以下、其ノ

幅ヲ 380 耗以下ト爲スベシ但シ L 100 米未滿ノ船舶又ハ委員會ニ於テ特ニ差支ナシト認ムル場合ニ於テハ適當ニ之ヲ斟酌スルコトヲ得人孔ハ實體肋板又ハ桁板ノ強力保持上適當ナル形狀ノモノト爲スベシ

第四條 内底板ニハ適當ナル數ノ人孔ヲ設ケ之ニ鋼製ノ蓋板ヲ備フベシ

前項ノ蓋板ヲ螺釘ヲ以テ内底板ニ取附クルトキハ人孔ノ周圍ニ縁環ヲ取附クベシ

船舶ノ二重底上ニ内張板ナキ場合ニ於テ人孔ノ蓋板又ハ其ノ取附金具ガ突起スルトキハ該孔ノ周圍ニ縁材ヲ取附ケ木製又ハ鋼製ノ蓋ヲ設クベシ

海水溜 **第五條** 旅客船ノ二重底ニハ軸路ノ後端ニ於ケルモノヲ除クノ外委員會ノ承認ヲ受クルニ非ザレバ船底外板ニ連スル海水溜ヲ設クルコトヲ得ズ

二重底ニ設クル海水溜ハ成ルベク其ノ深サヲ二重底ノ深サノ $\frac{1}{2}$ 以内ト爲スベシ

山形鋼ノ幅 **第六條** 中心線桁板ヲ固着スル上下山形鋼ノ各邊ノ幅ハ Lニ應ジ次表ニ依リ定メ其ノ他ノ二重底用山形鋼ノ各邊ノ幅ハ第二十四章第十五條ノ規定ニ依リ之ヲ定ムベシ

L	山形鋼ノ邊ノ幅(耗)			
	下部山形鋼		上部山形鋼	
	一列鋸固着	千鳥形固着	一列鋸固着	千鳥形固着
ヲ超エ以下 70	75	115	75	115
70 — 95	90	130	75	115
95 — 110	100	150	75	115
110 — 140	100	150	90	130
140 — 168	115	—	90	—
168 — 174	130	—	90	—
174 ヲ超ユルモノ	130	—	100	—

油密一列鋸固着ノ山形鋼ノ邊ノ幅ハ必要ニ應ジ前項ニ依ルモノヨリ適當ニ増加スベシ

汽罐室ニ於ケル山形鋼 **第七條** 汽罐室ノ二重底用山形鋼ニシテ全部「セメント」ニ依リ覆ハルルモノノ厚サハ以下本章ノ規定ニ拘ラズ船内ニ於ケル之ニ相當スル山形鋼ノ厚サト等シク爲スコトヲ得

第二節 中心線桁板

寸法 **第八條** 中心線桁板ノ高サハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ但シ 630 耗未滿ト爲スコトヲ得ズ

$$4L + 41.6d + 261 \text{ (耗ニテ)}$$

第九條 中心線桁板ノ厚サハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ但シ中央部 Lノ $\frac{1}{2}$ 間ノ前後ニ於テハ漸次其ノ厚サヲ減ジ首尾兩端ニ於テハ算式ニ依ルモノノ 85% ト爲スコトヲ得

$$0.066L + 5 \text{ (耗ニテ)}$$

汽罐室ニ於ケル中心線桁板ノ厚サハ前項ニ依ル厚サニ 2 耗ヲ増シタルモノト爲スベシ

上下山形鋼 **第十條** 中心線桁板ト平板龍骨及内底板トハ二重山形鋼ヲ以テ固着スベシ但シ L 100 米以上 140 米未滿ノ船舶ニ在リテハ單山形鋼ヲ以テ二列鋸固着ト爲シ L 100 米未滿ノ船舶ニ在リテハ主機室内、推力受臺ノ下部及前部 Lノ $\frac{1}{4}$ 間ニ於テハ單山形鋼ヲ以テ二列鋸固着ト爲シ、其ノ他ノ箇所ニ於テハ單山形鋼ヲ以テ一列鋸固着ト爲スコトヲ得

前項ノ下部山形鋼ノ厚サハ中心線桁板ノ厚サニ 1 耗ヲ加ヘタルモノ以上ト爲シ上部山形鋼ノ厚サハ中心線内底板ノ厚サ以上ト爲スベシ

第一項ノ單山形鋼ヲ銜接スルトキハ其ノ背面ニ適當ナル覆山形鋼ヲ附スベシ

第三節 實體肋板

配置 **第十一條** 二重底ニハ 3.5 米ヲ超エザル心距ニ肋骨ノ箇所ニ實體肋板ヲ設クベシ

次ニ掲グル箇所ニハ肋骨毎ニ實體肋板ヲ設クベシ

一、前部 L ノ $\frac{1}{5}$ 間

二、主機室内及汽罐臺ノ下部

三、横置隔壁ノ下部

船首ヨリ L ノ $\frac{1}{5}$ ニ相當スル箇所ト $\frac{1}{4}$ ニ相當スル箇所トノ間ニ於テハ實體肋板ノ心距ヲ適當ニ定メ前後ヲ通ジ該心距ニ急激ナル變化ナカラシムベシ

厚サ **第十二條** 實體肋板ノ厚サハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ但シ主機室内ニ於テハ 1.5 耗、汽罐室内ニ於テハ 3 耗ヲ増スベシ

$$0.035 L + 4.9 \text{ (耗ニテ)}$$

上下山形鋼 **第十三條** 實體肋板ト外板及内底板トヲ固着スル山形鋼ノ厚サハ其ノ箇所ニ於ケル實體肋板ノ厚サ以上ト爲スベシ但シ L 30 米ヲ超ユル船舶ニ在リテハ機室以外ノ箇所ニ限リ其ノ箇所ニ於ケル實體肋板ノ厚サニ次ノ算式ニ依ル厚サヲ加ヘタルモノナルコトヲ要ス

$$\frac{L}{100} - 0.3 \text{ (耗ニテ)}$$

前項但書ノ規定ニ依リ加フベキ厚サハ 1.5 耗ヲ超ユルコトヲ要セズ前部 L ノ $\frac{1}{5}$ 間ニ於テハ第一項ノ山形鋼ヲ中心線桁板ヨリ縁板迄連續シタルモノト爲シ且實體肋板ト外板トヲ固着スル山形鋼ヲ二重ト爲スベシ

往復動主汽機ノ下部、其ノ前後適當ノ間、汽罐臺ノ下部及推力受臺ノ下部ニ於テハ實體肋板ト内底板トハ二重山形鋼ヲ以テ固着スルカ又ハ單山形鋼ヲ以テ二列銲固着ト爲スベシ

中心線桁板トノ固着 **第十四條** L 150 米以上ノ船舶ニ在リテハ實體肋板ト中心線桁板トヲ二重山形鋼ヲ以テ固着スルカ又ハ單山形鋼ヲ以テ二列銲固着ト爲スベシ

L 150 米未滿ノ船舶ノ實體肋板ト中心線桁板トハ主機室内竝ニ推力受臺及汽罐臺ノ下部ニ於テハ二重山形鋼ヲ以テ固着スルカ又ハ單山形鋼ヲ以テ二列銲固着ト爲シ其ノ他ノ箇所ニ於テハ單山形鋼ヲ以テ

固着スベシ

前二項ノ山形鋼ノ厚サハ汽罐室内ニ於テハ實體肋板ノ厚サト等シクシ其ノ他ノ箇所ニ於テハ主機室内ニ於ケル實體肋板ノ厚サト等シク爲スベシ

側桁板又ハ縁板トノ固着 **第十五條** 實體肋板ト側桁板又ハ縁板トヲ固着スル堅山形鋼ノ厚サハ其ノ箇所ニ於ケル實體肋板ノ厚サ以上ト爲スベシ

防撓 **第十六條** L 85 米以上ノ船舶ノ實體肋板竝ニ L 85 米未滿ノ船舶ノ二肋骨心距以上ノ間隔ニ配置セラレタル實體肋板ニハ其ノ厚サニ等シキ厚サヲ有スル等邊山形鋼ヲ 1.5 米ヲ超エザル間隔ニ人孔ノ箇所ヲ避ケ堅ニ取附クベシ

第十七條 隔壁ノ下部及其ノ防撓材付板ノ外端ノ下部ニ於ケル肋板ハ適當ニ之ヲ防撓スベシ

水密肋板 **第十八條** 二重底ニハ水密肋板ヲ成ルベク水密隔壁ノ下部ニ設ケ之ヲ區畫スベシ

水密肋板ハ其ノ厚サヲ汽罐室内ニ於ケル實體肋板ノ厚サニ等シクシ且中心線桁板ノ深サガ 900 耗ヲ超ユル場合ニ於テハ水密肋板ニ 900 耗ノ心距ニ堅防撓材ヲ取附クベシ

前項ノ堅防撓材ノ截面抵抗率ハ第十二章第十條ノ規定ヲ準用シテ之ヲ定ムベシ

水密肋板ノ周圍ヲ固着スル山形鋼ノ厚サハ該肋板ノ厚サガ 12 耗以下ナルトキハ之ニ 1 耗ヲ加ヘタルモノ以上ト爲スベシ

第四節 組立肋板

第十九條 實體肋板ヲ設ケザル肋骨ノ位置ニハ本節ノ規定ニ依ル組立肋板ヲ設クベシ

深水槽ノ下方ニ於ケル組立肋板ハ必要ニ應ジ前項ニ依ルモノヨリ適當ニ堅牢ナラシムベシ

正肋材 副肋材 **第二十條** 組立肋板ヲ構成スル正肋材及副肋材ノ截面抵抗率ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$K S I^2 h \text{ (種ノ三乗ニテ)}$$

K ハ係數ニシテ中心線桁板ニ附スル肘板、縁板ノ内側ニ附スル肘板及側桁板相互ノ中間ニ形鋼支柱ヲ有セザルトキハ 6、形鋼支柱ヲ有スルトキハ 3

S ハ肋骨心距 (米ニテ)

l ハ中心線桁板ニ附スル肘板、縁板ノ内側ニ附スル肘板及側桁板相互ノ間隔ノ中大ナルモノ (米ニテ) = 0.09 ヲ加ヘタルモノ

h ハ D (吃水ノ特ニ小ナル船舶ニ在リテハ第二甲板迄測リタル深サ) ノ $\frac{2}{3}$ 及 d ノ中大ナルモノ (米ニテ) 但シ形鋼支柱ヲ有セザル場合ニ於ケル副肋材ノ寸法ヲ定ムルトキハ龍骨ノ上面ヨリ内底板ノ上面迄ノ距離ヲ減ジタルモノト爲スコトヲ得

中心線桁板ニ附スル肘板、縁板ノ内側ニ附スル肘板及側桁板相互ノ中間ニ形鋼支柱ヲ設クルトキハ支點ノ心距ヲ成ルベク 1.5 米以下ト爲スベシ

- 肘板 **第二十一條** 正肋材及副肋材ハ實體肋板ノ規定ノ厚サ以上ノ厚サノ肘板ヲ以テ次ノ各號ノ規定ニ依リ中心線桁板及縁板ニ固着スベシ
- 一、肘板ト正肋材又ハ副肋材トノ累接ノ幅ハ B ノ約 5% ト爲スベシ
 - 二、肘板ト中心線桁板又ハ縁板トハ肘板ノ厚サニ等シキ厚サノ山形鋼ヲ以テ固着スベシ
 - 三、L 70 米以上ノ船舶ニ在リテハ肘板ノ遊邊ヲ曲縁ト爲スベシ

豎形鋼 **第二十二條** 側桁板ニハ組立肋板ノ箇所ニ於テ豎形鋼ヲ附シ其ノ兩端ヲ正肋材及副肋材ニ固着スベシ

形鋼支柱 **第二十三條** 第二十條ノ形鋼支柱及前條ノ豎形鋼ノ截面積ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$2.9 Sgh \text{ (平方糎ニテ)}$$

g ハ形鋼支柱又ハ豎形鋼ニ依リ支持セラルル部分ノ幅 (米ニテ)

S 及 h ハ第二十條第一項ノ規定ニ依ル

形鋼支柱又ハ豎形鋼ノ兩端ハ其ノ截面積ニ應ジ次表ニ掲グル數及徑ノ鉄ヲ以テ正肋材及副肋材ニ固着スベシ

形鋼ノ截面積 (平方糎)	ヲ超エ 14.6 以下	14.6 〃 18.7 〃	18.7 〃 22.2 〃	22.2 〃 25.7 〃	25.7 〃 34.1 〃	34.1 〃 40.3 以下
數	2	3	4	4	5	5
徑(耗)	19	19	19	22	22	25

増厚 **第二十四條** 汽罐ノ下部ニ於テハ正肋材ハ其ノ厚サヲ 1 耗、副肋材、形鋼支柱及豎形鋼ハ其ノ厚サヲ 2 耗増スベシ

補強 **第二十五條** 隔壁ノ防撓材肘板ノ外端ノ下部ニ於ケル組立肋板ニハ特ニ形鋼支柱ヲ設ケ之ヲ補強スベシ

第五節 内底板及縁板

中心線内底板 **第二十六條** 中心線内底板ノ厚サハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ但シ次ノ特別規定ニ依ル

$$0.056 L + 5.9 \text{ (耗ニテ)}$$

一、中央部 L ノ $\frac{1}{2}$ 間ノ前後ニ於テハ漸次其ノ厚サヲ減ジ船ノ首尾ニ於テハ第二十七條ノ算式ニ依ル厚サト爲スコトヲ得

二、汽罐室ニ於テハ厚サヲ 2 耗増スベシ

中心線内底板ノ幅ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$3.75 L + 790 \text{ (耗ニテ)}$$

内底板 **第二十七條** 中心線内底板ヲ除キ其ノ他ノ内底板ノ厚サハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ但シ次ノ特別規定ニ依ル

$$0.052 L + 4.2 \text{ (耗ニテ)}$$

一、中央部 L ノ $\frac{1}{2}$ 間ノ前後ニ於テハ漸次其ノ厚サヲ減ジ船ノ首尾ニ於テハ算式ニ依ルモノノ 90% ト爲スコトヲ得

二、主機室内及汽罐室内ニ於ケル内底板ノ厚サハ其ノ箇所ニ於ケル中心線内底板ノ厚サニ等シク爲スベシ

中心線内底板ヲ除キ其ノ他ノ内底板ハ委員會ノ承認ヲ受ケ之ヲ横張ト爲スコトヲ得

縁板 **第二十八條** 縁板ノ配置ハ之ト外板トノ間ノ角度ヲ直角ニ近カラシムル様之ヲ定ムベシ

縁板ト外板トノ交線ハ成ルベク二重底ニ依リ彎曲部迄ノ船底ヲ保護

スル様適當ノ高サニ保ツベシ

幅 **第二十九條** 縁板ノ幅ハ上邊ヲ除キ中心線桁板ノ深サノ 80% 以上ト爲スベシ但シ次ノ特別規定ニ依ル

一、中央部 L ノ $\frac{1}{2}$ 間ノ前後ニ於テハ漸次其ノ幅ヲ減ジ船ノ首尾ニ於テハ中央部ニ於ケルモノノ 85% ト爲スコトヲ得

二、宥形ノ船舶ニ在リテハ委員會ノ承認ヲ受ケ縁板ノ幅ヲ適當ニ減少スルコトヲ得

三、船ノ首尾ニ於テハ縁板又ハ之ニ隣接スル内底板ノ厚サヲ増シ控板、控山形鋼又ハ帶板ノ固着ヲ特ニ堅牢ナラシムルトキハ縁板ノ幅ヲ減少スルコトヲ得

第三十條 縁板ノ上邊ノ幅ハ控板ヲ用フルトキハ内底板ノ外ニ於テ縁板ト控板トヲ固着スルニ十分ナル幅ト爲シ又前部 L ノ $\frac{1}{5}$ 間ニ於テハ成ルベク縁板ト實體肋板ノ上部ニ附スル山形鋼トヲ内底板ノ外ニ於テ二箇ノ鋸ヲ以テ固着スルニ十分ナル幅ト爲スベシ

厚 サ **第三十一條** 縁板ノ厚サハ第二十六條第一項ノ算式ニ依ル中心線内底板ノ厚サニ等シク爲スベシ但シ汽罐室ニ於テハ其ノ厚サヲ 2 耗増スベシ

固 着 **第三十二條** 縁板ト外板トヲ固着スル山形鋼ノ厚サハ其ノ箇所ニ於ケル縁板ノ厚サニ 0.5 耗ヲ加ヘタルモノト爲スベシ

増 厚 **第三十三條** 肋骨心距ガ其ノ標準心距ヲ超ユルトキハ超過 10 耗ニ付 0.1 耗ノ割合ヲ以テ中心線内底板ヲ除キ其ノ他ノ内底板ノ厚サヲ増スベシ

前項ノ場合ニ於テハ中心線内底板及縁板ノ厚サハ内底板ノ厚サ未滿ト爲スコトヲ得ズ

第三十四條 船口直下ノ内底板ニ船底内張板ヲ張ラザルトキハ該部ニ於ケル内底板ノ厚サヲ 2 耗増スベシ

摺揚機其ノ他機械ノ装置ニ依リ荷役ヲ爲ス船舶ニ在リテハ内底板ノ厚サヲ適當ニ増スベシ

第三十五條 主機礎板又ハ推力受臺ヲ直接ニ取附クル内底板ノ厚サハ

16 耗以上ト爲シ主機ノ大サ及出力ニ應ジ之ヲ定ムベシ

内底板ノ上面ト汽罐ノ下面トハ 450 耗以上ノ間隙ヲ保ツベシ但シ委員會ノ承認ヲ受ケ内底板ノ厚サヲ増加シ且汽罐下部ノ通風及防熱ヲ十分ナラシムルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第六節 外側肘板

厚 サ **第三十六條** 船内肋骨ト縁板トヲ固着スル外側肘板ハ其ノ厚サヲ第十遊 縁 二條ノ算式ニ依ル實體肋板ノ厚サニ 1.5 耗ヲ加ヘタルモノト爲シ遊縁ハ其ノ長サニ應ジ之ニ適當ナル寸法ノ山形鋼ヲ取附クルカ又ハ適當ナル幅ノ曲縁ト爲スベシ

外側肘板ハ汽罐室及石炭庫ニ於テハ其ノ厚サヲ 1.5 耗増スベシ

船内肋骨トノ固着 **第三十七條** 外側肘板ト船内肋骨トノ固着ハ次ノ各號ノ規定ニ依ル

一、外側肘板ト船内肋骨トハ肋骨ノ深サノ 2 倍以上相累接シ肋骨ノ截面積以上ノ合計截面積ヲ有スル鋸ヲ以テ固着スベシ但シ船内肋骨ガ正肋材ト副肋材トヨリ成ルモノナルトキハ副肋材ト外側肘板トノ累接ノ長サハ副肋材ノ遊邊ノ幅ノ 3 倍ニ止メ又肋骨ノ截面積ノ算定ニ付テハ正副肋材ノ累接部ニ於ケル副肋材ノ截面積ヲ加算セザルコトヲ得

二、外側肘板ト船内肋骨トノ累接ノ長サガ肋骨ノ深サノ 3 倍ヲ超ユルトキハ前號ノ規定ニ依ル鋸ヲ外側肘板ノ上端ヨリ測リ肋骨ノ深サノ 3 倍ニ相當スル累接部間ニ配置スルコトヲ要シ殘餘ノ累接部ハ適當ニ固着スベシ

三、外側肘板ノ上端ニ於テハ其ノ幅ヲ船内肋骨ノ深サニ等シクシ且固着鋸ヲ成ルベク竝列配置ト爲スベシ

四、船内肋骨ヲ縁板迄延長セザルトキハ船内肋骨ノ下端ト縁板トノ間ニ於テ外側肘板ヲ其ノ厚サニ等シキ厚サノ單山形鋼ヲ以テ外板ニ固着スベシ

外側肘板ノ船側ニ於ケル上端ハ縁板ノ上面ヨリ低キコトヲ得ズ

縁板トノ固着 **第三十八條** 外側肘板ト縁板トハ肘板ノ厚サニ等シキ厚サヲ有スル山形鋼ヲ成ルベク縁板ノ内側ニ附スル山形鋼ト同一側ニ配置シ一列鋸

ヲ以テ固着スベシ

控板 第三十九條 外側肘板ト縁板及内底板トハ次ノ各號ニ依リ控板、控山
控山形鋼
帶板 形鋼又ハ帶板ヲ以テ固着スベシ

一、控板、控山形鋼又ハ帶板ヲ外側肘板ニ固着スル鋸ノ截面積ノ合計竝ニ之ヲ縁板及内底板ニ固着スル鋸ノ截面積ノ合計ハ中央部Lノ $\frac{1}{2}$ 間及其ノ後部ニ於テハ次ノ算式ニ依リ算定シタル截面積以上、其ノ前部ニ於テハ該面積ノ1.5倍以上ト爲スベシ但シdガDノ85%ヨリ小ナルコト600耗ヲ超ユルトキハ其ノ超過100耗ニ付1平方糎ノ割合ヲ以テ截面積ヲ減ズルコトヲ得

$$1.33 (D-n-3)^2 \quad (\text{平方糎ニテ})$$

nハ當該部分ニ於ケル上甲板以下ノ甲板ノ層數

二、前號ノ合計截面積ニ對スル鋸數ガ四箇未滿トナルトキハ控板又ハ控山形鋼ヲ二肋骨心距以上ノ間隔ニ配置シ鋸ノ合計截面積ヲ前號ノ截面積ニ控板又ハ控山形鋼ノ間隔ト肋骨心距トノ比ヲ乘ジタルモノト爲シ且鋸ノ總數ヲ四箇以上ト爲スベシ

三、第一號ノ合計截面積ニ對スル鋸ノ全部ヲ一肋骨心距間ニ配置シ難キトキハ縁板ト外側肘板トヲ固着スル堅山形鋼ノ各邊ノ固着鋸ヲ増加スベシ此ノ場合各邊ニ於テ増加スル鋸ノ截面積ノ合計ハ控板、控山形鋼又ハ帶板ニ於ケル鋸ノ不足截面積以上ナルコトヲ要ス

四、控板、控山形鋼及帶板ノ厚サハ其ノ箇所ニ於ケル縁板ノ厚サニ等シク爲スベシ

五、肋骨心距ガ標準肋骨心距ヲ超ユル場合ニ於テハ標準肋骨心距ニ對シ前各號ノ規定ニ依リ固着シタルト同等以上ノ效力ヲ有スル固着ト爲スベシ

第四十條 縁板ヲ略水平ニ船側迄延長スル場合ニ於テハ外側肘板ノ幅ヲ縁板ノ規定ノ幅以上ト爲シ外側肘板ト縁板及内底板トノ固着ヲ前條ノ固着ト同等以上ノモノト爲スベシ

第七節 側 桁 板

配 置 第四十一條 B10.5米ヲ超エ19.5米以下ノ船舶ニ在リテハ各舷ニ一箇、B19.5米ヲ超エ24米以下ノ船舶ニ在リテハ各舷ニ二箇ノ側桁板ヲ設クベシ

主機及推力受臺ノ下部ニ於テハ適當ニ側桁板ヲ増設スベシ

厚 サ 側桁板ノ厚サハ其ノ箇所ニ於ケル實體肋板ノ厚サニ等シク爲スベシ

曲 線 第四十二條 側桁板ハ厚サヲ10%増ストキハ前部Lノ $\frac{1}{4}$ 間竝ニ主機、推力受臺及特設梁柱ノ下部ニ於ケルモノヲ除クノ外其ノ上縁ヲ曲線ト爲スコトヲ得

半 桁 板 第四十三條 前部Lノ $\frac{1}{4}$ 間ニ於テハ中心線桁板、側桁板及縁板相互ノ間隔ガ2.13米ヲ超エザル様側桁板ヲ配置シ且其ノ間ニ當該箇所ノ肋板ノ高サノ中央ニ達スル半桁板ヲ設クベシ

半桁板ハ山形鋼ヲ以テ外板及實體肋板ニ固着スベシ

前項ニ依リ半桁板ト實體肋板トヲ固着スル山形鋼ハ實體肋板ノ一側ニ於テハ之ヲ該肋板ノ上端迄達セシムベシ

外板及内 第四十四條 側桁板ト外板及内底板トハ側桁板ノ厚サニ等シキ厚サヲ
底板トノ 有スル山形鋼ヲ以テ固着スベシ
固着

主機及推力受臺ノ下部ニ於テハ側桁板ト内底板トハ二重山形鋼固着ト爲スカ又ハ單山形鋼ヲ以テ二列鋸固着ト爲スベシ航海速力14節以上ノ航洋船ノ船首部ニ於ケル外板ト側桁板トノ固着ニ付亦同ジ

第八節 燃料油ヲ積載スル二重底

第四十五條 燃料油ヲ積載スル二重底ノ中心線桁板ハ油密又ハ水密ノ構造ト爲サザルモ妨ナキモ首尾ニ於ケル小容積ノ二重底ニ於ケルモノヲ除クノ外之ニ開孔ヲ設クルコトヲ得ズ

第四十六條 燃料油ヲ積載スル二重底ト清水槽トノ間ニハ防油區畫ヲ設ケ之ヲ油密ニ構造スベシ

清水槽用ノ管バ之ヲ油管ニ兼用スルコトヲ得ズ

第四十七條 燃料油ヲ積載スル二重底ハ成ルベク管其ノ他ノ附屬品ヲ取附ケタル後水密試験ヲ行フベシ

第四十八條 燃料油ヲ積載スル二重底ニハ内底板上ニ厚サ50耗以上

ノ横木ヲ置キ其ノ上面ニ内張板ヲ張ルベシ但シ機關室内ノ二重底及標準肋骨心距ニ於ケル厚サ 10 耗以上ニシテ縦横縁ヲ二列以上ノ銲接合ト爲シタル内底板ヲ有スル二重底ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

第四十九條 燃料油ヲ積載スル二重底ノ内底板ノ縦横縁ハ機關室内ニ於テハ二列以上ノ銲接合ト爲スベシ

第五十條 燃料油ヲ積載スル二重底ニ於ケル控板、控山形鋼又ハ帶板ヲ固着スル銲ノ合計截面積ハ第三十九條ニ依ルモノノ 1.4 倍以上ト爲スベシ

第九節 雜 則

第五十一條 推力受臺又ハ特設梁柱ノ下部ニ於テハ二重底ヲ適當ニ補強スベシ

内燃機關ヲ備フル船舶ノ機關室ノ部分ニ於ケル二重底ノ構造ハ機關ノ出力及大サニ應ジ適當ニ強固ノモノト爲スベシ

第五十二條 船首船底ノ扁平ナル船舶、船尾部ニ機關室ヲ備フル船舶及航海速力 14 節以上ノ船舶ニ在リテハ前部 L ノ $\frac{1}{4}$ 間ニ於ケル船底ノ構造ヲ特ニ堅牢ナラシムベシ

第五十三條 鋼材其ノ他之ニ類似ノ重量貨物ノ積載ニ使用スル船舶ノ二重底ハ特ニ堅牢ニ構造スベシ

第五十四條 第四十六條ノ規定ハ潤滑油ヲ積載スル二重底ニ準用ス

第六章 肋 骨

第一節 肋骨ノ心距並ニ截面抵抗率ノ算定

心 距 **第一條** 肋骨ノ心距ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノヲ標準ト爲スベシ

$$2.28 L + 460 \quad (\text{耗ニテ})$$

肋骨心距ヲ前項ノ標準心距ニ 230 耗ヲ加ヘタルモノ以上ト爲ストキハ肋骨、肋板、二重底用材、梁柱、外板、甲板等ノ寸法及構造ニ付特ニ委員會ノ承認ヲ受クルコトヲ要ス

前二項ノ規定ニ拘ラズ船首隔壁ト船首ヨリ L ノ $\frac{1}{5}$ ニ相當スル箇所

トノ間ノ肋骨心距ハ 700 耗及第一項ノ算式ニ依ル心距ノ中小ナルモノヲ、船首尾艙ノ肋骨心距ハ 610 耗及第一項ノ算式ニ依ル心距ノ中小ナルモノヲ超ユルコトヲ得ズ

- 截面抵抗率ノ算定 **第二條** 肋骨ノ截面抵抗率ノ算定ニ付テハ次ノ各號ノ規定ニ依ル
- 一、船内肋骨ガ標準形肋骨(正肋材及之ト同一寸法ノ副肋材ヲ以テ構造シタルモノ)ナルトキハ其ノ截面ノ中性軸ニ對スル惰率ヲ該軸ヨリ截面ノ端ニ至ル距離ニテ除ス
 - 二、船内肋骨ガ前號ニ掲グルモノニ該當セザル場合ニ於テハ幅 610 耗厚サ 15 耗ノ外板ヲ含ミタル截面抵抗率ガ同一寸法ノ外板ヲ含ミタル實際ノ船内肋骨ノ截面抵抗率ニ等シキ標準形肋骨ヲ假想シ之ニ付前號ノ規定ヲ適用ス
 - 三、船首尾艙ノ肋骨、甲板間ノ肋骨及船樓ノ肋骨ニ在リテハ幅 610 耗厚サ 15 耗ノ外板ヲ含ム截面ノ中性軸ニ對スル惰率ヲ該軸ヨリ肋骨ノ内端ニ至ル距離ニテ除ス
 - 四、肋材ニ穿ツ銲孔及螺釘孔ハ之ヲ無キモノト看做ス
 - 五、肋骨ガ正肋材及副肋材ヲ以テ構造シタルモノナル場合又ハ溝形鋼ナル場合ニ於テ其ノ内側遊邊ニ銲孔又ハ螺釘孔ナキコト明カナルトキハ該肋骨ノ截面抵抗率ハ前各號ニ依ルモノノ 1.11 倍トス

第二節 艙内肋骨

截面抵抗率 **第三條** 艙内肋骨ノ截面抵抗率ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ナルコトヲ要ス

$$\frac{S(d-t)(f_1+f_2)}{1,000} \quad (\text{輻ノ三乗ニテ})$$

S ハ艙内肋骨ノ心距(米ニテ)

t ハ二重底構造ノ箇所ニ在リテハ船側ニ於ケル内底板ノ上面ト二重底外側肘板ノ上端トノ中央ヨリ、單底構造ノ箇所ニ在リテハ中心線ニ於ケル肋板ノ上面ト船側ニ於ケル肋板又ハ之ヲ肋骨ニ固着スル肘板ノ上端トノ中央ヨリ龍骨ノ上面迄ノ垂直距離(米ニテ)

f₁ ハ H ニ依ル係數ニシテ次表ニ依ル但シ船舶ノ當該部分ノ形狀ニ

因リ肋骨ガ附加力ヲ得ル場合ニ於テハ適當ニ斟酌スルコトヲ得

H	f ₁			
	上甲板下ニ甲板ヲ有スル場合		上甲板下ニ甲板ヲ有セザル場合	
	L75米以上ナル船舶	L60米以下ナル船舶	L75米以上ナル船舶	L60米以下ナル船舶
0	—	—	0	0
2.0	23,020	23,020	15,035	9,000
2.5	27,085	25,230	20,130	12,155
3.0	34,640	28,760	26,325	16,760
3.5	42,475	33,980	33,350	22,905
4.0	51,320	41,055	41,055	30,805
4.5	61,940	49,550	49,550	41,270
5.0	73,735	58,990	58,990	54,275
5.5	86,505	69,720	69,720	69,720
6.0	99,480	81,355	81,355	81,355
6.5	112,810	—	94,005	—
7.0	129,205	—	107,670	—
7.5	145,860	—	121,550	—

備考

- Hハ二重底構造ノ箇所ニ在リテハ船側ニ於ケル内底板ノ上面ト二重底外側肘板ノ上端トノ中央ヨリ、單底構造ノ箇所ニ在リテハ中心線ニ於ケル肋骨ノ上面ト船側ニ於ケル肋骨又ハ之ヲ肋骨ニ固着スル肘板ノ上端トノ中央ヨリ最下層甲板梁ノ梁肘板ノ深サノ中央迄ノ垂直距離(米ニテ)トス但シ上甲板下ニ甲板ヲ有スル場合ニ於テ該垂直距離ガ2米未滿ナルトキハ2米トス
- Hガ表ニ掲ゲルモノノ中間ニ在ルトキ及Lガ75米ト60米トノ中間ニ在ルトキハ挿間法ニ依リ f₁ ヲ算定ス

f₂ ハ Kニ依ル係數ニシテ次表ニ依ル

K	0	1.5	3.0	4.5	6.0	7.5	9.0	10.5	12.0
f ₂	0	1,041	2,084	4,133	6,217	9,275	13,358	18,467	24,600

備考

- Kハ最下層甲板梁ノ船側ニ於ケル上面ヨリ上甲板梁(低船首樓又ハ低船尾樓ノ箇所ニ於テハ低船首樓甲板又ハ低船尾樓甲板ノ梁)ノ船側ニ於ケル上面迄ノ垂直距離(米ニテ)ニ船樓アル部分ニ於テハ3,810ヲ、船樓ナキ部分ニ於テハ2,286ヲ加ヘタルモノトス
- Kガ表ニ掲ゲルモノノ中間ニ在ルトキハ挿間法ニ依リ f₂ ヲ算定ス

S, H及Kノ定メ方 第四條 前條ノ規定ノ適用方ニ付テハ次ノ各號ノ規定ニ依ル

- 一、上甲板下ニ甲板ヲ有セザル場合ニ在リテ滿載吃水ガ D ノ 85% ヨリ小ナルトキハ D ノ 85% ヲ d トシ前條ノ算式ヲ適用スベシ
- 二、前部 L ノ $\frac{1}{5}$ 間ニ於ケル船内肋骨ニ付テハ第一條第三項ノ規定ニ依リ肋骨心距ヲ 700 耗ニ制限シタル場合ト雖モ同條第一項ノ算式ニ依ル標準心距ヲ S トシ前條ノ算式ヲ適用スベシ
- 三、中央部 L ノ $\frac{1}{2}$ 間ニ在リテハ當該箇所ノ最下層甲板ニ付 L ノ中央ニ於テ H ヲ測リ船内肋骨ノ寸法ヲ定ムベシ但シ當該箇所ノ最下層甲板ガ L ノ中央ニ達セザルトキハ上甲板ニ沿ヒ最下層甲板ノ延長面ヲ假定シテ H ヲ定ムルモノトス
- 四、前後部 L ノ $\frac{1}{4}$ 間ニ在リテハ當該箇所ノ最下層甲板ニ付首尾ヨリ L ノ $\frac{1}{8}$ ノ箇所ニ於テ H ヲ測リ船内肋骨ノ寸法ヲ定ムベシ但シ當該箇所ニ於ケル最下層甲板ガ L ノ $\frac{1}{8}$ ノ箇所ニ達セザルトキハ上甲板ニ沿ヒ最下層甲板ノ延長面ヲ假定シテ H ヲ定ムルモノトス
- 五、最下層甲板ノ梁肘板ノ深サガ肋骨一本置ニ異ルトキ又ハ肋骨一本置ニ肘板ナキトキハ肘板ノ平均ノ深サニ依リ H ヲ定ムベシ
- 六、K ヲ定ムルニ用フル垂直距離ハ甲板及船樓ノ配置ガ同一ナル區間ニ付該區間ノ長サノ中央ニ於テ之ヲ定ムベシ

補強 第五條 Hガ肋骨ノ深サノ22倍ヲ超ユルトキハ適當ニ船内肋骨ノ寸法ヲ増スカ又ハ他ノ補強ヲ爲スベシ

輕減 肋骨ノ内側ニ船側縱通材ヲ設ケ斷切板ヲ以テ之ヲ外板ニ固着シタル場合ニ於テ肋骨ノ外面ニ沿ヒテ測リタル支點間ノ間隔ガ2.1米ヲ超エザルトキハ委員會ノ見込ニ依リ第三條ノ算式ニ用フル f₁ ヲ Hニ應ジ定メタルモノノ80% 迄減ズルコトヲ得但シ第十四章第六條第一項ノ規定ニ依リ設ケタル首尾防撓縱通材ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

船側縱通材 前項ノ船側縱通材ノ寸法ハ第十四章第六條第二項ノ規定ヲ準用シテ之ヲ定ムベシ

適用範圍 **第六條** 次ニ掲グル船内肋骨ノ截面抵抗率ハ委員會ノ見込ニ依リ前三條ニ依ルモノヨリ適當ニ増減セシムルコトアルベシ

一、Dガ4.57米未滿ナルカ又ハ18.29米ヲ超ユル船舶ノ船内肋骨

二、BガLノ $\frac{1}{10}$ ニ1.52米ヲ加ヘタルモノ未滿ナルカ又ハ之ニ6.10米ヲ加ヘタルモノヲ超ユル船舶ノ船内肋骨

三、Lト強力甲板迄ノ深サトノ比ガ10.0未滿ナルカ又ハ13.5ヲ超ユル箇所ノ船内肋骨

四、肋骨外面ヨリ之ニ最モ近キ梁柱列ノ中心線迄ノ水平距離ガ6.10米ヲ超ユル箇所ノ船内肋骨

固着 **第七條** 船内肋骨ト二重底外側肘板トノ固着ハ第五章第三十七條ノ規定ニ依リ、船内肋骨ト梁トノ固着ハ第七章第九條ノ規定ニ依ルベシ

船内肋骨ガ最下層甲板ニ止マル場合ニ於テ肋骨ノ位置ニ梁ナキトキハ肘板ヲ以テ肋骨ト梁上側板トヲ固着スベシ但シ甲板間ノ肋骨ヲ船内肋骨ニ累接スルトキハ此ノ限ニ在ラズ

前項ノ肘板ノ寸法ハ肋骨毎ニ設クル梁ニ附スベキ梁肘板ノ規定ノ寸法以上ト爲スベシ

第三節 船首尾艙ノ肋骨

船首尾艙 **第八條** 船首尾艙トハ船首尾隔壁ノ前方又ハ後方ニ在リテ該隔壁ガ上甲板以下ニ止マルトキハ其ノ上端ニ於ケル甲板以下ノ場所ヲ謂ヒ該隔壁ガ上甲板ノ上方ニ達スルトキハ上甲板以下ノ場所ヲ謂フ

截面抵抗率 **第九條** 船首尾艙ノ肋骨ノ截面抵抗率ハ次ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ナルコトヲ要ス

- 一、Dガ9.8米以上ナルトキ
- $$57.2 D + 46 d - 700 \quad (\text{糲ノ三乗ニテ})$$
- 二、Dガ9.8米未滿ナルトキ

$$\frac{150}{D} - 7.4 D + 55.6 d \left(1 - \frac{2.8}{D}\right) - 32 \quad (\text{糲ノ三乗ニテ})$$

滿載吃水ガDノ63%未滿ナルトキハDノ63%ヲ前項ノ算式ノ

d = 充ツベシ

適用範圍 **第十條** 次ニ掲グル船舶ノ船首尾艙ノ肋骨ノ截面抵抗率ハ前條ノ規定ニ拘ラズ委員會ノ適當ト認ムル所ニ依ル

- 一、Dガ4米未滿ナルカ又ハ14米ヲ超ユル船舶
- 二、船首尾艙ニ於ケル防撓構造ガ第十四章ノ規定ニ依ラザル船舶

固着 **第十一條** 船首尾艙ノ肋骨ト甲板梁又ハ防撓梁トノ固着ハ第七章第九條ノ規定ニ依ルベシ

甲板又ハ防撓層梁ノ箇所ニ於テ肋骨ノ位置ニ梁ナキトキハ梁上側板ノ幅ノ $\frac{1}{2}$ 以上ノ幅及深サヲ有スル肘板ヲ以テ肋骨ト梁上側板トヲ固着スベシ

第四節 甲板間ノ肋骨及船樓ノ肋骨

甲板間ノ肋骨 **第十二條** 上甲板以下ニ於テ甲板四層ヲ備フル船舶ニ在リテハ船内肋骨ヲ第三甲板迄達セシムベシ

第三甲板ト第二甲板トノ間ノ肋骨ノ截面抵抗率ハ船首尾艙ノ肋骨ノ規定ノ截面抵抗率ヲ標準ト爲シ第二甲板ト上甲板トノ間ノ肋骨ノ截面抵抗率ハ其ノ86%ヲ標準ト爲スベシ

第十三條 特ニ大ナル乾舷ヲ有スル船舶ニ在リテハ委員會ノ承認ヲ受ケ第二甲板、第三甲板及第四甲板ヲ順次ニ上甲板、第二甲板及第三甲板ト看做シ前條ノ規定ヲ適用スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ上甲板ト第二甲板トノ間ノ肋骨ノ寸法ハ該甲板間ヲ船樓ト看做シ其ノ位置ニ應ジ以下本章ノ規定ニ依リ之ヲ定ムベシ但シ第十四條第一項但書ノ規定ヲ適用スルノ限ニ在ラズ

船樓肋骨 **第十四條** 船樓ノ肋骨ノ截面抵抗率ハ肋骨ノ位置ニ應ジ船首尾艙ノ肋骨ノ規定ノ截面抵抗率ニ次表ニ掲グル係數ヲ乘ジタルモノヲ標準ト

肋骨ノ位置	係數
前部Lノ $\frac{1}{5}$ 間ニ在ル船樓	0.60
後部Lノ $\frac{1}{8}$ 間ニ在ル船樓	0.55
其ノ他ノ船樓	0.50

爲スベシ但シ特ニ大ナル乾舷ヲ有スル船舶又ハ L 100 米未滿ノ船舶ニ在リテハ委員會ノ承認ヲ受ケ適當ニ之ヲ斟酌スルコトヲ得

第十五條 船橋樓ノ兩端及中央部 L ノ $\frac{1}{2}$ 間ニ在ル船首樓又ハ船尾樓ノ端ニ於テハ少クモ四肋骨心距ノ間船樓ノ肋骨ノ寸法ヲ上甲板直下ノ甲板間ノ肋骨ノ規定ノ寸法以上ト爲スベシ

(修正) **第十六條** 甲板間又ハ船樓ノ肋骨ノ截面抵抗率ハ肋骨心距ガ標準心距ヲ超ユル場合ニ於テハ第十二條乃至第十四條ノ規定ニ依ルモノヨリ適當ニ之ヲ増スコトヲ要ス

甲板間又船樓ノ肋骨ノ截面抵抗率ハ當該場所ノ高サガ 2.6 米ヲ超ユルトキハ其ノ高サト 2.6 米トノ比ニ比例シテ之ヲ増スコトヲ要シ 2.6 米未滿ナルトキハ其ノ高サト 2.6 米ノ比ニ比例シテ之ヲ減ズルコトヲ得但シ第十二條乃至第十四條ノ規定ニ依ルモノノ 80% 未滿ト爲スコトヲ得ズ

船樓上ニ更ニ船樓又ハ大ナル甲板室ヲ有スル部分ニ於テハ其ノ下方ノ船樓ノ肋骨及甲板間ノ肋骨ノ強力ヲ適當ニ増スベシ

固着 **第十七條** 甲板間又ハ船樓ノ肋骨ガ下方ノ肋骨ニ連續セザルトキハ肘板ヲ以テ其ノ下部及其ノ下方ノ肋骨ノ上部ヲ梁上側板ニ固着シ上下肋骨ノ連結ヲ十分ナラシムベシ

前項ノ場合ニ於テ肋骨ノ下部ヲ固着スル肘板ノ寸法ハ該肋骨ノ寸法ニ適應スルモノト爲シ又肋骨ノ上部ヲ固着スル肘板ノ寸法ハ梁ノ位置ニ於テハ第七章第九條ノ規定ニ依ルモノ、梁ナキ位置ニ於テハ肋骨毎ニ設クル梁ニ附スベキ梁肘板ノ規定ノ寸法以上ト爲スベシ

第五節 雜 則

正副肋材 **第十八條** 正肋材ト副肋材トノ累リノ幅ハ鋸徑ノ 4 倍ヨリ小ナルコトヲ得ズ

第十九條 水槽又ハ燃料油槽ヲ構成スル部分ノ肋骨ノ寸法ハ該肋骨ヲ深水槽ノ隔壁ノ防撓材ト看做シ定メタル寸法ヨリ小ナルコトヲ得ズ

車軸管膨出部ノ肋骨ノ構造及寸法ハ委員會ノ適當ト認ムル所ニ依ル

特設肋骨 **第二十條** 特設肋骨ニ依ル機關室ノ補強構造ハ次ニ掲グル寸法ノ特設肋骨ヲ六肋骨心距ニ設ケタル構造ヲ標準ト爲シ機關ノ種類、馬力、機關室ノ長サ等ニ應ジ適當ニ之ヲ定ムベシ

D	鋼板 (耗)	特設肋骨ノ内縁ニ附スル二重山形鋼		
		龍骨ノ上面ヨリ最下層甲板ニ至ル深サ		
		4.5 米	7.0 米	9.5 米
4.5	350 × 8	(耗) 75 × 65 × 8	—	—
7.0	420 × 9.5	75 × 75 × 9.5	(耗) 100 × 75 × 11	—
9.5	500 × 11	90 × 75 × 9.5	125 × 75 × 10	—
12.0	600 × 12	90 × 75 × 10	125 × 75 × 12	(耗) 150 × 90 × 12
14.5	700 × 13	90 × 75 × 11	125 × 75 × 12	150 × 90 × 14

前項ノ特設肋骨ハ甲板四層以上ヲ備フル船舶ニ在リテハ最下層甲板ノ直上ノ甲板迄達セシメ其ノ他ノ船舶ニ在リテハ最下層甲板迄達セシムベシ

特設肋骨ハ其ノ深サ 600 耗ヲ超ユルトキハ外板ニ二重山形鋼ヲ以テ一列鋸固着ト爲スカ又ハ單山形鋼ヲ以テ二列鋸固着ト爲スベシ

特設肋骨ノ上端ニハ特ニ補強シタル梁ヲ設クベシ

第二十一條 船口端、機關室等ニ特ニ大ナル寸法ノ梁ヲ設ケルトキハ該梁ノ位置ニ於ケル肋骨ヲ適當ニ補強スベシ

第二十二條 横置隔壁ガ甲板ノ箇所ニ於テ上下ニ連續セザルトキハ隔壁ノ上方又ハ下方ニ於ケル肋骨ノ寸法ヲ増スカ又ハ適當ナル方法ニ依リ横強力ノ急激ナル變化ヲ避クベシ

第二十三條 汽罐室及常設石炭庫ニ於テハ船内肋骨ノ厚サヲ 1.5 耗増スコトヲ要ス但シ該肋骨ガ溝形鋼ナルトキハ其ノ「ウェブ」ノ厚サヲ 2.0 耗増スニ止ムルコトヲ得

船尾斜肋骨 **第二十四條** 船尾斜肋骨ノ心距ハ船尾稜縁ニ於テ之ヲ測リ第一條第一

項ノ規定ニ依ル心距ヲ標準ト爲スベシ但シ760 耗ヲ超ユルコトヲ得ズ

船尾斜肋骨ノ截面抵抗率ハ第十四條ノ規定ニ依ル後部 L ノ $\frac{1}{8}$ 間ニ在ル船樓ノ肋骨ノ截面抵抗率ヲ標準ト爲スベシ

第二十五條 巡洋艦型船尾ニ於ケル肋骨構造ニ付テハ次ノ各號ノ規定ニ依リ且承認ヲ受クベシ

- 一、肋骨心距ヲ 610 耗以下ト爲スコト
- 二、肋骨ノ截面抵抗率ヲ第九條ノ規定ニ依ルモノノ 86% 以上ト爲スコト
- 三、肋骨ヲ強力甲板迄達セシムルコト
- 四、必要ニ應ジ特設肋骨、縦通桁板等ヲ設ケ該部ヲ補強スルコト

第二十六條 横置隔壁ノ間隔ガ 30 米若ハ L ノ $\frac{1}{2}$ ヲ超ユル場合又ハ舷弧ノ高サガ特大ナル場合ニ於テハ必要ニ應ジ適當ノ方法ニ依リ其ノ局部ノ防撓性ヲ増スベシ

第七章 梁

第一條 梁ノ截面抵抗率ハ鋼甲板ヲ張ル場合ニ於テハ次ノ算式ニ依リ定メタル抵抗率以上、鋼甲板ヲ張ラザル場合ニ於テハ該抵抗率ノ

1.25 倍以上ナルコトヲ要ス

$$3.3 ShI^2 \text{ (種ノ三乗ニテ)}$$

S ハ梁ノ心距 (米ニテ)

h ハ第二條ノ規定ニ依リ定メタル高サ (米ニテ)

I ハ第三條ノ規定ニ依リ定メタル梁ノ支點間ノ長サ (米ニテ)

h ノ 値 **第二條** h ハ甲板ノ種類及 L = 應ジ次表ニ依リ之ヲ定ムベシ

甲板ノ種類	L										
	30 以下	40	50	60	70	80	90	100	110	120 以上	
端艇甲板	0.305	0.400	0.457	0.457	0.457	0.457	0.457	0.457	0.457	0.457	
遊歩甲板	0.305	0.400	0.500	0.600	0.700	0.800	0.900	0.914	0.914	0.914	

上層船橋樓甲板 船尾樓甲板 長サガ L ノ $\frac{1}{10}$ 以下ナルカ又ハ 甲板上ヲ専ラ居 住設備ニ充當ス ル船橋樓甲板	(米)	0.610	0.629	0.686	0.752	0.776	0.876	0.976	1.076	1.209	1.352
L100 米未滿ノ 船舶ノ船首樓甲 板 L100 米以上ノ 船舶ノ前部 L ノ $\frac{1}{8}$ 間ヲ除キタ ル船首樓甲板 L100 米未滿ノ 船舶ノ遮浪甲板 L100 米以上ノ 船舶ノ前部 L ノ $\frac{1}{8}$ 間ニ於ケル 暴露セル部分ヲ 除キタル遮浪甲 板 前欄ニ掲グルモ ノ以外ノ船橋樓 甲板 甲板二層以上ヲ 有スル箇所ノ上 甲板ニシテ甲板 上ヲ専ラ居住設 備ニ充當スルモ ノ 第二甲板以下ノ 甲板ニシテ甲板 上ヲ専ラ居住設 備ニ充當スルモ ノ	(米)	0.914	1.011	1.110	1.210	1.310	1.410	1.510	1.610	1.710	1.810
L100 米以上ノ 船舶ノ前部 L ノ $\frac{1}{8}$ 間ニ於ケル 船首樓甲板 L100 米以上ノ 船舶ノ前部 L ノ $\frac{1}{8}$ 間ニ於ケル 暴露セル遮浪甲	(米)	1.200	1.342	1.483	1.625	1.766	1.905	2.043	2.219	2.286	2.286

石炭、貨物又ハ倉庫品ヲ積載スル箇所ノ甲板ニ在リテハ其ノ直上ノ甲板迄ノ高サ又ハ甲板貨物ノ高サガ上記ノ高サヲ超ユルトキハ該高サニ依ル

板 甲板二層以上ヲ 有スル箇所ノ甲 板ニシテ前欄ニ 掲グルモノニ該 當セザルモノ											
帆船ノ上甲板 甲板一層ノミヲ 有スル箇所ノ上 甲板	(米) 1.372	1.562	1.762	1.962	2.162	2.362	2.562	2.762	2.896	2.896	
	甲板貨物ヲ積載スル場合ニ於テ貨物ノ高サガ上記ノ高サヲ超ユルト キハ該貨物ノ高サニ依ル										

備考 L₁ガ表ニ掲グルモノノ中間ニ在ルトキハ挿間法ニ依リ h₁ヲ算定ス

隔壁ノ階段部又ハ軸路ノ頂部ヲ構造スル甲板ニ對スル h₁ハ當該甲板・
梁ノ上面ヨリ隔壁甲板梁ノ上面迄ノ高サガ 6.10 米以上ナルトキハ
該高サト爲シ 6.10 米未滿ナルトキハ次ノ算式ニ依リ定メタル高サ
ト表ニ掲グルモノトノ中大ナルモノト爲スベシ

$$0.8 h_1 + 1.22 \quad (\text{米ニテ})$$

h₁ハ當該甲板梁ノ上面ヨリ隔壁甲板梁ノ上面迄ノ高サ (米ニテ)
深水槽ノ頂部ヲ構成スル甲板ニ對スル h₁ハ當該甲板梁ノ上面ヨリ滿
載吃水線迄ノ高サ、上甲板梁ノ上面迄ノ高サノ $\frac{2}{3}$ 及滿水状態ニ於
ケル水槽内ノ最高水面迄ノ高サノ中最モ大ナルモノニ 1.79 ヲ乘ジ
タルモノガ表ニ掲グルモノヨリ大ナルトキハ其ノ値ニ依ルベシ

甲板梁ニ冷肉其ノ他ノ貨物ヲ吊ス場合又ハ甲板上ニ特ニ重キ貨物ヲ
積載スル場合ニ於テハ當該甲板ニ對スル h₁ハ其ノ重量ニ應ジ適當ニ
之ヲ増スベシ

特ニ輕キ貨物ヲ積載スル甲板又ハ二層以上ノ甲板ヲ備ヘ特ニ大ナル
乾舷ヲ有スル船舶ノ上甲板ニ對シテハ h₁ノ値ヲ適當ニ斟酌スルコト
ヲ得

1ノ測定 **第三條** 船側ヨリ船側ニ達シ且中央ノミヲ支持スル梁ニ在リテハ中
心線ヨリ梁肘板ノ内端迄ノ水平距離 (米ニテ) ヲ l₁ト爲スベシ但シ
Bノ $\frac{1}{5}$ 未滿ト爲スコトヲ得ズ
船側ヨリ船側ニ達シ且二箇所以上ヲ支持スル梁ニ在リテハ外側梁柱

列ノ中心線ヨリ梁肘板ノ内端迄ノ水平距離 (米ニテ) = 0.15 米ヲ
加ヘタルモノト梁柱列ノ中心線間ノ水平距離 (米ニテ) トノ中大ナル
モノヲ l₁ト爲スベシ

甲板口ノ兩側ニ設クル半梁ニ在リテハ甲板口側縁材又ハ其ノ外側ニ
設クル甲板下縦桁ヨリ梁肘板ノ内端迄ノ水平距離 (米ニテ) = 0.15
米ヲ加ヘタルモノヲ l₁ト爲スベシ

縦通隔壁ニ肘板ヲ以テ取附ケタル梁ニ在リテハ該隔壁ヲ船側ト看做
シ前三項ノ規定ヲ準用シテ定メタルモノヲ l₁ト爲スベシ

深水槽ノ頂部及隔壁ノ階段部ニ附スル梁ハ之ヲ適當ニ支持シテ成ル
ベク前四項ノ規定ニ依リ l₁ヲ 4.6 米以下ト爲スベシ

船口端梁 **第四條** 梁柱、甲板下縦桁及船口縁材ノ配置ニ依リ集中荷重ヲ受ク
ル船口端梁ノ寸法ハ第九章第三條乃至第五條ノ規定ヲ準用シテ之ヲ
定ムベシ

半梁ノ補強 **第五條** 船口其ノ他ノ甲板口ノ側部ニ於テ梁柱列ノ中心線ト甲板口
側縁材トノ距離ガ 460 耗ヲ超ユル部分ニ於テハ半梁ノ寸法ヲ増スカ
又ハ其ノ他ノ適當ナル補強ヲ爲シ委員會ノ承認ヲ受クベシ

梁ノ心距 **第六條** 次ニ掲グル梁ハ肋骨毎ニ取附クベシ
一、水槽ノ頂部、軸路ノ頂部又ハ隔壁ノ階段部ヲ構成スル水密甲板
ノ梁
二、Dガ 4.6 米ヲ超ユル一層甲板船ノ船樓外ニ於ケル上甲板梁
三、木甲板ヲ張ラザル強力甲板ノ梁及前部 Lノ $\frac{1}{8}$ 間ニ於ケル船首
樓甲板ノ梁

四、船橋樓ノ兩端ヨリ其ノ内方八肋骨心距間ニ於ケル上甲板梁
五、肋骨心距ガ 760 耗ヲ超ユル箇所ノ甲板梁
梁ノ心距ハ肋骨心距ノ 2 倍ヲ超ユルコトヲ得ズ

第七條 梁ヲ肋骨一本置ニ取附クルトキハ各層ニ於ケル梁ハ上下相
重ネテ同一ノ肋骨ニ取附ケ且肋骨ガ正肋材及副肋材ヲ以テ構成セラ
レ副肋材ノ達スル高サガ肋骨ニ依リ異ナル場合ニ於テハ成ルベク其
ノ高サノ高キ方ノ肋骨ニ取附クベシ

梁 矢 第八條 暴露甲板梁ノ梁矢ハ成ルベク梁ノ長サノ $\frac{1}{50}$ 以上ト爲スベシ

梁 肘 板 第九條 梁ハ成ルベク肋骨迄達セシメ肘板ヲ以テ之ヲ肋骨ニ固着スベシ

深サ 900 耗以上ノ梁肘板ノ遊邊ハ之ヲ曲線シ且深サ 1400 耗以上ノ梁肘板ニ在リテハ曲線ト平行シ之ヨリ肘板ノ深サノ約 15% ノ箇所ニ防撓材ヲ取附クベシ

梁肘板ノ寸法竝ニ固着鉄ノ數及徑ハ梁ノ截面抵抗率ニ應ジ次表ニ依リ之ヲ定ムベシ

梁ノ 截面 抵抗 率 (三乗)	梁 ノ 上 肘 板 ノ 深 サ (耗)	梁 肘 板 ノ 幅 測 リ タ ル (耗)	肘板ノ厚サ及曲 線ノ幅 (耗)			肘板ノ各邊 ニ於ケル鉄		肘板ノ内方 ニ曲線ト平 行シテ附ス ル防撓材ノ 寸法 (耗)
			平 厚 板 サ ノ ト キ ノ	曲 厚 線 サ ノ ト キ ノ	曲 線 ノ 幅	數	徑 (耗)	
30	250	190	8			3	16	
60	300	210	8.5	7	40	3	19	
100	410	290	9.5	7.3	45	4	19	
150	510	360	11	8	50	5	19	
200	610	440	12	8.5	60	6	19	
	550	390				5	22	
300	700	520	13	9	65	6	22	
400	820	620	14.5	9.8	75	7	22	
500	930	710	16	10.5	85	8	22	
610	1040	800		11	90	9	22	
750	1160	900		12	100	10	22	
900	1280	1000		12.5	110	11	22	
1,070	1400	1100		12.5	120	12	22	
1,250	1530	1200		12.5	130	13	22	
1,440	1640	1300		12.5	130	14	22	山形鋼 75×75×12

1,650	1750	1390		12.5	130	15	22	山形鋼 90×90×13
1,870	1860	1480		12.5	130	16	22	
2,100	1970	1570		12.5	130	17	22	

第十條 一層甲板船ノ上甲板梁ノ梁肘板ノ寸法及固着ハ梁及肋骨ノ
截面抵抗率中大ナルモノヲ梁ノ截面抵抗率ト看做シ前條ノ表ニ依リ
之ヲ定ムベシ、甲板二層以上ヲ有スル船舶ニ在リテ第二甲板又ハ第
三甲板ニ於テ肋骨ヲ切斷スル箇所又ハ上下ノ肋骨ヲ累接スル箇所ノ
梁肘板ニ付亦同ジ

船口端梁
等ノ肘板 第十一條 船口端梁又ハ特設梁等ニ附スル肘板ハ各邊共二列鉄固着ト
爲シ其ノ深サ及厚サ竝ニ鉄ノ徑及各列ニ於ケル數ハ梁ノ截面抵抗率
ノ $\frac{1}{2}$ ヲ其ノ截面抵抗率ト看做シ第九條ノ表ニ依リ之ヲ定メ肘板ノ
幅ハ其ノ深サニ等シク爲スベシ但シ肘板ノ寸法ヲ該梁ニ隣接スル梁
ノ肘板ノ寸法ヨリ小ト爲スコトヲ得ズ

水槽頂部
梁肘板 第十二條 水槽ノ頂部ヲ構成スル甲板ニ於テ肋骨ヲ切斷スルトキハ其
ノ箇所ノ梁肘板ノ深サ及幅ハ水槽頂板ヨリ水槽底部ヲ肋骨ニ固着ス
ル肘板ノ上端迄ノ距離ノ 15% 未滿ト爲スコトヲ得ズ

外板トノ
固着 第十三條 甲板間又ハ船樓内ニ於テ肋骨ナキ位置ニ梁ヲ設クルトキハ
梁肘板ハ短山形鋼ヲ以テ外板ニ固着スベシ

端艇甲板、遊歩甲板等ノ梁ノ端ハ短山形鋼ヲ以テ固着スルコトヲ得
輕目孔 第十四條 梁肘板ニ輕目孔ヲ設クル場合ニ於テハ其ノ周ヨリ肘板ノ遊
邊及鉄列線ニ至ル距離ヲ孔ノ徑ノ $\frac{1}{2}$ 以上ト爲スベシ

甲板口側
縁材トノ
固着 第十五條 半梁ト甲板口側縁材トハ半梁ヲ肋骨毎ニ取附クルトキハ單
山形鋼ヲ以テ固着シ肋骨一本置ニ取附クルトキハ二重山形鋼ヲ以テ
一列鉄固着ト爲スカ又ハ單山形鋼ヲ以テ二列鉄固着ト爲スベシ
前項ノ山形鋼ハ其ノ厚サヲ縁材ノ規定ノ厚サ以上ト爲シ固着鉄ノ各
列ニ於ケル數ハ次表ニ依ルベシ

半梁ノ截面抵抗率(種ノ三乗)	160以下	160ヲ超エ400未滿	400以上
各鉄列ニ於ケル鉄數	2	3	4

機關室ノ全通梁 **第十六條** 機關室ニハ出來得ル限リ甲板ノ位置ニ於テ適當ナル全通梁ヲ取附クベシ

揚錨機等支持梁 **第十七條** 揚錨機、揚貨機、操舵機、檣其ノ他大ナル重量ヲ支持スル甲板梁ハ特ニ其ノ寸法ヲ増スカ之ニ梁柱ヲ増設スルカ又ハ其ノ他ノ適當ナル補強ヲ爲スベシ

第八章 梁 柱

第一條 各層ノ梁ハ本章ニ規定スル梁柱又ハ之ト同等以上ノ效カヲ有スル構造ニ依リ之ヲ支持スベシ

配 置 **第二條** 甲板間ニ於ケル梁柱ハ之ヲ艙内ニ於ケルモノノ直上ニ設クベシ但シ當該甲板間ノ下方ノ特設梁柱ノ寸法ガ第八條ノ規定ニ適合スルトキハ此ノ限ニ在ラズ

● **第三條** 肋骨毎又ハ肋骨一本置ニ取附クル中實圓形梁柱ノ徑ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノノ以上ト爲スベシ

$$6.5(l + \sqrt{l^2 + 2.5w}) \cdot (\text{耗ニテ})$$

l ハ梁柱ノ長サ (米ニテ)

w ハ次ノ算式ニ依リ定メタル數

$$w = w_0 + S b h$$

w_0 ハ梁柱ノ上端ノ甲板ガ上甲板又ハ船樓甲板ナルトキハ零、第二甲板以下ノ甲板ナルトキハ梁柱ノ上端ノ甲板ト其ノ直上ノ甲板トノ間ノ梁柱ニ對スル w

S ハ當該梁柱ヨリ其ノ前後ノ梁柱ニ至ル各區間ノ中心間ノ距離 (米ニテ)

b ハ當該梁柱ヨリ其ノ左右ノ梁柱又ハ肋骨ノ内面ニ至ル各區間ノ中心間ノ距離 (米ニテ) 但シ該距離ガ B ノ $\frac{1}{5}$ 未滿ナルトキハ B ノ $\frac{1}{5}$

h ハ梁柱ノ上端ノ甲板ガ上甲板ナルトキハ 3.81、居住設備ニ充當スル上層船樓甲板ナルトキハ 1.25、其ノ他ノ船樓甲板ナルトキハ 2.44、第二甲板以下ノ甲板ナルトキハ梁柱ノ上端ノ甲板ト其ノ直上ノ甲板トノ間ノ高サ (米ニテ)

二重梁柱 **第四條** 仕切板ヲ取附クル爲中實圓形梁柱ヲ二重ニ設クルトキハ其ノ徑ハ該梁柱ノ位置ニ設クル單梁柱ノ徑ノ $\frac{3}{4}$ ト爲スコトヲ得

取 固 附 着 **第五條** 二重底又ハ水槽ノ直上ニ設クル中實圓形梁柱ノ下端ハ内底板又ハ水槽頂板ニ取附ケタル堅牢ナル形鋼ニ固着スベシ中實圓形梁柱ノ兩端ハ梁、踵部山形鋼等ニ密着セシメ梁柱ニ荷重ヲ直接傳達シ得ル様取附クベシ

第六條 中實圓形梁柱ノ上下兩端ハ次ノ算式ニ依リ算定シタル面積ヨリ少カラザル合計截面積ヲ有スル鉄ヲ以テ固着スベシ但シ鉄ノ數ハ二箇以上ナルコトヲ要ス

$$0.18 \phi_0 - 5.5 \quad (\text{平方種ニテ})$$

ϕ_0 ハ中實圓形梁柱ノ徑 (耗ニテ) 但シ該徑ガ 75 耗未滿ナルトキハ 75 耗トス

● **第七條** 筒形特設梁柱ノ外徑ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノノ以上ト爲スベシ

$$18.2 \frac{w}{t} + 12.5 l + t \quad (\text{耗ニテ})$$

l ハ梁柱ノ長サ (米ニテ)

t ハ梁柱ヲ構成スル板ノ厚サ (耗ニテ)

w ハ次ノ算式ニ依リ定メタル數

$$w = w_0 + S b h$$

w_0 ハ梁柱ノ上端ノ甲板ガ其ノ箇所ニ於ケル最上層ノ甲板ナルトキハ零、其ノ他ノ甲板ナルトキハ梁柱ノ上端ノ甲板ト其ノ直上ノ甲板トノ間ノ梁柱ニ對スル w

S 及 b ハ第三條ノ規定ニ依ル

h ハ當該甲板ニ對シ第七章第二條ノ規定ニ依リ定メタル高サ (米ニテ)

筒形特設梁柱ヲ構成スル板ノ厚サハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノノ

ヨリ小ナルコトヲ得ズ

$$0.022 \phi_0 + 4.6 \text{ (耗=テ)}$$

ϕ_0 ハ筒形特設梁柱ノ外徑 (耗=テ)



第八條 筒形特設梁柱ト其ノ前方又ハ後方ノ特設梁柱トノ中間ニ於テ甲板下縦桁上ニ上部甲板間ノ梁柱ヲ設クルトキハ該筒形特設梁柱ノ外徑ハ次ニ掲グル w ヲ用ヒ前條第一項ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$w = kw_0 + S b h$$

S, b 及 h ハ前條第一項ノ規定ニ依ル

w_0 ハ筒形特設梁柱ノ上端ノ甲板ト其ノ直上ノ甲板トノ間ノ梁柱ニ對スル w

k ハ當該筒形特設梁柱ヨリ上部甲板間ノ梁柱ニ至ル水平距離ト當該筒形特設梁柱ヨリ上部甲板間ニ梁柱ノ設ケアル方向ニ於ケル特設梁柱ニ至ル水平距離トノ比 (r) ニ應ジ次ノ算式ニ依リ算定シタル係數

$$2r^3 - 3r^2 + 1$$

前項ノ算式ヲ適用スルニ當リ上部甲板間ノ梁柱二箇以上ナルトキハ當該筒形特設梁柱ノ直上、之ト其ノ前方ノ特設梁柱トノ間及之ト其ノ後方ノ特設梁柱トノ間ニ在ル上部甲板間ノ各梁柱ニ付算定シタル kw_0 ノ和ヲ算式ノ kw_0 ニ充ツベシ

下端取附部構造

第九條 船内ニ設クル特設梁柱ノ下端ハ肋板ト内龍骨又ハ二重底桁板トノ交叉スル箇所ニ取附クベシ若シ内龍骨又ハ桁板ナキ箇所ニ梁柱ヲ設クルトキハ該梁柱直下ニ於テ肋板ノ前後一肋骨心距間ニ斷切桁板ヲ設クベシ

取附固着

第十條 筒形特設梁柱ノ上下兩端ハ之ヲ取附クル鋼板ニ密着セシメ鑄山形鋼ヲ以テ固着スベシ
外徑 350 耗以上ノ筒形特設梁柱ト鑄山形鋼トハ二列錐以上ノ固着ト爲スベシ
筒形特設梁柱ノ下端ヲ二重底内底板又ハ水槽頂板ニ取附クルトキハ

内底板又ハ水槽頂板ニ適當ノ二重張板ヲ設クベシ

筒形特設梁柱ノ下端ヲ甲板ニ取附クルトキハ必要ニ應ジ適當ノ補強構造ヲ爲スベシ

筒形ニ非ザル特設梁柱ノ上下兩端ハ梁柱ノ形狀ニ從ヒ適當ノ山形鋼及肘板又ハ平置板ヲ以テ堅牢ニ固着スベシ

第十一條 軸路又ハ肋骨ニ梁柱ヲ取附クルトキハ該部分ニ於ケル軸路又ハ肋骨ヲ適當ニ補強スベシ

機關室ノ梁柱ニ代用スル仕切隔壁

第十二條 機關室内ノ梁ニハ成ルベク多數ノ梁柱ヲ取附クベシ

第十三條 仕切隔壁ヲ以テ梁柱ニ代用スルトキハ仕切隔壁ノ構造ハ次ノ各號ノ規定ニ依ルベシ

一、隔壁板ノ厚サハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ但シ 6 耗未滿ト爲スコトヲ得ズ

$$3.3 S_0 + 3 \text{ (耗=テ)}$$

S_0 ハ防撓材ノ心距 (米=テ)

二、隔壁ニハ次ノ算式ニ依リ算定シタル截面抵抗率ヲ有スル防撓材ヲ取附クベシ

$$C_1 S^3 + C_2 S b h f \text{ (糧ノ三乗=テ)}$$

l, S, b 及 h ハ防撓材ヲ梁柱ト看做シ第三條ノ規定ニ依リ定メタルモノ

f ハ防撓材ノ深サ (耗=テ)

C_1 ハ隔壁ノ兩側ニ石炭ヲ積載スル場合ニ於テハ 0.13、其ノ片側ニ石炭ヲ積載スル場合ニ於テハ 0.25、其ノ他ノ場合ニ於テハ 0.40

C_2 ハ防撓材ニ用フル形鋼ガ山形鋼ナルトキハ 0.007、球山形鋼ナルトキハ 0.010、溝形鋼ナルトキハ 0.012

三、隔壁板ヲ甲板及二重底ニ固着スル山形鋼ノ厚サハ隔壁板ノ厚サニ 2.5 耗ヲ加ヘタルモノ以上ト爲スベシ

四、防撓材ノ上端ハ梁ニ固着シ其ノ下端ノ固着ハ水密隔壁ノ防撓材ノ下端ニ於ケル短山形鋼固着ト同等以上ノ效力ヲ有スルモノト爲

スベシ

五、隔壁ヲ船口等ニテ中斷スルトキハ其ノ端ニ於ケル防撓材ノ兩端ハ肘板ヲ以テ固着スベシ

第十四條 圍壁ヲ以テ梁柱ニ代用スルトキハ其ノ構造ハ場合ニ應ジ甲板荷重及側壓ヲ支持スルニ十分ナルモノナルコトヲ要ス

第九章 梁下縦材及甲板下縦桁

第一條 梁毎ニ梁柱ヲ取附ケザル場合ニ於テハ梁下縦材又ハ甲板下縦桁ヲ設ケ梁柱ヲ取附ケザル梁ヲ支持スベシ

第二條 梁下縦材ハ次ノ算式ニ依リ算定シタル截面抵抗率ヲ有スルモノ以上ト爲シ二箇ノ鉄ヲ以テ梁ニ固着スベシ

$$C^2 b h \text{ (噸ノ三乗ニテ)}$$

C ハ梁柱ヲ梁一本置ニ配置スルトキハ 2.7、梁二本置ニ配置スルトキハ 3.2、梁三本置ニ配置スルトキハ 3.4

l ハ當該縦材ノ支點間ノ長サ (米ニテ)

b ハ當該縦材ヨリ其ノ左右ノ縦材又ハ肋骨ノ内面ニ至ル各區間ノ中心間ノ距離 (米ニテ) 但シ該距離ガ B ノ $\frac{1}{5}$ 未滿ナルトキハ B ノ $\frac{1}{5}$

h ハ當該縦材ニ依リ支持セララルル甲板ニ對シ第七章第二條ノ規定ニ依リ定メタル高サ (米ニテ)

第三條 甲板下縦桁ハ下縁ニ形鋼ヲ附スルカ又ハ下縁ヲ曲線シタル切缺縦通桁板ヲ曲線又ハ山形鋼ヲ以テ鋼甲板又ハ梁上帶板ニ固着シタル構造ト爲スベシ

桁板ノ深サハ隔壁ヨリ隔壁ニ至ル區間ヲ通ジ同一ト爲シ甲板下縦桁ヲ支持スル特設梁柱ノ心距ノ中最大ナルモノノ $\frac{1}{22}$ 以上ト爲スベシ

桁板ノ厚サハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$0.006 d_0 + 5 \text{ (耗ニテ)}$$

d_0 ハ桁板ノ深サ (耗ニテ)

甲板下縦桁ノ構造及寸法

桁板ノ下縁ニ於ケル曲線ノ幅ハ桁板ノ厚サノ 15 倍ヲ超ユルコトヲ得ズ但シ曲線部ニ冠板ヲ取附クルトキ又ハ曲線部ヲ肘板ヲ以テ支持スルトキハ此ノ限ニ在ラズ

桁板ノ下縁ニ於ケル形鋼又ハ曲線及之ニ附スル冠板ノ面積ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$48 \frac{l_0 b h}{d_0} - \frac{t d_0}{300} \text{ (平方噸ニテ)}$$

l, b 及 h ハ前條ノ規定ヲ準用シテ定メタル長サ、距離及高サ (米ニテ)

t ハ桁板ノ厚サ (耗ニテ)

d_0 ハ桁板ノ深サ (耗ニテ)

l_0 ハ隔壁ヨリ隔壁ニ至ル區間ニ於ケル特設梁柱ノ心距ノ中最大ナルモノ (米ニテ)

第四條 二箇ノ特設梁柱ニ依リ支持セララルル甲板下縦桁上ニ該特設梁柱ノ直上ニ在ラザル箇所ニ上部甲板間ノ梁柱ヲ設クルトキハ甲板下縦桁ノ桁板ノ下縁ニ於ケル形鋼又ハ曲線及之ニ附スル冠板ノ面積ハ前條第五項ノ規定ニ拘ラズ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$48 \frac{l_0 (l b h + k w)}{d_0} - \frac{t d_0}{300} \text{ (平方噸ニテ)}$$

l_0, l, b, h, t 及 d_0 ハ前條ノ規定ニ依ル

w ハ上部甲板間ノ梁柱ニ對スル第八章第三條、同章第七條又ハ第八條ニ掲ゲル w

k ハ甲板下縦桁ヲ支持スル特設梁柱ヨリ上部甲板間ノ梁柱ニ至ル水平距離 a ト l トノ比ニ應ジ次ノ算式ニ依リ算定シタル係數

$$12 \frac{a}{l} \left(1 - \frac{a}{l} \right)^2$$

前項ノ算式ヲ適用スルニ當リ上部甲板間ノ梁柱ガ一箇ナルトキハ之ニ近キ方ノ特設梁柱ヨリ測リタル a ニ依リ k ヲ定メ二箇以上ナル

トキハ同一特設梁柱ヨリ a ヲ測リ上部甲板間ノ各梁柱ニ付定メタル kw ノ和ト他ノ特設梁柱ニ對シ定メタル之ニ相當スル和トノ中大ナルモノヲ算式ノ kw ニ充ツベシ

第五條 已ムコトヲ得ザル理由ニ依リ桁板ノ深サヲ l_0 ノ $\frac{1}{22}$ 未滿ト爲ストキハ其ノ下縁ニ於ケル形鋼又ハ曲縁及之ニ附スル冠板ノ面積ハ前二條ノ規定ニ依ル面積ニ l_0 ノ $\frac{1}{22}$ ト桁板ノ深サトノ比ヲ乘ジタルモノ以上ト爲スベシ

第六條 梁下縦材又ハ甲板下縦桁ヲ構成スル桁板及形鋼ハ成ルベク長材ヲ用ヒ其ノ接合ハ覆板ヲ附シタル衝接ト爲スカ又ハ累接ト爲スベシ

第七條 甲板下縦桁ノ下縁ニ於ケル形鋼又ハ曲縁ノ幅 180 耗未滿ナルトキハ桁板ト梁トヲ山形鋼ヲ以テ固着シ且 1.8 米ヲ超エザル間隔ニ該山形鋼ヲ桁板ノ下端迄延長シ、180 耗以上ナルトキハ 2.7 米ヲ超エザル間隔ニ肘板ヲ取附ケ桁板及其ノ曲縁部又ハ形鋼ト梁トヲ固着シ且其ノ中間ノ梁ト桁板トヲ山形鋼ヲ以テ固着スベシ

第八條 甲板下縦桁ト隔壁ノ堅防撓材トハ桁板ノ下縁ヨリ測リタル深サ及防撓材ノ内縁ヨリ測リタル幅ハ各桁板ノ深サ以上、厚サハ桁板ノ厚サ以上ニシテ且遊邊ヲ曲縁ト爲シタル肘板ヲ以テ二列鉄固着ト爲スベシ

甲板下縦桁ヲ固着スル隔壁防撓材ハ該縦桁ヲ支持スルニ十分ナル效力ノモノナルコトヲ要ス

梁下縦材ト隔壁トハ短山形鋼ヲ以テ固着スベシ

第十章 外板

第一條 舷側厚板トハ強力甲板トシテ取扱ハルル上甲板ノ舷側ニ附スル外板ヲ謂フ

龍骨翼板トハ方形龍骨ニ附スル外板ヲ謂フ

船底外板トハ龍骨翼板ヲ除キ彎曲上部迄ノ船底ニ附スル外板ヲ謂フ

船側外板トハ舷側厚板及其ノ直下ノ外板ヲ除キ彎曲上部ヨリ上甲板

迄ノ船側ニ附スル外板ヲ謂フ

第二條 中央部 L ノ $\frac{1}{2}$ 間ニ於ケル船側外板ノ厚サハ次ノ算式ニ依リ算定シタル厚サニ d 及 D ニ對スル次ノ各號ノ修正高ヲ正負ノ符號ヲ附シタル儘加ヘタルモノ以上ト爲スベシ

$$5.18 + 5.96 \left(\frac{L}{100} \right) + 1.61 \left(\frac{L}{100} \right)^2 \quad (\text{耗ニテ})$$

一、d = 對スル修正高

$$(0.0044 L + 0.37)(d - 0.06 L) \quad (\text{耗ニテ})$$

二、D = 對スル修正高

$$0.0027 L \left(\frac{L}{12} - D \right) \quad (\text{耗ニテ})$$

中央部 L ノ $\frac{1}{2}$ 間ニ連續スル船樓アルトキハ該船樓甲板迄ノ深サヲ前項ノ算式ノ D ニ充ツベシ

第三條 中央部 L ノ $\frac{1}{2}$ 間ニ於ケル船底外板ノ厚サハ L ガ 105 米以下ナルトキハ前條ニ依ル船側外板ノ厚サ以上ト爲シ、L ガ 105 米ヲ超ユルトキハ前條ニ依ル船側外板ノ厚サニ次表ニ掲グル厚サヲ加ヘタルモノ以上ト爲スベシ

L	105 ヲ超エ 135 以下	135 〃 175 〃	175 ヲ超エ 以下
加フベキ厚サ (耗)	0.25	0.50	1.00

第四條 前部 L ノ $\frac{1}{4}$ 間ニ於ケル船底外板ノ厚サハ前條ノ規定ニ依ル厚サノ 1.1 倍以上ト爲スベシ

第五條 船側外板ノ厚サ及前條ニ掲グルモノヲ除キ其ノ他ノ船底外板ノ厚サハ中央部 L ノ $\frac{1}{2}$ 間ノ前後ニ於テハ漸次之ヲ減少シ首尾兩端ニ於テハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノト爲スコトヲ得

$$4.40 + 6.67 \left(\frac{L}{100} \right) - 0.90 \left(\frac{L}{100} \right)^2 \quad (\text{耗ニテ})$$

第六條 肋骨心距ガ第六章第一條ノ規定ニ依ル標準心距ヲ超ユルトキハ超過 10 耗ニ付 0.1 耗ノ割合ヲ以テ船側外板及船底外板ノ厚サ

ヲ増スベシ

舷側厚板 **第七條** 舷側厚板ノ幅ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$1000 + 2.08 L \quad (\text{耗ニテ})$$

舷側厚板ノ厚サハ次ノ算式ニ依リ算定シタル厚サニ d 及 D ニ對スル次ノ各號ノ修正高ヲ正負ノ符號ヲ附シタル儘加ヘタルモノ以上ト爲スベシ但シ中央部 L ノ $\frac{1}{2}$ 間ノ前後ニ於テハ漸次之ヲ減少シ首尾兩端ニ於テハ船側外板ノ首尾ノ厚サニ等シカラシムルコトヲ得

$$3.56 + 2.92 \left(\frac{L}{100} \right) + 5.74 \left(\frac{L}{100} \right)^2 \quad (\text{耗ニテ})$$

一、 d = 對スル修正高

$$(0.0016 L + 4.53)(d - 0.06 L) \quad (\text{耗ニテ})$$

二、 D = 對スル修正高

$$4.17 \left(\frac{L}{12} - D \right) \quad (\text{耗ニテ})$$

舷側厚板直下ノ外板 **第八條** 舷側厚板直下ノ外板ノ厚サハ當該箇所ニ於ケル舷側厚板ノ前條ノ規定ニ依ル厚サト船側外板ノ第二條及第五條ノ規定ニ依ル厚サトノ平均以上ト爲スベシ但シ舷側厚板ト船側外板トノ厚サノ差ガ小ナルトキハ船側外板ノ厚サニ等シク爲スコトヲ得

第九條 舷側厚板及其ノ直下ノ外板ノ厚サハ前二條ノ規定ニ拘ラズ當該箇所ニ於ケル船側外板ノ厚サヨリ小ナルコトヲ得ズ

龍骨翼板 **第十條** 龍骨翼板ノ幅ハ舷側厚板ノ幅以上ト爲シ、其ノ厚サハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ但シ中央部 L ノ $\frac{1}{2}$ 間ノ前後ニ於テハ漸次厚サヲ減ズルコトヲ得

$$5.79 + 7.66 \left(\frac{L}{100} \right) + 1.08 \left(\frac{L}{100} \right)^2 \quad (\text{耗ニテ})$$

龍骨翼板ノ厚サハ前項ノ規定ニ拘ラズ之ニ隣接スル船底外板ノ厚サヨリ小ナルコトヲ得ズ

車軸管覆外板等 **第十一條** 車軸管覆外板、船尾骨材ノ踵部ニ固着スル外板、眼鏡形車軸膨出部ノ外板等火造リヲ爲ス外板ノ厚サハ前條ノ算式ニ依ル厚サ

以上ト爲スベシ

前項ニ該當スルモノヲ除クノ外船尾骨材ニ固着スル外板ハ第二條ノ規定ニ依ル船側外板ノ厚サ以上ト爲スベシ

船樓外板 **第十二條** 船橋樓甲板ガ強力甲板ナル場合ニ於ケル船橋樓ノ外板ノ厚サハ船橋樓甲板迄ノ深サヲ D トシ第二條ノ規定ニ依リ算定シタル船側外板ノ厚サ以上ト爲スベシ

船首樓ノ外板又ハ船橋樓甲板ガ強力甲板ナラザル場合ニ於ケル船橋樓ノ外板ノ厚サハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$3.65 + 6.67 \left(\frac{L}{100} \right) - 1.03 \left(\frac{L}{100} \right)^2 \quad (\text{耗ニテ})$$

船尾樓ノ外板ノ厚サハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$4.42 + 3.83 \left(\frac{L}{100} \right) \quad (\text{耗ニテ})$$

第十三條 低船尾樓ヲ有スル部分ノ外板ノ寸法ハ低船尾樓甲板ヲ上甲板ト看做シ之ヲ定ムベシ

横縁ノ避距 **第十四條** 上下ニ隣接スル外板ノ横縁ノ距離ハ肋骨ノ心距ノ2倍以上ト爲シ又一條ヲ隔テタル外板ノ横縁ノ距離ハ肋骨ノ心距以上ト爲スベシ

龍骨ニ隣接スル外板ノ横縁ハ平板龍骨ノ横縁又ハ方形龍骨ノ嵌接ト適當ニ避距スベシ

前二項ノ規定ハ船ノ首尾ニ於テハ之ヲ斟酌スルコトヲ得

第十五條 暴露甲板ニ於テハ舷縁山形鋼ヲ以テ梁上側板ヲ外板ニ固着スベシ

補強 **第十六條** 舷側厚板ニ舷窓其ノ他ノ孔口ヲ設クル場合ニ於テ其ノ有效截面積ガ孔口ヲ設ケザル部分ノ截面積ノ80%未滿ナルトキハ適當ナル補強ヲ爲スベシ

外板ニ載貨門、載炭門、吸水口、排出口等ノ開口ヲ設クルトキハ其ノ四隅ニ丸味ヲ附シ且適當ナル補強ヲ爲シ縦及横ノ強力ヲ維持スベ

シ

第十七條 錨鎖管ヲ取附クル外板及其ノ下方ノ外板ハ其ノ厚サヲ増スカ又ハ二重張りト爲シ且其ノ縦線ガ錨及錨鎖ニ依リ損傷ヲ受ケザ様適當ニ構造スベシ

第十一章 甲 板

第一節 強力甲板及有效甲板ノ有效面積

名 稱 第一條 有效甲板トハ強力甲板ノ下方ノ甲板ニシテ其ノ面積ヲ第四條ノ規定ノ適用ニ當リ船體横截面ノ抵抗率ノ算定ニ算入スル甲板ヲ謂ヒ有效第二甲板、有效第三甲板等トハ強力甲板直下ノ有效甲板及順次其ノ下方ノ有效甲板ヲ謂フ
臺甲板トハ強力甲板ノ下方ニ在ル甲板ニシテ有效甲板ニ非ザルモノヲ謂フ

有效面積 第二條 強力甲板又ハ有效甲板ノ有效面積トハ中央部 L ノ $\frac{1}{2}$ 以上ヲ縦通スルカ又ハ縦通ト認メ得ベキ鋼甲板ノ船體中心線ノ各側ニ於ケル面積ヲ謂フ

舷線山形鋼ノ面積ハ強力甲板ノ有效面積ニ算入スルコトヲ得
有效面積ノ算定ニ當リテハ鋸孔及螺釘孔ハ之ヲ無キモノト看做ス

有效甲板 第三條 有效甲板ノ有效面積ハ中央部 L ノ $\frac{1}{2}$ 間ニ在リテハ成ルベク次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

有效第二甲板 $B(0.16L + 10.15)$ (平方糎ニテ)

有效第三甲板 $B(0.11L + 8.04)$ (平方糎ニテ)

強力甲板 第四條 強力甲板ノ有效面積ハ中央部 L ノ $\frac{1}{2}$ 間ニ在リテハ船體横截面ノ抵抗率ガ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上トナル様之ヲ定ムベシ

fdB (糎ノ三乗ニテ)

f ハ L ニ依ル係數ニシテ次表ニ依ル

L	f	L	f	L	f	L	f	L	f
30	3780	65	8870	100	18070	135	29855	170	43940
35	4160	70	9970	105	19610	140	31745	175	46110
40	4660	75	11140	110	21195	145	33680	180	48315
45	5280	80	12385	115	22825	150	35655		
50	6020	85	13730	120	24490	155	37670		
55	6690	90	15125	125	26220	160	39720		
60	7845	95	16575	130	28010	165	41810		

備考 L ガ表ニ掲グルモノノ中間ニ在ルトキハ挿間法ニ依リ f ヲ算定ス
前項ノ規定ニ依ル船體横截面ノ抵抗率ノ算定ニ付テハ次ノ各號ニ依ルベシ

- 一、船體横截面ノ水平中性軸ニ對スル惰率ヲ該軸ヨリ強力甲板ノ甲板梁ノ船側ニ於ケル上面迄ノ垂直距離ニテ除ス
- 二、強力甲板以下ニ在リテハ甲板梁ノ支持ヲ目的トスル梁下縦材又ハ甲板下縦材及有效甲板ノ有效面積ニ算入セザル鋼甲板ヲ除クノ外中央部 L ノ $\frac{1}{2}$ 以上ニ達スルカ又ハ同一ノ效力ヲ有スル總テノ縦通鋼材ヲ算入シ強力甲板ノ上方ニ在リテハ梁上側板ニ附スル縦通山形材及舷側厚板ノ延長部ノミヲ算入ス
- 三、鋸孔及螺釘孔ハ之ヲ無キモノト看做ス
- 四、面積ノ單位ハ平方糎トシ距離ノ單位ハ米トス

第五條 船舶ノ用途、構造等ニ依リ船體ノ中央頂部ニ於ケル縦材ニ過大ノ壓縮應力ヲ生ズル懸念アルトキハ強力甲板ノ有效面積ヲ前條ノ規定ニ依ルモノヨリ適當ニ増加スルコトヲ要ス

適用範圍 第六條 次ノ場合ニ於テハ強力甲板ノ有效面積ハ委員會ノ見込ニ依リ第四條ノ規定ニ依ルモノヨリ適當ニ増減セシムルコトアルベシ

- 一、 L ガ 182.88 米ヲ超ユルトキ
- 二、 B ガ L ノ $\frac{1}{10}$ = 1.52 米ヲ加ヘタルモノ未滿ナルカ又ハ之ニ 6.10 米ヲ加ヘタルモノヲ超ユルトキ
- 三、 L ト強力甲板迄ノ深サトノ比ガ 10 未滿ナルカ又ハ 13.5 ヲ超ユルトキ

小ナル有效面積ノ配分 **第七條** 前四條ノ規定ニ依リ要求セラルル強力甲板又ハ有效甲板ノ有效面積ガ小ナルトキハ順次梁上側板、甲板口ノ側部ニ設クル梁上帶板及梁上側板ニ隣接スル鋼甲板ノ面積ヲ増加シテ之ニ充ツベシ

船首尾甲板 **第八條** 中央部 $L \text{ノ} \frac{1}{2}$ 間ノ前後ニ於テハ強力甲板又ハ有效甲板ノ有效面積ヲ漸次減少シ首尾兩端ニ於テハ其ノ位置ニ於ケル梁上側板ノ規定ノ面積ト爲スコトヲ得

第二節 鋼甲板及梁上帶板

梁上側板 **第九條** 甲板梁ニハ梁上側板ヲ取附クベシ
強力甲板及有效甲板ノ梁上側板ノ幅ハ中央部 $L \text{ノ} \frac{1}{2}$ 間ニ在リテハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲シ其ノ前後ニ於テハ漸次幅ヲ減ジテ首尾兩端ニ在リテハ算式ニ依ルモノノ 70% 迄ト爲スコトヲ得

$125\sqrt{L-20}$ (耗ニテ)

L 140 米ヲ超ユル船舶ニ在リテハ前項ノ算式ノ適用ニ當リ L ヲ 140 米ト爲スベシ

船樓甲板及臺甲板ノ梁上側板ノ幅ハ中央部 $L \text{ノ} \frac{1}{2}$ 間ニ在リテハ強力甲板又ハ有效甲板ノ首尾兩端ニ於ケル梁上側板ノ規定ノ幅以上ト爲スベシ

梁上側板ノ幅ハ前三項ノ規定ニ拘ラズ之ヲ 250 耗未滿ト爲スコトヲ得ズ

船樓甲板以下ノ甲板ノ梁上側板ノ厚サハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ニシテ且強力甲板ニ在リテハ鋼甲板ノ厚サニ 1 耗ヲ加ヘタルモノ以上、其ノ他ノ甲板ニ在リテハ鋼甲板ノ厚サ以上ト爲スベシ

$0.4\sqrt{L} + 5.3$ (耗ニテ)

強力甲板ニ非ザル船首樓又ハ船尾樓ノ甲板ノ梁上側板ノ厚サハ前項ノ規定ニ拘ラズ其ノ箇所ニ於ケル船樓外板ノ厚サニ等シク爲スコトヲ得

強力甲板ノ梁上側板ノ厚サハ舷側厚板ノ厚サヨリ 5 耗以上小ナルコ

トヲ得ズ

鋼甲板ヲ要スル場合 **第十條** L 76 米以上 91.5 米未滿ノ船舶ニ在リテハ中央部 $L \text{ノ} \frac{1}{2}$ 間ノ強力甲板ニ、L 91.5 米以上 122 米未滿ノ船舶ニ在リテハ中央部 $L \text{ノ} \frac{3}{4}$ 間ノ強力甲板ニ鋼甲板ヲ張り詰メ其ノ前後ニ於テハ漸次其ノ幅ヲ減ジテ梁上側板ニ一致セシムベシ

L 122 米以上ノ船舶ニ在リテハ首尾ヲ通シ強力甲板ニ鋼甲板ヲ張り詰ムベシ

L 91.5 米以上ノ船舶ノ船首樓甲板ニハ鋼甲板ヲ張ルベシ

最小ノ厚サ **第十一條** 木甲板ヲ張ラザル鋼甲板ノ厚サハ甲板ノ種類ニ應ジ次ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノ未滿ト爲スコトヲ得ズ但シ強力甲板ニ付テハ船體横截面ノ抵抗率ガ第四條ニ定ムルモノニ比シ相當ノ餘裕アルトキハ委員會ノ見込ニ依リ適當ニ之ヲ斟酌スルコトヲ得

一、中央部 $L \text{ノ} \frac{1}{2}$ 間ニ於ケル強力甲板ノ有效面積ニ算入シタル鋼甲板ニシテ横方向ニ配置シタル梁ニ張りタルモノ

$13.91\sqrt{S} - 2.3$ (耗ニテ)

二、中央部 $L \text{ノ} \frac{1}{2}$ 間ニ於ケル有效甲板ノ有效面積ニ算入シタル鋼甲板ニシテ横方向ニ配置シタル梁ニ張りタルモノ

$12.65\sqrt{S} - 2.3$ (耗ニテ)

三、中央部 $L \text{ノ} \frac{1}{2}$ 間ニ於ケル強力甲板又ハ有效甲板ノ有效面積ニ算入シタル鋼甲板ニシテ縦方向ニ配置シタル梁ニ張りタルモノ

石炭庫ノ甲板

強力甲板中其ノ面積ヲ有效面積ニ算入セザル部分及首尾 $L \text{ノ} \frac{1}{4}$ 間中央部 $L \text{ノ} \frac{1}{2}$ 間ニ於ケル有效甲板ノ鋼甲板ニシテ其ノ面積ヲ有效面積ニ算入セザルモノ

$10.44\sqrt{S} - 0.8$ (耗ニテ)

四、船橋樓甲板ノ暴露部中其ノ面積ヲ強力甲板ノ有效面積ニ算入セザル部

分
 暴露セル船首樓甲板 } 10.12√S - 1.2 (耗ニテ)
 首尾 Lノ $\frac{1}{4}$ 間ニ於ケル有效甲板

五、暴露セル船尾樓甲板 9.17√S - 0.7 (耗ニテ)
 六、蔽圍セラレタル貨物積載區域ノ臺甲板 9.80√S - 1.5 (耗ニテ)
 七、蔽圍セラレタル居住區域ノ臺甲板 8.22√S - 1.4 (耗ニテ)
 Sハ梁ノ心距(米ニテ)但シ心距ガ 0.53 米未滿ナルトキハ 0.53 米トシ 1.4 米ヲ超ユルトキハ 1.4 米トス

木甲板ヲ張ラザル鋼甲板ノ厚サハ當該甲板ヨリ其ノ直上甲板迄ノ高サガ 2.5 米ヲ超ユルトキ又ハ特ニ重量大ナル物品ノ積載ヲ豫期スルトキハ前項ノ算式ニ依ルモノヨリ適當ニ増加スルコトヲ要ス
 鋼甲板ニ木甲板ヲ張りタル場合ト雖モ木甲板ガ第十九條乃至第二十一條ノ規定ニ適合シタルモノニ非ザルトキハ木甲板ハ之ヲナキモノト看做シ前二項ノ規定ヲ適用ス

甲板ノ階
 段部 **第十二條** 強力甲板ニ段階アル場合ニ於テハ階段部ト船底トノ間ニ梁柱、縦通膜板、隔壁又ハ部分隔壁ヲ設ケ該部ヲ堅牢ニ支持シ且各層ノ強力甲板ヲ構造スル諸材ヲ相互ニ延長シ膜板、桁板、肘板等ヲ以テ完全ニ結合スベシ
 前項ノ規定ハ必要ニ應ジ有效甲板ノ段階部ニ之ヲ準用ス

開口ニ對
 スル補強 **第十三條** 中央部 Lノ $\frac{3}{4}$ 間ニ於ケル強力甲板又ハ中央部 Lノ $\frac{1}{2}$ 間ニ於ケル有效第二甲板ノ大ナル甲板口ノ四隅ニ於テハ鋼甲板ヲ二重ト爲スカ、其ノ厚サヲ増スカ又ハ其ノ他ノ適當ナル方法ニ依リ該部ヲ補強スベシ

L 107 米以上ノ船舶ノ中央部 Lノ $\frac{2}{5}$ 間ニ於ケル強力甲板及有效第二甲板ニ在リテハ機關室口、艙口、其ノ他ノ大ナル甲板口ノ間及其ノ端ニ縦桁ヲ設ケ成ルベク之ヲ甲板口ノ圍壁又ハ縁材ニ結合スベシ
 前項ノ規定ハ委員會ニ於テ必要アリト認ムルトキハ L 107 米未滿ノ船舶ニ之ヲ準用ス

舷縁山形
 鋼 **第十四條** 舷縁山形鋼ノ厚サハ之ヲ取附ケル外板ノ厚サト梁上側板ノ

銅 厚サトノ中小ナルモノ以上ト爲シ其ノ厚サガ 15 耗以上ナルトキハ中央部 Lノ $\frac{1}{2}$ 間ニ於テハ二列鉄固着ト爲スベシ
 舷縁山形鋼ノ各邊ノ幅ハ其ノ厚サ及固着方ニ應ジ次表ニ依リ之ヲ定ムベシ

山形鋼ノ厚サ (耗)	ヲ超エ 7.5 以下	7.5 〃 9 〃	9 〃 12.5 〃	12.5 〃 17.5 〃	17.5 〃 22.5 〃	22.5 〃 28.5 〃	ヲ超エ 以下
山形鋼ノ各一列鉄ノトキ	65	75	90	100	115		125
邊ノ幅(耗) 二列鉄ノトキ				150	180		200

舷縁山形鋼ヲ銜接スル箇所又ハ之ヲ通シテ排水孔ヲ設ケル箇所ニハ梁上側板ノ下面ニ舷縁山形鋼ト同一寸法ノ背面山形鋼ヲ附スルカ又ハ之ト同一效力ノ補強ヲ爲スベシ

横縁ノ避
 距 **第十五條** 強力甲板及有效甲板ニ在リテハ梁上側板、舷縁山形鋼及之ニ接スル外板ノ横縁ハ互ニ肋骨心距ノ 2 倍以上避距スベシ但シ船ノ首尾ニ在リテハ適當ニ之ヲ斟酌スルコトヲ得

強力甲板及有效甲板ノ鋼甲板ノ横縁ハ之ニ隣接スル鋼甲板又ハ梁上側板ノ横縁ト成ルベク肋骨心距ノ 2 倍以上避距スベシ

外板トノ
 固着 **第十六條** 舷縁山形鋼ナキ箇所ニ於テハ肋骨ノ間ニ於テ梁上側板ト外板トヲ梁上側板ノ厚サニ等シキ厚サノ短山形鋼ヲ以テ又ハ梁上側板ヲ曲線シ一列鉄固着ト爲スベシ

梁上帶板 **第十七條** 鋼甲板ヲ張ラザル箇所ノ甲板ニハ次ノ各號ニ依リ梁上帶板ヲ設クベシ (第十七章第二十六條参照)

一、艙口其ノ他ノ大ナル甲板口ノ側部ニハ幅ハ甲板口ノ長サノ $\frac{1}{10}$ 以上、厚サハ梁上側板ノ厚サ以上ノ梁上帶板ヲ設ケ甲板口ノ長サガ 4 米ヲ超ユルトキハ帶板ヲ甲板口ノ端ヨリ肋骨心距ノ 2 倍以上延長スベシ

二、梁柱ノ位置ニハ幅ハ Bノ $\frac{1}{40}$ 以上、厚サハ梁上側板ノ厚サ以上ノ梁上帶板ヲ設クベシ

三、甲板室ノ縁材ノ下部及大ナラザル甲板口ノ側部ニハ適當ナル梁上帶板ヲ設クベシ

第三節 木 甲 板

材 質 **第十八條** 木甲板ニハ十分乾燥セラレ腐蝕、白身、割目及有害ナル節ヲ有セザル木材ヲ使用スベシ

堅材トハ「チーク」又ハ之ニ類似ノ木材ヲ謂ヒ柔材トハ米松又ハ之ニ類似ノ木材ヲ謂フ

柔材ヲ木甲板ニ使用スルトキハ木目ヲ堅ニ配置スベシ

寸 法 **第十九條** 暴露木甲板ノ各條ノ幅ハ成ルベク柔材ニ在リテハ125耗以下。堅材ニ在リテハ150耗以下ト爲スベシ

暴露木甲板ノ厚サハ次表ニ掲グルモノ以上ト爲スベシ

		L60米未満 ノ船舶	L60米以上 ノ船舶
梁ニ木甲板ノミヲ張ル場合	柔 材	65 耗	75 耗
	堅 材	50 耗	65 耗
鋼甲板上ニ木甲板ヲ張ル場 合	柔 材	65 耗	
	堅 材	50 耗	

取附固着 **第二十條** 木甲板ハ梁、鋼甲板其ノ他ノ鋼板トノ間ニ適當ナル防蝕劑ヲ施シ之ニ密着セシムベシ

梁ニ木甲板ノミヲ張ル場合ニ於テ梁ガ肋骨一本置ニ配置セラルルトキハ梁毎ニ木甲板ヲ固着スベシ

鋼甲板又ハ梁上帶板上ニ木甲板ヲ張ル場合ニ於テハ鋼板ノ防撓性ヲ増ス爲成ルベク梁ノ間ニ於テ鋼板ニ木甲板ヲ固着スベシ

第二十一條 厚サ 80 耗未滿ノ柔材木甲板又ハ厚サ 70 耗未滿ノ堅材木甲板ノ固着ニハ徑 12.5 耗以上、其ノ他ノ木甲板ノ固着ニハ徑 16 耗以上ノ亞鉛鍍ヲ施シタル螺釘ヲ用フベシ

木甲板ノ固着ニハ固着箇所毎ニ板ノ幅 150 耗以下ナルトキハ一箇、150 耗ヲ超ユルトキハ二箇ノ螺釘ヲ用フベシ

螺釘ハ頸部ニ白鉛ヲ塗リタル填架ヲ卷キ附ケ上ヨリ木甲板ヲ貫通セシメ頸部ハ木甲板ニ埋メ其ノ上部ニハ白鉛等ヲ塗リタル上埋木シ下端ニ母螺ヲ施スベシ

第二十二條 木甲板ノ周縁ニ於テハ鋼縁材ニ沿ヒ木板ヲ配置シ木甲板ノ端面ト鋼材トカ直接ニ接觸スルコトナカラシムベシ

中央部 L ノ $\frac{1}{2}$ 間ニ於ケル強力甲板又ハ有效甲板ニ木甲板ノミヲ張ルトキハ木甲板ノ横縁ハ少クトモ三條ヲ隔ツルニ非ザレバ之ヲ同一ノ梁心距内ニ置クコトヲ得ズ

第二十三條 甲板口ノ周圍ニ鋼甲板ヲ張ラザルトキハ木甲板ノ固着ノ爲其ノ兩端ノ梁ニ鋼板ヲ取附クベシ

木甲板ノミヲ張りタル暴露甲板ニ在リテハ中央部 L ノ $\frac{1}{2}$ 間ニ於ケル木甲板ノ衝接ノ箇所ニハ木甲板ノ固着ノ爲梁ニ短山形鋼又ハ鋼板ヲ取附クベシ

舷側水道ノ内側ニ附スル山形鋼ノ厚サハ 9 耗以上ト爲スベシ

甲板室ノ圍壁、機關室口ノ圍壁等ヲ暴露甲板ニ取附クル山形鋼ノ邊ハ木甲板ノ上面ヨリ 12 耗以上ノ高サニ達セシムベシ

第四節 雜 則

増 厚 **第二十四條** 濕氣又ハ熱氣ニ接スル箇所ニ於ケル鋼甲板又ハ梁上側板ハ次表ニ依リ其ノ厚サヲ増スベシ但シ特殊ノ塗裝ニ依リ保護セラルルトキハ此ノ限ニ在ラズ(第十六章第七條參照)

箇 所	石炭庫ノ下部	補汽罐ノ下部 及汽管ノ下部	冷藏庫ノ下部
増スベキ厚サ(耗)	2	2	1

第二十五條 木甲板ニハ填架ヲ施スベシ

水密試驗 暴露甲板ニハ鑢製品ノ取附ヲ完了シタル後布管内ノ水壓力毎平方糎 2 疋以上ノ水ヲ注射シ其ノ水密ヲ試驗スベシ

舷側水道ニハ之ニ塗裝ヲ施ス前水ヲ湛エ又ハ前項ノ規定ニ依リ其ノ水密ヲ試驗スベシ

諸 工 事 **第二十六條** 肋骨ガ甲板ヲ通過スル箇所ニハ甲板ノ種類ニ應ジ次ノ各號ニ掲グル工事ヲ施スベシ但シ第二號後段ノ工事ハ臺甲板又ハ積載貨物ノ種類ニ依リ必要ナシト認ムル箇所ニ於テハ之ヲ省略スルコトヲ得

一、暴露甲板又ハ水艙ノ頂部ヲ構造スル甲板ニ在リテハ鰐山形鋼ニ依ル水密工事

二、其ノ他ノ甲板ニ在リテハ肋骨ノ内側ニ沿ヒ山形鋼ヲ取附ケ貫通箇所ノ間隙ヲ木製又ハ鋼板製ノ填材ヲ以テ閉塞シ且該山形鋼ト外板トノ間ニ適當ノ厚サ迄「セメント」ヲ塗ルコト

●**第二十七條** 鋼甲板ヲ張ラザル場合ト雖横置隔壁ノ箇所ニ於テハ隔壁ト梁トノ間ニ鋼板ヲ張り隔壁ノ堅牢ナル支持ノ爲必要ニ應ジ之ヲ防撓スベシ

第二十八條 鋼甲板上ニ化學的被覆材料ヲ塗装スル場合ニ於テハ塗装前鋼甲板ヲ填隙シ水密ナラシムベシ
塗装材料ガ鋼材ヲ腐蝕スル虞アルモノナルトキハ塗装前鋼板ニ絶縁塗料ヲ施スベシ

第十二章 隔 壁

第一節 總 則

配 置 **第一條** 船首隔壁ハ満載吃水線ニ於ケル船首材ノ前面ヲ距ルコト推進機關ヲ有セザル帆船ニ在リテハ L ノ $\frac{1}{10}$ 、其ノ他ノ船舶ニ在リテハ L ノ $\frac{5}{100}$ ヨリ小ナラザル箇所ニ之ヲ設クベシ
特殊ノ形状ノ船首ヲ有スル船舶ノ船首隔壁ノ位置ハ委員會ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第二條 推進機關ヲ有セザル帆船ヲ除キ其ノ他ノ船舶ニ在リテハ適當ノ位置ニ船尾隔壁ヲ設クベシ
船尾管ハ船尾隔壁又ハ其ノ他ノ適當ナル構造ニ依リ他ノ部分ト隔離セル水密區畫室内ニ之ヲ設クベシ
機關ヲ有セザル帆船ニシテ海水ニ連結シ得ベキ「ポンプ」ヲ船尾ニ備フルモノニ在リテハ船尾隔壁ヲ適當ナル位置ニ設ケ該「ポンプ」ヲ水密區畫室内ニ蔽圍スベシ

第三條 機關室ノ前後ニハ水密隔壁ヲ設クベシ

數 **第四條** L 67 米以上 87 米未満ノ船舶ニシテ機關室ヲ船尾ニ有スル

モノニ在リテハ船首隔壁ト機關室前端隔壁トノ中間ニ一箇ノ水密隔壁ヲ設クベシ

L 87 米以上 102 米未満ノ船舶ニシテ機關室ヲ中央ニ有スルモノニ在リテハ一箇、機關室ヲ船尾ニ有スルモノニ在リテハ二箇ノ水密隔壁ヲ船首隔壁ト機關室前端隔壁トノ中間ニ設クベシ

L 102 米以上 123 米未満ノ船舶ニシテ機關室ヲ中央ニ有スルモノニ在リテハ前艙及後艙ニ各一箇ノ水密隔壁ヲ設ケ機關室ヲ船尾ニ有スルモノニ有リテハ船首隔壁ト機關室前端隔壁トノ中間ニ三箇ノ水密隔壁ヲ設クベシ

L 123 米以上ノ船舶ニ付テハ前二項ノ規定ニ倣ヒ水密隔壁ヲ配置シ其ノ總數ヲ 143 米未満ノ船舶ニ在リテハ七箇、143 米以上 165 米未満ノ船舶ニ在リテハ八箇、165 米以上 186 米未満ノ船舶ニ在リテハ九箇ト爲スベシ

間 隔 **第五條** 前四條ノ隔壁ハ其ノ間隔ヲ成ルベク 30 米以下ト爲スベシ
達スル高サ 前四條ノ隔壁ハ上甲板迄達セシムベシ但シ次ノ特別規定ニ依ル

一、低船首樓又ハ低船尾樓ノ箇所ニ於テハ隔壁ヲ當該船樓甲板迄達セシムベシ

二、吃水ノ特ニ小ナル船舶ニ在リテハ委員會ノ承認ヲ受ケ船首隔壁ヲ除キ其ノ他ノ隔壁ヲ第二甲板ニ止ムルコトヲ得

三、船尾隔壁ハ満載吃水線以上ニ在ル甲板ヲ該隔壁ヨリ船尾迄水密ニ構造スルトキハ之ヲ該甲板ニ止ムルコトヲ得

第六條 特殊ノ用途ニ使用スル船舶ニ在リテハ委員會ノ承認ヲ受ケ水密隔壁ノ數又ハ其ノ達スル高サヲ減ズルコトヲ得
前項ノ規定ニ依リ隔壁ヲ省略スルトキハ部分隔壁、特設肋骨等ニ依リ適當ナル補強ヲ爲スベシ

第七條 水密隔壁ガ強力甲板迄達セザルトキハ該隔壁ノ上部ニ強力甲板ニ達シ船體ノ横強力及横防撓性ヲ維持スルニ十分ナル特設肋骨ヲ設クルカ又ハ其ノ他ノ適當ナル補強ヲ爲スベシ

第八條 機關ヲ有セザル帆船ノ水密隔壁ニ付テハ第一條及第二條第

三項ノ規定ニ依ルノ外委員會ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第二節 水密隔壁ノ構造及水密試験

板 **第九條** 隔壁板ノ厚サハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$(0.4S + 0.115)(H + 8.35) + 2.1 \quad (\text{耗ニテ})$$

S ハ防撓材ノ心距 (米ニテ) 但シ船首隔壁ニ在リテハ防撓材ノ實際ノ心距 (米ニテ) = 0.15 米ヲ加ヘタルモノ

H ハ各隔壁板ノ下縁ヨリ船ノ中心線ニ於ケル隔壁甲板迄ノ距離 (米ニテ) 但シ該距離ガ2米未滿ナルトキハ2米

隔壁ノ最下部ニ用フル板ノ厚サハ前項ノ規定ニ依ルモノニ1耗ヲ加ヘタルモノト爲スベシ但シ隔壁ノ下部ニ於テ其ノ前後ニ互ル二重底アル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

隔壁ノ最下部ニ用フル板ノ上縁ノ高サハ二重底ノ箇所ニ於テハ内底板ノ上面ヨリ、單底ノ箇所ニ於テハ龍骨ノ上面ヨリ成ルベク610耗以上ト爲シ隔壁ノ一側ノミニ二重底アルトキハ内底板ノ上面ヨリ成ルベク300耗以上ト爲スベシ

滄水路ニ於ケル隔壁板ノ厚サハ成ルベク第一項ノ規定ニ依ルモノニ2.5耗ヲ加ヘタルモノト爲スベシ

汽罐又ハ石炭庫ニ面スル隔壁ノ最下部ニ用フル板ハ其ノ厚サヲ第一項ノ算式ニ依ルモノニ2.5耗ヲ加ヘタルモノ以上ト爲シ且汽罐ニ面スルモノハ汽罐室床上610耗以上ノ高サニ達セシムベシ

船尾管ノ貫通スル箇所ニ於テハ船尾隔壁ヲ二重張ト爲スカ又ハ其ノ厚サヲ増スベシ

防撓材 **第十條** 隔壁防撓材ノ截面抵抗率ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$KS^2(H+M) \quad (\text{輻ノ三乗ニテ})$$

S ハ防撓材ノ心距 (米ニテ) 但シ船首隔壁ニ在リテハ防撓材ノ實際ノ心距ノ1.25倍

l ハ防撓材ノ支點間ノ全長 (米ニテ) ニシテ其ノ端ニ於テハ固着

部ノ長サヲ含ムモノ

H ハ l ノ中央ヨリ船ノ中心線ニ於ケル隔壁甲板迄ノ距離 (米ニテ)

M ハ L 75 米以上ノ船舶ニ在リテハ 0.6、L 60 米以下ノ船舶ニ在リテハ零、其ノ他ノ船舶ニ在リテハ次ノ算式ニ依リ算定シタル數

$$0.04L - 2.4$$

K ハ係數ニシテ防撓材ノ兩端ヲ肘板固着ト爲ストキハ 1.9、短山形鋼固着ト爲ストキハ 2.8、固着セザルトキハ 3.6

滄水路ノ箇所ニ於ケル特ニ長キ防撓材ニ付テハ其ノ下端ヲ特ニ堅牢ニ固着スルトキハ二重底上面迄ノ l ニ依リ其ノ截面抵抗率ヲ定ムルコトヲ得

防撓横桁 **第十一條** 隔壁ニ次ノ各號ニ依リ防撓横桁ヲ設クルトキハ堅防撓材ノ寸法ハ l ヲ横桁迄測リ前條ノ規定ニ依リ之ヲ定ムベシ但シ堅防撓材ガ防撓横桁ヲ貫通シ且短山形鋼ヲ以テ該横桁ニ固着セラルル場合ニ於テ其ノ固着銀ノ截面積ヲ第十三條ノ規定ニ依ル截面積ノ2倍以上ト爲ストキハ之ヲ肘板固着ト看做シ K ノ値ヲ定ムルコトヲ得

一、防撓横桁ハ桁板ヲ隔壁板ニ固着シ其ノ遊縁ニ形鋼ヲ附スルカ又ハ曲縁シタル構造ト爲スベシ

二、桁板ノ厚サハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$0.006 d_0 + 5 \quad (\text{耗ニテ})$$

d_0 ハ桁板ノ深サ (耗ニテ)

三、桁板ノ遊縁ニ附スル形鋼又ハ桁板ノ曲縁部ノ截面積ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$54 \frac{FSh}{d_0} - \frac{td_0}{300} \quad (\text{平方輻ニテ})$$

l ハ防撓横桁ノ端ノ固着部ヲ含ミタル全長 (米ニテ)

S ハ當該防撓横桁ヨリ其ノ上下ノ防撓横桁、甲板又ハ内底板ニ至ル各區間ノ中心間ノ距離 (米ニテ)

h ハ防撓横桁ヨリ船ノ中心線ニ於ケル隔壁甲板ノ上端迄ノ距離
(米ニテ)

d₀ ハ桁板ノ深サ(耗ニテ)

t ハ桁板ノ厚サ(耗ニテ)

四、防撓横桁ノ端ハ固着部ヲ除キタル各邊ノ長サガ桁板ノ深サ以上ニシテ且遊縁ヲ曲縁シタル肘板ニ依リ外板又ハ縦通隔壁板ニ二列鉋固着ト爲スベシ

五、防撓横桁ハ堅防撓材二本置ニ肘板ヲ設ケ之ヲ支持シ其ノ他ノ堅防撓材ニ短山形鋼ヲ以テ固着スベシ

斟酌 **第十二條** 委員會ハ隔壁ノ達スル高サト吃水トヲ併セ考慮シ前三條ノ規定ノ適用ヲ適當ニ斟酌スルコトヲ得

防撓材兩端ノ固着 **第十三條** 防撓材ノ端ヲ短山形鋼又ハ肘板ヲ以テ固着セザルトキハ之ヲ隔壁ノ周圍山形鋼ニ累ネ固着スベシ

防撓材ノ端ヲ短山形鋼ヲ以テ固着スル場合ニ於テハ山形鋼ノ各邊ニ於ケル鉋ノ數及徑ハ防撓材ノ種類及深サニ應ジ次表ニ依リ之ヲ定ムベシ

防撓材ノ深サ	溝形鋼ナルトキ	150	180		200	230	250	280	300	380	425
	山形鋼又ハ球山形鋼ナルトキ	150	175	200	230	250	280	300			
山形鋼ノ各邊ニ於ケル鉋	數	2	3	3	4	4	4	5	6	8	9
	徑	19	19	19	19	19	22	22	22	22	22

防撓材ノ端ヲ肘板ヲ以テ固着スル場合ニ於テハ肘板ノ寸法及固着ハ第七章第九條ノ表ヲ準用シテ之ヲ定ムベシ但シ防撓材又ハ固着用山形鋼ト累ナル部分ノ肘板ノ深サ及幅ハ相等シクシ表ニ掲グル肘板ノ幅ト等シク爲スコトヲ得

防撓材ノ上端ヲ固着スル鉋ノ數ハ前二項ノ規定ニ依ルモノニ次ノ算式ニ依リ算定シタル係數ヲ乗ジタルモノト爲スコトヲ得

$$1 - \frac{0.08 l}{H}$$

H 及 l ハ第十條第一項ノ規定ニ依ル

防撓材ノ下端ノ肘板ヲ内底板ニ固着スル山形鋼ハ隔壁ノ次ノ肋板ヲ超エテ延長スベシ

防撓材ノ上端ノ肘板ヲ甲板ニ固着スル山形鋼ハ之ヲ隔壁ノ次ノ梁ニ達セシメ且必要ニ應ジ該部分ニ於ケル甲板ノ防撓性ヲ増スベシ

周圍山形鋼 **第十四條** 水密隔壁ノ周圍山形鋼ハ其ノ厚サヲ之ヲ取附クル隔壁板ノ規定ノ厚サニ 2.5 耗ヲ加ヘタルモノ以上ト爲シ船ノ中心線ニ於ケル隔壁甲板ノ上端ヨリ 10.7 米ヲ超ユル箇所ニ在リテハ二列鉋固着ト爲スベシ

階段部 **第十五條** 隔壁ガ階段ヲ爲ス場合ニ於テハ上方隔壁ノ下端及階段部ノ各肋骨ノ位置ニ第七章第一條ノ規定ニ依リ梁ヲ設クベシ但シ上方隔壁ノ下端ノ梁ハ之ニ代用スル爲隔壁ノ構造ヲ特ニ堅牢ナラシムルトキハ省略スルコトヲ得

隔壁ノ階段部ニ張ル鋼板ノ厚サハ之ト同一ノ高サニ於ケル隔壁板ノ規定ノ厚サニ 1 耗ヲ加ヘタルモノ以上ト爲スベシ但シ當該部分ノ鋼甲板ノ厚サ未滿ト爲スコトヲ得ズ

隔壁ノ階段部ヲ支持スル梁柱ノ寸法ハ階段部ノ上面ニ作用スルコトアルベキ水壓ヲ考慮シテ之ヲ定メ該梁柱ノ固着ハ其ノ下面ニ作用スルコトアルベキ水壓ニ耐ユルモノト爲スベシ

水密戸 **第十六條** 水密戸ハ其ノ受クベキ水壓ニ對シ十分ナル強力ヲ有シ接着良好ニシテ成ルベク製造所ニ於テ效力試験ヲ行ヒ之ニ合格シタルモノナルコトヲ要ス

水密戸ハ塵芥ノ堆積又ハ石炭ノ押壓ノ爲其ノ閉鎖ヲ妨ゲラレザル構造ト爲スベシ

艙内ニ設クル水密戸ハ二戸ナルコトヲ要ス

水密二戸ノ開閉装置ハ常ニ接近シ得ベキ場所ニ之ヲ設ケ隔壁甲板上ヨリ操作シ得ル構造ト爲シ該操作位置ニハ成ルベク戸ノ開閉ヲ指示スル装置ヲ設クベシ

水密二戸ノ開閉軸ハ成ルベク直接配置ト爲シ軸ノ螺旋部ニ用フル母

螺ハ之ヲ黃銅製ト爲スベシ

甲板間ノ隔壁ニ設クル水密戸ハ委員會ノ承認ヲ受ケタルトキハ之ヲ蝶番戸ト爲スコトヲ得

前項ノ水密戸ニ設クル蝶番ノ軸針ハ黃銅製ト爲スベシ

補強 **第十七條** 隔壁ノ下部ニ於テ水密戸ヲ設クル爲防撓材ヲ切斷スルトキハ戸口ニ適當ナル枠ヲ附シ防撓材ヲ切斷セザル場合ニ於ケル隔壁ノ強力ヲ保持スルニ十分ナル構造ト爲シ戸口ノ兩側ニハ隔壁ノ下端ヨリ戸口ノ上方相當ノ高サニ達シ且外縁ヲ防撓シタル勾配附桁板ヲ設クベシ

甲板間ノ隔壁ニ於テ水密戸ヲ設クル爲防撓材ヲ切斷セズシテ其ノ箇所ニ於ケル防撓材ノ心距ヲ増シタルトキハ戸口ノ兩側ニ適當ナル補強ヲ爲シ、戸口ヲ設ケザル場合ニ於ケル隔壁ノ強力及防撓性ヲ保持スルニ十分ナル構造ト爲スベシ此ノ場合戸口ニ附シタル枠ヲ防撓材ト看做スコトヲ得ズ

支水弁 **第十八條** 船首隔壁ニハ溢水排出ノ爲ノ支水弁又ハ支水「コック」ヲ設クルコトヲ得ズ其ノ他ノ隔壁ト雖モ檢査ノ爲何時ニテモ近寄り得ル箇所ニ非ザレバ之ニ支水弁又ハ支水「コック」ヲ設クルコトヲ得ズ

支水弁又ハ支水「コック」ノ開閉鐸ハ其ノ重量ヲ弁又ハ「コック」ニテ支ワルコトナク隔壁甲板上ノ箇所ヨリ操作シ得ル構造ト爲シ且其ノ操作位置ニ弁又ハ「コック」ノ開閉ヲ指示スル裝置ヲ設クベシ

錨鎖庫 **第十九條** 錨鎖庫ヲ船首隔壁ノ後方ニ設クルトキハ水密ヲ保持スルニ十分ナル構造ト爲シ且「ポンプ」ニ依ル排水裝置ヲ設クベシ

水密試驗 **第二十條** 水密隔壁及其ノ階段部ニハ布管内ノ壓力每平方糎2 疋以上ノ水ヲ注射シ其ノ水密ヲ試驗スベシ

船首隔壁ノ後方ニ在ル錨鎖庫ハ其ノ頂端迄水ヲ充シ其ノ水密ヲ試驗スベシ

船尾管區畫室ハ滿載吃水線迄ノ高サニ等シキ水高壓力ヲ以テ、船首艙ハ滿載吃水線迄ノ高サ及船首隔壁ノ高サノ $\frac{2}{3}$ ノ中大ナルモノニ等

シキ水高壓力ヲ以テ其ノ水密ヲ試驗スベシ

第三節 水密ヲ要セザル隔壁

石炭庫隔壁 **第二十一條** 梁柱ニ兼用スル石炭庫隔壁ノ構造及寸法ニ付テハ第八章第十三條ノ規定ニ依ルベシ

第二十二條 梁柱ニ兼用セザル石炭庫隔壁ノ板ノ厚サハ第八章第十三條第一號ノ規定ヲ準用シテ之ヲ定メ防撓材ノ截面抵抗率ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$C_1 S^2 + C_2 \quad (\text{糎ノ三乗ニテ})$$

S 及 l ハ第十二章第十條ノ規定ニ依ル

C₁ ハ横置隔壁ナルトキハ 0.32、縦通隔壁ナルトキハ 0.23

C₂ ハ横置隔壁ナルトキハ 15、縦通隔壁ナルトキハ 13

第二十三條 石炭庫隔壁ノ最下部ニ用フル板ノ厚サハ9 疋以上ト爲シ其ノ上縁ノ高サハ焚火室床面上 610 疋以上ト爲スベシ

第二十四條 傾斜セル石炭庫隔壁ニ在リテハ防撓材ノ寸法ヲ適當ニ増加シ且防撓材ト甲板梁トヲ肘板ニ依リ固着セラレタル控山形鋼ヲ以テ連結スベシ

第十三章 深水槽

第一節 深水槽ノ構造

第一條 深水槽トハ水、油其ノ他ノ液體ヲ積載スル爲艙内又ハ甲板間ニ構造スル水槽ヲ謂フ

深油槽 **第二條** 深油槽ヲ構造スル隔壁ノ防撓材及深油槽ノ部分ニ於ケル肋骨ハ約 2.5 米ノ間隔ニ設ケタル防撓横桁ヲ以テ之ヲ支持スベシ

第十二章第十一條第一號、第二號、第四號及第五號ノ規定ハ前項ノ防撓横桁ニ之ヲ準用ス

桁板ノ遊縁ニ附スル形鋼又ハ桁板ノ曲縁部ノ截面積ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$62 \frac{t^2 Sh}{d_0} - \frac{td_0}{300} \quad (\text{平方糎ニテ})$$

l ハ防撓横桁ノ端ノ固着部ヲ含ミタル全長(米ニテ)

S ハ當該防撓横桁ヨリ其ノ上下ノ防撓横桁又ハ油槽頂板若ハ底板ニ至ル各區間ノ中心間ノ距離(米ニテ)

h ハ防撓横桁ヨリ油槽頂板マデノ距離ニ溢出管ノ頂板上ノ高サノ $\frac{1}{2}$ 及 1.2 米ノ中大ナルモノヲ加ヘタルモノ(米ニテ)

d_0 ハ桁板ノ深サ(耗ニテ)

t ハ桁板ノ厚サ(耗ニテ)

船側ヨリ船側ニ達シ長サ 9 米ヲ超ユル深油槽ニ在リテハ防撓横桁ノ寸法ヲ特ニ増加シ且必要ニ應ジ横制油板ヲ設クベシ

板 第三條 深水槽ヲ構造スル隔壁板ノ厚サハ次ノ算算ニ依リ算定シタルモノ及 8 耗ノ中大ナルモノ以上ト爲スベシ但シ其ノ箇所ニ於ケル船側外板ノ規定ノ厚サヨリ大ナルコトヲ要セズ

$$3.7 S \sqrt{H} + 2.35 \quad (\text{耗ニテ})$$

S ハ防撓材ノ心距(米ニテ)

H ハ各隔壁板ノ下縁ヨリ水槽頂板迄ノ距離ニ溢出管ノ頂板上ノ高サノ $\frac{1}{2}$ 及 1.2 米ノ中大ナルモノヲ加ヘタルモノ(米ニテ)

防撓材 第四條 深水槽ヲ構造スル隔壁ノ防撓材ノ截面抵抗率ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲シ成ルベク之ヲ水槽ノ内面ニ取附クベシ

$$KSH^2 \quad (\text{輻ノ三乗ニテ})$$

S ハ防撓材ノ心距(米ニテ)

H ハ l ノ中央ヨリ水槽頂板迄ノ距離ニ溢出管ノ頂板上ノ高サノ $\frac{1}{2}$ 及 1.2 米ノ中大ナルモノヲ加ヘタルモノ(米ニテ)

l ハ防撓材ノ支點間ノ全長(米ニテ)ニシテ其ノ端ニ於テハ固着部ノ長サヲ含ムモノ

K ハ係數ニシテ防撓材ノ端ヲ肘板ヲ以テ固着スル場合ニハ 5、短山形鋼ヲ以テ固着スル場合ニハ 7.5

第二條第二項及第三項ノ規定ニ適合スル防撓横桁ヲ設ケタル深水槽ノ隔壁ニ付テハ l ヲ該横桁迄測リ前項ノ規定ニ依リ堅防撓材ノ寸法

ヲ定ムベシ但シ堅防撓材ガ防撓横桁ヲ貫通シ且短山形鋼ヲ以テ該横桁ニ固着セラルル場合ニ於テ其ノ固着部ノ截面積ヲ第十二章第十三條ノ規定ニ依ル截面積ノ 2 倍ト爲ストキハ之ヲ肘板固着ト看做シ K ノ値ヲ定ムルコトヲ得

防撓材兩端ノ固着 第五條 防撓材ノ端ハ第十二章第十三條第二項乃至第六項ノ規定ニ依リ肘板又ハ短山形鋼ヲ以テ固着スベシ

周圍山形鋼 第六條 隔壁ノ周圍山形鋼ハ水槽ノ外側ニ取附ケ其ノ厚サハ之ヲ取附クル隔壁板ノ第三條ノ規定ニ依ル厚サニ 2.5 耗ヲ加ヘタルモノ以上ト爲スベシ

隔壁、頂板及底板ノ周圍山形鋼ノ各邊ハ少クトモ二列固着ト爲スベシ但シ滿載状態ニテ液體ノ達スル最高面ヨリ下方 4.8 米以内ノ箇所ニ於テハ一列固着ト爲スコトヲ得

第七條 深水槽ノ構造ニ關スル事項ニシテ前五條ニ規定セザルモノニ付テハ第十二章ノ規定ニ依ル

復原性ノ保持ノ爲深水槽内ニ設クル縱通水密隔壁ノ構造ハ該水槽ガ脚荷水槽ナルトキニ限り第十二章ノ規定ニ依ルコトヲ得

頂板 第八條 深水槽ノ頂板ノ厚サハ之ヲ其ノ位置ニ於ケル深水槽隔壁板ト看做シ且梁ノ心距ヲ防撓材ノ心距ニ充テ第三條ノ規定ニ依リ定メタル厚サニ 1 耗ヲ加ヘタルモノ以上ト爲スベシ但シ當該箇所ニ於ケル鋼甲板ノ厚サヨリ小ナルコトヲ得ズ

甲板下縱桁 第九條 深水槽ヲ構造スル隔壁ノ前後ニ於ケル甲板下縱桁ハ該隔壁ノ位置ニ於テ成ルベク相連續スル構造ト爲スベシ

制水板 第十條 航海中常ニ滿水状態ニ保ツニ適當ナル装置ナキ深水槽内ニハ適當ナル制水板ヲ設クベシ

第二節 深水槽ノ設備及水密試験

第十一條 罐水用ノ深水槽ニハ該水槽ガ滿水状態ニ在ルヤ否ヤヲ検査スル爲螺込驗水栓ヲ設クベシ但シ適當ナル船口在ル場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラズ

第十二條 深水槽内ニ於テハ諸材ニ適當ナル通氣孔ヲ設ケ空氣ガ槽内

ノ一部ニ閉塞セラルルコトヲ防止スベシ
 水槽ノ頂板ニ設クル驗水栓ハ何時ニテモ接近シ得ベキ位置ニ取附ケ
 水槽ノ充水ハ成ルベク驗水栓ヲ開キタル儘之ヲ行フベシ

第十三條 深油槽ノ周圍漏油ノ處アル箇所ニハ適當ナル防油區畫、油道、油受等ヲ設クベシ

燃料油ヲ積載スル深油槽ト船艙トヲ區畫スル隔壁ノ船艙側ニハ適當ナル空隙ヲ殘シ内張板ヲ張り且隔壁ニ沿ヒ適當ナル油道ヲ設クベシ

第十四條 満水ノ際過壓ヲ防止スル爲設クル溢管ハ其ノ截面積ヲ充水管ノ截面積以上ト爲シ船外又ハ豫備水槽ニ導クベシ

第十五條 深水槽ノ頂部ノ汚水ヲ排除スル爲有效ナル排水装置ヲ設クベシ

第十六條 第五章第四十七條ノ規定ハ深油槽ニ之ヲ準用ス

第十七條 深水槽ハ溢管ノ上端迄ノ高サ及頂板上 2.4 米ノ箇所迄ノ高サノ中大ナルモノニ相當スル水高壓力ヲ以テ其ノ水密ヲ試験スベシ

第十四章 船首尾防撓構造

第一節 船首艙ニ於ケル防撓構造

防撓梁 **第一條** 船首艙ニ於テハ最下層甲板ヨリ肋骨ノ上面迄 2 米ヲ超エザル間隔ニ防撓梁ヲ設クベシ

前項ノ防撓梁ハ之ヲ肋骨毎又ハ肋骨一本置キニ配置シ其ノ寸法ハ甲板二層以上ヲ有スル箇所ノ上甲板ニシテ甲板上ヲ專ラ居住設備ニ充當スルモノニ非ザルモノノ梁ノ寸法ニ等シク爲スベシ

第二條 防撓梁ハ船ノ中心線ニ於テ形鋼ヲ以テ上下及前後ニ十分結合スベシ

梁上側板 **第三條** 各層ノ防撓梁ニハ強力甲板ノ梁上側板ノ首尾ニ於ケル寸法ニ等シキ寸法ノ梁上側板ヲ設ケ L75 米ヲ超ユル船舶又ハ高馬力ノ船舶ニ在リテハ外板ニ二重山形鋼ヲ以テ一列鋲固着ト爲スカ又ハ單山形鋼ヲ以テ二列鋲固着ト爲シ其ノ他ノ船舶ニ在リテハ外板ニ單山

形鋼ヲ以テ一列鋲固着ト爲スベシ

防撓梁ヲ肋骨毎ニ配置シタル場合ニ於テハ前項ノ規定ニ拘ラズ梁上側板ヲ肋骨ノ内側ニ止ムルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ梁上側板ノ兩縁ヲ補強シ且船首艙ニ於ケル満載吃水線下ノ船側外板ノ厚サヲ第十章第五條ノ規定ニ依ル厚サヨリ 20% 増加シタルモノト爲スベシ

肋骨トノ固着 **第四條** 防撓梁ト肋骨トハ第七章第九條ノ規定ニ依リ肘板ヲ以テ固着スベシ

防撓梁ナキ位置ニ於ケル肋骨ハ梁上側板ノ幅ノ $\frac{1}{2}$ 以上ノ幅及深サヲ有シ且梁上側板ノ厚サ以上ノ厚サヲ有スル肘板ヲ以テ梁上側板ニ固着スベシ此ノ場合ニ於テハ肘板ト梁上側板トヲ固着スル山形鋼ハ梁上側板ノ内縁迄達セシムベシ

船首肘板 **第五條** 船首艙及其ノ上方ニ於テハ梁上側板ノ前端及其ノ中間ニハ必要ニ應ジ船首肘板ヲ設クベシ

第二節 船首隔壁ヨリ後方ニ於ケル防撓構造

船側縦通材 **第六條** 船首隔壁ト船首ヨリ $L \frac{15}{100}$ ニ相當スル箇所トノ間ニ於テハ船首艙ニ於ケル梁上側板ノ延長線上ニ船側縦通材ヲ設クベシ前項ノ船側縦通材ハ縦通山形鋼ヲ斷切板ヲ以テ外板ニ固着シタル構造ト爲シ其ノ寸法ハ次表ニ依ルベシ

D	斷切板ノ厚サ(耗)	山形鋼(耗)	D	斷切板ノ厚サ(耗)	山形鋼(耗)
4	7.5	75×75×8	10	10.5	150×90×12
5	8.0	90×75×9	11	11.0	175×90×12
6	8.5	100×75×10	12	11.5	200×90×12
7	9.0	125×75×10	13	12.0	200×90×13
8	9.5	125×75×10	14	12.5	200×100×15
9	10.0	125×90×10			

第七條 斷切板ヲ外板ニ固着スル山形鋼ノ厚サハ斷切板ノ厚サト等シク爲スベシ

第八條 船側縦通材ハ肘板ヲ以テ船首隔壁ニ固着スベシ

前項ノ肘板ハ其ノ厚サヲ斷切板ノ厚サ以上、其ノ幅ヲ船側ニ於テハ

2 肋骨心距以上、隔壁側=於テハ 1.5 肋骨心距以上ト爲シ隔壁=單山形鋼ヲ以テ二列鋸固着ト爲スベシ

第九條 船首隔壁ト船首ヨリ $L \div \frac{15}{100}$ = 相當スル箇所トノ間=於ケル肋骨ヲ次ノ各號=依リ構造スルトキハ前三條ノ船側縱通材ヲ省略スルコトヲ得

- 一、肋骨ノ截面抵抗率ヲ 15% 増加スルコト
- 二、船首隔壁直後ノ肋骨=大ナル副肋材ヲ附スルコト
- 三、當該箇所ノ船内肋骨ノ寸法ヲ定ムル場合=用フル H ガ肋骨ノ深サノ 15 倍ヲ超ユルトキハ一箇、20 倍ヲ超ユルトキハ二箇ノ縱材ヲ以テ適當=各肋骨ヲ連結スルコト

第三節 船尾ニ於ケル防撓構造

第十條 船尾艙=於テハ最下層甲板ヨリ肋板ノ上面迄 2.5 米ヲ超エザル間隔=防撓梁及梁上側板ヲ設ケ船首艙=準ジ之ヲ防撓シ該部=於ケル肋骨ガ著シク傾斜スル爲支點間ノ長サガ特=大ト爲ルトキハ更=適當ノ防撓構造ヲ爲スベシ

高馬力ノ船舶ノ船尾艙=於ケル肋骨ハ二列鋸ヲ以テ外板ト固着スベシ

第十一條 船尾隔壁ヨリ前方=於テハ必要=應ジ適當ナル防撓構造ヲ爲スベシ

第四節 雜 則

第十二條 甲板間ノ高サ大ナル船舶=在リテハ必要=應ジ前部 L ノ $\frac{1}{10}$ 間=於テ該甲板間=船側縱通材ヲ設クルカ其ノ他適當ナル方法=依リ之ヲ防撓スベシ

第十三條 船尾突出部ハ其ノ形狀=應ジ必要ト認ムルトキハ特設肋骨及船側縱通材ヲ設クルカ其ノ他適當ナル方法=依リ之ヲ補強スベシ

第十五章 船樓及甲板室

第一節 船 樓

構造第一條 船樓ノ肋骨、梁、梁柱、梁下縱材及甲板下縱桁、外板及甲

板ハ夫々第六章乃至第十一章ノ規定=依リ構造スベシ

第二條 船舶=ハ船首樓ヲ備フベシ但シ遮浪甲板船、特=大ナル乾舷ヲ有スル船舶、船首=於ケル舷弧ノ高サガ特=大ナル船舶其ノ他委員會=於テ差支ヘナシト認ムル船舶=付テハ此ノ限=在ラズ

第三條 船樓ノ暴露セル端=設クル隔壁ハ次表=掲グル厚サノ隔壁板=同表=掲グル截面抵抗率ヲ有スル防撓材ヲ堅=760 耗以内ノ心距=取附ケタルモノナルコトヲ要ス

船橋樓ノ前端隔壁及 L ^ノ $\frac{4}{10}$ 以上ノ長サヲ有スル船尾樓又ハ機關室口ヲ截圍スル船尾樓ノ保護セラレザル隔壁		部分的=保護セラレタル船尾樓隔壁又ハ L ^ノ $\frac{4}{10}$ 未満ノ長サヲ有シ且機關室口ヲ截圍セザル船尾樓ノ隔壁		船首樓及船橋樓ノ後端隔壁			
隔壁板ノ最小ノ厚サ							
L	厚サ(耗)	L	厚サ(耗)	L	厚サ(耗)		
61.00 以下	7.5	48.75 以下	6.0	48.75 以下	5.0		
115.80 以上	11.0	122.00 以上	9.5	122.00 以上	7.5		
防撓材ノ種類及最小ノ截面抵抗率並ニ短山形鋼固着=於ケル鋸ノ數							
球 山 形 鋼	短山形鋼固着=於ケル鋸ノ數	山 形 鋼	短山形鋼固着=於ケル鋸ノ數	山 形 鋼			
L	截面抵抗率(種ノ三乘)	L	截面抵抗率(種ノ三乘)	L	截面抵抗率(種ノ三乘)		
48.75 ^{未満}	61.4	3	45.70 ^{未満}	10.6	2	45.70 ^{未満}	6.3
48.75	77.8	3	45.70	14.9	2	45.70	10.1
61.00	93.4	4	61.00	21.1	2	76.20	14.4
73.20	112.2	4	76.20	28.0	2	106.70	19.8
85.35	132.7	4	91.45	36.2	3		
97.55	157.3	5	106.70	47.7	3		
109.75	183.5	5	121.90	59.1	3		
121.90	213.0	5	137.15	73.4	3		
134.10	248.2	5	152.40	88.1	4		
146.30	283.5	5	167.65	91.4	4		
158.50	325.3	6					
170.70	365.4	6					

備考 L ガ表=掲ゲルモノノ中間=在ルトキハ挿間法=依リ隔壁板ノ厚サ及防撓材ノ截面抵抗率ヲ算定ス

船樓ノ前端隔壁ノ防撓材ノ兩端ハ前表=定ムル數ノ鋸ヲ用ヒ短山形鋼ヲ以テ甲板=固着シ其ノ後端隔壁ノ防撓材ノ兩端ハ隔壁ノ周圍山形鋼=累ネ固着スベシ

第四條 船樓端ノ隔壁ノ周圍山形鋼ノ厚サハ隔壁板ノ厚サ以上ト爲シ隔壁ノ下縁ヲ甲板=固着スル山形鋼ノ豎邊ハ成ルベク甲板ノ上面ヨリ 150 耗以上ノ高サ=達セシムベシ

第五條 船樓ノ高サガ遞信省令船舶滿載吃水線規程=定ムル標準ノ高サヨリ大ナルトキハ其ノ端=於ケル隔壁ヲ前二條=定ムルモノヨリ堅牢=構造シ其ノ強サヲ標準ノ高サノ船樓端=於ケル前二條=依ル構造ノ隔壁ノ強サト同一ナラシムベシ

特=大ナル乾舷ヲ有スル船舶ノ船樓又ハ船樓ノ高サガ遞信省令船舶滿載吃水線規程=定ムル標準ノ高サヨリ小ナル船樓=在リテハ委員會ノ承認ヲ受ケ隔壁ノ構造ヲ適當=輕減スルコトヲ得

第六條 船樓ノ前端隔壁ノ出入口ニハ成ルベク第一級閉鎖裝置ヲ設クベシ

第七條 中央部 L ノ $\frac{1}{2}$ 間=在ル船樓端ノ隔壁ノ下部ハ船樓甲板ガ強力甲板=非ザル場合ト雖モ船樓及其ノ上部=設クル甲板室ノ大小及重量=應ジ適當=之ヲ支持スベシ

第八條 遮浪甲板船及 L ノ $\frac{1}{2}$ ヲ超ユル長サノ船首樓ヲ有スル船舶=在リテハ L ノ前端ヨリ其ノ $\frac{5}{100}$ 以上ノ箇所=於テ上甲板ト遮浪甲板又ハ船首樓甲板トノ間=水密構造ノ隔壁ヲ設ケ之ト船首隔壁トノ間=於ケル上甲板ヲ水密構造ト爲スベシ

前項ノ隔壁ノ寸法ハ遮浪甲板又ハ船首樓甲板ヲ隔壁甲板ト看做シ船首隔壁=關スル第十二章ノ規定=依リ之ヲ定ムベシ

第九條 船橋樓ノ兩端及中央部 L ノ $\frac{1}{2}$ 間=在ル船首樓又ハ船尾樓ノ端ハ第六章第十五條ノ規定=依ルノ外次ノ各號ノ規定=依リ補強スベシ

一、船樓甲板ガ強力甲板ナラザルトキハ船樓端ノ前後適當ノ間舷側厚板及上甲板ノ梁上側板ノ厚サヲ 30% 増スベシ

二、船樓甲板ガ強力甲板ナルトキハ船樓外=於ケル上甲板ノ梁上側板、舷側厚板及其ノ直下ノ外板ヲ少クトモ $B \times \frac{1}{3}$ = 相當スル長サノ間、鋼甲板ヲ適當ノ間船樓内=延長シ且船樓端ノ前後適當ノ間舷側厚板及梁上側板ノ厚サヲ 50% 増スベシ但シ中央部 L ノ $\frac{1}{2}$ 間=在ラザル船橋樓端=在リテハ舷側厚板及梁上側板ノ増厚ノ程度ヲ斟酌スルコトヲ得

三、船樓外板ヲ適當ノ間船樓外=延長シ順次其ノ高サヲ減ジ船樓端ヨリ 1.5 米ヲ超エザル間隔=設ケタル銅板製ノ堅桁=テ支ヘ上下兩甲板ノ強力ノ連續=急激ナル變化ナカラシムベシ

四、船樓甲板ガ強力甲板ナルトキハ船樓端ノ附近=於ケル船樓外板ノ縱縁ハ鋸徑ノ 4 倍以下ノ心距ノ二列鋸ヲ以テ固着スベシ

五、船樓甲板ガ強力甲板ナルトキハ船樓端ノ附近=於テハ舷縁山形鋼ヲ梁上側板及外板=固着スル鋸ノ截面積ノ和ヲ前號ノ規定=依ル外板ノ縱縁ノ固着=倣ヒ適當=増加スベシ此ノ場合必要=應ジ舷縁山形鋼ノ邊ノ幅ヲ増加シ又ハ梁上側板ノ下面=斷切山形鋼ヲ附スベシ

第十條 低船尾樓ノ前端=ハ隔壁ヲ設クベシ
暴露セル低船尾樓前端隔壁ノ構造ハ船橋樓前端ノ隔壁=準ジ之ヲ定ムベシ

前項ノ隔壁=ハ開口ヲ設クルコトヲ得ズ

第十一條 低船尾樓ノ前端ハ次ノ各號ノ規定=依リ之ヲ補強スベシ

一、下層強力甲板ノ舷側厚板ヲ上層強力甲板下=延長シ且低船尾樓前端ノ前後適當ノ間其ノ厚サヲ 30% 増スベシ

二、低船尾樓甲板=鋼甲板ヲ張ラザル場合=於テハ其ノ前端隔壁ト其ノ直後ノ梁トノ間=梁上側板ト同一ノ厚サノ鋼板ヲ張ルベシ

三、下層強力甲板ノ梁上側板及鋼甲板ヲ船舶ノ大小=應ジ 2 又ハ 3 肋骨心距ノ間上層強力甲板下=延長シ適當數ノ膜板ヲ以テ之ヲ上

層強力甲板=固着シ且該梁上側板ヲ更ニ2又ハ3肋骨心距ノ間延長スベシ

四、上層強力甲板ノ直下ノ甲板ガ有效甲板ナルトキハ前號ニ依リ延長シタル梁上側板及鋼甲板ト該有效甲板トヲ適當ニ連結スベシ

第二節 甲板室

周 壁 **第十二條** 甲板室ノ周壁ハ鋼甲板又ハ梁上帶板ニ堅牢ニ固着スベシ
大ナル甲板室ノ側壁及端壁ハ約9米ノ心距ニ部分隔壁又ハ特設肋骨ヲ配置シ其ノ間ニ堅防撓材ヲ取附ケ之ヲ支持スベシ
前項ノ部分隔壁又ハ特設肋骨ハ成ルベク下方ニ隔壁在ル箇所ニ設クベシ
第二項ノ部分隔壁又ハ特設肋骨ヲ下方ニ隔壁ナキ箇所ニ設クルトキハ下方ノ梁又ハ肋骨ヲ適當ニ補強スベシ
大ナル甲板室ノ前後端附近ニ於テハ甲板室周壁ヲ甲板ニ固着スル山形鋼ノ寸法ヲ増加スルカ、鋼甲板ノ厚サヲ増スカ又ハ甲板下ニ縱材若ハ梁柱ヲ特設スベシ

第十三條 大ナル甲板室ノ側壁ニ於ケル開口ノ四隅ニハ適當ナル丸味ヲ附シ且開口ノ上下ノ側壁板ハ各開口ヲ通ジ連續セル構造ト爲スベシ
大ナル甲板室ノ側壁ニ凹入箇所アル場合等ニ於テハ適當ナル構造ニ依リ強力ノ連續ヲ維持スベシ

頂 部 **第十四條** 甲板室ノ頂部ニハ適當ナル梁ヲ附スベシ
前項ノ梁ハ成ルベク側壁ニ於ケル防撓材ノ位置ニ配置シ必要ニ應ジ梁柱ヲ以テ支持スベシ

居住甲板室 **第十五條** L90米ヲ超ユル船舶ニ在リテハ居住用甲板室ノ頂部ヲ構成スル暴露甲板ニハ成ルベク鋼甲板ヲ張ルベシ

第十六條 L90米ヲ超ユル船舶ノ上甲板ニ設クル居住用甲板室ノ周壁ハ其ノ位置ニ應ジ船樓端隔壁ニ準ズル構造ノモノト爲スベシ

補 強 **第十七條** 端艇ノ搭載場所ニ面スル甲板室側壁及端艇鈎ヲ支持スル箇所ノ甲板ハ適當ニ之ヲ補強スベシ

第十八條 上層甲板ニ於ケル甲板室ニ付テハ振動ヲ防止スル爲ニ必要ニ應ジ梁柱ヲ附スル等適當ナル方法ヲ講ズベシ

第十六章 機關室及軸路

第一節 機 關 室

第一條 機關室ニハ特設肋骨、特設梁、特設梁柱等ヲ設クルカ其ノ他適當ナル補強ヲ爲スベシ

機關下部ノ構造 **第一條** 高馬力ノ機關ヲ備フル船舶ニ在リテハ主機ノ高サト幅又ハ長サトノ割合、重量及出力等ニ應ジ主機ノ下部ニ於ケル構造及固着ヲ特ニ強固ナラシムベシ

第二條 單底構造ノ箇所ニ在リテハ肋骨又ハ其ノ上ニ設ケタル桁構ノ上ニ主機ノ大サ及出力ニ應ジ十分ナル強力ヲ有スル厚板ヲ取附ケ之ニ主機ヲ固着スベシ
前項ノ厚板ニ主機ヲ取附クル螺釘ノ主要列ノ下部ニハ厚板ニ達スル斷切板又ハ縱通桁板ヲ設ケ螺釘ハ其ノ上縁ニ附スル山形鋼ノ水平邊ヲ貫通セシムベシ

船體中心線ニ主機ヲ備フル船舶ニ在リテ前項ノ縱通桁板ヲ設クルトキハ該桁板ノ間隔ガ特ニ大ナラザル場合ニ限り其ノ部分ノ中心線内龍骨ハ之ヲ省略スルコトヲ得

第三條 機關室ニ二重底ヲ備フル船舶ニ在リテハ主機礎板及推力受ヲ成ルベク内底板ニ直接ニ螺釘ヲ以テ取附クベシ
前項ノ螺釘ノ主要列ノ下部ニハ側桁板ヲ設ケ螺釘ハ其ノ上縁ニ附スル山形鋼ノ水平邊ヲ貫通セシムベシ

第四條 機械臺及汽罐臺ハ堅牢ニ構造シ且適當ナル方法ニ依リ十分ニ之ヲ支持スベシ

推力受臺 **第五條** 推力受臺ハ推力受ニ傳達セラルル力ニ對シ十分ナル強力ヲ有スルモノナルコトヲ要ス
推力受臺ハ推力受ノ前後ニ適當ノ長さ延長シ側桁板等ヲ以テ之ヲ支持スベシ

第六條 汽罐ト隔壁トノ間ニハ汽罐ヲ検査スルニ十分ナル間隔ヲ存セシムベシ

防熱 燃料庫隔壁、船艙隔壁及甲板ト汽罐及煙道トハ十分ニ隔離スルカ又ハ其ノ間ニ適當ナル防熱装置ヲ施スベシ
汽罐ニ近接スル隔壁ノ船艙側ニハ適當ナル空隙ヲ殘シ内張板ヲ張ルベシ

補汽罐下部甲板 **第七條** 石炭焚ノ補汽罐ヲ甲板上ニ据附クルトキハ其ノ下部ニ當ル鋼甲板ハ第十一章第二十四條ノ規定ニ拘ラズ其ノ厚サヲ 2.5 耗増加シ且 50 耗以上ノ厚サ迄煉瓦ヲ敷クカ又ハ「セメント」塗裝ヲ爲スベシ

第二節 軸 路

水密軸路 **第八條** 中央部ニ機關室ヲ設クル船舶ニ在リテハ十分ナル大サノ水密軸路ヲ設ケ軸系ヲ蔽圍スベシ

軸路ノ前端ノ出入口ニハ水密戸ヲ備ヘ隔壁甲板上ヨリ容易ニ開閉シ得ベキ装置ト爲スベシ

軸路ニハ成ルベク逃口ヲ適當ノ位置ニ設ケ且之ヲ隔壁甲板以上ノ甲板ニ達セシムベシ

構造及寸法 **第九條** 軸路ノ頂板及側板ノ厚サハ防撓材ノ心距及各艙ノ長サノ中央ニ於テ各條鋼板ノ下縁ヨリ隔壁甲板迄ノ高サニ應ジ第十二章第九條ノ規定ヲ準用シテ之ヲ定ムベシ但シ彎曲セル頂板又ハ彎曲セル側板ノ厚サハ防撓材ノ實際ノ心距ヨリ 150 耗減ジタルモノヲ其ノ心距ト看做シ之ヲ定ムルコトヲ得

第十條 艙口直下ニ於ケル軸路ノ頂板ハ其ノ厚サヲ前條ニ定ムルモノヨリ 2 耗以上増加スルカ又ハ 50 耗以上ノ厚サノ木板ヲ以テ之ヲ被覆スベシ

前項ノ木板ハ貨物ノ爲破損セラルルコトアルモ軸路ノ水密ヲ損ハザル様取附クルコトヲ要ス軸路ニ梯子棧等ヲ取附クル場合ニ付亦同ジ

第十一條 軸路ノ周圍山形鋼ノ厚サハ軸路ノ側板ノ厚サニ 2 耗ヲ加ヘタルモノ以上ト爲スベシ

第十二條 軸路ノ頂板及側板ニハ次ノ各號ノ規定ニ依リ第十二章第十條ノ規定ヲ準用シテ定メタル寸法ノ防撓材ヲ設クベシ

一、I ハ軸路ノ下端ヨリ側板ノ上端迄ノ高サトス

二、II ハ各艙ノ長サノ中央ニ於ケル隔壁甲板ヨリ I ノ中央迄ノ距離トス

水槽又ハ油槽ニ面スル軸路ノ構造及強力ハ深水槽ノ隔壁ニ關スル規定ヲ準用シテ之ヲ定ムベシ

第十三條 軸路ノ防撓材ノ下端ハ周圍山形鋼ニ累ネ且短山形鋼ヲ附シ之ヲ固着スベシ但シ防撓材ノ深サガ 150 耗未滿ナルトキハ短山形鋼ハ之ヲ省略スルコトヲ得

第十四條 軸路ノ頂部ニ橋又ハ梁柱ヲ附スル場合ニ於テハ其ノ支持スベキ重量ニ應ジ當該部分ヲ適當ニ補強スベシ

第十五條 軸路ノ端室ノ頂部ノ構造ハ第十二章第十五條ノ規定ニ準ジ之ヲ定ムベシ

第十六條 軸路ニ通ズル通風筒及逃口圍壁ハ隔壁甲板迄水密ト爲シ其ノ受クルコトアルベキ壓力ニ對シ十分ナル強力ヲ有スル構造ト爲スベシ

水密試驗 **第十七條** 軸路ニハ布管内ノ水壓力每平方糎 2 疋以上ノ水ヲ注射シ其ノ水密ヲ試驗スベシ

水密隧道 **第十八條** 軸路ニ非ザル水密隧道ヲ設クルトキハ其ノ構造ハ軸路ニ準ジ之ヲ定ムベシ

第十七章 艙口其ノ他ノ甲板口

第一節 緣 材

高サ **第一條** 艙口、載炭口、逃口、昇降口其ノ他ノ甲板口ノ緣材ノ高サハ次表ニ掲グルモノ以上ト爲スベシ但シ次ノ各號ノ甲板口ニ在リテハ適當ニ之ヲ減ズルコトヲ得

一、遮浪甲板ニ於ケル常設閉鎖装置ヲ備ヘザル甲板口

二、閉鎖装置ノ效力ガ第二級閉鎖装置ノ效力ニ及バザル船樓ノ船樓

甲板=於ケル逃口又ハ昇降口

三、水密閉鎖装置ヲ備フル小ナル甲板口

甲板ノ種類及位置		縁材ノ甲板上ノ高サ(耗)
暴露セル上甲板		610
暴露セル船樓甲板 (低船尾樓甲板及遮浪甲板ヲ含ム)	前部 Lノ $\frac{1}{4}$ 間ノ場所	457
	船首ヨリ Lノ $\frac{1}{4}$ =相當スル箇所ヨリ後方ノ場所	
閉鎖装置ノ効力ガ第一級閉鎖装置ノ効力ニ及バザル船樓内ノ上甲板	閉鎖装置ノ効力ガ第二級閉鎖装置ノ効力ニ及バザル船樓内	229
	閉鎖装置ノ効力ガ第二級閉鎖装置ノ効力以上ナル船樓内	

逓信省令船舶滿載吃水線規程ニ依ル船樓ノ有效ノ長サノ和トLトノ比ガ 0.70 以上ナル船舶ノ前部ノ「ウエル」ニ設クル船口ノ縁材ノ高サハ前項ニ定ムルモノヨリ適當ニ大ナラシムベシ但シ滿載吃水ガ形狀ニ依ル吃水ヨリ小ナル場合ニ於テ委員會ノ承認ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第二甲板以下ノ甲板又ハ端壁ニ開口ナキ船樓若ハ閉鎖装置ノ効力ガ第一級閉鎖装置ノ効力以上ナル船樓内ノ上甲板ニ設クル船口其ノ他ノ甲板口ニ於テハ其ノ周縁ニ山形鋼等ヲ取附クルトキハ縁材ヲ甲板上ニ延長セザルモ妨ナシ

厚サ **第二條** 暴露セル上甲板、閉鎖装置ノ効力ガ第一級閉鎖装置ノ効力ニ及バザル船樓内ノ上甲板又ハ暴露セル船樓甲板ニ設クル船口ノ縁材ノ厚サハ L 30 米以下ノ船舶ニ在リテハ 8.5 耗、L 60 米以上ノ船舶ニ在リテハ 11 耗、L 30 米ヲ超エ 60 米未滿ノ船舶ニ在リテハ 8.5 耗ト 11 耗トノ間ニ挿間法ニ依リ定メタルモノ以上ト爲スベシ
第二甲板以下ノ甲板又ハ端壁ニ開口ナキ船樓若ハ閉鎖装置ノ効力ガ第一級閉鎖装置ノ効力以上ナル船樓内ノ上甲板ニ設クル船口ノ縁材ノ厚サハ 10 耗以上ト爲スベシ但シ L 60 米以下ノ船舶ニ在リテハ適當ニ減ズルコトヲ得
小ナル船口ニ在リテハ縁材ノ厚サヲ前二項ニ規定スルモノヨリ適當ニ減ズルコトヲ得

側縁材 **第三條** 船口ノ側縁材ハ船口ノ兩側ニ設クル半梁ノ下端ニ達セシムベシ

端縁材 船口ノ端縁材ハ船口端梁ニ適當ニ固着スルコトヲ要シ暴露セル船口ニ在リテハ船口蓋板ニ十分ナル傾斜ヲ與フル爲中心線ニ於ケル高サヲ側縁材ニ於ケル高サヨリ大ナラシムベシ

固着 **第四條** 船口ノ縁材ヲ鋼甲板又ハ梁上帶板ニ固着スル山形鋼ノ厚サハ縁材ノ厚サ以上ト爲シ其ノ堅邊ノ幅ハ木甲板ヲ張ル場合ニ於テハ該木甲板ノ厚サニ 10 耗ヲ加ヘタルモノト爲スベシ
第一條第一項ニ依リ縁材ノ高サヲ規定シタル船口ノ四隅ニ於テハ前項ノ山形鋼ハ特ニ厚キ材料ヨリ火造シタルモノト爲スベシ
側縁材ト端縁材トヲ堅山形鋼ヲ以テ接續スルトキハ該山形鋼ノ厚サハ縁材ノ厚サ以上ト爲シ二列銼ヲ以テ固着スベシ但シ長サ又ハ幅ガ 3 米以下ナル船口ニ在リテハ一列銼固着ト爲スコトヲ得

横防撓材 **第五條** 甲板上ノ高サ 610 耗以上ナルコトヲ要スル船口縁材ニハ其ノ上縁ヨリ下方 254 耗ノ箇所ヨリ低カラザル位置ニ幅 178 耗以上ノ防撓材ヲ横ニ取附クベシ但シ L 75 米以下ノ船舶又ハ長サ 3 米以下ノ縁材ニ在リテハ横防撓材ノ幅ヲ船口ノ大サニ應ジ適當ニ減ズルコトヲ得

長サ 3.05 米ヲ超ユル側縁材又ハ端縁材ハ前項ノ防撓材ヨリ甲板ニ達スル堅牢ナル肘板又ハ支柱ヲ 3.05 米以内ノ間隔ニ設ケテ之ヲ補強スベシ

前二項ノ規定ハ船樓等ニ依リ保護セラルル端縁材ニ付テハ適當ニ之ヲ斟酌スルコトヲ得

第六條 船口縁材ノ高サヲ 915 耗以上ト爲ストキハ其ノ構造ハ委員會ノ適當ト認メタルモノナルコトヲ要ス

上下端 **第七條** 船口縁材ノ上端ニハ大ナル半丸鋼等ヲ取附ケ其ノ下端ハ之ヲ曲線ト爲スカ又ハ適當ナル構造ト爲スベシ

船口側部ノ補強 **第八條** 船口ノ外側ニ設クル梁柱ノ心距ガ 4 肋骨心距ヲ超ユル場合又ハ梁柱列ト側縁材トノ距離ガ 460 耗ヲ超ユル場合ニ於テハ船口側

部ヲ特ニ補強シ其ノ構造ニ付委員會ノ承認ヲ受クベシ

第二節 艙口梁及縦材

寸法第九條 暴露セル艙口ノ艙口梁及縦材ノ寸法ハ甲板上ノ縁材ノ高さ610 耗以上ナルコトヲ要スル艙口ニ在リテハ次ニ掲グル甲表ニ依リ其ノ他ノ艙口ニ在リテハ次ニ掲グル乙表ニ依リ之ヲ定ムベシ
船樓内ノ上甲板ニ設クル艙口ノ艙口梁及縦材ノ寸法ハ次ニ掲グル甲表ニ依リ之ヲ定ムベシ但シ閉鎖装置ノ効力ガ第二級閉鎖装置ノ効力以上ニシテ旅客ノ搭載ニ専用セララルル船樓内ニ在リテハ次ニ掲グル乙表ニ依ルコトヲ得
第二甲板以下ノ甲板ニ設クル艙口ノ艙口梁及縦材ノ寸法ハ次ニ掲グル甲表ニ依リ之ヲ定ムベシ但シ旅客ノ搭載ニ専用セララルル場所ニ在リテハ次ニ掲グル乙表ニ依ルコトヲ得

甲 表 其ノ一

艙 口 梁							
艙口ノ幅(米)	縦材ヲ設ケザルトキ		縦材ヲ設ケタルトキ			球板ノ上部又ハ平板ノ上下兩部ニ附スル二重山形鋼	
	艙口梁ノ心距(米)						
	1.22	1.52	1.83	2.44	3.05		
3.05	球 深サ(耗)厚サ 230×11.5	深サ(耗)厚サ 254×12.5	深サ(耗)厚サ 280×7.5	深サ(耗)厚サ 305×8	深サ(耗)厚サ 356×8.5	平 75×75×10	
3.66	280×12.5	305×12.5	305×8	356×8.5	432×9	75×75×10	
4.27	305×12.5	305×8	356×8.5	432×9	508×9.5	平 75×75×10.5	
4.88	305×8	356×8.5	406×9	483×9.5	559×9.5	90×75×10.5	
5.49	平 356×8.5	406×9	457×9	533×9.5	635×10	100×75×11	
6.10	381×8.5	457×9	508×9.5	610×10	711×10.5	100×75×11	
6.71	406×9	483×9	559×9.5	660×10.5	762×11	115×75×11.5	
7.32	432×9	508×9.5	584×10	711×10.5	813×11	130×90×11.5	
7.93	457×9	533×9.5	610×10	736×10.5	864×11.5	鋼 140×90×12	
8.54	鋼 483×9.5	559×9.5	635×10	787×11	915×12	150×90×12.5	
9.14	508×9.5	584×10	660×10.5	813×11	965×12	150×90×13	

甲 表 其ノ二

中 央 縦 材							
縦材ノ長さ(米)	球 板 縦 材			球板ノ上部ニ附スル二重山形鋼	木 製 縦 材		
	縦材ノ心距(米)				縦材ノ心距(米)		
	0.91	1.22	1.52		0.91	1.22	1.52
1.83	深サ(耗)厚サ 150×9.0	深サ(耗)厚サ 165×9.5	深サ(耗)厚サ 180×9.5	(耗) 65×65×9	深サ(耗)幅 140×180	深サ(耗)幅 150×180	深サ(耗)幅 165×180
2.44	180×10.5	200×11	230×11	65×65×9.5	165×180	190×180	200×180
3.05	200×12.5	240×12.5	280×12.5	65×65×10	200×180	215×200	230×230

兩 側 縦 材							
縦材ノ長さ(米)	球 山 形 縦 材			球山形鋼ノ上部ニ附スル單山形鋼	木 製 縦 材		
	縦材ノ心距(米)				縦材ノ心距(米)		
	0.91	1.22	1.52		0.91	1.22	1.52
1.83	(耗) 150×75×9.5	(耗) 165×90×9.5	(耗) 180×95×9.5	(耗) 65×65×9	深サ(耗)幅 140×140	深サ(耗)幅 150×150	深サ(耗)幅 165×150
2.44	180×90×10.5	200×75×11	230×90×11	65×65×9.5	165×165	190×180	200×180
3.05	200×90×12.5	240×90×12.5	280×90×12.5	65×65×10	200×180	215×200	230×230

乙 表 其ノ一

艙 口 梁							
艙口ノ幅(米)	縦材ヲ設ケザルトキ		縦材ヲ設ケタルトキ			球板ノ上部又ハ平板ノ上下兩部ニ附スル二重山形鋼	
	艙口梁ノ心距(米)						
	1.22	1.52	1.83	2.44	3.05		
3.05	球 深サ(耗)厚サ 203×10	深サ(耗)厚サ 230×11	深サ(耗)厚サ 241×11.5	深サ(耗)厚サ 267×12.5	深サ(耗)厚サ 292×13	球板 75×75×10	
3.66	230×11	254×12.5	280×12.5	280×7.5	330×8.5	75×75×10	
4.27	254×12.5	292×12.5	280×7.5	330×8	381×8.5	75×75×10.5	
4.88	280×7.5	280×7.5	305×8	381×8.5	432×9	75×75×10.5	
5.49	平 280×7.5	305×8	386×8.5	432×9	483×9.5	90×75×10.5	
6.10	305×8	330×8.5	406×9	483×9.5	533×9.5	100×75×11	
6.71	318×8	356×8.5	432×9	508×9.5	584×10	100×75×11	
7.32	330×8.5	368×8.5	457×9	533×9.5	635×10	115×75×11.5	
7.93	344×8.5	381×8.5	483×9.5	559×9.5	660×10.5	130×90×11.5	
8.54	鋼 356×8.5	406×9	508×9.5	584×10	686×10.5	140×90×12	
9.14	381×8.5	432×9	533×9.5	610×10	711×10.5	150×90×12.5	

乙 表 其 ノ 二

中 央 縦 材									
縦材ノ長さ(米)	球 板 縦 材					木 製 縦 材			
	縦材ノ心距(米)			球板ノ上部ニ付スル二重山形鋼	縦材ノ心距(米)				
	0.91	1.22	1.52		0.91	1.22	1.52		
1.83	深サ(耗)厚サ 130×8.5	深サ(耗)厚サ 140×8.5	深サ(耗)厚サ 150×9	(耗) 65×65×9	深サ(耗)幅 130×180	深サ(耗)幅 140×180	深サ(耗)幅 150×180		
2.44	150×9.5	180×10	190×10.5	65×65×9.5	150×180	165×180	180×180		
3.05	180×11	200×11.5	230×12.5	65×65×10	180×180	190×180	200×180		
兩 側 縦 材									
縦材ノ長さ(米)	球 山 形 縦 材					木 製 縦 材			
	縦材ノ心距(米)			球山形鋼ノ上部ニ付スル單山形鋼	縦材ノ心距(米)				
	0.91	1.22	1.52		0.91	1.22	1.52		
1.83	(耗) 130×75×8.5	(耗) 140×75×8.5	(耗) 150×75×9	(耗) 65×65×9	深サ(耗)幅 130×130	深サ(耗)幅 140×130	深サ(耗)幅 150×130		
2.44	150×75×9.5	180×75×10	190×90×10.5	65×65×9.5	150×130	165×150	180×150		
3.05	180×75×11	200×90×11.5	230×90×12.5	65×65×10	180×150	190×150	200×180		

備 考

- 一、船口ノ幅、船口梁ノ心距又ハ縦材ノ長さ若ハ心距ガ表ニ掲グルモノノ中間ニ在ルトキハ船口梁又ハ縦材ノ寸法ハ挿間法ニ依リ之ヲ定ム
 - 二、船口梁ノ深サハ其ノ長さノ中央ニ於テ上部山形鋼ヨリ梁ノ下縁迄測リタルモノ、縦材ノ深サハ船口蓋板ノ下面ヨリ縦材ノ下縁迄測リタルモノトス
- L 30.5 米以下ノ船舶ニ在リテハ平鋼及山形鋼ヲ以テ構造シタル船口梁ノ深サハ表ニ掲グルモノノ 60%、球板及山形鋼ヲ以テ構造シタル船口梁竝ニ鋼製縦材ノ深サハ表ニ掲グルモノノ 80%ト爲シ平鋼、球板及球山形鋼ノ厚サハ其ノ深サニ對シ表ニ掲グル厚サニ等シクシ又木製縦材ノ深サ及幅ハ表ニ掲グルモノノ 80%ト爲スコトヲ得但シ平鋼、球板及球山形鋼ノ厚サハ 7.5 耗ヨリ又中央木製縦材ノ幅ハ 165 耗ヨリ小ナルコトヲ得ズ
- L 30.5 米ヲ超エ 61 米未滿ノ船舶ニ在リテハ船口梁及縦材ノ寸法ハ第一項、第二項又ハ第三項ニ依ルモノト前項ニ依ルモノトノ間ニ挿

間法ニ依リ之ヲ定ムルコトヲ得

心 距 船口梁ノ心距ハ 3.05 米ヲ超ユルコトヲ得ズ

構 造 **第十條** 船口梁ノ兩端ニ於ケル深サハ其ノ長さノ中央ニ於ケル規定ノ深サノ $\frac{1}{2}$ ト爲スコトヲ得但シ 150 耗ヨリ小ナルコトヲ得ズ

船口梁ヲ構造スル球板ノ上部又ハ平鋼ノ上下兩部ニ付スル山形鋼ハ廣邊ヲ水平ニ置クベシ

船口梁又ハ鋼製縦材ノ上部ニ付スル山形鋼ハ該梁又ハ縦材ノ兩端ニ達セシメ且船口梁ノ上部ニ付スル山形鋼ハ縦材ヲ支フル爲之ヲ屈折セシムルコトヲ得ズ

船口梁又ハ鋼製縦材ノ兩端ニハ之ヲ構造スル平鋼又ハ球板ノ兩面ニ幅 180 耗以上ニシテ厚サハ前二項ノ山形鋼ノ厚サニ等シキ鋼板ヲ附シテ表面ヲ平直ナラシムベシ

第十一條 船口ニ縦材ヲ設ケザルトキハ船口梁一本置ニ其ノ梁板ヲ木製蓋板ノ上面迄達セシムベシ

鋼製縦材ト船口梁ト交叉スル箇所ニ於テハ該縦材ノ下縁ニ堅牢ナル山形鋼ヲ取附クベシ

木製縦材 **第十二條** 木製縦材ハ乾燥完全ニシテ割目其ノ他ノ缺點ヲ有セザル松又ハ之ト同一效力ヲ有スル木材ヲ以テ製造シ其ノ兩端ノ支面ハ厚サ 12.5 耗、幅 180 耗以上ノ鋼板ヲ以テ包ミ且其ノ船口梁ト交叉スル箇所ニハ厚サ 12.5 耗、長さ 230 耗以上ノ鋼板ヲ取附クベシ

受 材 **第十三條** 船口梁又ハ縦材ヲ支フル受材ハ鋼製ニシテ幅 75 耗以上ノ支面ヲ有シ船口梁又ハ縦材ノ兩面ヲ挟ミ頸部ニ適合スル形状ノモノナルコトヲ要ス

受材ノ底部ハ實體ト爲スカ又ハ徑 22 耗ノ鋸二箇以上ヲ以テ緊着シタルモノト爲スベシ

受材ヲ山形鋼ヲ以テ構造スルトキハ其ノ厚サハ 12.5 耗以上ト爲スベシ

側縁材ニ付スル各受材ヲ構成スル山形鋼ノ一方ハ少クトモ甲板ノ位置迄達セシムベシ

側縁材=附スル各受材ヲ甲板ノ位置迄達セシメザルトキハ側縁材ノ厚サヲ増スコトヲ要ス

側縁材=附スル各受材=ハ艙口梁ノ脱落ヲ防グ適當ナル装置ヲ備フベシ

縦材ガ艙口梁ト交叉スル箇所=於テハ艙口梁=堅牢ナル短山形鋼ヲ取附ケ縦材ノ移動ヲ防止スベシ

小ナル艙口=於テハ本條=規定スル各材ノ寸法ヲ適當=減ズルコトヲ得

第三節 艙口ノ閉鎖装置

蓋板 **第十四條** 艙口=ハ有效ナル蓋板ヲ備ヘ支面ノ幅 63 耗以上ノ支材ヲ以テ兩端ヲ支フル装置ト爲スベシ

木製蓋板ノ仕上ノ厚サハ支點ノ間隔 1.52 米以内ナルトキ少クトモ 60 耗、1.83 米ナルトキ少クトモ 75 耗ト爲スベシ但シ小形船=在リテハ適當=斟酌スルコトヲ得

暴露セザル艙口=於テハ蓋板ノ代リ=格子蓋ヲ用フルモ妨ナク又第二甲板以下ノ甲板又ハ端壁=開口ナキ船樓若ハ閉鎖装置ノ效力ガ第一級閉鎖装置ノ效力以上ナル船樓内ノ上甲板=於テハ蓋板ヲ備ヘザルモ妨ナシ

帶金受 **第十五條** 暴露セル艙口又ハ閉鎖装置ノ效力ガ第一級閉鎖装置ノ效力=及バザル船樓内ノ上甲板=設クル艙口=ハ 610 耗以内ノ心距=幅 63 耗以上ノ堅牢ナル帶金承ヲ第五條第一項ノ防撓材アルトキハ該防撓材=其ノ他ノ場合=於テハ艙口縁材=二箇以上ノ鉄ヲ以テ取附ケ且端末ノモノハ艙口ノ各隅ヨリ 150 耗以内ノ箇所=之ヲ取附クベシ

帶金楔 帶金及楔ハ艙口ヲ閉鎖スル爲有效ノモノニシテ良好ナル状態=在ルコトヲ要ス

覆布 **第十六條** 暴露セル艙口又ハ閉鎖装置ノ效力ガ第一級閉鎖装置ノ效力=及バザル船樓内ノ上甲板=設クル艙口=ハ遞信省令艙口覆布試験規程=依ル甲種覆布二枚以上ヲ備フベシ

締附装置 **第十七條** 暴露セル艙口=ハ覆布ヲ締附クル爲縛索用ノ環附螺釘其ノ他適當ナル装置ヲ備フベシ

艙口ノ幅ガ該箇所=於ケル甲板ノ幅ノ 60% ヲ超エ且縁材ノ甲板上ノ高サカ 610 耗以上ナルコトヲ要スル艙口=ハ前項ノ装置ノ外特別ノ締附装置ヲ備フベシ

第四節 載炭口及平載炭孔

第十八條 載炭口ノ構造及閉鎖装置=付テハ艙口=關スル規定ヲ準用ス

第十九條 船樓甲板及上甲板=於テハ次=掲グル場所ヲ除クノ外平載炭孔ヲ設クルコトヲ得ズ

一、船橋樓甲板、船尾樓甲板、遞信省令船舶滿載吃水線規程=定ムル低船尾樓ノ標準ノ高サ $\frac{1}{10}$ 以上ノ高サヲ有スル低船尾樓甲板又ハ船首ヨリ L ヲ $\frac{1}{8}$ =相當スル箇所ヨリ後方ノ遮浪甲板上ノ場所

二、閉鎖装置ノ效力ガ第二級閉鎖装置ノ效力以上ナル船樓内ニシテ何時ニテモ近寄り得ル場所

三、特殊ノ航路=使用スル小形船ノ上甲板ニシテ委員會=於テ差支ナシト認メタル場所

前項ノ平載炭孔ノ枠及蓋ハ金屬製ニシテ堅牢ナル構造ノモノナルコトヲ要シ又蓋ハ螺込止又ハ挿込止トシ蝶番=依リ枠=取附クルカ又ハ鎖ヲ以テ枠=連結シ置クベシ

第五節 逃口及昇降口

第二十條 逃口ノ構造及閉鎖装置=付テハ第二十一條=規定スルモノヲ除クノ外艙口=關スル規定ヲ準用ス

第二十一條 閉鎖装置ノ效力ガ第二級閉鎖装置ノ效力以上ナル船樓内ノ上甲板=設クル逃口=在リテハ其ノ周縁=山形鋼ヲ取附ケ之=門又ハ適當ナル間隔=配置セラレタル螺釘及母螺ヲ以テ閉鎖定着シ得ル蝶番附ノ水密鋼製蓋ヲ備フルトキハ第一條=定ムル縁材ヲ設ケザルモ妨ナシ

内外兩側ヨリ操作シ得ル水密鋼製蓋ヲ備フル逃口ノ上面ハ甲板ノ上面ト平直ト爲スコトヲ得

第二十二條 上甲板ノ暴露部又ハ閉鎖装置ノ效力ガ第二級閉鎖装置ノ效力以上ナル船樓ノ船樓甲板ノ暴露部ニ設クル昇降口ハ鋼製ノ堅牢ナル昇降口室ヲ以テ蔽圍スベシ

昇降口室ハ鋼甲板又ハ梁上帶板ニ固着スルコトヲ要ス

昇降口室ノ戸口ノ敷居ノ甲板上ノ高サハ昇降口ノ位置ニ應ジ第一條ニ定ムル縁材ノ高サ以上ト爲シ戸ハ堅牢ニシテ内外兩側ヨリ閉鎖定着シ得ルモノト爲スコトヲ要ス

第六節 雜 則

第二十三條 甲板間ノ高サ 2.6 米ヲ超エ之ニ石炭又ハ貨物ヲ積載スルトキハ艙口梁、縦材、受材及蓋板ハ適當ニ其ノ強力ヲ増スコトヲ要ス

第二十四條 圍壁艙口ヲ設ケ中間ノ甲板ニ於テ艙口梁及蓋板ヲ備ヘザルトキハ該圍壁艙口直下ノ艙口ニ設クル縁材、艙口梁、縦材、受材及蓋板ハ適當ニ其ノ強力ヲ増スコトヲ要ス

圍壁艙口ノ圍壁ヲ以テ艙口ノ位置ニ於ケル甲板間ノ梁柱ニ代用スルトキハ該圍壁ハ鋼製トシテ十分防撓シタルモノト爲スベシ

第二十五條 特殊構造ノ鋼製蓋ヲ備フル艙口ノ構造及閉鎖装置ニ付テハ委員會ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第二十六條 上甲板又ハ船樓甲板ニ於テ長サ 5 米ヲ超エ 6.5 米以下ノ艙口側ニ鋼甲板ヲ張ラザルトキハ艙口ノ兩側ニ附スル梁上帶板ハ幅ヲ艙口ノ長サノ $\frac{1}{5}$ 以上ト爲スベシ

長サ 6.5 米ヲ超ニル艙口ヲ上甲板又ハ船樓甲板ニ設クルトキハ其ノ兩側ニ鋼甲板ヲ張詰メ艙口ノ前後ニ於テハ漸次其ノ幅ヲ減ジテ梁上側板ニ會セシムベシ

第二十七條 船體ニ比シ過大ナル長サ又ハ幅ヲ有スル艙口ヲ設クルトキハ必要ニ應ジ其ノ兩側ニ於ケル鋼甲板、艙口兩端梁及縁材ノ寸法ヲ増シ且特設肋骨ヲ設クルカ又ハ肋材ニ二重副肋材ヲ附スルカ若ハ

肋骨ノ深サヲ増シテ該部ヲ補強スルコトヲ要シ其ノ構造ニ付テハ委員會ノ承認ヲ受クベシ

第二十八條 特ニ大ナル乾舷ヲ有スル船舶ニ付テハ委員會ハ其ノ程度ニ應ジ本章ノ規定ヲ適當ニ斟酌スルコトヲ得

第十八章 機 關 室 口

第一條 機關室口ニハ甲板毎ニ其ノ周縁ニ次表ニ掲グル高サ以上ノ縁材ノ高サヲ有スル縁材ヲ取附クベシ

甲板ノ種類及位置	縁材ノ甲板上ノ高サ(耗)
暴露セル上甲板	610
暴露セル低船尾樓甲板	457
低船尾樓甲板以外ノ暴露セル船樓甲板(遮浪甲板ヲ含ム)	380
閉鎖装置ノ效力ガ第一級閉鎖装置ノ效力ニ及バザル船樓内ノ上甲板	229
閉鎖装置ノ效力ガ第二級閉鎖装置ノ效力ニ及バザル船樓内ノ上甲板	229
其ノ他ノ甲板	適 宜

第二條 暴露セル上甲板又ハ船樓甲板ニ於ケル機關室口ハ堅牢ナル鋼製圍壁ヲ以テ蔽圍スベシ

前項ノ圍壁ノ甲板上ノ高サハ實際上差支ヘナキ限り成ルベク高クシ少クトモ次表ニ掲グルモノト爲スベシ

甲板ノ種類	L(米)	圍壁ノ甲板上ノ高サ(米)
上 甲 板	90 以下	1.83
	90ヲ超エ120未滿	1.83ト2.29トノ間ニ挿間法ニ依リ定メタルモノ
	120 以上	2.29
船樓甲板	船樓ノ高サガ標準ノ高サ以上ナルトキ	0.76
	船樓ノ高サガ標準ノ高サニ達セザルトキ	船樓ノ高サニ應ジ前欄ニ掲グル高サト上甲板ニ對スル高サトノ間ニ挿間法ニ依リ定メタルモノ

第三條 閉鎖装置ノ效力ガ第一級閉鎖装置ノ效力ニ及バザル船樓内

ニ於テハ機關室口ヲ鋼製圍壁ヲ以テ蔽圍スベシ

戸口 **第四條** 前二條ノ圍壁ニ戸口ヲ設クルトキハ其ノ數居ノ甲板上ノ高サヲ第一條ニ規定スル縁材ノ高サ以上ト爲シ且戸口ハ成ルベク蔽圍シタル場所ニ之ヲ設クベシ

前項ノ戸口ニ設クル戸ハ堅牢ナル構造ト爲シ常設的ニ圍壁ニ取附ケタルモノナルコトヲ要シ暴露セル場所ニ設クルモノハ外開戸トシ内外兩側ヨリ迅速ニ閉鎖シ且定着シ得ルモノナルコトヲ要ス

第五條 機關室口ハ成ルベク小ナルモノト爲スベシ

機關室口ニハ成ルベク各甲板ノ位置ニ於テ適當ナル全通梁ヲ取附ケベシ

機關室口圍壁ノ頂部ハ梁及鋼板ニ依リ有效ニ蔽圍スベシ

鋼甲板 鋼甲板ヲ張ラザル甲板ニ於ケル主機室口又ハ汽罐室口ノ長サガ 4.5 米ヲ超ユルカ又ハ兩口ガ相接近シ其ノ合長ガ 9 米ヲ超ユルトキハ其ノ兩側ニ於テ梁上側板ト梁上帶板トノ間ニ鋼板ヲ張詰メ之ヲ其ノ前後ニ於テ梁ノ心距ノ 2 倍延長シ尙之ヨリ前後ニ於テハ漸次其ノ幅ヲ減ジテ梁上側板ニ會セシムベシ

鋼甲板ヲ張ラザル甲板ニ於テ主機室口、汽罐室口、艙口等ノ大ナル甲板口ガ相接近スルトキハ該口間ノ甲板ニハ鋼板ヲ張詰ムベシ

暴露圍壁 **第六條** 暴露セル上甲板又ハ船樓甲板ニ設クル機關室口ノ圍壁ノ厚サハ L30 米以下ノ船舶ニ在リテハ 6.5 耗以上、L90 米以上ノ船舶ニ在リテハ 8.5 耗以上、L30 米ヲ超エ 90 米未滿ノ船舶ニ在リテハ 6.5 耗ト 8.5 耗トノ間ニ挿間法ニ依リ定メタルモノ以上ト爲スベシ但シ低船尾樓甲板以外ノ船樓甲板(遮浪甲板ヲ含ム)上ノ圍壁竝ニ直接波浪ヲ受ケザル部分ノ圍壁ニ在リテハ其ノ厚サヲ 1 耗減ズルコトヲ得

前項ノ機關室口ノ縁材ノ厚サハ圍壁ノ厚サニ 1 耗ヲ加ヘタルモノ以上ト爲スベシ

暴露セル上甲板又ハ船樓甲板ニ設クル機關室口ノ圍壁ニハ次表ニ掲グル寸法ノ防撓材ヲ 760 耗ノ心距ヲ以テ堅ニ縁材ヲ通ジテ取附クベシ

シ但シ L30 米以下ノ船舶ノ船樓甲板上ノ圍壁又ハ直接波浪ヲ受ケザル部分ノ圍壁ノ防撓材ノ寸法ハ適當ニ之ヲ減ズルコトヲ得

	L(米)	山形鋼(耗)
低船尾樓甲板以外ノ船樓甲板(遮浪甲板ヲ含ム)上ノ圍壁ノ防撓材		75×75×7
上甲板又ハ低船尾樓甲板上ノ圍壁ノ防撓材	30 以下	75×65×6
	30 ヲ超エ 60 以下	80×70×6.5
	60 超エ 90 以下	90×75×7
	90 ヲ超エ 120 以下	100×75×7.5
	120 ヲ超ユルモノ	125×75×7.5
備考 防撓材ノ長サガ第二條ニ規定スル機關室口圍壁ノ甲板上ノ高サヨリ大ナルトキハ適當ニ山形鋼ノ寸法ヲ増スベシ		

甲板間圍壁 **第七條** 甲板間ニ於ケル機關室口ノ圍壁ノ厚サハ 6.5 耗以上、其ノ縁材ノ厚サハ 7.5 耗以上ト爲シ且適當ニ之ヲ防撓スベシ但圍壁及縁材ノ厚サハ前條第一項及第二項ニ依ルモノヨリ大ナルコトヲ要セズ」
甲板間ニ於ケル機關室口圍壁ガ石炭庫圍壁ヲ兼ヌルトキハ該圍壁ノ構造ハ第十二章第三節ノ規定ニ依リ之ヲ定ムベシ

機關室頂部 **第八條** 主機室ノ天窗ハ堅牢ニ構造シ且螺釘又ハ鉸ヲ以テ機關室口圍壁ノ頂部ニ固着スベシ
機關室頂部ニ於ケル焚火室口、煙筒及通氣筒ノ縁材ハ暴露甲板上成ルベク高キ位置ニ設ケ又焚火室口ニハ常設的ニ取附ケタル堅牢ナル鋼製蓋ヲ備フベシ

第九條 第十七章第三條第一項、同章第四條第一項及同章第八條ノ規定ハ機關室口ニ之ヲ準用ス

第十條 特ニ大ナル乾舷ヲ有スル船舶ニ付テハ委員會ハ其ノ程度ニ應ジ本章ノ規定ヲ適當ニ斟酌スルコトヲ得

第十九章 通風筒及橋孔

通風筒 **第一條** 通風筒ノ縁材ノ高サハ暴露上甲板及前部 Lノ $\frac{1}{4}$ 間ニ於

ケル暴露船樓甲板=在リテハ915耗以上、其ノ他ノ暴露船樓甲板=在リテハ760耗以上ナルコトヲ要ス但シ特ニ大ナル乾舷ヲ有スル船舶ノ通風筒及上層船樓甲板=於ケル通風筒=付テハ適當ニ斟酌スルコトヲ得

第二條 暴露甲板=於ケル通風筒ノ縁材ノ厚サハ次表ニ掲グルモノ以上ト爲スベシ

通風筒ノ内徑(耗)	150ヲ超ニ	200	280	330	380	430
	200以下	280	330	380	430以下	
縁材ノ厚サ(耗)	7.5	8	8.5	9	9.5	10

通風筒ノ縁材ヲ取附クル箇所=於テハ鋼甲板ナキトキハ特ニ鋼板ヲ張り又必要ニ應ジ梁ノ間=於テ該鋼板又ハ鋼甲板ヲ防撓スベシ
暴露甲板=於ケル通風筒ノ縁材ト鋼甲板又ハ前項ノ鋼板トハ次ノ各號ノ規定ニ依リ固着スベシ

- 一、固着用山形鋼ノ厚サハ縁材ノ厚サニ1耗ヲ加ヘタルモノ以上ト爲シ其ノ堅邊ハ木甲板アルトキハ其ノ上面ヨリ13耗以上ノ高サニ達セシムベシ
- 二、前號ノ固着用山形鋼ノ各邊=於ケル鋸ノ心距ハ鋸徑ノ4倍以下ト爲スベシ

通風筒ノ縁材ハ其ノ高サガ915耗ヲ超ユルトキハ特別ニ之ヲ支持スベシ但シ上層船樓甲板=設クル通風筒ノ縁材=付テハ適當ニ斟酌スルコトヲ得

第三條 通風筒ノ「カウル」ハ縁材ノ外面ニ密接センメ挿入部ノ長サヲ380耗以上ト爲スベシ但シ徑200耗以下ノ通風筒=付テハ挿入部ノ長サヲ斟酌スルコトヲ得

第四條 通風筒ノ縁材ニハ「カウル」ヲ取外シタルトキハ開口ヲ閉鎖スル爲堅牢ナル栓及覆布ヲ備フルカ又ハ迅速且有效ニ取附ケ得ベキ金屬製ノ蓋ヲ備フベシ

第五條 居住區域等ニ通ズル菌形、雁首形其ノ他特殊ノ形狀ノ通風筒ハ構造適當ニシテ螺釘ヲ以テ堅牢ニ甲板ニ取附ケラレタルモノナルコトヲ要ス

前項ノ通風筒ヲ取附クル箇所=於テハ鋼甲板ナキトキハ特ニ鋼板ヲ張ルベシ但シ徑250耗以下ノ通風筒=付テハ此ノ限ニ在ラズ

第六條 橋ヲ楔止又ハ固定スル甲板=鋼甲板ヲ張ラザルトキハ該甲板ノ橋ノ前後ノ梁ノ間ニハ船ノ中央部=於ケル該甲板ノ梁上側板ノ厚サ以上ノ厚サヲ有シ橋ノ徑ノ3倍以上ノ幅ヲ有スル鋼板ヲ張ルベシ

橋ヲ楔止又ハ固定スル甲板=於ケル橋孔ノ周縁ニハ球山形鋼又ハ球板ト山形鋼トヲ以テ構造シタル縁材ヲ設ケ縁材ノ高サハ橋ノ徑ノ $\frac{1}{3}$ 及229耗ノ中小ナルモノ以上ト爲シ之ヲ橋孔板ニ固着スベシ
橋孔ヲ設クル爲梁ヲ切斷スルトキハ堅牢ナル縦梁ヲ設クルコトヲ要ス

第二十章 舷牆及舷側諸口

第一條 舷牆ハ其ノ高サニ應ジ堅牢ニ構造シ其ノ上縁ヲ有效ニ防撓スベシ

上甲板ノ舷牆ハ次ノ各號ノ規定ニ依リ構造スベシ

- 一、舷牆板ノ厚サハ成ルベク6耗以上ト爲スベシ
- 二、船樓端=於テハ必要ニ應ジ舷牆板ノ厚サヲ増加シ船樓外板ノ延長部ノ厚サトノ間ニ急激ナル變化ナカラシムベシ
- 三、舷牆ハ1.8米ヲ超エザル間隔ニ堅牢ナル支柱ヲ設ケ之ヲ支持スベシ
- 四、支柱ノ箇所=於テハ舷側厚板ヨリ手摺ニ達スル防撓山形鋼ヲ附シ之ニ支柱ノ上端ヲ固着シ其ノ下端ハ形鋼ヲ以テ梁上側板ニ堅牢ニ固着スベシ

第二條 舷牆ニ設クル舷門其ノ他ノ諸口ハ船樓端ヨリ成ルベク隔リタル箇所ニ設クベシ

舷門等ヲ設クル爲舷牆ヲ中斷スルトキハ其ノ兩側ニ特ニ堅牢ナル支柱ヲ設クベシ

繫船孔ノ附近ノ舷牆板ハ之ヲ二重張ト爲スカ又ハ其ノ厚サヲ増スベシ

船樓端ニ於テハ舷牆ノ手摺ヲ肘板ヲ以テ船樓ノ端壁又ハ船樓甲板ノ梁上側板ニ固着スルカ又ハ其ノ他ノ方法ニ依リ強力ノ急激ナル變化ナカラシムベシ

高サ **第三條** 木材貨物ヲ積載スル甲板ニ設クル舷牆ハ其ノ高サヲ 990 耗以上ト爲シ梁ノ箇所ニ特ニ堅牢ナル支柱ヲ設ケ之ヲ支持スベシ

放水口 **第四條** 舷牆ニハ適當ナル放水口ヲ設クベシ

上甲板上又ハ船樓甲板上ノ舷牆ガ「ウエル」ヲ形成スルトキハ之ニ設クル放水口ノ全面積ハ上甲板上及低船尾樓甲板上ニ在リテハ次表ニ掲グルモノ以上、其ノ他ノ船樓甲板上ニ在リテハ次表ニ掲グルモノノ $\frac{1}{2}$ 以上ト爲シ且全面積ノ $\frac{2}{3}$ ハ船ノ中央寄ニ於ケル舷牆ノ半部ニ之ヲ置クベシ

各舷ニ於ケル舷牆ノ長サ(米)	4	6	8	10	12	14	16	18	20	20 ヲ超ユルトキ
各舷ニ設クベキ放水口ノ全面積(平方米)	0.726	0.787	0.848	0.909	0.970	1.031	1.092	1.153	1.220	舷牆ノ長サ 1 米ニ付 0.061 平方米ノ割合
備考	舷牆ノ長サガ表ニ掲グルモノノ中間ニ在ルトキハ挿間法ニ依リ放水口ノ面積ヲ算定ス									

放水口ノ面積ハ舷弧ノ高サガ逓信省令船舶滿載吃水線規程ニ依ル標準舷弧ノ高サヨリ小ナル船舶ニ在リテハ前項ニ規定スルモノヨリ適當ニ之ヲ増スコトヲ要シ又「ウエル」ノ長サガ L ノ $\frac{1}{10}$ ヲ超ユル船舶又ハ特ニ大ナル乾舷ヲ有スル船舶ニ在リテハ適當ニ之ヲ減ズルコトヲ得

第五條 舷牆ノ放水口ハ甲板上成ルベク低キ位置ニ之ヲ設クルコトヲ要シ其ノ下縁ハ成ルベク舷牆山形鋼ノ上縁ヨリ高カラザル様爲スベシ

放水口ニハ約 230 耗ノ間隔ニ棒ヲ取附クベシ又戸ヲ取附クルトキハ梗塞ノ虞ナキ構造ト爲シ且蝶番ハ黃銅製軸針ヲ有スルモノト爲スベシ

排水孔 **第六條** 甲板上ノ水ヲ排出スル爲暴露甲板ニハ船外ニ通ズル排水孔ヲ設ケ其ノ他ノ水密甲板ニハ適當ナル排水管ヲ設クベシ

上甲板下ノ甲板及閉鎖装置ノ效力ガ第一級閉鎖装置ノ效力以上ナル船樓内ノ上甲板ニ設クル排水管ハ之ヲ船底ニ導クベシ但シ排水管ニ第七條ノ規定ニ依ル自働不還弁ヲ備フルトキハ之ヲ船外ニ導クコトヲ得

閉鎖装置ノ效力ガ第一級閉鎖装置ノ效力ニ及バザル船樓内ノ上甲板ニ船底ニ導ク排水管ヲ設ケタルトキハ上甲板下ノ場所ニ不意ニ浸水スルコトヲ防グ爲適當ナル装置ヲ爲スベシ

排水管 **第七條** 上甲板下ノ場所ヨリ船側ヲ貫通スル各排出管ニハ自働不還弁二箇ヲ備ヘ中一個ハ何時ニテモ近寄り得ル場所ニ之ヲ設置スベシ但シ弁ガ容易ニ近寄り得ル場所ニ在リテ上甲板上ノ場所ヨリ之ヲ閉鎖シ得ル装置ヲ有シ且該場所ニ弁ノ開閉ヲ示ス装置ヲ備フルトキハ自働不還弁一箇ノミナルモ妨ナシ

前項ノ規定ハ特ニ大ナル乾舷ヲ有スル船舶ニ在リテハ適當ニ之ヲ斟酌スルコトヲ得

船樓内ノ上甲板上ノ場所ヨリ船側ヲ貫通スル各排出管ニハ自働不還弁一個ヲ備フベシ

船側ニ付スル自働不還弁ハ鑄鐵以外ノ材料ニテ作り船側ヲ貫通スル箇所ノ附近ニ於ケル排出管ハ鐵製又ハ鋼製ト爲シ且亞鉛鍍ヲ施スコトヲ要ス

舷門等 **第八條** 船樓外板又ハ上甲板下ノ外板ニ設クル舷門、載貨門、載炭門等ニハ堅牢ニシテ定着装置ヲ有スル戸又ハ蓋ヲ備ヘ之ヲ閉鎖シタルトキハ水密トナルベキ構造ト爲スベシ

舷窓 **第九條** 海水ニ於ケル最高滿載吃水線ヨリ 152 耗未滿ノ箇所ニ下縁ヲ有スル舷窓ハ逓信省令舷窓試驗規程ニ適合スル甲種舷窓又ハ之ト

同等以上ノモノナルコトヲ要シ又海水ニ於ケル最高滿載吃水線ヨリ 1.22 米未滿ノ箇所ニ下面ノ最低點ヲ有スル甲板ノ下方ニ設クル舷窓ハ同規程ニ適合スル乙種舷窓又ハ之ト同等以上ノモノナルコトヲ要ス

前項ニ掲グルモノノ外上甲板下ノ場所又ハ閉鎖装置ノ効力ガ第二級閉鎖装置ノ効力ト同等以上ナル船樓内ノ場所ニ設クル舷窓ニハ螺番ニ依リ取附ケタル内蓋ヲ備ヘ完全ニ水密トナル構造ト爲スベシ但シ雜居三等旅客ニ非ザル旅客又ハ船員ニ専用スル船樓内ノ容易ニ近寄り得ル場所ニ設クル舷窓ノ内蓋ハ取外シ得ルモノト爲スコトヲ得前項但書ノ場合ニ於テハ内蓋ヲ常ニ舷窓ノ近クニ備ヘ置ク爲ノ装置ヲ爲スベシ

第二項ノ舷窓ノ枠ハ黃銅、鑄鋼其ノ他適當ナル金屬ヲ以テ堅牢ニ構造シタルモノナルコトヲ要シ之ヲ鑄鐵製ト爲スコトヲ得ズ又螺番ノ軸針及締附螺釘ハ黃銅製ナルコトヲ要ス

第二十一章 舵及操舵装置

第一節 不平衡舵

第一條 本節ノ規定ハ特ニ明示セルモノヲ除クノ外不平衡單板舵ニ付之ヲ定メタルモノトス

材料 第二條 舵頭材、舵心材、舵腕及舵針ハ鐵又ハ平爐若ハ電氣爐ニ依リ製造シタル鋼塊ヨリ鍛造スベシ但シ豫メ委員會ノ承認ヲ受クルトキハ鑄鋼材ヲ使用スルコトヲ得又舵腕ハ純粹ノ屑鋼ヨリ鍛造スルコトヲ得

鍛造シタル舵腕及舵針ニ付テハ材料試験ヲ爲スコトヲ要セス

舵頭材 第三條 舵頭材ノ徑ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$118\sqrt[3]{Ar} - 52 + \sqrt[5]{Ar}(0.16V^2 - 0.32V) \quad (\text{耗ニテ})$$

A ハ舵針ノ中心線ヨリ舵板ノ後端迄測リタル舵ノ全面積(平方米ニテ)

r ハ舵針ノ中心線ヨリ A ノ重心ニ至ル距離(米ニテ)

V ハ最大航海速力(節ニテ)

舵頭材ト舵心材トノ接合部ノ根元ハ十分大ナラシムベシ

專ラ曳船ニ從事スル汽船ニ在リテハ第一項ノ規定ニ依ル舵頭材ノ徑ヲ適當ニ増スコトヲ要シ又舵心材ノ中心線ガ舵頭材ノ中心線ノ後方ニ在ル船舶ニ在リテハ舵頭材ノ下部ノ截面積ヲ適當ニ増スコトヲ要ス

舵心材 第四條 舵心材ノ徑ハ舵頭材ノ徑以上ト爲スベシ但シ上端壺金ノ下方ニ於テハ漸次減少シ下端ニ於テハ舵頭材ノ徑ノ 75% ト爲スコトヲ得

舵腕 第五條 舵腕ハ舵板ノ兩面ニ交互ニ設クベシ

舵腕ト舵心材トヲ別箇ニ製造スルトキハ舵腕ハ燒炭其ノ他ノ方法ニ依リ十分舵心材ニ嵌込メ且栓止ト爲スベシ、此ノ場合ニ於テハ舵心材ノ徑ヲ該部ニ於テ栓溝ノ深サニ應ジ適當ニ増加スベシ

第六條 舵心材ニ最モ近キ鉸孔ノ部分ニ於ケル舵腕ノ寸法ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$\text{幅} \quad 28.6\sqrt[3]{arV^2} + \phi + 5 \quad (\text{耗ニテ})$$

$$\text{厚サ} \quad 17.2\sqrt[3]{arV^2} \quad (\text{耗ニテ})$$

a ハ舵板中當該舵腕ニテ支持スル部分ノ面積ニシテ舵心材ノ後面ヨリ測リタルモノ(平方米ニテ)

r ハ舵心材ニ最モ近キ鉸孔ヨリ a ノ重心ニ至ル距離(米ニテ)

V ハ最大航海速力(節ニテ)但シ最大航海速力ガ L76 米以上ノ船舶ニ於テ 11 節未滿ナルトキハ 11 節トシ其ノ他ノ船舶ニ於テ次ノ算式ニ依リ算定シタル V_m ヨリ小ナルトキハ V_m トス

$$V_m = 0.0656L + 6$$

ϕ ハ舵腕ト舵板トヲ固着スル鉸ノ徑(耗ニテ)

舵心材ノ周圍ニ於ケル舵腕ノ厚サハ前項ノ規定ニ依ル厚サノ 70% 以上ト爲スベシ

後端ニ於ケル舵腕ノ厚サハ舵板ノ厚サ以上ト爲スベシ

第七條 舵腕ト舵板トヲ固着スル鋸ハ舵腕ノ幅115耗以下ナルトキハ一列、115耗ヲ超ユルトキハ二列ニ配置シ各列ニ於ケル心距ヲ徑ノ4.5倍以下ト爲スベシ

鋸ヲ二列ニ配置スル場合ニ於テハ後端ノモノヲ除クノ外竝列配置ト爲スコトヲ得ズ

鋸ヲ三列以上ニ配置セントスルトキハ舵腕ノ幅及鋸ノ配置ニ付委員會ノ承認ヲ受クベシ

第八條 壺金ノ心距ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ及1.9米ヲ超ユルコトヲ得ズ

$$0.26\sqrt{S} \quad (\text{米ニテ})$$

Sハ舵頭材ノ徑(耗ニテ)

上端壺金ハ成ルベク之ヲ舵頭管ニ接近セシムベシ

壺金ノ深サハ舵頭材ノ徑ノ70%以上、厚サハ舵頭材ノ徑ノ25%以上ト爲スベシ

第九條 舵針ノ徑ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$0.44S + 13.5 \quad (\text{耗ニテ})$$

Sハ舵頭材ノ徑(耗ニテ)

第十條 舵柱ノ壺金ニ嵌入スル舵針ノ平行部ノ長サハ舵頭材ノ徑ノ75%以上ト爲スベシ但シ下端ノ舵針ニ付テハ40%ト爲スコトヲ得

第十一條 舵頭材ト舵心材トヲ鑿接スルトキハ鑿ノ厚サハ栓溝ノ深サヲ除キ舵頭材ノ徑ノ25%以上ト爲シ螺釘孔ト鑿縁トノ距離ハ螺釘ノ徑ノ $\frac{2}{3}$ 以上ト爲スベシ

第十二條 舵頭材ト舵心材トノ嵌接ノ各部ノ寸法ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ但シ嵌接ノ上端ノ幅ハ該部ニ三箇以上ノ螺釘ヲ用フルトキハ適當ニ之ヲ増スベシ

$$\text{嵌接ノ長サ} \quad 2.5S \quad (\text{耗ニテ})$$

$$\text{嵌接ノ上端ノ幅} \quad 1.75S \quad (\text{耗ニテ})$$

$$\text{嵌接ノ下端ノ幅} \quad 2.5S \quad (\text{耗ニテ})$$

嵌接ノ末端ノ厚サ $0.13S$ (耗ニテ)

Sハ舵頭材ノ徑(耗ニテ)

第十三條 舵頭材ト舵心材トノ接合部ニ用フル螺釘ノ數ハ成ルベク六箇以上ト爲シ其ノ截面積ノ和ハ接合ノ種類ニ應ジ次ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$\text{一、水平鑿接ノ場合} \quad \frac{0.003S^3}{r} \quad (\text{平方糎ニテ})$$

$$\text{二、垂直鑿接ノ場合} \quad 0.0044S^2 \quad (\text{平方糎ニテ})$$

$$\text{三、嵌接ノ場合} \quad 0.0053S^2 \quad (\text{平方糎ニテ})$$

rハ鑿接螺釘配置ノ中心ヨリ螺釘ノ中心迄ノ平均距離(耗ニテ)

Sハ舵頭材ノ徑(耗ニテ)

前項ノ螺釘ノ母螺ハ締附ケタル後止母螺、割栓等ニ依リ之ヲ其ノ位置ニ固定スベシ

第十四條 舵板ノ厚サハ最大航海速力ガ15節以下ナルトキハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲シ、15節ヲ超ユルトキハ次ノ算式ニ依リ算定シタル厚サニ超過速力1節ニ付1耗ノ割合ヲ以テ定メタル厚サヲ加ヘタルモノ以上ト爲スベシ但シ舵腕ノ心距ガ第八條ノ規定ニ依ル壺金ノ最大心距ト異ル場合ニ於テハ適當ニ増減スベキモノトス

$$3.75\sqrt{S} \quad (\text{耗ニテ})$$

Sハ舵頭材ノ徑(耗ニテ)

第十五條 波浪ノ衝擊等ニ依ル舵ノ扛擧ヲ防グ爲「ロツキングピントル」其ノ他適當ノ裝置ヲ設クベシ

第十六條 不平衡複板舵ノ構造ハ前諸條ノ規定ニ依ル單板舵ト同等以上ノ強力ヲ有スルモノト爲スベシ但シ最大航海速力ガ第六條ニ定ムル其ノ最小限度ヲ超ユル船舶ノ複板舵ニ在リテハ委員會ニ於テ差支ナシト認ムルトキハ舵頭材ノ徑ヲ第三條ノ算式ニ依リ算定シタルモノヨリ適當ニ減少スルコトヲ得

複板舵ノ舵板ハ支點ノ間隔ヲ成ルベク90糎以下ト爲シ厚サヲ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ若シ支點ノ間隔ガ90糎

ヲ超ユル場合ニ於テハ超過 7.5 糎毎ニ 0.5 耗ノ割合ヲ以テ舵板ノ厚サヲ増スベシ

$$2\sqrt[3]{S}-1 \text{ (耗ニテ)}$$

S ハ舵頭材ノ徑 (耗ニテ)

舵ノ直前ニ推進器ヲ備フル船ニ在リテハ複板舵ノ前縁ヲ熔接ト爲ストキハ覆板其ノ他適當ノ方法ニ依リ之ヲ保護スベシ

第二節 平衡舵

第十七條 平衡舵ニ關シ以下本節ニ規定ナキ事項ニ付テハ前節ノ規定ヲ適用ス

第十八條 平衡舵ノ頸部「ベアリング」ヨリ上部ニ於ケル舵頭材ノ徑ハ第三條ノ算式ニ於テ A ヲ回轉軸ノ中心線ヨリ舵板ノ後端迄測リタル舵ノ面積、r ヲ回轉軸ノ中心線ヨリ面積 A ノ中心ニ至ル距離トシテ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

第十六條第一項但書ノ規定ハ前項ノ場合ニ亦之ヲ適用ス

第十九條 頸部及底部ニ有效ナル「ベアリング」ヲ有スル平衡舵ニ在リテハ頸部「ベアリング」以下ノ部分ニ於ケル舵頭材ノ徑ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$C \times \sqrt[3]{ARV^2} \text{ (耗ニテ)}$$

A ハ頸部及底部「ベアリング」間ノ舵ノ面積 (平方米ニテ)

R ハ次ノ算式ニ依リ算定シタル長サ

$$R = 0.25(a + \sqrt{a^2 + b^2})$$

a ハ頸部「ベアリング」ヨリ面積 A ノ中心ニ至ル垂直距離 (米ニテ)

b ハ舵頭材ノ中心線ヨリ面積 A ノ中心ニ至ル水平距離 (米ニテ)

V ハ第六條ノ規定ニ依ル

C ハ係數ニシテ最大航海速力ガ第六條ニ定ムル其ノ最小限度以下ナルトキハ 21.6、之ヲ超ユルトキハ次ノ算式ニ依リ算定シタル數

$$C = 21.6 - 0.4V$$

▼ ハ最大航海速力ト第六條ニ定ムル其ノ最小限度トノ差 (節ニテ) 但シ其ノ差ガ 6 節ヲ超ユルトキハ 6 節トス

舵心材ノ徑ハ前項ノ算式ニ依ル下部舵頭材ノ徑以上ト爲スベシ但シ頸部「ベアリング」ヨリ頸部及底部「ベアリング」間ノ距離ノ $\frac{2}{3}$ ニ相當スル箇所ノ下方ニ於テハ漸次減少シ底部「ベアリング」ノ部分ニ於テハ其ノ 75% ト爲スコトヲ得

舵心材ノ底部「ベアリング」ニ嵌入スル部分ノ長サハ舵心材上部ノ規定ノ徑ノ 70% ヲ小ナルベカラズ

各「ベアリング」ニハ金屬製ノ「ブツシュ」ヲ設ケ且舵ノ重量ヲ支持スル爲適當ナル裝置ヲ設クベシ

第二十條 底部「ベアリング」ヲ有セザル平衡舵ニ在リテハ頸部「ベアリング」以下ノ部分ニ於ケル舵頭材ノ徑ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$C \times \sqrt[3]{ARV^2}$$

A ハ舵ノ全面積 (平方米ニテ)

R ハ次ノ算式ニ依リ算定シタル長サ

$$R = a + \sqrt{a^2 + b^2}$$

a、b、V 及 C ハ前條第一項ノ規定ニ依ル

舵心材ノ徑ハ前項ノ算式ニ依ル下部舵頭材ノ徑以上ト爲スベシ但シ頂部舵腕ノ下方ニ於テハ漸次減少シ踵部ニ於テハ其ノ 33% ト爲スコトヲ得

頸部「ベアリング」ハ其ノ深サヲ下部舵頭材ノ規定ノ徑ノ 1.5 倍以上ト爲シ金屬製ノ「ブツシュ」ヲ設ケ且舵ノ重量ヲ支持スル爲適當ナル裝置ヲ設クベシ

第二十一條 下部ガ前方ニ突出シタル部分平衡舵ニ在リテハ下部舵針ノ徑ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$16.7\sqrt[3]{ArV^2} \text{ (耗ニテ)}$$

A ハ下部舵針ノ「ベアリング」ヨリ下方ニ於ケル舵ノ面積 (平方

米=テ)
 r ハ下部舵針ノ「ベアリング」ヨリ面積 A ノ中心ニ至ル垂直距離 (米=テ)
 V ハ最大航海速力 (節=テ)

第三節 操舵装置

動力操舵装置 **第二十二條** 長サ 60 米ヲ超ユル汽船ニハ動力ニ依ル操舵装置ヲ備フベシ

豫備操舵索 **第二十三條** 手用操舵具ヲ常用スル船舶ニハ豫備操舵索一揃ヲ備フベシ但シ航路ヲ平水区域内ニ制限スル船舶及總噸數 50 噸未滿ノ船舶ニ付テハ検査員ノ見込ニ依リ之ヲ備ヘザルモ妨ナシ

豫備操舵装置 **第二十四條** 動力ニ依ル操舵機ヲ常用スル船舶ニハ豫備トシテ手用操舵具又ハ動力ニ依ル操舵機ヲ備フベシ但シ小形船ニ付テハ検査員ノ見込ニ依リ舵柄ノ制動索ヲ以テ豫備手用操舵具ニ兼用セシムルコトヲ得

緩衝装置等 **第二十五條** 動力ニ依ル操舵機ヲ備フル船舶ニハ其ノ操舵装置ニ發條其ノ他ノ緩衝装置ヲ備ヘ且舵柄ニ連絡スル部分ノ操舵鎖ノ豫備ヲ備フベシ但シ航路ヲ平水区域内ニ制限スル船舶及總噸數 500 噸未滿ノ船舶ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

回轉止 **第二十六條** 舵柄又ハ舵柄弧ニ對シテハ甲板上ニ堅牢ナル回轉止ヲ取附クベシ但シ操舵機ヲ直接舵柄弧ニ連結スルトキハ此ノ限ニ在ラズ

制動装置 舵柄又ハ舵柄弧ニハ適當ナル制動装置又ハ制動索ヲ備フベシ

第二十七條 船尾ニ於ケル操舵装置ハ L 65 米以上ノ船舶ニ在リテハ之ヲ蔽圍シタル場所ニ置クベシ但シ船尾樓甲板又ハ其ノ上層甲板ニ設置セル舵柄、舵柄弧又ハ操舵輪ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

舵柄 舵柄弧 **第二十八條** 鍛鋼製ノ舵柄又ハ舵柄弧ノ寸法ハ次ノ各號ニ掲グルモノヲ標準ト爲スベシ但シ操舵機ニ直接連結スル舵柄弧ノ半徑ハ委員會ノ適當ト認ムル所ニ依ル

一、舵頭材ノ中心ヨリ操舵鎖ノ中心線迄測リタル舵柄ノ長サ又ハ舵柄弧ノ半徑

$$830 + 0.017 S^2 \quad (\text{耗=テ})$$

- 二 舵頭孔部ノ寸法
 - 深サ S (耗=テ)
 - 外徑 1.8 S (耗=テ)
- 三 舵頭孔部ニ連續スル箇所ノ腕ノ寸法
 - 幅 S (耗=テ)
 - 厚サ 0.5 S (耗=テ)
- 四 外端ニ於ケル舵ノ寸法
 - 幅 0.67 S (耗=テ)
 - 厚サ 0.33 S (耗=テ)

S ハ舵頭材ノ徑 (耗=テ)

鍛鋼製ノ舵柄弧ニ在リテハ腕ノ幅及厚サハ二箇ノ腕ヲ有スルトキハ前項ノ規定ニ依ルモノノ 85%、三箇ノ腕ヲ有スルトキハ 77%、四箇ノ腕ヲ有スルトキハ 70% ト爲スコトヲ得

鑄鋼製ノ舵柄又ハ舵柄弧ノ寸法ハ其ノ強力ガ前二項ノ規定ニ依ル鍛鋼製ノ舵柄又ハ舵柄弧ノ強力ト同等ト爲ル様之ヲ定ムベシ

第二十九條 舵柄又ハ舵柄弧ハ燒嵌其ノ他ノ方法ニ依リ十分舵頭材ニ嵌込ムカ又ハ螺釘ヲ以テ締附クルコトヲ要シ且栓止ト爲スコトヲ要ス

第三十條 舵頭材ニ固定シタル舵柄ト之ニ固定セザル遊動舵柄弧トヲ併用スルトキハ遊動舵柄弧ノ腕ノ寸法ハ其ノ全長ヲ通ジ第二十八條第一項第四號ニ依ルモノト爲スコトヲ得

操舵鎖 **第三十一條** 操舵鎖ノ徑ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ但シ 9.5 耗未滿ト爲スコトヲ得ズ

$$0.38 \sqrt{\frac{S^3}{R}} \quad (\text{耗=テ})$$

S ハ舵頭材ノ徑 (耗=テ)

R ハ舵頭材ノ中心ヨリ操舵鎖ノ中心線迄測リタル舵柄ノ長サ又ハ舵柄弧ノ半徑 (耗=テ)

操舵圓材 操舵圓材ノ徑ハ前項ノ規定ニ依ル操舵鎖ノ徑ノ 1.25 倍以上ト爲スベシ

導鎖滑車 **第三十二條** 導鎖滑車ハ成ルベク操舵鎖ヲ短カラシメ且之ヲ小角度ニ

屈折セシメザル様配置スベシ

操舵鎖ノ中心線迄測リタル導鎖滑車ノ徑ハ鎖徑ノ16倍以上ト爲シ
滑車針ノ徑ハ鎖徑ノ2倍以上ト爲スベシ

操舵鎖ノ屈折角度ガ120度未満ナルトキハ導鎖滑車及滑車針ノ徑ヲ
前項ノ規定ニ依ルモノノ1.25倍以上ト爲スベシ

導鎖滑車ノ枠、基板、滑車針其ノ他衝擊ヲ受クル部分ハ之ヲ鑄鐵製
ト爲スベカラズ又滑車ヲ船體ニ取附クル螺釘ハ其ノ截面積ノ和ヲ次
ノ算式ニ依ルモノ以上ト爲スベシ

$$0.024 \phi^2 \text{ (噸ニテ)}$$

ϕ ハ操舵鎖ノ徑 (耗ニテ)

第三十三條 總噸數500噸以上ノ船舶ニ備フル操舵鎖及鋼索ハ遞信省
令鎖試驗規程又ハ索試驗規程ニ依ル試驗ニ合格シタルモノナルコト
ヲ要ス

第二十二章 内張板

第一條 單底構造ノ船底ニハ彎曲上部迄船底内張板ヲ張詰ムベシ
二重底構造ノ船底ニハ艙口直下ノ内底板上及外側肘板上ニ船底内張
板ヲ張詰ムベシ但シ艙口直下ノ内張板ハ該部ニ於ケル内底板ノ厚サ
ヲ2耗増ストキハ之ヲ省略スルコトヲ得

第二條 船底内張板ノ厚サハL60米以下ノ船舶ニ在リテハ50耗
以上、L60米ヲ超ユル船舶ニ在リテハ63耗以上ト爲スベシ

第三條 二重底内底板ノ上面ニ内張板ヲ張ルトキハ内張板ノ下部ニ
厚サ38耗以上ノ横木ヲ置クベシ

第四條 一般貨物ヲ積載スル船舶ノ船艙ニハ厚サ50耗以上ノ船側
内張板ヲ230耗以下ノ間隔ヲ以テ張ルベシ

第二十三章 排水装置

第一條 各水密區畫室ニハ有效ナル排水装置ヲ備フベシ

排水装置ハ船體ガ龍骨ヲ水平ニシテ直立セルトキ及5度ノ傾斜ヲ有

スルトキ少クトモ一箇ノ吸引口ニ依リ各區畫室内ノ排水ヲ爲シ得ル
様装置スベシ

二重底内底板ヲ船側迄延長スルトキハ二重底ノ全幅ニ達スル滲水溜
ヲ設クルカ又ハ二重底上面ガ凹面ナル場合ニ於テハ中央部及兩側
ニ、其ノ他ノ場合ニ於テハ兩側ニ滲水溜ヲ設ケ之ニ吸引口ヲ設クベシ

滲水溜ノ容積ハ0.17立方米ヨリ小ナルコトヲ得ズ但シ小ナル水密
區畫室ニ設クルモノハ此ノ限ニ在ラズ

石炭庫ノ下部ヲ水密ニ構造スルトキハ該部ニ吸引口ヲ設ケ且其ノ閉
塞ヲ防止スル爲適當ナル装置ヲ爲スベシ

機關室 第二條 機關室ニ二重底ヲ備ヘザルトキハ中心線ニ正滲水「ポンプ」
ノ吸引口及副滲水「ポンプ」ノ直接吸引口ヲ設ケ且船底勾配ガ5度
未満ナルトキハ兩側ニ正滲水「ポンプ」ノ吸引口ヲ増設スベシ
機關室ニ二重底ヲ備ヘ兩側ニ滲水路ヲ有スル場合ニ於テハ各側ニ吸
引口二箇ヲ設ケ各別ノ動力「ポンプ」ニ連結スベシ但シ内一箇ハ副
滲水「ポンプ」ノ直接吸引口ト爲スコトヲ得
機關室ニ於ケル二重底内底板ヲ船側迄延長スルトキハ第一條第三項
ノ規定ニ依ル滲水溜ニ設クル吸引口ノ總數ハ少クトモ正滲水「ポン
プ」ノ吸引口三箇及副滲水「ポンプ」ノ直接吸引口一箇ト爲スベシ
汽機室及汽罐室ガ隔離セル場合ニ於テハ各室ニ於ケル吸引口ノ數ハ
艙内ニ於ケルモノト同數ト爲シ且汽機室ニ於テハ副滲水「ポンプ」
ノ直接吸引口一箇ヲ増設スベシ

船首尾艙 第三條 脚荷水槽トシテ使用スル船首尾艙ニハ之ニ動力「ポンプ」
ノ吸引口ヲ設クベシ

脚荷水槽トシテ使用セザル船首艙ニ動力「ポンプ」ノ吸引口ヲ設ケ
ザルトキハ適當ノ手動「ポンプ」ヲ備フベシ

脚荷水槽トシテ使用セザル船尾艙ニ動力「ポンプ」ノ吸引口ヲ設ケ
ザルトキハ適當ナル手動「ポンプ」ヲ設クルカ又ハ船尾隔壁ニ取附
ケタル弁又ハ「コック」ニ依リ船尾艙ノ滲水ヲ動力「ポンプ」ノ吸

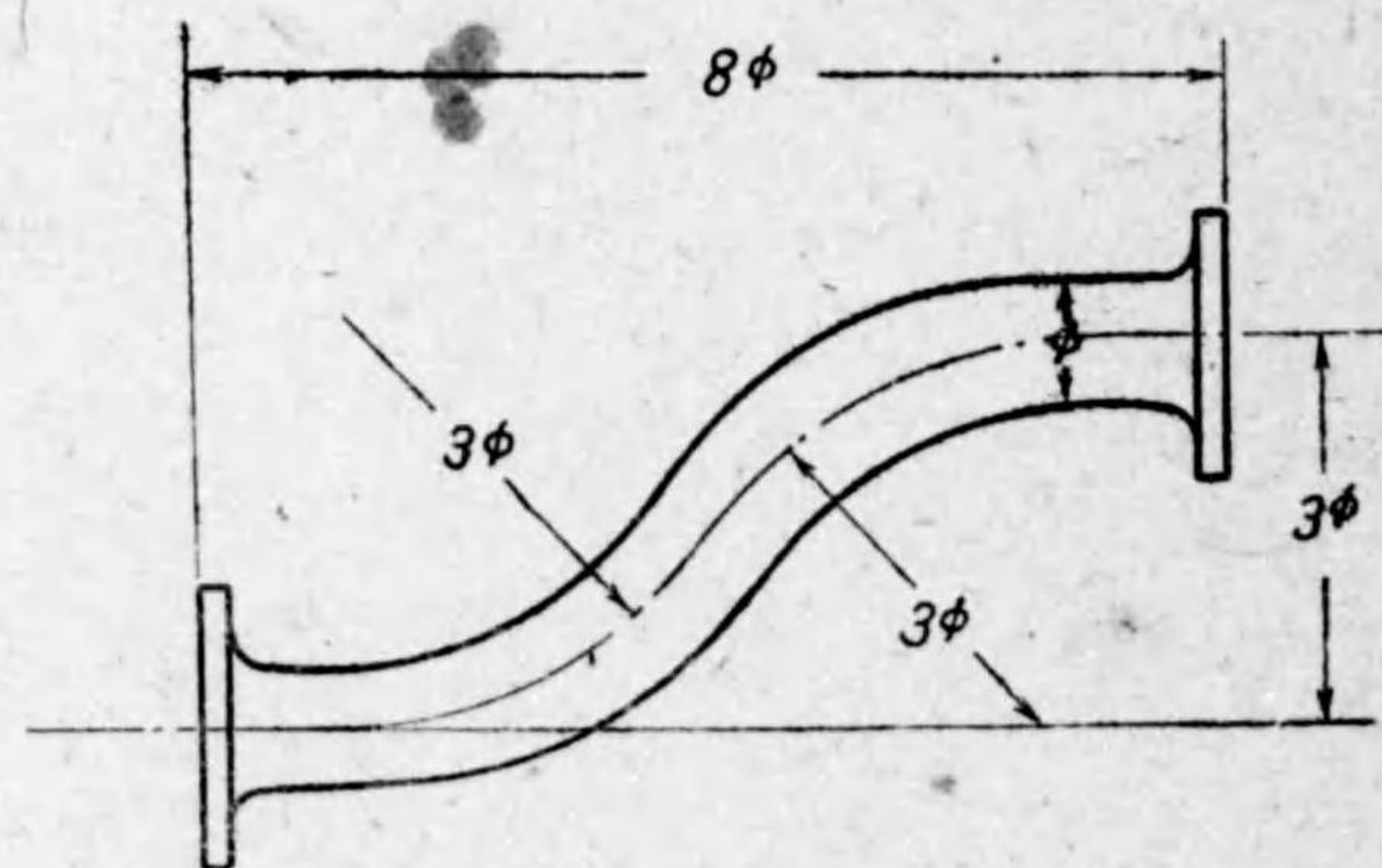
引口=導キ得ベキ装置ト爲スベシ
 船首水槽頂部又ハ錨鎖庫ガ満載吃水線下=在ルトキハ之=手動「ポンプ」又ハ動力「ポンプ」ノ吸引口ヲ設クベシ
 機関室ヨリ船首艙=至ル吸引管ガ他ノ艙内ヲ通過スル場合=ハ満載吃水線ノ上方ニシテ何時ニテモ近寄り得ル場所ヨリ操作シ得ル螺締弁ヲ船首隔壁ノ船首艙側=取附ケ之=吸引管ヲ連結スベシ但シ特殊ノ管配置ヲ爲シタル場合=於テ委員會ノ承認ヲ受ケタルトキハ此ノ限=在ラズ

軸路 第四條 軸路=ハ滲水溜ヲ設ケ之=動力「ポンプ」ノ吸引口ヲ設クベシ

滲水吸引管 第五條 滲水吸引管ハ成ルベク二重底内ヲ通過セザル様配置スベシ
 石炭庫内ノ滲水吸引管=ハ鉛管ヲ用フルコトヲ得ズ但シ十分ナル保護装置ヲ爲ストキハ此ノ限=在ラズ

第六條 管ハ振動ヲ防止スル爲帯金其ノ他ノ方法=依リ適當=之ヲ取附クベシ

管=ハ各區間=有效ナル膨脹接手又ハ彎曲部ヲ設クベシ
 鉛管ノ彎曲部ノ形狀及寸法ハ次圖=掲グルモノヲ標準ト爲スベシ



弁、「コック」 第七條 船首隔壁及船尾艙ヲ脚荷水槽トシテ使用スル場合=於ケル船尾隔壁=ハ排水用ノ弁又ハ「コック」ヲ取附クルコトヲ得ズ
 前項ノ隔壁ヲ除キ其ノ他ノ水密隔壁=排水用ノ弁又ハ「コック」ヲ取附クルトキハ何時ニテモ近寄り得ル場所=設ケ且満載吃水線以上ノ場所ヨリ閉鎖シ得ル装置ト爲スベシ

滲水及脚荷水ノ吸引管=連結ズル弁又ハ「コック」ハ何時ニテモ近寄り得ル場所=之ヲ設クベシ但シ滲水吸引管=取附クル不還弁ハ此ノ限=在ラズ

第八條 脚荷水及貨物ノ積載=兼用スル深水槽=於テハ貨物ヲ搭載スルトキ脚荷水ノ充水口及吸引口ヲ閉鎖シ脚荷水ヲ積載スルトキ滲水吸引口ヲ閉鎖シ得ル装置ト爲スベシ

第九條 弁匣、「コック」、管等ヲ隔壁板又ハ軸路板=取附クル=ハ植込螺釘又ハ螺込螺釘ヲ用フルコトヲ要ス

滲水吸引管ノ徑 第十條 滲水吸引管ノ内徑ハ管ノ種類=應ジ次ノ各號ノ算式=依リ算定シタルモノヲ標準ト爲スベシ

一、滲水主管及滲水直接吸引管

$$1.67\sqrt{L(B+D_1)+25} \text{ (耗=テ)}$$

二、滲水支管

$$2.15\sqrt{L(B+D_1)+25} \text{ (耗=テ)}$$

D_1 ハ L ノ中央=於テ龍骨ノ上面ヨリ隔壁甲板ノ船側=於ケル上面迄ノ深サ(米=テ)

l ハ當該支管=依リ排水スベキ區畫室ノ長サ(米=テ)

前項ノ規定=拘ラズ滲水主管ノ内徑ハ 60 耗及滲水支管ノ内徑ヨリ小ト爲スコトヲ得ズ

滲水支管ノ内徑ハ L 60 米以上ノ船舶ノ船首尾艙及軸路ノ滲水溜=至ル管=在リテハ 57 耗ヨリ、其ノ他ノ管=在リテハ 50 耗ヨリ小ナラザルコトヲ要シ又何レノ管ト雖モ 100 耗ヨリ大ナルコトヲ要セズ

空氣管 第十一條 水槽=ハ充水口ノ反對隅又ハ該水槽ノ最高部=空氣管ヲ設

ケ之ヲ滿載吃水線ヨリ上方ノ箇所ニ導クベシ
 前項ノ空氣管ノ截面積ノ和ハ充水管ノ截面積以上ト爲スベシ
 空氣管ヲ暴露セル上甲板又ハ船樓甲板上ニ導クトキハ其ノ開口ノ甲
 板上ノ高サハ上甲板ニ於テハ 915 耗以上、低船尾樓甲板ニ於テハ
 760 耗以上、其ノ他ノ船樓甲板ニ於テハ 457 耗以上ト爲スベシ但シ
 特ニ大ナル乾舷ヲ有スル船舶ニ付テハ適當ニ斟酌スルコトヲ得

第十二條 前條ノ規定ハ油槽ニ之ヲ準用ス

油槽ノ空氣管ニハ取外シ易キ細目金網製隔膜ヲ備フベシ

第十三條 機關室ヲ除キタル各船艙、水槽、油槽其ノ他水ノ溜ル區畫
 室ニハ測水管ヲ設クベシ但シ油槽船ノ油槽ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ
 測水管ハ成ルベク眞直ト爲シ其ノ直下ノ外板ニハ厚キ銅板ヲ當テ測
 水桿ノ衝擊受ト爲スベシ

測水管ハ滿載吃水線以上ニシテ何時ニテモ近寄り得ル場所ニ達セシ
 ムベシ但シ軸路又ハ機關室直下ノ二重底ニ在リテ測水管ノ端ヲ近寄
 リ得ル箇所ニ止メ且之ニ取放チ得ザル螺蓋ヲ備フルカ又ハ自動閉塞
 裝置ヲ有スル「コック」ヲ備フル場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラズ

第十四條 滲水管、空氣管、測水管等ハ貨物又ハ石炭ノ爲破損セザル
 様之ヲ保護スベシ

冷凍區畫ニ於ケル滲水管、空氣管、測水管等ニハ十分ナル保温裝置
 ヲ施シ管内ノ凍結ヲ防止スベシ

第十五條 手動滲水「ポンプ」ハ滿載吃水線以上ノ場所ニテ操作シ得
 ルモノト爲シ吸引水高ハ 7.5 米以下ト爲スベシ

手動滲水「ポンプ」ノ滲水吸引管ノ内徑ハ滲水支管ニ關スル第十條
 ノ規定ヲ準用シテ之ヲ定ムベシ

第十六條 脚荷水吸引管ハ水槽ニ一箇ノ吸引口ヲ設クルトキハ其ノ内
 徑ヲ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲シ水槽ニ二箇以上ノ吸
 引口ヲ設クルトキハ其ノ截面積ノ和ヲ次ノ算式ニ依リ算定シタル徑
 ヲ有スル管ノ截面積ヨリ適當ニ増スベシ

$$4.3\sqrt{T} + 47 \quad (\text{耗ニテ})$$

T ハ水槽ノ容量 (立方米ニテ)

脚荷水吸引管ノ内徑ハ前項ノ規定ニ拘ラズ 60 耗未滿ト爲スコトヲ
 得ズ

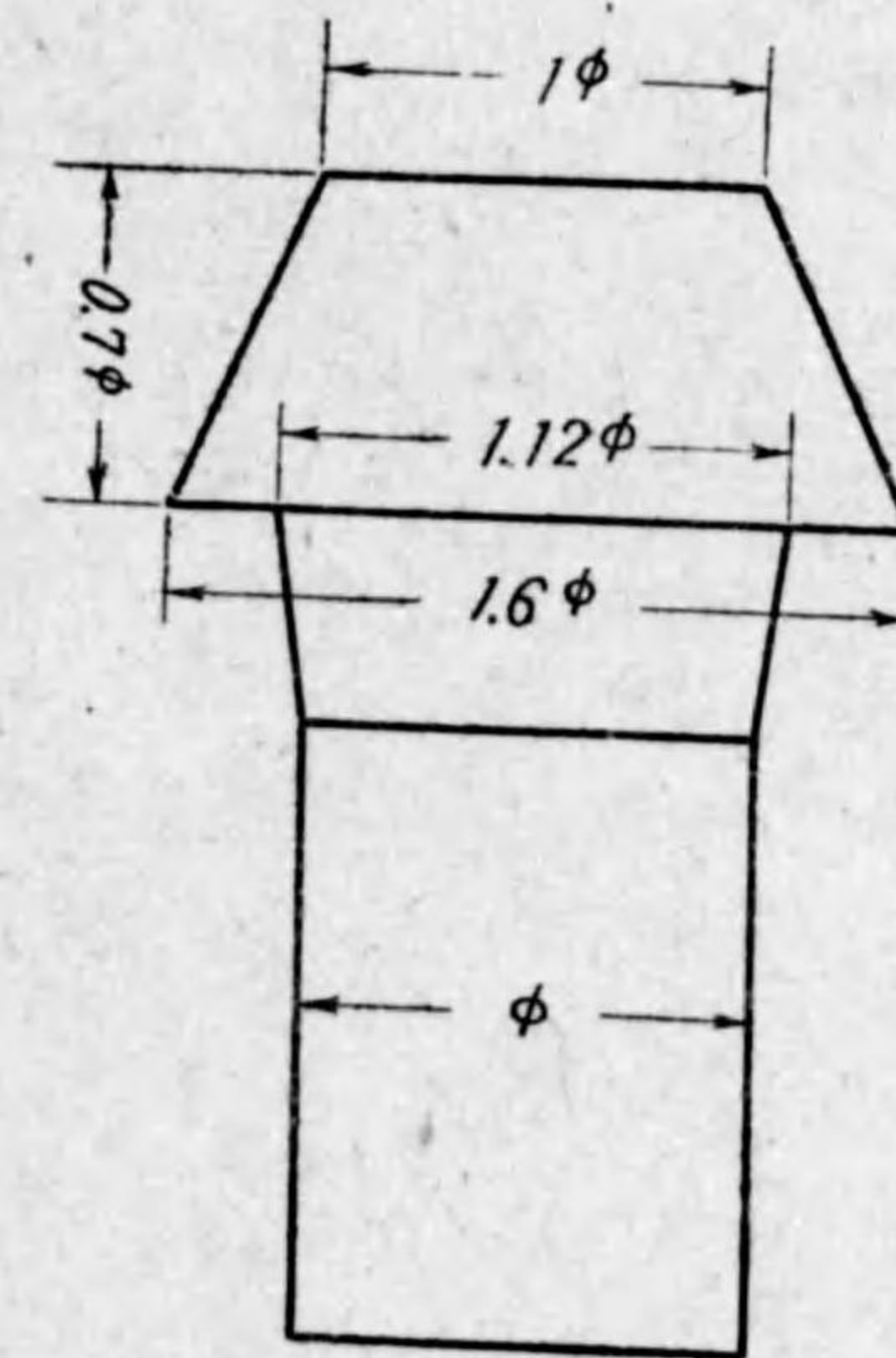
第十七條 機關ヲ有セザル帆船ニ在リテハ必要ナル數ノ手動滲水「ポ
 ンプ」ヲ備フベシ

第十八條 排水裝置ニ付テハ本章ノ規定ニ依ルノ外機關ノ種類ニ應ジ
 第三編ノ規定ニ依ル

第二十四章 銑及銑接合

第一節 銑

第一條 船體主要部分ノ固着ニハ銑孔ヲ打貫キタルトキハ次圖ニ掲
 ゲル寸法ノ頸太平銑ヲ、銑孔ヲ錐揉シテ穿チタルトキハ直頸平銑ヲ



板ノ種類	板ノ厚サ(耗)												
	9.0以下	9.5	10.0	11.0	12.5	14.0	15.5	18.0	20.0	22.0	24.5	27.0以上	
16 中心線内龍骨、貫通板及平置板ノ横線													
17 中央部 Lノ $\frac{1}{3}$ 間ニ於ケル鋼甲板(Lノ15%未滿ノ長サノ船樓ノ鋼甲板ヲ除ク)ノ横線													
18 中央部 Lノ $\frac{1}{3}$ 間ニ於ケル二重底内底板(中心線内底板ヲ除ク)ノ横線		2				3				4			
19 二重底側桁板ノ横線													
20 首尾 Lノ $\frac{1}{4}$ 間ニ於ケル二重底ノ縁板及中心線内底板ノ横線													
21 首尾 Lノ $\frac{1}{4}$ 間ニ於ケル鋼甲板(第23欄ノ鋼甲板ヲ除ク)ノ横線		1		2		3				4			
22 首尾 Lノ $\frac{1}{4}$ 間ニ於ケル二重底内底板(中心線内底板ヲ除ク)ノ横線													
23 Lノ15%未滿ノ長サノ船樓又ハ首尾兩端ヨリ Lノ15%ノ箇所迄ノ船樓ノ鋼甲板、梁上帯板、梁上側板及外板ノ横線、臺甲板ノ横線		1											
24 首尾 Lノ $\frac{1}{4}$ 間ニ於ケル船側外板ノ横線、造浪甲板、上甲板及下層甲板ノ機關室口及艙口ノ縁材ノ横線				2									
25 突梁ヨリ下方ニ於ケル橋板ノ横線			3										
26 水密隔壁板及軸路板ノ横線	隔壁甲板ヨリ下方 10.7 米迄ノ箇所ニ於テハ 1 列、其ノ下方ニ於テハ 2 列												
備考 板ノ厚サ等シカラザルトキハ小ナル厚サニ依リ銀列ヲ定ムベシ但シ厚サノ差大ナルトキハ銀列ニ付適當ナル考量ヲ加フベシ													

(縦線) 第六條 板ノ縦線接合ニ於ケル銀列ハ板ノ厚サニ應ジ次表ニ依リ之ヲ定メ銀列ガ二列以上ナル場合ノ銀ノ配置ハ並列ト爲スベシ

第七條 外板ト船首材、方形龍骨、船尾骨材又ハ螺旋軸支材トハ少クトモ二列銀固着ト爲スベシ

L 107 米ヲ超ユル單螺旋汽船ノ螺旋軸管ノ下部ニ於テハ外板ト船尾

縦線ノ種類	板ノ厚サ(耗)												
	9.0以下	9.5	10.0	11.0	12.5	14.0	15.5	18.0	20.0	22.0	24.5	27.0以上	
1 龍骨翼板及船底外板ノ縦線	1									2			
2 第1欄及第5欄ノ外板ヲ除キ其ノ他ノ外板ノ縦線	前部 Lノ $\frac{1}{4}$ 間ニ於ケル銀列ハ二列ト爲スベシ												
			1						2			3	
3 鋼甲板及梁上側板ノ縦線	L 85 米以上ノ船舶ニ在リテハ少クトモ 2 列ト爲スベシ												
4 二重底ノ内底板及縁板ノ縦線			1						2				
5 Lノ15%未滿ノ長サノ船樓又ハ首尾兩端ヨリ Lノ15%ノ箇所迄ノ船樓ノ外板ノ縦線			1										
6 橋板ノ縦線			1										
7 水密隔壁板及軸路板ノ縦線			1										
備考 一、板ノ厚サ等シカラザルトキハ小ナル厚サニ依リ銀列ヲ定ムベシ但シ厚サノ差大ナルトキハ銀列ニ付適當ナル考量ヲ加フベシ 二、船首樓及船尾樓ノ外板ヲ除キ船ノ首尾ニ於ケル其ノ他ノ外板ノ縦線ノ銀列ハ中央部ニ於ケル厚サニ依リ定ムベシ													

骨材トヲ少クトモ三列銀固着ト爲スベシ

第八條 銀孔ノ中心ヨリ板又ハ形鋼ノ縁迄ノ距離ハ銀徑ノ 1.5 倍以上ト爲スベシ

第九條 板ノ接合ニ於ケル銀列ノ距離ハ縦線接合ニ在リテハ銀徑ノ 2.5 倍以上、横線接合ニ在リテハ銀徑ノ 3 倍以上ト爲スベシ但シ外板又ハ鋼甲板ノ横線接合ニ於テ肋骨又ハ梁ノ間ニ規定ノ銀ヲ配置シ得ザルトキハ銀列ノ距離ヲ銀徑ノ 2.5 倍迄減ズルコトヲ得

形鋼ノ固着ニ於ケル銀列ノ距離ハ並列配置ニ在リテハ銀徑ノ 2.5 倍以上、千鳥形配置ニ在リテハ銀徑ノ 2 倍以上ト爲スベシ

覆板 第九條 板ノ衝接ニ於ケル覆板ノ厚サハ板ノ厚サニ應ジ種類ニ應

シ次表=掲ゲル係數ヲ乗ジタルモノ以上ト爲スベシ

覆板ノ種類	單 覆 板		二 重 覆 板	
	横縁=施スモノ	縦縁=施スモノ	皿取ヲ施スモノ	皿取ヲ施サザルモノ
係 數	1.25	1.00	0.70	0.60

第三節 鋸ノ心距

第十條 板ノ横縁接合=於ケル鋸ノ心距ハ次表ニ依ル
(横縁)

欄	種 類	心 距 (鋸徑ノ倍 數ニテ)
1	平板龍骨、外板及梁上側板ノ横縁(4列鋸接合、5列鋸接合及二重覆板銜接ノ場合ヲ除ク)	$3\frac{1}{2}$
2	4列鋸接合及二重覆板銜接ノ横縁	4
3	鋼甲板、肋板、二重底中心線桁板、梁上帶板、中心線内龍骨ノ貫通板並ニ甲板下縱桁及特設肋骨ヲ構成スル鋼板ノ横縁	
4	二重底ノ内底板及縁板ノ横縁	
5	5列鋸接合ノ横縁	$4\frac{1}{2}$
6	水槽ヲ構成スル水密隔壁板及水槽ヲ構成スル軸路板ノ横縁	
7	遮浪甲板、上甲板及下層甲板ノ機關室口及艙口ノ縁材ノ横縁	
8	突梁ヨリ下方ニ於ケル橋板ノ横縁	5
9	水密隔壁板及軸路板ノ横縁(第6欄ノ横縁ヲ除ク)	$5\frac{1}{2}$

(縦縁) 第十一條 板ノ縦縁接合=於ケル鋸ノ心距ハ次表ニ依ル

欄	種 類	心 距 (鋸徑ノ倍 數ニテ)
1	外板、二重底ノ内底板及縁板ノ縦縁	$4\frac{1}{2}$
2	鋼甲板及梁上側板ノ縦縁	
3	水槽ヲ構成スル水密隔壁板及水槽ヲ構成スル軸路板ノ縦縁	5
4	橋板ノ縦縁	
5	水密隔壁板及軸路板ノ縦縁(第3欄ノ縦縁ヲ除ク)	$5\frac{1}{2}$

前項ノ規定ニ拘ラズ L140 米以上ノ船舶ニ在リテハ首尾ヨリ測リ約 $L \times \frac{1}{4}$ = 相當スル箇所ノ前後適當ノ長サノ間ニ於テ深サノ中央ノ附近ニ於ケル外板ノ縦縁ヲ接合スル鋸ノ心距ハ其ノ徑ノ 3.75 倍以下ト爲スベシ

形鋼 第十二條 形鋼ニ於ケル鋸ノ心距ハ次表ニ依ル

欄	種 類	心 距 (鋸徑ノ倍 數ニテ)
1	單 中心線内龍骨ノ貫通板又ハ斷切板ト單底肋板トノ固着	4
2	底 中心線内龍骨ノ貫通板又ハ斷切板ト平板龍骨トノ固着	5
3	構 前部 $L \times \frac{1}{4}$ 間ニ於ケル肋板ト外板トノ固着	$5\frac{1}{2}$
4	内龍骨各材相互間ノ固着	
5	造 肋板ト其ノ上縁ニ附スル山形鋼トノ固着	
6	肋板ト外板トノ固着(第3欄ノ固着ヲ除ク)	7
7	縁板ト外板トノ固着	$4\frac{1}{2}$
8	縁板ト實體肋板又ハ組立肋板ニ於ケル肘板トノ固着	5
9	縁板ト外側肘板トノ固着	
10	中心線桁板ト平板龍骨トノ固着	
11	重 中心線桁板ト實體肋板又ハ組立肋板ニ於ケル肘板トノ固着	5
12	組立肋板ニ於ケル正副肋材ト肘板トノ固着	
13	底 前部 $L \times \frac{1}{4}$ 間ニ於ケル實體肋板ト外板トノ固着	
14	前部 $L \times \frac{1}{4}$ 間ニ於ケル組立肋板ノ正肋材ト外板トノ固着	$5\frac{1}{2}$
15	構 心距 760 耗ヲ超ユル組立肋板ノ正肋材ト外板トノ固着	6
16	造 内底板ト中心線桁板又ハ側桁板トノ固着	7
17	實體肋板ト内底板又ハ側桁板トノ固着	
18	實體肋板ニ附スル防撓材ノ固着	

欄	種	類	心 距 (鉄徑ノ倍) 數ニテ
19	二重底構造	實體肋板ト外板トノ固着 (第 13 欄ノ固着ヲ除ク)	7
20		組立肋板ニ於ケル正肋材ト外板トノ固着 (第 14 欄及第 15 欄ノ固着ヲ除ク)	
21		組立肋板ニ於ケル副肋材ト内底板トノ固着	
22	肋	船尾艙ニ於ケル正肋材ト肋板及兩舷結合板トノ固着	5
23		前部 L ノ 1/4 間ニ於テ滿載吃水線ノ下方ニ於ケル肋骨ト外板トノ固着	5 1/2
24		船首尾水槽及深水槽ニ於ケル肋骨ト外板トノ固着	
25		心距 760 耗ヲ超ユル肋骨ト外板トノ固着 (前 2 欄ノ固着ヲ除ク)	6
26		船内肋骨ト二重底ノ外側肘板トノ固着	7
27	肋骨ト外板トノ固着 (第 23 欄乃至第 25 欄ノ固着ヲ除ク)		
28	特設肋骨及船側縱通材	船側縱通材ヲ構成スル鋼板ト特設肋骨ヲ構成スル鋼板トノ固着	4 1/2
29	通材	特設肋骨及船側縱通材ノ内縁ニ附スル山形鋼ノ固着	7
30	甲 板	船樓端ノ附近ニ於ケル舷縁山形鋼ノ固着	4
31		舷縁山形鋼ノ固着 (前欄ノ固着ヲ除ク)	4 1/2
32		肋骨一本置ニ附シタル梁ト鋼甲板及梁上側板トノ固着	6
33		肋骨毎ニ附シタル梁ト鋼甲板及梁上側板トノ固着	7
34		暴露セザル甲板及防撓材ノ梁上側板ニ附スル縱通山形鋼ノ固着	
35	甲板下縱桁、梁下縱材及特設梁柱	甲板下縱桁ト鋼甲板トノ固着	5
36	特設梁柱、梁下縱材及甲板下縱桁ヲ構成スル鋼材相互ノ固着	7	
37	艙 口	暴露甲板又ハ水槽頂板ニ於ケル艙口ノ縁材ト甲板又ハ頂板トノ固着	4 1/2
38		暴露セザル艙口ノ四隅附近ニ於ケル縁材ト鋼甲板トノ固着	
39		暴露セザル艙口ノ縁材ト鋼甲板トノ固着 (前欄トノ固着ヲ除ク)	5
40		艙口梁ノ上下ニ附スル山形鋼ノ固着	7
41	艙口縁材ニ附スル横防撓材ノ固着		

欄	種	類	心 距 (鉄徑ノ倍) 數ニテ
42	水密隔壁及軸路	肘板ヲ附セザル防撓材ノ上下兩端部其ノ長さノ 15% ノ間ニ於ケル固着	4
43		水槽ヲ構成スル隔壁又ハ軸路ノ防撓材ノ固着	6
44		前二欄以外ノ箇所ニ於ケル防撓材ノ固着	7
45		水密隔壁板ヲ外板ニ固着スル山形鋼ト隔壁板トノ固着	4 1/2
46		水密隔壁板ト二重底ノ内底板及縁板トノ固着	
47		水密隔壁板ヲ外板ニ固着スル山形鋼ト外板トノ固着	5
48		水密隔壁板ト甲板及軸路トノ固着	
49	軸路板ト二重底内底板トノ固着		
50	主機關臺	構成山形鋼ノ固着	5

備考 汽機、内燃機及推力受ノ下方ニ於ケル二重底構造又ハ單底構造ノ諸材ノ固着鉄ノ心距ハ本表ニ定ムルモノヨリ適當ニ減少スベシ

梁上側板及船側縱通材等ノ切込板又ハ斷切板ヲ肋骨間ニ於テ外板ニ固着スル山形鋼ノ各邊ニハ肋骨心距 660 耗以下ナルトキハ四箇、660 耗ヲ超エ 760 耗以下ナルトキハ五箇、760 耗ヲ超エ 840 耗以下ナルトキハ六箇、840 耗ヲ超エ 915 耗以下ナルトキハ七箇ノ鉄ヲ用フベシ

正肋材ト副肋材トヲ固着スル鉄ノ心距ト鉄徑トノ比ハ當該箇所ニ於ケル肋骨ト外板トノ固着ニ關スル規定ヲ準用シテ定ムベシ但シ溝形鋼ニ副肋材ヲ附シタル肋骨等ニ於テ固着鉄列ガ肋骨ノ深サノ端ニ近キトキハ鉄ノ心距ヲ其ノ徑ノ 7 倍ト爲スコトヲ得

第十三條 二重底ノ外側肘板、縁板及内底板ト控山形鋼、控板又ハ帶板トヲ固着スル鉄ノ心距ハ其ノ徑ノ 5 倍以下ト爲スベシ

第十四條 船首材、船尾骨材、方形龍骨又ハ螺旋軸支肘ト外板トヲ固着スル鉄及船尾骨材ト船尾肋板トヲ固着スル鉄ノ心距ハ其ノ徑ノ 5 倍以下ト爲スベシ

外板ト船首材等及船尾骨材ト船尾肋材トノ固着

第四節 雜 則

山形鋼ノ邊ノ幅
第十五條 固着用山形鋼ノ各邊ノ幅ハ特ニ規定アル場合ノ外其ノ厚サニ應ジ次表ニ依リ之ヲ定ムベシ

山形鋼ノ厚サ (耗)	山形鋼各邊ノ幅(耗)		
	二列鉸固着		一列鉸固着
	並列鉸固着	千鳥形固着	
以上 以下 4.5 - 5.5	100	75	50
6 - 8.5	115	100	65
9 - 12.5	130	115	75
13 - 18	150	130	90
18.5 - 23.5	180	150	90
24 - 28.5	200	180	100
29 - 32	230	200	115

油密一列鉸固着ノ山形鋼ノ邊ノ幅ハ必要ニ應ジ前項ニ依ルモノヨリ適當ニ増加スベシ

第十六條 遮浪甲板船ノ遮浪甲板及其ノ他ノ船舶ノ上甲板ニ設クル暴露セル機關室口圍壁ノ板及防撓材ハ水密隔壁ニ準ジ固着スベシ

増厚セル鋼板ノ固着
第十七條 肋骨心距ヲ増大シタル爲又ハ腐蝕若ハ磨耗ニ備フル爲増厚セル鋼板ノ固着ニ用フル鉸ノ徑、鉸列及衝接覆板ノ厚サハ増厚セザル鋼板ノ厚サニ依リ定ムルコトヲ得但シ衝接ニ用フル單覆板ノ厚サ又ハ二重覆板ノ厚サノ和ヲ増厚セル鋼板ノ厚サ未滿ト爲スコトヲ得ズ

肋骨鉸ト縦線鉸トノ兼用
第十八條 肋骨ノ箇所ニ於ケル外板ノ縦線ヲ固着スル鉸ト肋骨ヲ外板ニ固着スル鉸トノ兼用ニ付テハ次ノ規定ニ依ル

- 一、外板ノ縦線ガ一列鉸接合ナルトキハ鉸一箇ヲ兼用スベシ
- 二、外板ノ縦線ガ二列鉸接合ナル場合ニ於テハ外板及肋骨ヲ「ジョツグル」セザルトキハ鉸一箇ヲ兼用シ、外板又ハ肋骨ヲ「ジョツグル」スルトキハ鉸二箇ヲ兼用スベシ
- 三、外板ノ縦線ガ三列鉸接合ナルトキハ外板ノ縁ニ近キ鉸二箇ヲ兼

用スベシ

皿 取 第十九條 外板、暴露甲板、二重底内底板並ニ深水槽ノ隔壁板及頂板ニ於ケル鉸孔ハ填隙ヲ施スベキ側ニ於テ板ノ厚サ 13 耗以下ナルトキハ板ノ全厚ニ互リ約 60 度ノ頂角ヲ以テ、厚サ 13 耗ヲ超ユルトキハ板ノ厚サノ 90% ニ互リ約 45 度ノ頂角ヲ以テ皿取スベシ

兩剪斷ヲ受クル鉸
第二十條 單剪斷ヲ受クル鉸ニ依ル固着ノ代リニ兩剪斷ヲ受クル鉸ニ依ル固着ヲ用フルトキハ鉸ノ效力ハ單剪斷ヲ受クル鉸ノ效力ノ 1.75 倍ニ相當スルモノト看做シ鉸ノ心距及鉸列ヲ變更スルコトヲ得但シ水密又ハ油密ヲ要スル箇所ノ鉸心距ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

第五節 深油槽ニ關スル特別規定

鉸 列 第二十一條 深油槽ヲ構成スル隔壁板、甲板、軸路板及底板ノ縱橫線ニシテ滿載状態ニテ油ノ達スル最高面ヨリ下方 4.8 米ヲ超ユル箇所ニ在ルモノハ少クトモ二列鉸接合ト爲スベシ但シ油槽ト油槽トヲ仕切ル中間隔壁板ノ縦線ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

心 距 深油槽ヲ構成スル隔壁板、甲板、軸路板及底板ノ縱橫線接合ノ固着鉸ノ心距ハ板ノ厚サ 12.5 耗以下ナルトキハ鉸徑ノ 3.5 倍以下、12.5 耗ヲ超ユルトキハ鉸徑ノ 4 倍以下ト爲スベシ

第二十二條 深油槽ノ隔壁板、頂板及底板ノ周圍山形鋼ノ固着鉸ノ心距ハ其ノ徑ノ 5 倍以下ト爲スベシ

第二十三條 深油槽ヲ構成スル隔壁ノ防撓橫桁ト隔壁板トノ固着ハ橫桁ノ兩端ヨリ其ノ深サノ 2 倍ニ相當スル箇所迄ノ間ニ於テハ二列鉸固着、其ノ他ノ箇所ニ於テハ一列鉸固着ト爲シ鉸ノ心距ハ其ノ徑ノ 4 倍以下ト爲スベシ

防撓橫桁ト外板トノ固着ハ二列鉸固着ト爲シ鉸ノ心距ハ其ノ徑ノ 4 倍以下ト爲スベシ

第二十四條 深油槽内ノ肋骨ト外板トヲ固着スル鉸ノ心距ハ其ノ徑ノ 5.5 倍以下ト爲スベシ

深油槽ヲ構成スル隔壁及軸路ノ防撓材ノ固着鉸ノ心距ハ其ノ徑ノ 6 倍以下ト爲スベシ

第二十五章 電弧熔接

第一節 總 則

- 第一條** 本章ノ規定ハ壓延鋼材相互ノ電弧熔接ニ之ヲ適用ス
鑄鋼材、鍛鋼材其ノ他壓延鋼材ニ非ザル材料ヲ相互ニ熔接シ又ハ之
ト壓延鋼材トヲ熔接セントスルトキハ委員會ノ承認ヲ受クベシ
銲接合ニ付規定ナキ接合ヲ電弧熔接ニ依リ行ハントスルトキハ本章
ノ規定ニ付適當ニ斟酌スルコトヲ得
- 第二條** 電弧熔接ノ施工ノ箇所、様式等ニ付テハ豫メ圖面及明細書
ヲ添ヘ委員會ノ承認ヲ受クベシ
- 第三條** 電極棒ハ其ノ化學成分及材質竝ニ之ヲ用ヒ熔接シタル試験
片ガ第二節ノ規格ニ適合シ豫メ本會ノ承認ヲ受ケタル型ノモノナル
コトヲ要ス
- 第四條** 熔接工ハ當該熔接工事ニ熟練シタル者ニシテ豫メ第三節ノ
試験ニ合格シ本會ノ承認ヲ受ケタル者ナルコトヲ要ス
本會ハ熔接ノ施工方法又ハ結果ヲ適當ナラズト認ムルトキハ當該熔
接工ヲシテ現場ニ於ケルト同一條件ノ下ニ試験片ヲ熔接セシメ第三
節ノ規定ニ準ジ試験ヲ行ヒ必要アリト認ムルトキハ前項ノ承認ヲ取
消スコトアルベシ

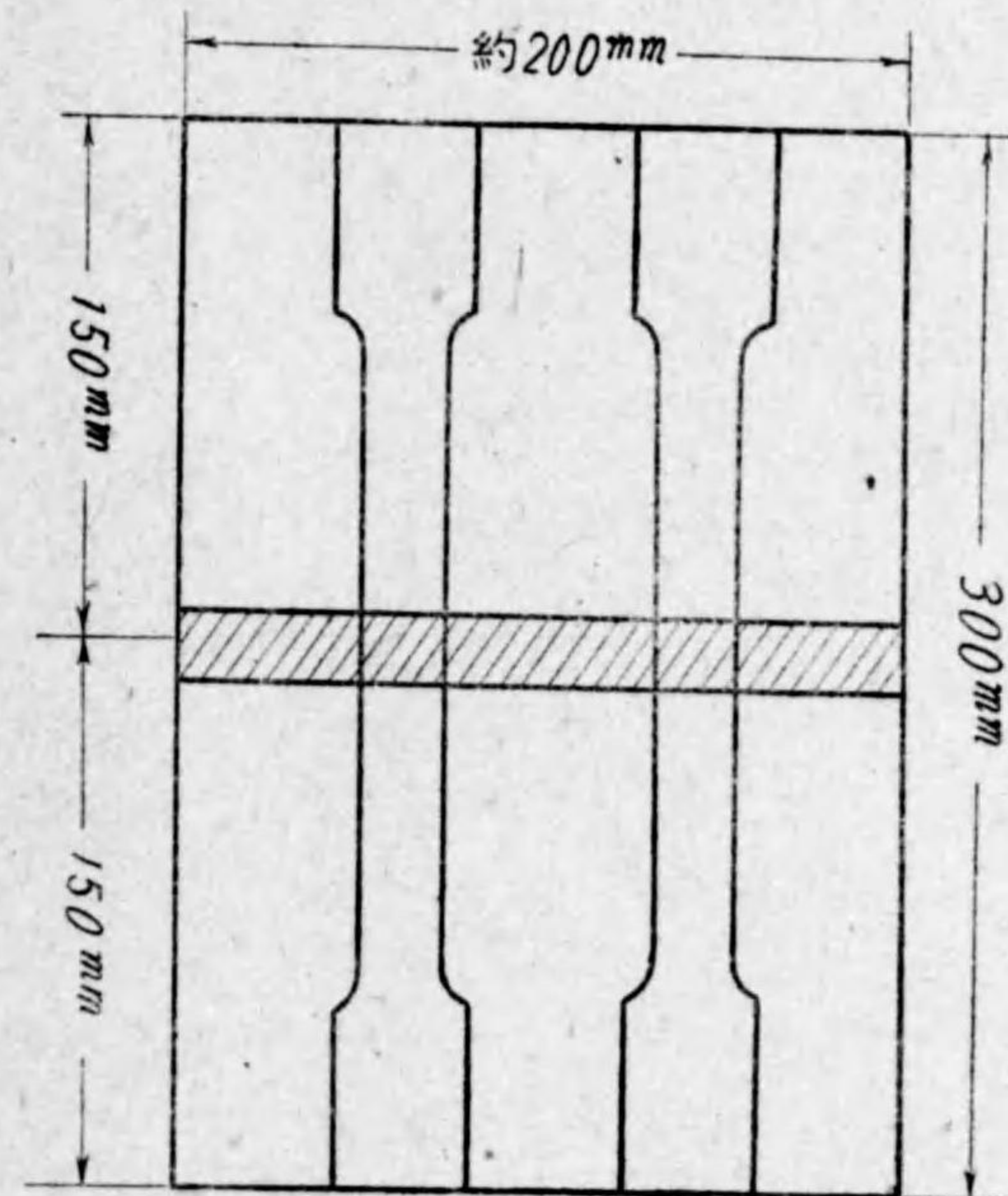
第二節 電 極 棒

- 化學成分 第五條** 電極棒（被覆電極棒ニ在リテハ其ノ鋼心）ノ化學成分ハ成
ルベク炭素含有量 0.06 乃至 0.18%、硅素含有量 0.05% 以下、滿
俺含有量 0.3 乃至 0.6%、磷及硫黃ノ含有量各々 0.04% 以下、窒
素含有量 0.01% 以下ナルコトヲ要ス
電極棒ノ被覆ハ均一ニ塗布セラレ十分ニ乾燥セラレ龜裂、巢孔等ヲ
有セズ且部分的ニモ剝落シ居ラザルコトヲ要ス
- 熔着金屬ノ試験 第六條** 熔着金屬ハ之ノミヲ以テ製作シタル第四號試験片（第五編
第二章第一條參照）二箇ニ付抗張試験ヲ行ヒ各試験片ノ成績ガ抗張
力每平方耗 39 珎以上、標點間伸長百分率 20 以上ノモノナルコト

ヲ要ス

熔着金屬ハ徑 14 耗ノ試験片二箇ヲ 25 耗ノ内側半徑ヲ以テ 120 度
以上屈曲スルモ裂疵ヲ生ゼザルモノナルコトヲ要ス
前各項ノ試験ニ於テ試験片中一箇ハ試験ニ合格シ他ノ一箇ハ之ニ合
格セザルトキハ更ニ試験片二箇ヲ製作シテ再試験ヲ行ヒ二箇トモ試
験ニ合格シタルトキハ之ヲ合格ト爲スコトヲ得

- 熔接試験 第七條** 衝合熔接試験ノ試験片ハ第五編第三章ノ規格ニ適合スル厚
サ 6 耗、13 耗及 19 耗ノ各鋼板ヨリ次ノ各號ニ依リ製作スルモノ
トス
一、一箇ノ圓材ヨリ第一號試験片（第五編第二章第一條參照）二箇
ヲ作ルコト
二、前號ノ試験片ヲ採取シタル母材ノ該試験片ニ成ルベク近接シタ
ル箇所ヨリ鋼板ヲ採取シ之ヲ第四節ノ規定ニ從ヒ衝合熔接ト爲シ



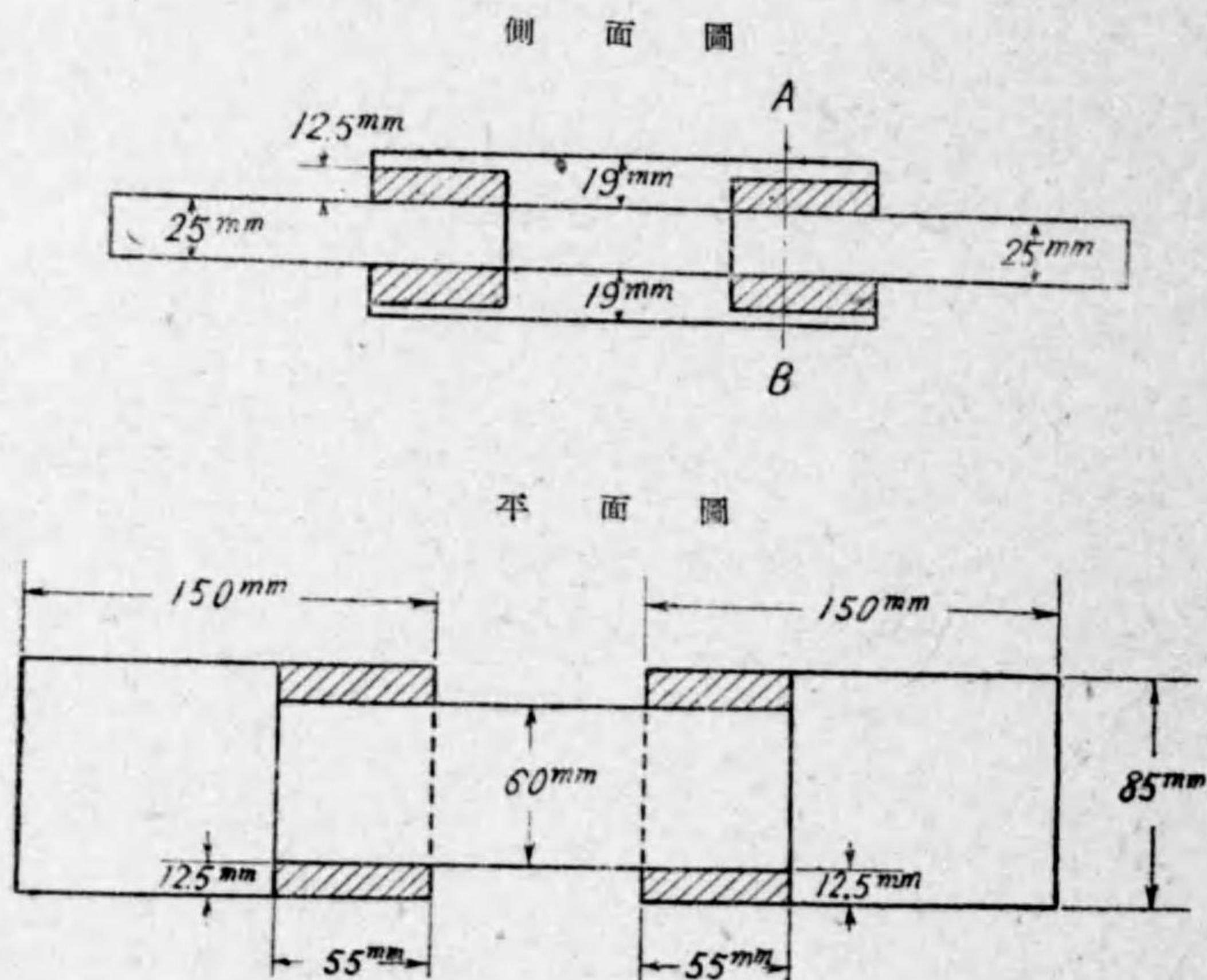
熔接線=直角ノ方向ヨリ該線ヲ中央部ニ置キテ前號ノ試験片ト同一寸法ノ試験片(以下衝合熔接試験片ト稱ス)二箇ヲ作ルコト但シ補強盛ハ平削スルモノトス(附圖参照)
 二箇ノ衝合熔接試験片ノ平均抗張力ハ第一號ノ試験片ノ平均抗張力ノ90%以上ナルコトヲ要ス

第八條 側面隅肉熔接試験片ハ第五編第三章ノ規格ニ適合スル鋼板ヨリ次ノ各號ニ依リ製作スルモノトス

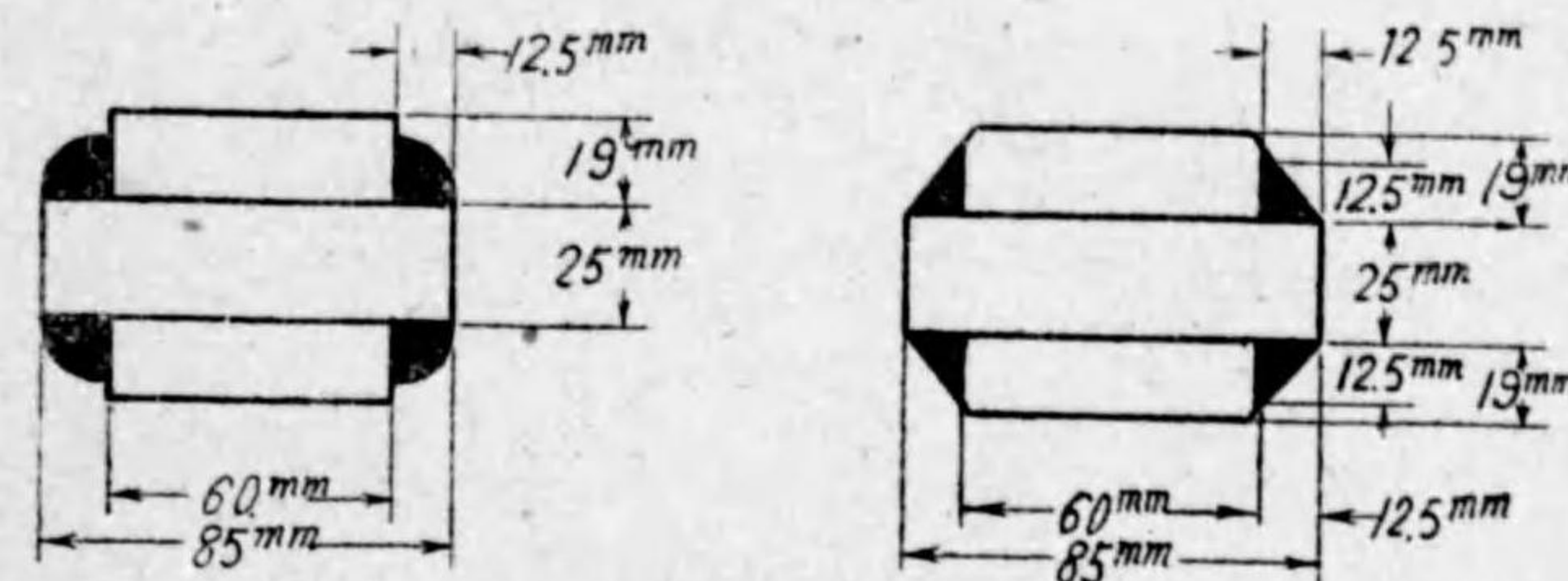
- 一、試験片ノ形狀、寸法及熔接箇所ハ次圖ニ依ルコト但シ隅肉ノ斜面ハ平削スルモノトス
- 二、下向熔接ニ依ル試験片二箇ヲ作ルコト但シ堅又ハ上向専用ノ電極棒ノ試験ヲ受ケントスルトキハ堅熔接又ハ上向熔接ニ依リ試験片ヲ作ルコト

三、熔接ハ第四節ノ規定ニ從ヒ行フコト

側面隅肉熔接試験片ハ各々49 吨ノ抗張荷重ニ堪フルコトヲ要ス



AB 切斷圖



前項ノ試験ニ於テ試験片中一箇ハ試験ニ合格シ他ノ一箇ハ之ニ合格セザルトキハ更ニ試験片二箇ヲ製作シテ再試験ヲ行ヒ二箇トモ試験ニ合格シタルトキハ之ヲ合格ト爲スコトヲ得

第三節 熔接工ノ技備試験

試験片 **第九條** 熔接工ノ技備試験ニ用フル試験片ハ次ノ各號ニ依リ製作スルモノトス

- 一、第五編第三章ノ規格ニ適合スル厚サ10 耗以上13 耗以下ノ鋼板ヨリ第七條第一項第二號ノ規定ヲ準用シテ第一號試験片(第五編第二章第一條参照)及幅35 耗以上ノ屈曲試験片(第五編第二章第二條参照)各一箇ヲ作ルコト
- 二、試験片ハ第二節ノ規格ニ適合スル電極棒ヲ用ヒ第四節ノ規定ニ從ヒ熔接スルコト
- 三、堅熔接又ハ上向熔接ノ試験ヲ受ケントスル熔接工ニ對シテハ試験片ノ熔接ハ堅熔接又ハ上向熔接ニテ行フコト

合格ノ條 **第十條** 前條ノ各試験片ニ付夫々抗張試験又ハ屈曲試験ヲ行ヒ其ノ成績ガ次ノ各號ニ適合スルトキハ之ヲ合格トス

- 一、抗張試験 抗張力毎平方耗37 耗以上ナルコト
- 二、屈曲試験 常溫ノ儘厚サノ2 倍以下ノ内側半徑ヲ以テ90 度屈曲スルモ裂疵ヲ生ゼザルコト

効力 **第十一條** 熔接工ノ技備試験ノ効力ハ一年以内トス

第四節 熔接施工方法

施工條件 **第十二條** 電極棒及使用電流ノ種類ハ各熔接工ニ付第三節ニ定ムル試

驗片製作=使用シタルモノナルコトヲ要シ使用電流ノ量及電壓ハ該
 試驗片製作ノ際使用シタルモノト成ルベク同一ナルコトヲ要ス

熔接現場ニハ何時ニテモ電流及電壓ヲ測定シ得ル設備ヲ爲スベシ

歪ミノ防 止 **第十三條** 母材ハ熔接前之ヲ定位置ニ置キ熔接工事中其ノ位置ヲ保持
 セシムル爲適當ノ方法ヲ講ズベシ

母材ノ組合セ及熔接順序等ニ付適當ナル考慮ヲ爲シ熔接ニ因リ生ズ
 ル反リ、歪ミ及内力ヲ最少ナラシムベシ

熔接ト銲接台トヲ併用スル部分ハ成ルベク熔接後ニ銲接合ヲ爲スベ
 シ

第十四條 熔接工事ハ成ルベク蔽圍シタル場所ニ於テ行フベシ

寒氣嚴シキ場所ニ於ケル熔接工事ハ成ルベク之ヲ避クルコトヲ要ス

第十五條 熔接ハ母材ノ熔接面ヲ清掃シ成ルベク錆、黒皮、油、塗料、
 塵、瓦斯切斷ニ依ル燒滓等ヲ除去シタル後之ヲ行フベシ

下層熔着金屬上ニ熔接ヲ反覆セントスルトキハ其ノ都度輕ク鎚打ヲ
 爲シ且「ブラツシ」等ヲ以テ熔着金屬ノ表面ヲ清掃スベシ

第十六條 熔接工事ハ成ルベク下向ニ行フベシ

隔壁、甲板室ノ周壁其ノ他船體ト別箇ニ組立テ得ル構造物ハ成ルベ
 ク之ヲ船ニ取附クル前熔接スベシ

第十七條 異ル厚サノ鋼板ノ衝合熔接ハ熔接部ニ於ケル鋼板ノ厚サガ
 同一ト爲ル迄厚キ方ノ鋼板ニ緩勾配ヲ附シタル後熔接ヲ行フベシ

前項ノ規定ハ熔接ノ箇所又ハ板ノ厚サノ差ト母材ノ厚サトノ關係ヲ
 考慮シ検査員ニ於テ差支ナシト認ムルトキハ之ヲ適用セザルコトヲ
 得

形鋼ト鋼
 板トノ熔
 接

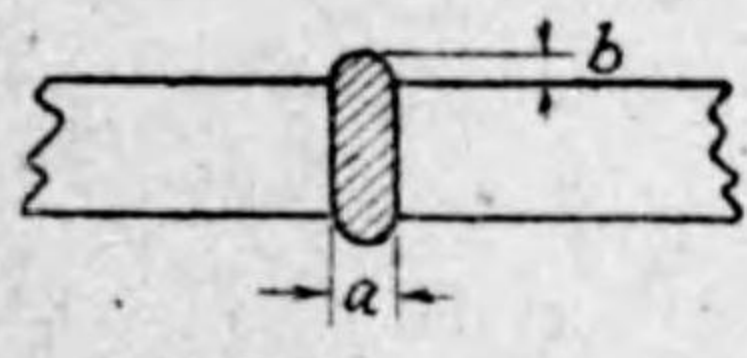
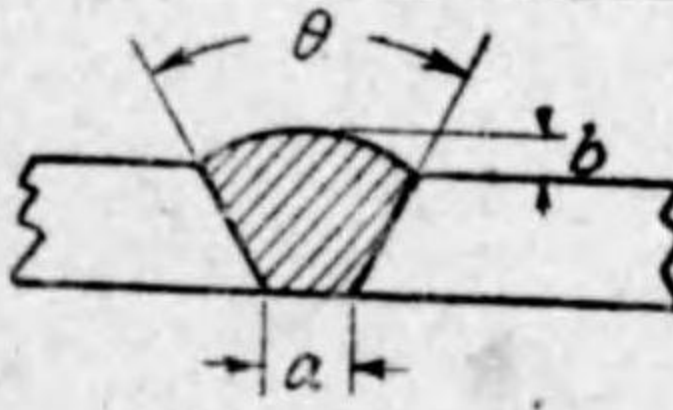
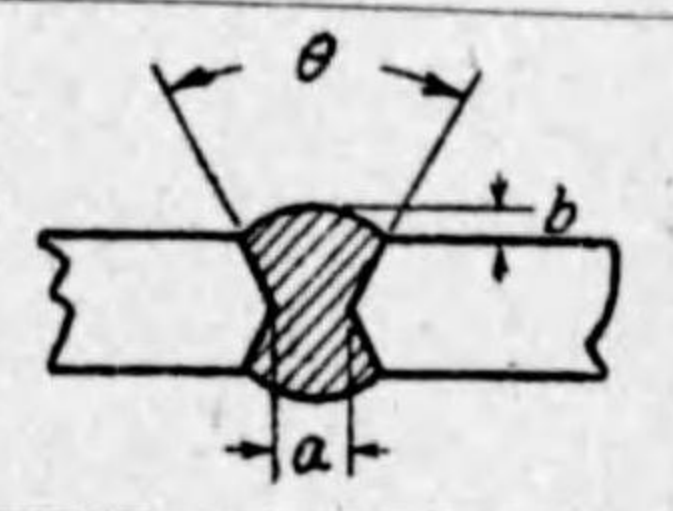
第十八條 鋼板ニ熔接スル肋骨、梁、防撓材等ニ形鋼ヲ用フルトキハ
 成ルベク鋼板ニ平接スル邊ヲ有セザル様形鋼ヲ配置スベシ但シ船尾
 水艙内、船首 Lノ $\frac{1}{5}$ 間及對水構造部ニ於ケル肋骨ニ付テハ此ノ
 限ニ在ラズ

前項但書ノ箇所ニ於テ外板ニ平接スル邊ヲ有セザル肋骨ヲ使用スル
 トキハ當該箇所ニ於ケル外板ノ厚サヲ増スカ其ノ他適當ノ補強ヲ爲

スベシ

第十九條 平板龍骨ト中心線桁板又ハ中心線内龍骨トヲ隅肉熔接ト爲
 シ固着用山形鋼ヲ省略スルトキハ中心線桁板又ハ中心線内龍骨ノ截
 面積ヲ規定ノモノヨリ該山形鋼ノ截面積ノ 70% 以上増加シタルモ
 ノト爲スベシ

様 式 **第二十條** 衝合熔接ノ様式ハ成ルベク次表ニ依ルベシ但シ補強盛ノ程
 度ハ熔接箇所ニ應ジ検査員ノ見込ニ依リ適當ニ斟酌スルコトヲ得

I 形	V 形				X 形			
								
板ノ厚サ4耗未満ノモノニ使 用シ a ハ 2 耗以下 b ハ 1 耗トス	板ノ厚 サ(耗)	a (耗)	b (耗)	θ	板ノ厚 サ(耗)	a (耗)	b (耗)	θ
	4	1	1	60°	16以上	3	2	60°
	6	2	1.5	"				
	8	2	2	"				
	10	2.5	2	"				
	11	2.5	2.5	"				
	13	3	2.5	"				
	14以上 25以下	3	3	"				

第二十一條 隅肉熔接ノ脚及喉厚ハ夫々薄キ方ノ母材ノ厚サ及其ノ
 70% ヲ標準トス

第二十二條 水密又ハ油密ヲ要スル箇所ノ熔接ヲ隅肉熔接ト爲ス場合
 ニ於テハ片側ハ前條ノ規定ニ依ル連續熔接ト爲シ他側ノ熔接ハ少ク
 トモ輕連續熔接又ハ斷續熔接ト爲スベシ

第二十三條 鋼板ト形鋼等トノ熔接ハ水密ヲ要スル場合其ノ他特ニ連
 續熔接ト爲スヲ要スル場合ノ外成ルベク斷續隅肉熔接ト爲シ且形鋼
 等ノ兩側ニ施行スベシ

千鳥熔接ヲ以テ形鋼等ヲ銅板ニ熔接スル場合ト雖モ其ノ兩端ニ於テハ竝列熔接ト爲スベシ

熔着金屬ノ長サ及心距

第二十四條 斷續隅肉熔接ノ各熔着金屬ノ長サハ 75 耗ヲ標準トス但シ熔着金屬ノ長サニハ其ノ兩端ニ於ケル壺ノ長サヲ算入セズ
 熔接セララル形鋼等ノ各側ニ於ケル斷續隅肉熔接ノ熔着金屬ノ心距ハ次表ニ依ルベシ

斷續隅肉熔接ノ種類	薄キ方ノ母材ノ厚サ(耗)	熔接箇所ガ一列鉋固着ト爲スベキ場合ニ於ケル千鳥熔接			熔接箇所ガ二列鉋固着ト爲スベキ場合ニ於ケル竝列熔接又ハ千鳥熔接		
		7 以下	15	20 以上	7 以下	15	20 以上
當該固着ヲ鉋固着ト爲ス場合ノ鉋心距(鉋徑ノ倍数ニテ)	4	210耗	270	300	105	135	150
	5	270	330	360	135	165	180
	6	310	400	430	155	200	215
	7	360	450	500	180	225	250
	7ヲ超ユルトキ	420	520	570	210	260	2・5
備考 鉋心距及母材ノ厚サガ表ニ掲グルモノノ中間ニ在ルトキハ挿間法ニ依リ心距ヲ定ム							

熔着金屬ノ長サ及心距ハ前二項ノ規定ニ依ルモノヨリ母材ノ厚サガ特ニ大ナルトキハ適當ニ増加シ母材ノ厚サガ特ニ小ナルトキハ適當ニ減少スルコトヲ得

熔接線ト鉋接トノ交叉

第二十五條 銅板ニ形鋼等ヲ斷續熔接ニ依リ熔接スル場合ニ於テ熔接線ガ鉋ヲ以テ固着シタル銅板ノ縱橫線ト交叉スルトキハ該縱橫線ノ箇所ヲ熔接スルコトヲ得ズ

平行ナル連續熔接相互ノ間隔ハ成ルベク 250 耗以上ト爲スベシ

累熔接

第二十六條 累熔接ニ於ケル母材ノ累接ノ幅ハ薄キ方ノ母材ノ厚サノ 3 倍ヲ標準トス

覆板

第二十七條 當金接手ニ用フル覆板ノ厚サハ薄キ方ノ母材ノ厚サノ $\frac{1}{2}$ 及 4 耗ノ中大ナルモノ以上ト爲スベシ

栓熔接

第二十八條 栓熔接ノ孔ノ徑ハ孔ヲ穿ツ母材ノ厚サノ 2.5 倍及 10 耗

ノ中大ナルモノ以上ト爲シ 60 度ノ頂角ヲ以テ皿取スベシ

第二十九條 氣泡多キ箇所其ノ他不完全ナル熔接箇所ハ之ヲ除去シ再熔接ヲ行フコトヲ要ス

V形衝合熔接ニ於テハ融合部ガ銅板ノ裏面ニ到達スル程度ニ熔込ヲ完全ナラシメ熔込不十分ナルトキハ裏面ヨリ熔接底部ヲ削取シ更ニ熔接ヲ施スベシ

第三十條 補強盛ハ特ニ必要アル場合ノ外之ヲ平削スルコトヲ得ズ

熔接部ハ検査員ニ於テ検査ヲ了シタル後ニ非ザレバ之ニ塗裝ヲ施スコトヲ得ズ

第二十六章 橋、荷役其ノ他ノ作業ノ設備

「デリック」ヲ取附ケザル橋

第一條 汽船ニ於ケル鋼製橋ニシテ貨物用「デリック」ノ柱トシテ使用セザルモノニ在リテハ其ノ徑ヲ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

甲板ノ部分ニ於ケル平均ノ徑 $3.3h$ (輻ニテ)

突梁ノ部分ニ於ケル平均ノ徑 $2.5h$ (輻ニテ)

h ハ甲板ヨリ突梁迄ノ橋ノ高サ(米ニテ)

前項ノ橋ノ橋板ノ厚サハ橋ノ各部ノ徑ニ對シ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ但シ 5 耗ヨリ小ト爲スベカラズ

$$2.55 + \frac{\phi}{10} \quad (\text{耗ニテ})$$

ϕ ハ橋ノ各部分ニ於ケル平均ノ徑(輻ニテ)

橋ノ下端、橋環及突梁ノ部分ニハ橋板ニ橋徑ヨリ小ナラザル長サノ二重張板ヲ取附クベシ

「デリック」ヲ取附クル橋

第二條 汽船ニ於ケル鋼製ノ橋ニシテ貨物用「デリック」ヲ取附クルモノニ在リテハ適當ニ靜索ヲ以テ支持セラレ且「デリック」ノ揚卸スル全荷重ガ普通ノ作業状態ニ於テ一時ニ 10 吨ヲ超エザルモノナルトキハ其ノ徑及橋板ノ厚サハ前條ノ規定ニ依ル但シ甲板ノ下方ヨリ「デリック」臺ノ上方適當ノ高サ迄ノ部分ニ於ケル橋板ノ厚サハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノヨリ小ナルベカラズ

$$C \times \frac{W \times O}{\phi^2} \quad (\text{耗ニテ})$$

W ハ一時ニ吊ル全荷重 (噸ニテ)

O ハ「デリック」ノ最大可働半径 (米ニテ)

ϕ ハ橋ノ平均ノ徑 (糎ニテ)

C ハ係數ニシテ W ガ 5 噸以下ナルトキハ 670、W ガ 10 噸ナルトキハ 600

橋ノ一側ニ於テ同時ニ 2 本以上ノ「デリック」ヲ使用スル場合ニ於テハ前項ノ算式ニ於ケル W×O ハ各「デリック」ニ對スル吊揚荷重及最大可働半径ノ積ノ和ト爲スベシ

第一項但書ノ規定ニ依リ橋板ノ厚サヲ増ス代リニ二重張板ヲ取附クルトキハ橋板及二重張板ノ合厚ヲ同項ノ算式ニ依ル厚サノ 1.16 倍ト爲シ且二重張板ノ上下兩端ノ部分ニ於テ強力ノ急激ナル變化ヲ來サザル構造ト爲スベシ

比較的大ナル荷重ヲ低速度ニテ動作セシムル場合ニ於テ特ニ支索ヲ増設スルトキハ二重張板ヲ取附クル橋ノ橋板及二重張板ノ合厚ハ第一項ノ算式ニ於テ C ノ値トシテ次ニ掲グルモノヲ用ヒテ算定シタルモノニ依ル

荷重 (W)	C
40 噸以上ナルトキ	350
10 噸ヲ超エ 40 噸未滿ナルトキ	810-11.5 W

汽船ニ於テ貨物用「デリック」ノ柱トシテ使用スル鋼製ノ橋ニシテ前各項ニ該當セザルモノノ構造ハ委員會ノ適當ト認ムル所ニ依ル

「デリック」柱
第三條 支索ヲ取附ケザル短キ鋼製「デリック」柱ニ在リテハ板ノ厚サハ前條第一項ノ算式ニ於テ C ノ値トシテ 1340 ヲ用ヒテ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

「リギング」
第四條 橋ニ取附クル「リギング」ハ次表ニ掲グル寸法ノ鋼索ヲ以テ作りタル「シユラウド」2 本ツツヲ橋ノ各側ニ設ケ其ノ下端ニ於ケル「チェーン プレート」ノ位置ガ橋ノ突梁ノ前後夫々橋ノ高サノ

$\frac{1}{4}$ 以上ノ距離ニ在ル様取附ケタルモノト同等以上ノ效力ヲ有スルモノト爲スベシ、此ノ場合橋ノ長サハ甲板ヨリ突梁迄測ルモノトス

「デリック」ニ於ケル荷重 (噸ニテ)	甲板ヨリ突梁迄ノ高サ (米ニテ)				
	9	12	15	18	
0	鋼索ノ徑 (糎ニテ)	20	22	24	26
2.5		24	26	28	30
5.0		28	30	32	34
7.5		30	32	34	38
10.0		32	34	36	

「リギング」用鋼索ハ逓信省令索試験規程ニ依ル試験ニ合格ノモノヲ用フベシ但シ索ノ寸法及配置適當ニシテ「リギング」ノ效力ガ前項ニ規定スルモノト同等以上ナル場合ニ於テハ該試験規程ニ定ムルモノヨリ小ナル強力ノ鋼索ヲ用フルコトヲ得

「リギング スクルー」、其ノ栓及「チェーン プレート」ハ「リギング」用鋼索ニ對シ適當ノモノヲ用フベシ

第五條 橋、「デリック」及「リギング」用ノ鍛造金具ハ良質ニシテ適當ノ寸法ナルモノナルコトヲ要ス

揚貨設備 **第六條** 揚貨設備ハ適當ナル構造及装置ノモノナルコトヲ要ス

第二十七章 艦 裝 品

艦裝數 **第一條** 汽船ニ於テ艦裝數トハ $L \times (B + D)$ ノ算式ニ依リ算定シタル數ニ船樓又ハ甲板室ノ種類ニ應ジ次ノ各號ニ掲グル數ヲ加算シタルモノヲ謂フ

一、低船首樓又ハ低船尾樓ヲ有スル船ニ在リテハ該樓ノ長サト高サトヲ相乗ジタル數

二、船首樓、船橋樓又ハ船尾樓等ヲ有スル船ニ在リテハ船樓ノ長サト高サトヲ相乗ジタル積ノ $\frac{3}{4}$

三、Bノ $\frac{1}{2}$ ヲ超ユル長サ又ハ幅ヲ有スル甲板室其ノ他類似ノ構造

物ヲ備フル船ニ在リテハ其ノ長サト高サトヲ相乗ジタル積ノ $\frac{1}{2}$
帆船ニ於テ艤裝數トハ船樓ヲ有セザル場合ニ於テハ $L \times (B+D)$ ノ
算式ニ依リ算定シタル數ヲ謂ヒ船樓ヲ有スル場合ニ於テハ該數ニ其
ノ $\frac{1}{15}$ ヲ加算シタルモノヲ謂フ
前二項ノ數ヲ算定ニ用フル寸法ハ單位ヲ「メートル」トシ單位下第
二位ニ止ム

錨、錨鎖、
索ノ數量

第二條 船舶ニハ其ノ艤裝數ニ應ジ第一號表又ハ第二號表ニ定ムル
錨、錨鎖及索ヲ備フベシ

特殊ノ製法ニ依ル鋼製ノ錨鎖ニシテ試験ノ成績良好ナルモノハ委員
會ノ承認ヲ受ケ前項ノ規定ニ依ル錨鎖ヨリ小ナル寸法ノモノヲ以テ
之ニ代用スルコトヲ得

第三條 大錨ノ合量ガ表ニ掲グルモノヨリ減少セザル限リ大錨二箇
ヲ備フベキ船舶ニ在リテハ中一箇ハ 7.5% 以内又三箇ヲ備フベキ船
舶ニ在リテハ中一箇ハ 15% 以内、一箇ハ 7.5% 以内表ニ掲グルモ
ノヨリ少量ナルモノト爲スモ妨ナク又各大錨ノ單量ヲ相等シキモノ
ト爲スモ妨ナシ

第四條 有錐錨ノ錨錐ノ重量ハ錨錐ヲ除キタル錨ノ重量ノ $\frac{1}{4}$ 以上ナ
ルコトヲ要ス

無錐錨ノ錨柄ヲ除キタル重量ハ錨ノ全重量ノ $\frac{3}{5}$ 以上ナルコトヲ要
ス

第五條 錨、錨鎖及鋼索ハ夫々遞信省令錨試験規程、鎖試験規程又
ハ索試験規程ニ依ル試験ニ合格ノモノナルコトヲ要ス但シ航路ヲ沿
海區域以下ニ制限スル船舶及航路ヲ近海區域ニ制限スル帆船ニ備フ
ルモノニ在リテハ此ノ限ニ在ラズ

第六條 航路ヲ沿海區域以下ニ制限スル汽船ニ付テハ検査員ニ於テ
差支ナシト認ムルトキハ大錨三箇ヲ備フベキ場合ト雖モ其ノ數ヲ二
箇ト爲スコトヲ得但シ中一箇ノ大錨ノ錨量ハ表ニ掲グル單量以上、
他ノ一箇ハ該單量ノ 85% 以上ト爲スベシ

日本形錨
ノ使用 **第七條** 航路ヲ近海區域以下ニ制限スル帆船及總噸數 50 噸未滿ノ
汽船ニ在リテハ日本形錨ヲ代用スルモ妨ナシ

前項ノ規定ニ依リ代用シタル日本形錨ニ對シテハ相當ノ錨索ヲ以テ
錨鎖ニ代用スルモ妨ナシ

日本形錨ノミヲ備フル帆船ノ錨數、錨量竝ニ錨索及其ノ他ノ索ノ
數、徑及長サハ検査員ノ適當ト認ムル所ニ依ル

麻索及棕
相索ノ使
用

第八條 第一號表及第二號表ニ定ムル中錨ノ鎖又ハ鋼索ハ相當ノ大
サノ麻索又ハ棕相索ヲ以テ之ニ代用シ又同表中挽索ノ麻索ハ相當ノ
大サノ棕相索ヲ以テ之ニ代用スルモ妨ナシ

第九條 總噸數 30 噸未滿ノ帆船、浚渫船、航路ヲ平水區域ニ制限
スル非旅客船及航路ヲ湖川港内ニ制限スル船舶ニ付テハ錨數、錨量
竝ニ錨鎖、大索等ノ徑及長サハ検査員ノ適當ト認ムル程度迄之ヲ減
ズルコトヲ得

漁船ニ對
スル特別
規定

第十條 漁船ハ推進機關ヲ備フルトキハ總テ之ヲ汽船ト看做シ第一
條第一項ノ規定ニ依リ艤裝數ヲ算定スベシ

第五條乃至第七條及前條ノ規定ハ漁船ニ付テハ其ノ種類及大小ニ應
ジ検査員ノ適當ト認ムル所ニ依リ之ヲ準用ス

第十一條 錨ハ常時使用セザルモノト雖モ取出シ易キ場所ニ備ヘ置ク
ベシ

重量 150 斤以上ノ錨ヲ備フル船舶ニハ適當ナル揚錨ノ設備ヲ爲スベ
シ

第十二條 艤裝品トシテ使用スル錨鎖ハ進水ノ際曳鎖トシテ之ヲ使用
スベカラズ

錨鎖ノ内端ハ堅牢ナル「アイプレート」ニ「シャツクル」止メト爲
スカ又ハ同等效力ノ裝置ニ依リ之ヲ繫止ムベシ

揚錨機

第十三條 揚錨機ハ動作良好、構造堅牢ニシテ錨鎖ノ寸法ニ適合スル
モノナルコトヲ要ス

揚錨機ハ強固ナル臺ニ螺釘ヲ以テ取附クベシ又揚錨機及錨鎖管ハ錨
鎖ノ運動ヲ十分圓滑ナラシムル様之ヲ配置スベシ

載裝數	錨數		錨量(有鉛錨ハ其ノ鉛量ヲ除ク)				大錨鎖		中錨鎖		中錨鎖又ハ鋼索		大索(麻索又ハ鋼索)					
	大	中	大錨		中錨		長サ	徑	長サ	徑	鋼索		大索					
			單量	合量	單量	合量					單量	合量	數	長サ	徑	數	長サ	徑
ヲ超エ 以下			單量	合量	單量	合量	單量	合量	單量	合量	長サ	徑	數 <td>長サ</td> <td>徑</td> <td>數 <td>長サ</td> <td>徑</td> </td>	長サ	徑	數 <td>長サ</td> <td>徑</td>	長サ	徑
80-90	2		50	10	65	130	100	12	125	13	110	28	1	80	20	1	110	30
90-105	2		65	130	80	160	125	13	140	14	110	30	1	110	22	1	110	32
105-140	2	1	75	150	95	190	150	14	150	14	110	32	1	110	22	1	110	35
140-175	2	1	100	200	125	250	175	16	175	16	135	35	1	135	22	1	135	40
175-220	2	1	140	280	175	350	200	17	200	17	135	40	1	135	22	1	135	45
220-280	2	1	180	355	230	445	225	18	225	18	135	45	1	165	24	1	165	45
280-335	2	1	215	430	265	530	225	19	225	19	135	45	1	165	32	1	165	45
335-390	2	1	255	510	320	635	250	21	250	21	135	50	1	165	32	1	165	50
390-445	2	1	290	585	370	725	300	22	300	22	135	50	1	165	32	1	165	50
445-500	2	1	330	660	420	825	300	24	300	24	135	55	1	165	40	1	165	55
500-555	2	1	370	735	460	915	300	25	300	25	135	60	1	165	45	1	165	60
555-620	3	1	420	810	520	1015	300	27	300	27	135	60	1	165	45	1	165	60
620-685	3	1	510	1020	635	1205	350	29	350	29	135	65	1	165	45	1	165	65
685-750	3	1	595	1190	735	1425	350	30	350	30	135	70	1	165	50	1	165	70
750-825	3	1	685	1370	850	1625	375	32	375	32	135	70	1	165	50	1	165	70
825-900	3	1	775	1550	965	1845	400	34	400	34	165	75	1	165	50	1	165	75
900-985	3	1	865	1740	1080	2075	400	36	400	36	165	75	1	165	50	1	165	75
985-1075	3	1	950	1940	1180	2300	400	36	400	36	165	75	1	165	50	1	165	75
1075-1180	3	1	1040	2150	1295	2575	400	38	400	38	165	75	1	165	50	1	165	75
1180-1290	3	1	1145	2370	1425	2865	450	40	450	40	165	75	1	165	50	1	165	75
1290-1410	3	1	1245	2540	1550	3115	450	42	450	42	165	75	1	165	50	1	165	75
1410-1550	3	1	1345	2730	1675	3405	450	43	450	43	165	75	1	165	50	1	165	75
1550-1720	3	1	1450	2940	1805	3715	450	44	450	44	165	75	1	165	50	1	165	75
1720-1915	3	1	1575	3150	1970	4065	450	46	450	46	165	75	1	165	50	1	165	75
1915-2110	3	1	1700	3360	2135	4380	450	48	450	48	165	75	1	165	50	1	165	75
2110-2320	3	1	1830	3585	2285	4710	500	48	500	48	165	75	1	165	50	1	165	75

載裝數	錨數		錨量(有鉛錨ハ其ノ鉛量ヲ除ク)				大錨鎖		中錨鎖		中錨鎖又ハ鋼索		大索(麻索又ハ鋼索)					
	大	中	大錨		中錨		長サ	徑	長サ	徑	鋼索		大索					
			單量	合量	單量	合量					單量	合量	數	長サ	徑	數	長サ	徑
ヲ超エ 以下			單量	合量	單量	合量	單量	合量	單量	合量	長サ	徑	數 <td>長サ</td> <td>徑</td> <td>數 <td>長サ</td> <td>徑</td> </td>	長サ	徑	數 <td>長サ</td> <td>徑</td>	長サ	徑
2320-2535	3	1	1980	5040	2475	7060	600	50	500	52	220	32	2	165	60	2	165	32
2535-2760	3	1	2135	6070	2665	7995	600	52	500	54	220	36	2	165	60	2	165	36
2760-2990	3	1	2255	6500	2860	8130	600	54	500	56	220	36	2	165	60	2	165	36
2990-3235	3	1	2440	6935	3050	8660	600	56	500	58	220	38	2	165	60	2	165	38
3235-3495	3	1	2590	7390	3240	9545	600	58	500	60	220	40	2	165	60	2	165	40
3495-3755	3	1	2770	7900	3455	9880	600	58	500	62	220	40	2	165	60	2	165	40
3755-4015	3	1	2945	8410	3685	10515	600	60	550	64	240	42	2	185	65	2	185	42
4015-4275	3	1	3125	8915	3910	11150	600	62	550	66	240	44	2	185	65	2	185	44
4275-4535	3	1	3300	9425	4130	11785	600	64	550	68	240	44	2	185	65	2	185	44
4535-4795	3	1	3480	9930	4345	12420	600	66	550	70	240	44	2	185	65	2	185	44
4795-5070	3	1	3685	10460	4570	13080	600	66	550	72	240	44	2	185	65	2	185	44
5070-5350	3	1	3880	11020	4825	13770	600	68	600	74	240	44	2	185	65	2	185	44
5350-5630	3	1	4065	11580	5080	14480	600	70	600	76	240	44	2	185	65	2	185	44
5630-5925	3	1	4240	12090	5310	15140	600	70	600	78	240	44	2	185	65	2	185	44
5925-6225	3	1	4420	12600	5535	15800	600	72	600	80	240	44	2	185	65	2	185	44
6225-6520	3	1	4620	13150	5765	16460	600	74	600	82	240	44	2	185	65	2	185	44
6520-6820	3	1	4800	13660	5995	17070	600	76	600	84	240	44	2	185	65	2	185	44
6820-7135	3	1	4980	14170	6225	17730	600	78	600	86	240	44	2	185	65	2	185	44
7135-7450	3	1	5155	14730	6450	18390	600	80	600	88	240	44	2	185	65	2	185	44
7450-7785	3	1	5330	15290	6705	19100	600	82	600	90	240	44	2	185	65	2	185	44
7785-8140	3	1	5500	15850	6960	19810	600	84	600	92	240	44	2	185	65	2	185	44
8140-8510	3	1	5765	16460	7215	20530	600	85	600	94	240	44	2	185	65	2	185	44
8510-8900	3	1	5995	17070	7495	21340	600	85	600	96	240	44	2	185	65	2	185	44
8900-9310	3	1	6225	17730	7775	22150	600	88	600	98	240	44	2	185	65	2	185	44
9310-9755	3	1	6450	18390	8075	22960	600	91	600	100	240	44	2	185	65	2	185	44

備考 表中ノ※印欄鋼索ハ十二本線六ツ撻柔鋼索ヲ、⊕印欄鋼索ハ二十四本線六ツ撻特別柔鋼索ヲ、⊖印欄鋼索ハ三十本線六ツ撻特別柔鋼索ヲ使用シタル場合ノ寸法トス

第二號表 帆船、船、錨、錨鎖、錨鎖及大索表

載裝數	錨數			錨量(算量ヲ除ク)		大錨鎖		中錨鎖又ハ鎖		錨鎖(麻索又ハ鋼索)		大索(麻索又ハ鋼索)		小		
	大	中	小	單量	合量	長サ	徑	長サ	徑	長サ	徑	數	長サ	徑	數	徑
ヲ超エ	2	1	1	75	150	125	12	75	9	110	28	1	165	20	1	14
65-80	2	1	1	90	180	150	14	110	32	110	32	1	165	20	1	14
80-95	2	1	1	115	230	175	16	110	35	135	40	1	165	22	1	14
95-115	2	1	1	140	280	200	17	135	40	135	40	1	165	24	1	14
115-150	2	1	1	180	355	225	18	155	40	135	40	1	165	24	1	14
150-195	2	1	1	215	430	225	19	135	45	135	45	1	165	24	1	14
195-230	2	1	1	255	510	250	21	135	45	135	45	1	165	24	1	14
230-280	2	1	1	290	580	300	22	135	50	135	50	1	165	28	1	14
280-315	2	1	1	330	660	300	24	135	55	135	55	1	165	32	1	14
315-360	2	1	1	370	735	300	25	135	55	135	55	1	165	32	1	14
360-400	3	1	1	420	1195	300	27	135	60	135	60	1	165	32	1	14
400-445	3	1	1	510	1450	350	29	135	60	135	60	1	165	40	1	14
445-490	3	1	1	610	1740	400	30	135	65	135	65	1	165	45	1	14
490-550	3	1	1	685	1955	400	32	135	65	135	65	1	165	45	1	14
550-605	3	1	1	775	2210	400	34	135	70	135	70	1	165	50	1	14
605-660	3	1	1	865	2465	425	36	135	75	135	75	1	165	55	1	14
660-715	3	1	1	965	2745	450	36	135	24	135	24	1	165	60	1	14
715-780	3	1	1	1065	3030	450	38	135	26	135	26	1	165	60	1	14
780-855	3	1	1	1175	3405	500	40	135	26	135	26	1	165	65	1	14
855-940	3	1	1	1295	3695	500	42	135	26	135	26	1	165	65	1	14
940-1030	3	1	1	1410	4015	500	42	135	28	135	28	1	165	75	1	14
1030-1145	3	1	1	1525	4345	500	44	135	28	135	28	1	165	75	1	14
1145-1265	3	1	1	1625	4635	500	46	135	30	135	30	1	165	75	1	14
1265-1400	3	1	1	1730	4930	500	48	135	30	135	30	1	165	75	1	14
1400-1560	3	1	1	1855	5285	500	50	135	32	135	32	1	165	75	1	14
1560-1730	3	1	1	1930	5500	500	50	135	32	135	32	1	165	75	1	14
1730-1905	3	1	1	2030	5790	500	52	135	34	135	34	1	165	75	1	14
1905-2110	3	1	1	2135	6085	500	56	135	34	135	34	1	165	75	1	14
2110-2340	3	1	1	2285	6515	550	58	135	36	135	36	1	165	75	1	14
2340-2590	3	1	1	2440	6960	550	60	135	36	135	36	1	165	75	1	14
2590-2860	3	1	1									1				

備考 表中※印欄錨鎖ハ十二本線六ツツ鋼索ヲ使用シタル場合ノ寸法トス

錨鎖管 第十四條 錨鎖管ハ堅牢ニシテ十分ナル大サヲ有スルモノト爲シ錨鎖ノ磨損ヲ減ズル爲其ノ兩端ニハ大ナル丸味ヲ有スル錨ヲ設ケ滑リヲ良クスベシ

錨鎖管ハ鉄徑ノ7倍ヲ超エザル心距ニ配置シタル鉄ヲ以テ外板及甲板ニ固着スベシ此ノ場合ニ於テ固着スベキ板ノ厚サ十分ナラザルトキハ之ニ二重張ヲ施スベシ

錨鎖管ハ之ヲ取附ケタル後成ルベク布管内ノ水壓力毎平方糎2糎以上ノ水ヲ注射シ其ノ水密ヲ試驗スベシ

無鉛錨用錨鎖管ハ錨ノ出入ニ差支ナキ様其ノ内徑ヲ十分大キクシ検査員立會ノ上錨ノ揚卸試驗ヲ爲スベシ

第二十八章 油 槽 船

第一節 總 則

- 第一條** 油槽船ニ付テハ本章ノ規定ニ依ルノ外前二十七章ノ規定ニ依ル
- 第二條** 本章中構造ニ關スル規定ハ船尾ニ機關ヲ有シ第二甲板、中心線隔壁及膨脹「トランク」ヲ備ヘ且縱肋骨式構造ニ依ル油槽船ニ對シ定メタルモノトス
- 前項ニ該當セザル油槽船ノ構造寸法ハ委員會ノ適當ト認ムル所ニ依ル
- 第三條** 第二甲板ハ上甲板ノ下方2.5米ノ位置ニ油槽、防油區畫及「ポンプ」室ヲ通ジ連續的ニ設クベシ
- 第四條** 膨脹「トランク」ハ上甲板ト第二甲板トノ間ニ設ケ其ノ側壁ハ油槽、防油區畫及「ポンプ」室ヲ通ジ連續的ニ構造スベシ幅ガBノ60%ヲ超ユル膨脹「トランク」ノ構造及配置ニ付テハ委員會ノ承認ヲ受クルコトヲ要ス
- 第五條** 主油槽ノ長サハ9.25米以下ト爲シ夏期油槽ノ長サハ18.5米以下ト爲スベシ
- 前項ノ長サヲ超ユル油槽ノ構造及配置ニ付テハ委員會ノ承認ヲ受ク

ルコトヲ要ス

燃料油ヲ積載スル夏期油槽ニハ 9.25 米ヲ超エザル 間隔ニ制油隔壁ヲ設クベシ

第六條 貨物油ヲ積載スル場所ノ前後兩端ニハ船底ヨリ膨脹「トランク」ノ頂部ニ達スル長さ 910 耗以上ノ防油區畫ヲ設クベシ
前項ノ防油區畫ハ「ポンプ」室ニ兼用スルコトヲ得
貨物油ヲ積載スル場所ト燃料油ヲ積載スル場所トノ間ニ設クベキ防油區畫ハ委員會ノ承認ヲ受ケタルトキハ之ヲ省略スルコトヲ得
(尙貨物油ヲ積載スル場所ト燃料油ヲ積載スル場所トノ隔離ニ付テハ「パナマ」運河規則ニ注意スベシ)

第七條 中心線隔壁ハ油槽、「ポンプ」室及防油區畫ヲ縱通シ船底ヨリ膨脹「トランク」ノ頂部ニ達セシムベシ
中心線隔壁ハ油槽内ニ於テハ油密構造ト爲スベシ但シ委員會ノ承認ヲ受ケタルトキハ水密構造ト爲スコトヲ得

第八條 油槽船ニハ遞信省令船舶滿載吃水線規程ニ定ムル船樓ノ標準ノ高さ以上ノ高さヲ有シ L ノ 7% 以上ノ長さヲ有スル船首樓ヲ設クベシ

第九條 船尾樓ト船橋樓トノ間ニハ甲板下ノ通路ヲ利用シ得ル場合又ハ之ト同等ノ效力ヲ有スル通路設備ヲ備フル場合ヲ除クノ外船樓甲板ト同一ノ高さヲ有シ 760 耗以上ノ幅ヲ有スル堅牢ナル常設歩路ヲ備フルコトヲ要ス船員室ヲ船首ニ設ケタル場合ニ在リテハ船橋樓ト船首樓トノ間ニ付亦同ジ

第十條 油密工事ハ叮嚀ニ施工シ油密ヲ要スル箇所ノ各隅ニ於テハ「シーブス」ヲ用ヒ油密ヲ保ツ構造ト爲スベシ
外板ノ縱線及油密横置隔壁ノ周圍山形鋼ハ成ルベク「ジョツゲル」ヲ避クベシ

第十一條 油ヲ積載スル場所ノ肋骨、縱通材等ニハ成ルベク單材ヲ用ヒ組材ノ使用ヲ避クベシ
二重山形鋼ノ代リニ丁形鋼ヲ用フルトキハ其ノ「ウエブ」ニ於ケル鋸ガ單剪斷ヲ受クルコトヲ考慮シ鋸數ヲ適當ニ定ムベシ

專ラ油ヲ積載スル場所ノ「セメント」塗裝ハ之ヲ省略スルコトヲ得
第十二條 横肋骨、横置梁又ハ隔壁ノ防撓堅桁ニ之ニ交叉スル強力材ヲ通ス爲切込ヲ穿ツトキハ其ノ隅ニ十分ナル丸味ヲ附スルコトヲ要シ荒打貫ノ儘ト爲スコトヲ得ズ

第十三條 舵頭材ノ徑及舵腕ノ寸法ハ第二十一章ノ規定ニ依ルモノノ、
1.1 倍ト爲スベシ
舵ノ他ノ部分、操舵裝置及船尾骨材ニ於ケル舵ノ壺金ノ各部ノ寸法ハ前項ニ依リ増加シタル舵頭材ノ徑ニ應ジ之ヲ定ムベシ

第二節 船底横肋骨

第十四條 船底横肋骨ハ肋骨板ノ上縁ニ面材ヲ取附ケタル構造ト爲スベシ

肋骨板ノ深サハ次ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

一、B ガ 14 米未滿ナルトキ

$$11.1 S (B-4) - 4.3 B + 27 D + 410 \quad (\text{耗ニテ})$$

二、B ガ 14 米以上ナルトキ

$$11.1 S (B-4) + 20.9 B + 50 D - 110 \quad (\text{耗ニテ})$$

S ハ横肋骨ノ心距 (米ニテ)

肋骨板ノ厚サハ次ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ但シ 12.5 耗ヲ超ユルトキハ 12.5 耗トシ 9 耗未滿ナルトキハ 9 耗トス

一、肋骨板ノ深サガ 900 耗未滿ナルトキ

$$0.008 d_0 + 3.5 \quad (\text{耗ニテ})$$

二、肋骨板ノ深サガ 900 耗以上ナルトキ

$$0.0036 d_0 + 7.5 \quad (\text{耗ニテ})$$

d_0 ハ骨肋板ノ深サ (耗ニテ)

面材 面材ハ形鋼ヲ用ヒタルトキ其ノ截面積ヲ次ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

一、B ガ 14 米未滿ナルトキ

$$1.35(B-5.5)(S+1) \text{ (平方糎ニテ)}$$

二、Bガ14米以上ナルトキ

$$0.319(B+22)(S+1) \text{ (平方糎ニテ)}$$

Sハ横肋骨ノ心距(米ニテ)

肋骨板ノ上縁ニハ船底ノ傾斜ニ等シキ傾斜ヲ附スベシ

面材ハ船側横肋骨ノ内端ヨリ中心線隔壁ノ堅桁ノ内端迄又堅桁ナキトキハ成ルベク隔壁板ノ近ク迄達セシムベシ

第十五條 船底横肋骨ニ設クル軽目穴ハ其ノ徑ヲ250耗以下ト爲シ縦肋骨ニ對スル切込ノ間ニ於テ其ノ中央附近ニ設クベシ

肘板 **第十六條** 船底横肋骨ノ肋骨板ハ船側横肋骨及中心線隔壁ニ肘板ヲ以テ固着スベシ

前項ノ肘板ハ其ノ遊縁ヲ130耗曲縁シ其ノ厚サヲ肋骨板ノ厚サト等シク爲シ外板又ハ隔壁板ヨリ測リタル幅及肋骨板ノ上縁ヨリ測リタル深サヲ夫々左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$\text{幅} \quad 205B-960 \text{ (耗ニテ)}$$

$$\text{深サ} \quad 210d_1 \text{ (耗ニテ)}$$

d_1 ハ龍骨ノ上面ヨリ第二甲板梁ノ船側ニ於ケル上面ニ至ル深サ(米ニテ)

肘板ノ遊縁ノ長サ1.7米ヲ超ユルトキハ厚サハ肘板ノ厚サニ等シク各邊ノ幅ハ次表ニ掲グルモノニ等シキ山形鋼ヲ以テ該肘板ヲ防撓スベシ

肘板ノ厚サ(耗)	12.5以下	12.5ヲ超ユルモノ
山形鋼ノ邊ノ幅(耗)	90×75	90×90

肘板ト中心線隔壁板トハ次ノ各號ノ規定ニ依リ肘板ト同一ノ厚サヲ有スル山形鋼ヲ以テ固着スベシ

一、L145米ヲ超ユル場合又ハL128米ヲ超エ且Lト横肋骨ノ心距(米ニテ)トノ積ガ400ヲ超ユル場合ニ於テハ二重山形鋼ヲ附シ二列鋌固着ト爲スベシ

二、前號ニ該當スル場合ノ外L128米ヲ超ユルトキハ二重山形鋼ヲ附シ片側ノモノハ二列鋌固着、他側ノモノハ一列鋌固着ト爲スベシ此ノ場合山形鋼ノ邊ノ幅ヲ適當ニ定メ一列鋌固着ト爲ス山形鋼ノ邊ノ爲二列鋌固着ト爲ス山形鋼ノ鋌固着ヲ妨ゲザル様爲スベシ

三、其ノ他ノ場合ニ於テハ單山形鋼ヲ以テ二列鋌固着ト爲スベシ肘板ト船側横肋骨ノ肋骨板又ハ隔壁ノ堅桁板トハ累接二列鋌固着ト爲スベシ

肘板ヲ外板又ハ中心線隔壁板迄延長シ横肋骨板又ハ堅桁板ニ兼用スルトキハ之ト横肋骨板又ハ堅桁板トハ接手ガ縦肋骨又ハ隔壁ノ水平防撓材ノ中間ニ來ルトキハ累接三列鋌固着ト爲シ接手ガ縦肋骨又ハ隔壁ノ水平防撓材ノ位置ニ來ルトキハ四列鋌固着ト爲スベシ横肋骨板ノ累接ハ成ルベク縦肋骨ノ位置ヨリ遠ザクルコトヲ要ス

外板トノ固着 **第十七條** 船底横肋骨ト外板トハ肋骨板ト同一ノ厚サヲ有スル單山形鋼ヲ以テ二列鋌固着ト爲スベシ但シL145米ヲ超ユル場合又ハLト横肋骨ノ心距(米ニテ)トノ積ガ400ヲ超ユル場合ニ於テハ背面山形鋼ヲ増設シテ之ヲ一列鋌固着ト爲スベシ此ノ場合背面山形鋼ノ邊ノ爲二列鋌固着ト爲ス山形鋼ノ鋌固着ヲ妨ゲザル様山形鋼ノ邊ノ幅ヲ適當ニ定ムベシ

縦肋骨トノ固着 **第十八條** 船底横肋骨板ト船底縦肋骨トハ山形鋼ヲ以テ固着シ之ヲ交互ニ横肋骨ノ面材ノ下縁迄及横肋骨ノ深サノ $\frac{1}{2}$ 迄延長シ肋骨板ヲ防撓スベシ但シ該山形鋼ヲ輕目穴ノ上端ヨリ低キ箇所ニ止ムルコトヲ得ズ

前項ノ防撓山形鋼ノ寸法ハ次表ニ依リ之ヲ定ムベシ

横肋骨板ノ深サ(耗)	防撓山形鋼(耗)
750以下	125×75×9
900	150×75×9.5
1,000	150×90×10.5
1,100以上	150×90×11

防撓山形鋼ト縦肋骨トヲ固着スル鋸ノ數及徑ハ次表ニ依リ定ムベシ

縦肋骨ノ種類 及深サ(耗)		防撓山形鋼ノ縦肋骨ニ接スル邊ノ幅					
		75 耗又ハ 90 耗		125 耗		150 耗	
		鋸 數	鋸徑(耗)	鋸 數	鋸徑(耗)	鋸 數	鋸徑(耗)
球山形鋼	以下 180			3			19
	200	2	19		19	4	
	230			4			22
球山形鋼	250	2			19	5	
	280		22	5			22
	300	3			22	6	
溝形鋼	280					5	
	300	3	22			6	22
	320						
	350						
	380	4				8	
440							
組立肋骨	440	4				8	
	470	5	22			9	22
	500						
	530					10	

第十九條 B 12.2 米以下ナル場合ニ於テハ船ノ中心線ヨリ B ノ約 $\frac{1}{4}$ ニ相當スル箇所ノ附近ニ於ケル船底縦肋骨ノ箇所ニ於テ船底横肋骨ノ片側ニ肘板ヲ設ケ之ヲ支持スベシ

B 12.2 米ヲ超ユル場合ニ於テハ船底横肋骨ヲ船側横肋骨及中心線隔壁ニ固着スル各肘板ノ端ノ附近ニ於ケル船底縦肋骨ノ箇所ニ於テ船底横肋骨ノ片側ニ肘板ヲ設ケ之ヲ支持スベシ

第二十條 船底横肋骨ノ面材ノ水平邊ノ幅ガ 180 耗ヲ超ユル場合ニ於テハ各舷ニ於テ少クトモ二箇ノ横肋骨防撓山形鋼ト面材ノ水平邊ト

ヲ短山形鋼ヲ以テ固着スベシ

第三節 船側横肋骨

第二十一條 第二甲板下ノ船側横肋骨ハ船底横肋骨ニ接續シテ設ケ肋骨板ノ内縁ニ面材ヲ取附ケタル構造ト爲スベシ

肋骨板ノ深サハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$13.5(S+5.4)(h+1) \text{ (耗ニテ)}$$

S ハ横肋骨ノ心距 (米ニテ)

h ハ L ノ中央ニ於テ船底横肋骨ノ中心線ニ於ケル上端ヨリ第二甲板梁ノ船側ニ於ケル上面ニ至ル深サ (米ニテ)

肋骨板ノ厚サハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ但シ 12.5 耗ヲ超ユルトキハ 12.5 耗トス

$$1.234\sqrt[3]{d_0} \text{ (耗ニテ)}$$

d_0 ハ肋骨板ノ深サ (耗ニテ)

面材 面材ハ形鋼ヲ用ヒタルトキ其ノ截面積ヲ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$1.5S(D-5)+11 \text{ (平方糎ニテ)}$$

S ハ横肋骨ノ心距 (米ニテ)

深サノ修正 第二甲板ノ舷弧ノ高サガ 150 耗以上ナル箇所ニ於テハ舷弧ノ高サ 100 耗ニ付 10 耗ノ割合ヲ以テ肋骨板ノ深サヲ第二項ニ依ルモノヨリ増スベシ

面材ハ船底横肋骨ノ上端ヨリ第二甲板ノ横置梁ノ下端迄達セシムベシ

肘板 **第二十二條** 船側横肋骨ノ上端ハ肘板ヲ以テ第二甲板ノ横置梁ニ固着スベシ

前項ノ肘板ハ其ノ遊縁ヲ 130 耗曲縁シ其ノ厚サヲ第二甲板ノ横置梁ヲ構成スル鋼板ノ厚サト等シク爲シ船側横肋骨ノ内縁ヨリ測リタル幅及横置梁ノ下端ヨリ測リタル深サヲ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$168d_1 \text{ (耗ニテ)}$$

d_1 ハ龍骨ノ上面ヨリ第二甲板梁ノ船側ニ於ケル上面ニ至ル深サ
(米ニテ)

第十六條第三項、第五項乃至第七項ノ規定ハ船側横肋骨ニ之ヲ準用ス

外板トノ固着

第二十三條 第二甲板下ノ船側横肋骨ト外板トハ横肋骨板ト同一ノ厚サヲ有スル單山形鋼ヲ以テ二列鋌固着ト爲スベシ但シ D 9.2 米ヲ超エ且 L 145 米ヲ超ユル場合又ハ D 9.2 米ヲ超エ且 L ト横肋骨ノ心距(米ニテ)トノ積ガ 400 ヲ超ユル場合ニ於テハ背面山形鋼ヲ増設シテ之ヲ一列鋌固着ト爲スベシ此ノ場合背面山形鋼ノ邊ノ爲二列鋌固着ト爲ス山形鋼ノ鋌固着ヲ妨ゲザル様山形鋼ノ邊ノ幅ヲ適當ニ定ムベシ

縦肋骨トノ固着

第二十四條 第二甲板下ノ船側横肋骨ト縦肋骨トハ山形鋼ヲ以テ固着シ之ヲ交互ニ横肋骨ノ面材ノ縁迄及其ノ深サノ $\frac{1}{2}$ 迄延長シ肋骨板ヲ防撓スベシ但シ該山形鋼ハ横肋骨ノ深サ 500 耗以下ナルトキハ總テ面材ノ縁迄達セシムルコトヲ要シ又船側横肋骨ノ下端ノ肘板ノ範圍ニ在ル縦肋骨ヲ固着スルモノニ在リテハ該肘板ノ遊縁迄又ハ面材ノ内端迄達セシムルコトヲ要ス

前項ノ防撓山形鋼ノ寸法ハ其ノ長短ニ從ヒ肋骨板ノ深サニ應ジ次表ニ依リ之ヲ定ムベシ但シ D 11.5 米以上ノ船舶ノ防撓山形鋼又ハ船側横肋骨ノ下半部ニ附スル防撓山形鋼ハ總テ長防撓山形鋼ノ寸法ニ依ルベシ

横肋骨ノ深サ (耗)	短防撓山形鋼 (耗)	長防撓山形鋼 (耗)
460 以下	75×75×9	125×75×9
610	75×75×9.5	150×75×9.5
710	90×90×10	150×90×10
810 以上	90×90×11	150×90×11

防撓山形鋼ト縦肋骨トノ固着ニ付テハ第十八條第三項ノ規定ニ依ル

第二十五條 第二甲板下ノ船側横肋骨ヲ横置梁ニ固着スル肘板ノ下端及船底横肋骨ニ固着スル肘板ノ上端附近ニ於ケル縦肋骨ノ位置ニハ

船側横肋骨ノ片側ニ水平肘板ヲ設ケ之ヲ支持スベシ但シ D 7 米未滿ナルトキハ水平肘板一箇ヲ設クルニ止ムルモ妨ナシ

第二十六條 船側横肋骨ノ面材ノ遊邊ノ幅ガ 180 耗ヲ超ユル場合ニ於テハ少クトモ二箇ノ横肋骨防撓山形鋼ト面材ノ遊邊トヲ短山形鋼ヲ以テ固着スベシ

甲板間肋骨板

第二十七條 上甲板及第二甲板間ノ船側横肋骨ハ肋骨板ノ内縁ニ面材ヲ取附ケタル構造ト爲スベシ

肋骨板ノ寸法ハ次ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

深サ $6.45(D-1.5)(h+0.6)+280$ (耗ニテ)

厚サ $0.009d_0+6$ (耗ニテ)

h ハ上甲板及第二甲板間ノ高サ (米ニテ)

d_0 ハ船側横肋骨ノ深サ (耗ニテ)

面材

面材ハ形鋼ヲ用ヒタルトキ其ノ截面積ヲ次ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

一、D ガ 7.5 米未滿ナルトキ

$0.25 D(S+5.25)+2$ (平方糎ニテ)

二、D ガ 7.5 米以上ナルトキ

$0.94(D-5.5)(S-2)+15.5$ (平方糎ニテ)

S ハ横肋骨ノ心距 (米ニテ)

肘板

横肋骨ハ遊縁ヲ 75 耗曲縁シタル肘板ヲ以テ上甲板横置梁及第二甲板ニ固着スベシ

前項ノ肘板ハ其ノ厚サヲ横肋骨板ノ厚サト同一ト爲シ横肋骨ノ内縁ヨリ測リタル幅及横置梁ノ下端又ハ第二甲板ヨリ測リタル深サヲ横肋骨ノ深サノ 1.5 倍ト爲スベシ

横肋骨板、上甲板横置梁及前項ノ肘板ハ相互ニ累接二列鋌固着ト爲スベシ

肘板ヲ外板又ハ甲板迄延長シ横肋骨又ハ横置梁ヲ構成スル鋼板ニ兼用スルトキハ之ト横肋骨又ハ横置梁ヲ構成スル鋼板トハ接手ガ縦肋骨ノ中間ニ來ルトキハ累接三列鋌固着ト爲シ接手ガ縦肋骨ノ位置ニ